

新書太閤記「第一分冊」(吉川英治)

序

民衆の上にある英雄と、民衆のなかに伍してゆく英雄と、いにしえの英雄たちにも、星座のように、各々の性格と軌道があった。

秀吉は、後者のひとであった。

生れおちた時から壮年期はいうまでもなく、豊太閤となつてからでも、聚楽桃山の絢爛や豪壘にかこまれても、彼のまわりには、いつも庶民のおいが盈ちていた。かれは衆愚凡俗をも愛した。

かれは自分も一箇の凡俗であることをよく弁えていたひとである。かれほど人間に対して寛大な人間はなかった。人間性のゆたかな英雄はと問えば、たれもみなまず指を秀吉に屈するの、かれのそういう一面が、以後の民衆の間に、ふかく親しまれて来たからではないだろうか。

おそらく秀吉への親しみは、この後といえどかわるまい。理由はかんたんである。かれは典型的な日本人だったから。そして、その同身感から好きになる。わけてかれの大凡や痴愚な点が身近に共鳴するのである。

日本人の長所も短所も、身ひとつにそなえていた人。それが秀吉だともいえよう。かれの長所をあげれば型のごとき秀吉礼讃が成り立つが、その方は云わずもがなである。われわれが端的に長所をか

ぞえたてたりすれば、かえって彼という人間の規格は小さくなる。かれの大ききとは、そんな程度のものではない。

わたくしのこの「新書太閤記」は、まだ秀吉の大往生までは書いていない。彼も英雄というものの例外でなく、晩年の秀吉は悲劇の人だ。大坂城の斜陽は「落日の莊嚴」そのものだった。私はむしろ、彼の苦難時代が好きである。この書においても、秀吉の壮年期に多くの筆を注いだのは、そのためだった。また、ひとり秀吉だけの行動を主とする太閤記でもありたくなかった。尠くも、信長出現以後、天正・慶長にまでわたる無数の熒星、惑星の現没にも触れてゆきたい。特になお、家康が書いていなくては、太閤記は完しといえないと思う。

むかしからある多くの類本、川角太閤記、真書太閤記、異本太閤記など、それから転化した以後の諸書も、すべてが主題の秀吉観を一にして、彼の性情を描くのに、特種なユーモラスと機智と功利主義とを以てするのが言い合わせたように同型である。

かつての太閤記作家もみな、秀吉の人間とは、なかなか、真正面に組みきれなかったことが分る。わたくしはそういう逃げ方はしまいと思った。わたくしの力不足はわかつているが、彼もまた、わたくしと同じ血と凡愚をもっていた一日本人であったという基本が、何よりも著者の力であった。

著者

日本の天文五年は、中国の明の嘉靖十五年の時にあたる。

日本では、その年の正月に、尾張の国熱田神領の——戸数わずか、五、六十戸しかない貧しい村の一軒で——藁屋根の下の藁のうえに奇異な赤ン坊が生れていた。

後の豊臣秀吉である。

生み落された嬰兒は、母が貧しい物しか喰べていなかったで、五年樽の梅干みために、赤くて皺だらけだった。

藁廂の藁の先から、氷柱がさがっているような一月の寒さだったし、産褥を囲む小屏風一ツない家なので、嬰兒は、へその緒を切られても、泣く力すらなかった。

——死んで生れたか。

と、みな思った。

でも、父の弥右衛門だの、知己の人たちが、産湯から上げて、お襦袢のうえへ転がしてみると、突然、呱呱の声をあげた。

啼くだけ啼きぬくと、この嬰兒はまた、百年の眠りから覚めたように、大きな欠伸を一つした。

——生きてるがなあ！

——何とか育とうによ！

襦袢をはずした手伝いの女たちは、そういつて、せめて親の弥右衛門をなぐさめ、産婦を祝福したものだった。

その年の頃。

隣邦の中国では、大いに兵乱があり、遼東が騒いだりしていたが、元の国号を革めて明としてから、朱氏数百年の治世はまだ揺ぎもなかった。

いやむしろ、元の前時代、宋や唐の昔より、国運は漲り、近代的に覚めて以て、今や明の盛代とさえ見えた。

黄河の水。

揚子江の水。

それも今と少しも変らない——悠久として黄色い濁流を、中国と日本のあいだの——大きな天地から観れば一跨ぎの溝に過ぎない海へ——不断に吐き出していたのである。

×

×

×

天のはら

ふりさけみれば

春日なる

みかさの山に

いでし月かも

遠く日本を出てから、五郎大夫は、故国のこともいつか頭に薄れていたが、この歌だけは、忘れはしなかった。

阿倍仲麻呂の歌だ。

月を見、草を見、渡り鳥を見るにつけ、五郎大夫は、阿倍仲麻呂が歌ったような日本恋しさの望郷に、どれほど駆られたことか。だが、明日こそ帰るのだ！

十二年間も留まっていたこの江西省饒州府の浮梁（現在の景德鎮）を立て。

「夜が明けたら……」

五郎大夫は寝ても眠れなかった。

「——日本に残して来た家の者たちは、わしが生きているとは夢にも思っていないだろうな。母はまだ達者かしら。弟妹たちは、どうしたろう」

更けるほど、頭は冴えてしまう。——明日の旅に、疲れを残してはならないと気遣いながらも。

すると、同じ想いで、やはり寝つけないでいたものとみえ、日本から連れて来て以来、ずっと側に仕えてきた忠実な下僕の捨次郎が、

「旦那さま。お目ざめでございましょうか。お目ざめなら、ちよつと……」

と、寢室の扉を外から軽たたいた。

五郎大夫は、臥床から降りて、榻（陶器製の腰掛け）へ腰を移しながら、

「おはいり。——おまえも眠れないのか」

「なあに、私は」

捨次郎は部屋の中へ進んで来て、主人の前に立った。

「宵にぐっすり寝ておりますが……ただあのことが一つ気になりまして」

「あのことは」

「お子様のことです」

「……ウむ」

と、五郎大夫も、ずきんと、胸の傷む顔をした。

この浮梁にいる間に、五郎大夫はひとりの婦人との間に、子をもうけていた。

彼女は、廬山の向う側の星子という土地から、この浮梁の窯業場

へ、働きに来ていた。

姓は楊、名は梨琴といって、気のやさしい——その代り病身そんな細腰の美人だったから、激しい働きには、不向きだった。

話は、少し反れるが。

そもそもこの江西省の浮梁という土地は、日本まで遠く聞えている陶器の産地なのである。遠い唐の時代から窯が築かれ、宋元の頃には、宮廷の御用品を焼く官窯が出来、それに附随する役所だの、商家だの、職人町などで、当時、支那第一の陶府といわれるほど殷賑を極めていた。

五郎大夫は、この陶器の製法を究めるために、実に、十二カ年の辛苦と郷愁に耐えて、異国に暮して来たのだった。

日本から来るには。——海上六百里、長江を溯つてから、なお四百余里もある。——そして、潯陽城（現在の九江）の河港からまた、水路や陸路を経て、廬山をおおぎながら、鄱陽湖をわたり楽平河をめぐり——文字どおり千里の旅を、半歳もかかるのだった。

その幾山河を、明日はまた、日本へ向って帰るのだ。

五郎大夫も、捨次郎も、眠れないほど欣しい！

だが、宵から帳を垂れて、顔も見せずに泣いてばかりいる者があつた。子を抱えた梨琴であつた。

梨琴は、窯場で五郎大夫と親しくなつて、その妾とも家婢ともつかず、この家へ来たものだつた。

五郎大夫の研究はその目的を達して、いよいよ曠れて帰る日が来た。かねて覚悟していたことではあるし、彼の多年の苦心が、彼の本国で実を結ぶことを考えると、梨琴は悲しみ以上に、男のために欣ばなければいけないと思つた。けれど、まだ三歳のあどけない

男の子を、膝に見ると、

「この子をどうしよう」

と、思いみだれ、おとといの夜から泣きつづけて、顔も見せない程だった。

下僕の捨次郎が今——ふいに主人の寢室を訪れたのもその梨琴が迷っていた問題を、やっと彼女も思い決めたというので、取次に来たのであった。

「ただ今、梨琴さんがいうには、きのうも一昨日も、あんなに云い張ったが、将来を考えると、やはり自分の手で育てるよりも日本へ連れて帰っていただいた方が幸福になるに違いない。——だから最初の相談のように、子どもは、貴方にお頼みしたいと申すのです」

「あ。……考え直したか」

五郎大夫は、彼女の気持を思いやって、ほろりとした。

「ちよっと、呼んでくれい。——梨琴を」

「はい」

下僕の捨次郎は、部屋を出て行った。

大きい家ではない。

勿論、家も調度も、主従の服装も、すべてこの土地の風俗のままである。

「旦那さま。お連れしました」

捨次郎は、やがて梨琴の腕を抱いて、支えながらそこへはいって来た。

梨琴はすぐ床へ泣きくずれ、

「祥瑞さま! ……」

と、咽んで呼んだ。

祥瑞というのは、五郎大夫の中国名であった。陶器を焼く秘法を会得するためには、あらゆる習慣をすてて、この国の生活に、同化して来たのであった。

「才オ……。今、捨次郎から聞いた。子どものことは、心配しないがいい」

こんな言葉では、慰めきれない気がしたが、五郎大夫は、そういうしかなかった。

梨琴は、やっと涙をおさめて、

「あなたにお別れする上に、子まで離すのは、死ぬより辛うございますが、よくよく考えてみると、わたしには身寄りもなく、体も弱いし、この子が大きくなるまでは、生きていられないと思います。そうすれば、この子はきっと、奴隷に売られるか、土匪に手なづけられるか、いい人間には成りっこありません」

もう彼女は、聡明な母の冷静に返っていた。

「——それにひきかえ、長年の間、あなた様のお生活ぶりや、御主従のあいだ柄を見てみると——知らない日本という国がうすうすでも分る気がいたしました。私の国では、あなたの国の人を、倭奴だの、東洋鬼だのと、恐れています、それは南の海岸や、揚子江を溯って来る、あの倭寇ばかり見て、それが日本人だと思ひこんでいるからでしょう。……けれど私は、そうは思いません」

彼女は、泣いてばかりいた三日分の思いを一ぺんに晴らすように、云いつづけた。

「——日本には行ってみませんけれど、貴方のお心のうちには、何年か住まわせていただきました。貴方はいくら中国の着物を着、中国の女を持ち、中国の家に暮しても、血は驚くほど変らない日本人です。その日本の国は、情義に強く、武勇に長けて、しかも優美な

国だということもよく分っているつもりです。——ですからこの子は、私の手に育てるより、貴方にお頼みしたほうが子の幸福だと考えたわけでございます」

「……………」

五郎大夫は肅然と、大きくうなずいて見せた。

捨次郎も傍らに立ったまま、頭を垂れて、聞いていた。

その時、がががやと、家の外で声がした。

ふと見れば、窓は仄かな夜明けの光に染まりかけている。外の声は、きょう日本へ立つ五郎大夫を見送りに来てくれた窯場の人たちである。勿論ががやという言葉はみな中国音である。五郎大夫も、熟練した中国音で、

「やあ、皆の衆。お早くからありがとうございます。今すぐ支度しますから、茶でも喫んでいて下さい」

扉をひらいて、挨拶した。

見送りの者たちは、

「いや、茶も朝飯も、途中の景色のいい所でやろうよ。支度がよかつたら出かけようじゃないか」

と、いった。

浮梁は、丘に囲まれた、盆地の町だった。

土採り山や、薪山や、無数の窯場が、目の下に見える。

窯の数カ所から、暁の浅黄いろの空に向って、幾すじも、煙が立ちのぼっていた。

「祥瑞さん、もうこれが、お別れだな」

見送りの人々もいう。

祥瑞五郎大夫は、丘の上の道に立って、

「ええ、まったく」

振り願って、しばらくじっと、眸をこらしていた。

言葉は、それだけしか出なかったが、既往十二年のことが、一度に胸へ呼び起されていた。

わけて、後に残して来た梨琴の身が、不慙であった。

その梨琴は、今朝、

「わたしは、家の窓からお見送りさせて戴きます。生なか途中まで行けば、もっともつと、日本までも、従って行きたくなりますから」といって、家に残った。

飽くほど、頼ずりして、泣く泣く彼女が手から離れた子は下僕の捨次郎に今、負ぶわれている。男の子だ。

名は、楊景福。

見送り人は、十五、六名もいて、荷物は一頭の驢馬と、一台の鶏公車とに積んだ。見送りの一人が途中で、

「捨さん、重いだろ。長い途だから、子どもはこれへ乗せたらどうだね」

と、いつてくれたので、捨次郎は背中の子を鶏公車へ移した。

車輪の大きな手押し車である。野や山坂のきらいなく押し通る小型の荷車だから、わざと齒の心棒には油を注さない。車輪が廻るにつれて、キイキイと牝鶏が啼くような軋み声をたてるので鶏公車という名があった。

その荷物の中に挟まって、嬰兒は嬉々としていた。時々、米の粉の搔いたのや、練飴を舐ぶらせて行く。

船で泊り、旅籠に休み、幾夜を経てようやく、揚子江の畔の潯陽に出て来た。

見送り人もそれまで来る途中で、二人別れ、三人去り、こここの城内まで従って来た者も、やがてみな帰った。

船宿で、五郎大夫主従は、幾日か船の便を待っていた。

すると金陵（南京）まで下江る船が今夜おそく、湓浦江の河口から出るという日の——まだ明るい頃だった。

船宿の手代が、薄い紙包を持って来て、

「旦那にお上げしてくれと、瘦形の綺麗な女が、これを置いて、逃げるように行ってしまいました」

と、告げた。

容貌や年頃を糺すと、梨琴にちがいないのである。

怪しんで、包を開いてみると、それは五郎大夫が長年のあいだ、手に入れようとしても、どうしても手に入れることが出来なかった陶製の秘本だった。

この本を所持していた者は、窯場の職人頭をしている、依怙地者で、

「日本人には売らない」

といったり、途方もない多額な値を吹っかけたり、五郎大夫も遂に、断念するほかなかった物であった。

「どうしてそれを、梨琴が手に入れたらう？」

彼女が、姿を見せたのは、たった今のことだという。五郎大夫は、子を宿の者に頼んで下僕の捨次郎と共に、城内の街を隈なく探しあ

るいた。

見つからない。——梨琴のすがたは、とうとう見つからなかった。

日は暮れてしまう。

夜は深くなる。

かえって、宿の者が、五郎大夫主従を探しぬいて、やっと追いつき、

「もう、船が出ますぞ」

と、いう。

あわてて、荷物や子どもを、湓浦江の岸へ運んでもらい、蘆荻のあいだに繋いである小舟に乗りこんだ。

便船は、江の中ほどに、碇を下ろしている。そこまで小舟で行くのだった。

暗い水に怯えたのか、小舟が揺れ出すと、嬰兒は、ひいッと泣き出した。

「泣くな、泣くな。何をお泣きやる。……よし、よし」

——すると何処からか、琵琶の音がながれて来た。この辺に水楼の灯は見えない。江一面に、蘆荻と暗い水の戦ぎであった。

「ア、梨琴じゃないか」

五郎大夫は、見まわした。

梨琴も琵琶が上手であったからである。——だが、櫓を把っている船頭は、少しも感情のない声でいった。

「旦那、ご存じありませんか。この潯陽城の船着きは、むかし白楽天とかいう詩人が、琵琶行っていう有名な詩を遺した跡だつていうんで、琵琶亭があるし、それから船で琵琶を弾いて、旅のお客さまに伽をする妓がいるんです。……お望みなら、舷を手でたたいて、オーイと呼んでごらんさい。すぐ漕ぎよせて来ますから」

五郎大夫は、聞き流して、闇をながめていた。

琵琶はやんだ。

そして、通りすがった蘆間の蔭に、一艘の船を見た。竹で編んだ苦のうちから、薄い灯火の光が洩れ、その明りの中に、耳環をした女の白い顔が見えた。

「……？」

もとより梨琴ではない。

けれど彼女の心と、五郎大夫の心とは、この星の下と、波間のう
えとで、明らかに交流していた。

「日本に帰っても」

と、彼は独り思った。形の上の別れが、絶対の別れではないと思
った。

一つの花が、他の一つの花へ、花粉を触れた時、それから生れ出
た物は、永遠に地上から消えない芽を土から持つ。

その芽は、自然が手伝って、繁茂する。花になりまた、結実する。

千里を隔てていても、土と土とが、また——心と心とが、かくま
で似ている二つの国では、そうした文化の交流は、雨と海水とのよ
うに、何千年も前から自然に行われて来た作用であつた。

深夜。長江の秋だ。

五郎大夫は、東へ東へと、揚子江を下ってゆく船の上でも、そん
なことを想いつづけた。

自分が、この江を溯さかのぼつて来たのも、その作用の一役を、自然
が命じているのである。自分と濃い血液のつながっている数代前の
祖先、伊藤五郎大夫は、道元どうげん禅師ぜんじに侍かしずいて、やはり支那へ渡つた
人であつた。

臨済りんざいの栄西えいさい禅師ぜんじも。

また、弘法こうぼうも。

ずっと以前の遣唐使けんとうしの若いたくさんな人々も。

同じに、支那からも、秦しんや漢代かんだいの人々が、無数に日本へ移り住
み、それはすでに、この国の民くさとなって、血も立派に一つとな
って今日に流れて来ている。

野の子ども

「おらの蜂はちだぞッ」

「おらのだい」

「うそだいうそだい」

「見つけたのは俺おらだい」

この辺りいちめん、真つ白な大根の花と、咽もせるような菜の花の
畑である。

その中を、棒でたたいて、七、八名の悪童連が、朝鮮蜂とよぶ尻
に袋を持ったのを、一匹でも見出すと土旋風つちつむじでも駆けるように、
われがちな奪い合いだった。

弥右衛門やえもんの子、日吉ひよしは、ことし七歳になる。

胎内たいないにいた時、母が十分に食物を摂とっていなかったせい、五
年漬の梅干みみたいな顔をして生れ落ちたこの子は、七歳になつても、
まだその不足が取り返せないとみえ、他の子より小粒で、貌かおに小皺こじわ
があつた。

だが、悪戯と乱暴は、この中村郷なかもろこうの童わらわの中でも、一といつて二
と落ちない。

「阿呆ア呆ッ」

蜂を争いながら、日吉はどなった。

大きな子に、撥はねとばされたのである。

転んだ上を、またほかの子が踏ふんづけた。日吉は、その足を掬すく
て、

「――捕^とつた者^{もの}の蜂^{はち}だぞ。捕^とつたら捕^とつた者^{もの}の蜂^{はち}だい」と、宣言^{せんげん}して、敏^{びん}捷^{しやう}に先^{まへ}へ駈^{かけ}けた。

そして、宙^{ちゆう}へ飛^とぶと、その手^ての中に蜂^{はち}をつかんでいた。

「やあい、おらの物^{もの}ンだ」

日吉^{ひきち}は、蜂^{はち}を握^もつて、十歩^{じふ}ほど先^{まへ}へ行^いつてから掌^てをひらいた。蜂^{はち}の首^{くび}と、羽^はを挽^もいで、すぐ口^{くち}へ入^いれてしまった。

蜂^{はち}の腹^{はら}は、甘い蜜^{みつ}の袋^{ふくろ}である。砂糖^{さとう}などの味^{あじ}を知らない少年^{せうねん}の舌^{した}には、天地^{てんち}にこんな美味^{うまい}い物^{もの}があるうかと思^{おも}われるのだった。

「……アア、甘^{あま}え」

日吉^{ひきち}は、眼^めをほそくして、蜜^{みつ}が喉^{のど}をながれ込^こんでも、何^{なん}度も舌^{した}を鳴^{なり}らしていた。

「……………」

ほかの連中^{うらや}は、羨^{うらや}ましげに、彼の表^{おもて}情^{じやう}を唾^{つば}を溜^ためて眺^{なが}めていた。

蜂^{はち}はいくらも飛^とんでるが、朝鮮^{しやうせん}蜂^{はち}は少ないのだ。その口^{くち}惜^しさがこみあげて、

「猿^{さる}」

と、大きな童^{わっぱ}がいった。仁王^{にや}と綽^{あだな}名^なのある少年^{せうねん}である。

仁王^{にや}だけには、日吉^{ひきち}も敵^{かな}わなかった。それを知^しっているの、みな尾^おについて、

「えて坊^{ぼく}」

「猿^{さる}やい」

「さる。さる。さる」

と、いちばんチビの於福^{おふく}までいった。

於福^{おふく}は、数^{かず}え年^{ねん}九^くツというが、七^{しち}歳の日吉^{ひきち}とそう違^{ちが}わなかった。

しかし、色^{いろ}は白^{しろ}いし、目^め鼻^{はな}立ちもよく、容^{よう}貌^{ぼう}では較^{くら}べものにならな

それに、村^{むら}では、大^{だい}尽^{じん}子^この方^{かた}で、小^{せう}袖^{そで}らしい着^き物^{ぶつ}を着^きているのも、於福^{おふく}だけだった。ほんとの名^なは、福^{ふく}太^た郎^{らう}とか福^{ふく}松^{まつ}とかいうのだらうけれど、男^{おとこ}名^なでも、頭^{かぶ}字^じに於^おの字^じをかぶせて呼^よぶことが、良^よ家の風^{ふう}習^{しゆ}となつているので、このお大^{だい}尽^{じん}子^こも、そんな真^ま似^ねをして呼^よばれているものとみえる。

「やい、いったな!」

日吉^{ひきち}は、誰^{たれ}に猿^{さる}とよばれても、怒^{いか}つた例^{たと}しはなかつたが、於福^{おふく}にいわれると、睨^ねめつけた。

「いつも俺^{おれ}が、庇^{かば}つてやるのを、忘^{わす}れたのか。白^{しろ}茄^{なす}子^すめ!」

日吉^{ひきち}にそう罵^{のの}られると、於福^{おふく}は何^{なん}ともいえない、氣^きの弱^{じやく}い顔^{かお}をして爪^{つめ}を噛^かんだ。

白^{しろ}茄^{なす}子^すと悪^{あく}口^{くち}をいわれたことよりも、恩^{おん}知^ちらずといわれたことが、子^こども心^{こころ}にも、強^{きやう}く恥^ちを感じ^{かん}じたらしかった。

ほかの子^こ供^{ども}らは、もう眼^めを反^そらしていた。そして朝鮮^{しやうせん}蜂^{はち}の代^{しろ}りに、畑^{はたけ}の彼^そ方^{はう}を通^{とほ}る一^{ひと}筋^{しん}の黄^{わう}色^{しき}い埃^{ぼこり}に眼^めをあつめた。

「ア、兵^{へい}隊^{たい}だ」

「武^ぶ者^{しや}が通^{とほ}る」

「戦^{いくさ}から歸^{かへ}つて来^きた」

わあっと、両^{りやう}手^てを挙^あげて、彼^から^んは歡^{かん}呼^こした。

領^{おだ}主^{のふひで}の織^お田^だ信^{しん}秀^{しゆ}と、隣^{りん}国^{こく}の今^{いま}川^{がわ}義^ぎ元^{げん}とは、両^{りやう}立^たしな二^{ふた}つの勢^{せい}力^{りき}だった。国^{くに}境^{けい}方面^{はつめん}では、絶^{ぜつ}えずどこかで小^こ競^ぎり合^あひがあつた。

或^{ある}る年^{ねん}は、今^{いま}川^{がわ}家の精^{しやう}銳^{えい}が、この辺^{へん}まで潜^{ひそ}行^{ぎやう}して来^きて、ふいに民^{たみ}家^かに火^ひを放^{はな}つたり、田^での稲^{いね}を刈^{かり}つたり、畑^{はたけ}を荒^あしたりして去^さつたこと

もある。

そういう時^{とき}、領^{おだ}主^{のふひで}の兵^{へい}は、火^ひの手^てを見^みるや、那^な古^こ屋^やや清^{きよ}洲^{しゅう}城^{じやう}か

ら殺^{ころ}到^{りて}して、眼^めの前^{まへ}で、敵^{てき}を蹴^けちらし、敵^{てき}を斬^{きる}り、そして各^{かく}所^{しよ}の砦^{とりで}

や木戸の兵も出合せて、これを殲滅した。

冬――

そんな年には当然、土民は、食物にも家にも困ったが、誰も、領主を怨まなかった。飢えれば飢えるで、寒ければ寒いで、

(今に、一泡ふかしてやるで)

と、むしろ今川氏に対する敵愾心を昂めた。

この辺の童は、生れた時から、それを見、それを聞きして、育つて来たのである。

だから領主の軍勢とみれば、自分自身みたいと思った。また、子供らの生れながらの血も、兵馬を見ると、何を見たよりも強く昂奮した。

「行ってみろ」

誰かがいうと、わつと皆、それへ向つて今も、駈け出した。

於福と日吉だけは、後に残つてまだ睨みあつていた。気の弱い於福は、他の者と一緒に駈けて行きたかつたが、日吉の眼に縛られて、去るに去れない姿だつた。

「……ごめん」

於福は、恐々、日吉のそばへ寄つて、彼の肩へ手をのせた。

「ごめんね。……ね」

日吉は、ぶつと赤い顔をして、肩を揺りうごかしたが、於福の泣き出しそうな眼を見ると、急に、

「俺んことを、一緒になつて、悪でいいからだい」

と、肩を柔らげた。

そしてまだ少し胸がすまないようにいつた。

「汝れのことを、何日もみんなが、唐人子、唐人子つて、擲擲うだろが。おらは擲擲つたことなんかあるかい」

「ない……」

「唐人子だつて、おら達のなかまになればおら達の国の者んだい。そういつてるだろ」

「うん」

「ほんとだぞ、於福」

「うん……」

於福は、眼をこすつた。泥が涙に溶けて、眼のまわりにぶちができた。

「ばかやい。泣くから唐人子つていわれるだい。武者を見に行こう、ア、早く行かねえと行つちまうぞ」

於福を引っぱつて、日吉も後から駈け出した。彼方の黄色い埃の中に、軍馬や旗差物がもう近く見えていた。

二十騎ほどの侍と、二百人ばかりの歩兵だつた。それに小荷駄の一隊が、ごつちやに交じつて――槍も長柄も弓持も、秩序なく前後になつて――熱田街道から稲葉地の野づらを横ぎり、庄内川の堤の上へと、今、一騎一騎、背のびするように登りかけたところだつた。

「――わあッ」

畑から飛んで来た子ども達は、軍馬を追い越して堤へ駈けあがつた。

日吉も、於福も、仁王も、ほかの湊つ垂らしも、眼をかがやかして、そこらの野薔薇や葦や雑草の花をむしり取つて、両手につかみ、眼の前を勇しい武将や兵が通るたびに、

「八幡。八幡」

「勝ちいくさ」

「華武者祝え。華武者祝え」

ふしをつけて叫びながら、手の花を、声と共に抛り合った。

村でも、街道でも、領土の子ども達は、兵馬を見るとこう躁いで祝福した。——けれど馬上の将も、足を引き摺って行く兵隊も、みな仮面のような強い顔を黙々と持って、

(寄るな……)

とも叱らない代りに、彼らの歓呼に、ニコと一笑を酬いてもくれなかった。

殊に今通るこの一隊は、三河方面から引き揚げて来た軍の一部らしく、前線でさんざんに戦い抜いて来たものとみえ、馬も人も疲れぬいていた。

馬の中には、腹を突かれて、腸をぶら下げている馬もいた。兵の中には、満身血になって、戦友の肩にすがってやっと歩いて行くような兵もいた。

槍の柄にも、具足にも、干乾びた血は、漆みたいに黒く光っている。——そして、どの顔もどの顔も、汗と埃にまみれ、ただぎらぎらした眼のみが続いて行った。

「水を飼え。——馬に」

河原へ降りると、先頭の武将のひとりが云った。

側を囲んでいた騎馬の侍がすぐ、そのことを大声で、隊に伝え、「やすめ」

と、令を布いた。

騎馬の者は、ばらばらと馬を降り、徒歩の兵は、ほっと足を止めて、

ああ！

といわないばかりに皆、草の中に腰を落した。

清洲の城は、川向うの彼方に小さく見えていた。隊の中には、

この尾張四郡の領主、織田備後守信秀の弟にあたる織田与三郎がいた。——与三郎は床几に掛け、五、六名の旗本に囲まれ、黙然と、空を見ていた。

「……………」

旗本たちも、口をつぐみ合っていた。脚の傷や、籠手の傷を、縛り直している者もある。この人々の眉色から察するに、前線での戦いは、明らかに、味方の大敗であったに違いなかった。

けれどもとより子ども達に、そういう観察はない。血を見れば、自分が血を流したように勇み、槍や長柄の光を見れば、敵を殲滅して来たものと思いこんで、ただ昂ぶり躁ぐのだった。

「八幡八幡」

「華武者、華武者」

馬に水を飼っていると、馬にも花を投げて囃した。——すると

駒のそばにいた一人の侍が、日吉を見かけて、

「弥右衛門の倅。おっ母さんは変りないか」

と、手招きして訊いた。

「あ？ ……。おらけえ」

日吉は、彼の手の下へ歩いて行った。黒い鼻の穴を上へ向けて、その人を正視した。

「うん……」

日吉を手招きした手は、日吉の汗くさい頭を押えて、大きく頷いた。

まだ二十歳そこそこの若い武者だった。この人も戦って来た兵隊のひとりかと思うと、日吉は、頭に載せられている鎖籠手の重い手も、ぞくぞくする程、光栄なここちがした。

(どうだ、おれの家は、こういうお侍と知ってるんだぞ)

という誇らしさを、並んで此方をながめている他の友達へありありと顔つきに示していた。

「弥右衛門の子。おまえはたしか日吉といったな」

「ああ」

「いい名だ。いい名だ」

若い武者は、彼の頭を一つ撫でまわした。そしてその手を、自分の革胴の腰帯のところへ当てると、少し身を反らしながら、日吉の顔を眺め直して、独りで何か笑い顔していた。

日吉は、大人にでも、女の人にでも、すぐなつつこい顔つきを示すのだ。これは生れ性とみえる。まして知らないおじさんから——しかも離れてばかり見ていた武者から、直に頭に手を載せてもらったので、大きな眼は忽ち得意にかがやいて、いつものお喋舌りがすぐ出て来た。

「だけどなあ、おじさん。おらのことを、誰も日吉って呼ばないよ。」

日吉って呼ぶのは、おっ母さんとお父さんだけだ」

「似てるからな」

「猿にだろ」

「自分も心得ているのはなおい」

「だって、みんないうもの」

「はははは」

戦場暮しの侍の声は、笑い声まで大きかった。側にいた侍たちも同時に笑った。その間、日吉は無聊な顔して、ふところから黍の茎みたいな物を出してはポリポリ齧っていた。その茎の汁は青臭いなかに甘い味があった。

「ベッ。……ベッ」

日吉は、噛むだけ噛んだ甘黍の糟を、そこらじゅうへ、行儀も

なく吐きちらした。

「幾歳になるか」

「おらの年け」

「ウム」

「七歳」

「もうそうなるかなあ」

「おじさん、何処の人」

「おまえの母親と親しい者だ」

「へえ？」

「おまえの母の妹は、ようわしの屋敷へは遊びに見える。帰ったら、母へよろしくいってくれ。藪山の加藤弾正が、お達者に——というていたとな」

一息やすんだ兵馬は、その時もう列を立て直して、庄内川の浅瀬を彼方へ渡り出していった。

振り向くと、弾正も急いで、馬の背に跳ねあがった。陣刀だの、具足だのが、その人の体で、羽ぶるいするようにガチャツと鳴った。「戦がやんだら、そのうち遊びに寄るぞというてくれ。弥右衛門どのへも」

云い捨てると、列から後れた弾正は、駒を速らせて、川瀬へ入れた。駒の脚から白い水が颯々と立って行く——。日吉は、甘黍の糟を口に入れたまま、恍惚と見送っていた。

この一軒

彼の母は納屋^{なや}へはいるたびに、心が暗くなつた。

漬物や穀類^{たねもの}や焚物^{たきもの}や——ここへはいる時は必らずそういう蓄えを取り出しに来るのであるが、その生命^{いのち}の糧^{かて}は、常に途切れがちだつた。

（この先、どうして……）

と、胸がつまるのである。

子どもは、七歳^{ななつ}の日吉と、十歳^{とお}になる姉と、わずか二人に過ぎなかつたが、どつちもまだ何の働きに出せる年でもないし——良人^{おと}の弥右衛門^{やえもん}は、夏でも炉^{かたわ}ばたに坐つたきりで、湯沸^{ゆわか}の下を見ているだけのことしかできない不具^{ふぐ}者^{もの}だつた。

「——あんな物、いつそのこと薪^{まき}にして焚^たいてしもうたら、胸が癒^いえように」

納屋の壁を仰ぐと、真っ黒な檜柄^{かしのへ}の槍と、陣笠と、切れ端のよな古具足^{ふるぐそく}とが、吊^{つる}してあつた。

以前、良人^{おと}が戦^{いくさ}に出るごとに、身に着けて出た晴着である。

それも今は、煤^{すす}だらけになつたまま、不具^{ふぐ}の良人と同じように、納屋の隅に埋もれていた。彼女は、見るたびに、忌^いらしい気もちに囚^{とら}われた。戦^{いくさ}というものに顫^{おの}きを覚えて、

（良人が何といおうが、日吉は、侍にはさせぬ）

と、思うのであつた。

自分が木下弥右衛門^{とつ}へ嫁^{よめ}ごうとした頃は、良人を選ぶなら侍と思

つたものであつた。自分が生れた御器所^{ごき所}の家も、小さいながら武家^{ぶけ}だつたし、木下弥右衛門も足輕ながら織田信秀^{おだののぶひで}の家中^{うち}だつた。そして今、この納屋^{なや}の煤^{すす}に埋もれている具足^{ぐそく}も、夫婦になると同時に、（未来は千石取りに）

と、いう希望を賭けて、欲しい世帯道具よりも先に、無理工面して、新調したものではなかつたか。

夫婦^{ふたり}にとれば、懐かしい思いでの品でもある——。

だが、そんな若い頃の夢は、今の現実のまえには、一顧^{いっこ}の価もないし、むしろ呪^{のろ}わしい気がよけい胸を噛むばかりである。良人はろくな手柄も立てないうちに戦場で足腰も立たないような不具^{ふぐ}者^{もの}になつてしまつた。身分の低い足輕なので、御奉公^{ごほうこう}を退^ひくと、もう半年目^{たつき}から生活^{くわつ}にも困り、結局、百姓でもするしかなかったが、その百姓仕事^{ひやくしや}さえ出来ない今の良人であつた。

でも、女手で。しかも二人の子を抱いて、桑を摘^つみ、畑を打ち、麦を踏み、数年の貧乏と闘つては来たが、

（この先？ ……）

と考え出すと、さすがに、この細腕と根気がつづくかどうか、彼女の女^{おんな}ごころは、納屋の闇のように、凍^こえてしまふ。

晩^かの糧^{かて}に、乏^あしい粟^{あわ}と、大根の切干^{きりば}しとを、箆^{へら}に入れて、彼女はやがてそこから出て来た。まだ三十前なのに、日吉を生んでからは、産後^たが祟^{たた}つて、いつも青い桃のように見える彼女の顔いろだつた。

「——おつ母」

日吉の声だ。

「おつ母ア……」

と、家の横を廻つて、自分の姿を探しているらしいのである。

彼女は、ニコと笑った。

そうだ！

自分にも一つの光明はある。あの日吉を育てることだ。はやく大きくして、あの気の毒な不具の良人に、一日一合のお酒でも上げられるような良い跡取り息子に仕上げることだ。

彼女はそう思つて、急に心も明るくなり、

「日吉やあ。ここだよ。——母はここにおるがのう」

と、大きく答えた。

母の声に、日吉は飛んで来た。そして、箆を抱えた母の肩へぶら下がつて、

「おつ母。今日なあ、おつ母の知つてる人に会つたよ、河原で——」

「誰にの」

「お侍だよ。藪山の加藤つていえば、おつ母が知つてるといった。

——ああ、それから、達者で暮しているかつて、おらの頭を撫でて訊いたよ」

「じゃあ、弾正さんじゃろ」

「戦から帰つて来た大勢の武者の中に交じつてね、良い馬に乗つてたよ。——あれ、誰だい？」

「だから、今いうたでないか。光明寺の藪山に住んでいる弾正さんだよ」

「弾正さんて」

「御器所の妹の——許婚じゃがの」

「許婚つて？」

「ま。執こい」

「だって、分んねえだもの」

「今に、夫婦になる、良人のことじゃがな」

「なアんだ。……じゃあ、おつ母の妹のお智さんのことけ」

日吉は、何と解したか、クツクツ笑つた。彼の母は、その白い歯と、小ましくくれた唇を見ると、わが子ながら、早熟な——と小憎らしく思うのだった。

「おつ母。納屋ん中に、これつくらいな、刀があつたらう」

「あるが、どうするのじゃ」

「貸してくんないか。どうせ、あんなボロ刀、お父っさんも、もう使やしないから」

「また。戦遊びか」

「……いいだろ」

「いけません」

「なぜ」

「百姓の子が、刀など、持ち馴れたとて、どうなろうぞ」

「おら、侍になるんだい」

日吉は、駄々子足を踏んで、一文字に唇をむすんで云つた。

——彼の母は、じつと睨めすえているうちに、その眼を涙でいっぱいにしてしまった。

「……阿呆っ」

突然、そう叱ると、母はあわてて涙を拭き、片手に、彼の手を拉して、

「少しは、水なと汲んだり、姉の手助けなとしなされ」

ぐいぐいと曳いて、土間口の方へ歩き出した。

「嫌でい。嫌でい」

日吉は、母と争つて、手と手を引っ張り合いながら叫んだ。しかし、地に踵を踏んばつても、彼の母は、彼の歩みを、自分の意志のほうへ引き寄せずにおかなかった。

「——やだようつ。嫌だつてえに。おつ母の馬鹿。嫌でい！」

すると、竹窓の中から、老人のような咳声せきこゑが、炉いろけむりと一緒に洩れてきた。

父の声を聞くと、日吉は首をすくめて黙ってしまった。父の弥右衛門はまだ四十がらみであったが、長年、廃人同様な起臥おきふしをしているので、咳せきの声まで、五十過ぎの人みたいに皺しわ噎がれていた。

「……吩咐いひつけけてやりますぞ。余り母を困らすと」

母は、そつと手を弛ゆるめて云った。

解とかれた手を顔へやると、日吉は眼をこすつて、しゆくしゆく泣き出した。母はこの駄々坊だだばうを持て余し顔に、

（この子はまア……）

と見つめているうち、自分も共に、泣いてしまいたくなくなった。

「——お奈加なにか、お奈加。なにをまた日吉と喚わめき合っているのだつ。見ツともない。自分の子と争いさつて、泣いているたわけがあるか」

暗い屋根裏の見える窓の内でもた——病人特有な、癩かんのたかい、弥右衛門の声だった。

「あなた。——少しこの腕白を叱なつてくだされ。今も今とて」

弥右衛門に呶ど鳴なられると、彼の母は、そこから窓越しに、日吉のいけないことを、一息に訴えた。

すると、家の中の弥右衛門は、げらげら笑つて、

「何のこつた、納屋の中に抛ほうりこんである俺の古刀を、日吉が、持ち出そうというだけか」

「そうなんです」

「戦いくさの真似事まねごとでもする気なのだろう」

「それがいけないんです」

「男の子だ。弥右衛門の子だ。いけないことがあるものか。出して

やれ、出してやれ」

「……………」

お奈加は、まあと、呆あきれ顔を窓へ向けたまま、恨めしそうに唇を噛んで、眼に涙を溜ためていた。

（どうだ！）

日吉は、勝った気持を、高慢そうに眼にあらわした。——だが、ほんの瞬間だった。その眼は、母の青じろい頬をつたう涙を見るに及んで、すぐ萎しんでしまった。

「おつ母、泣くのお止しよ。おらはもう、刀はいらないや。——姉えに水を汲んでやろうつと！」

迅はしつこい日吉は、すぐ土間口のほうへ駈けて行つた。土間は広く、一方は炉部屋の上がり框がまち、一方は台所だった。

十一歳ばかりの女の子が、猫背を立てて、火吹竹で泥竈へつついの口をふいていた。

「姉え。水汲んでやろか」

日吉が、飛び込んで来ると、おつみは、びくつとした眼を上げた。
——そして何をされるかと、恟々おととして、

「いいがな。いいがな」

と、顔を振つた。日吉は、水甕みずがめの蓋ふたをあけて見て、

「オヤ。水なんか、いっぱい汲んであるじゃねえか。味噌を搗すつてやろか」

「味噌など搗すつてくれんていいわ。邪魔な——」

「邪魔だつて、おらは、用をしたいんだ。用をさせろ。漬物出してやろか」

「今、母さんが、出しに行ったがな」

「じゃ、何するんだ」

「ぬしゃあ、大人おとなしくしていたら、母さんも欣よろこぶによ」

「こんなに大人しいじゃないか。……なんだい。まだ竈かまどの火がつかねえでやる。おらがつけてやる。どけ、どけ」

「いってえに！」

「どけたら」

「あれ、そんなことするで、消えちもうた」

「嘘つけ。自分が消したくせに」

「嘘。嘘。ぬしが……」

「うるせい」

日吉は、燃えない薪まきに焦じれて、そこを離れるついでに、おつみの頬を、ぴしやりと、一つ打った。

おつみが、大きな声で、泣きながら奥へ云いつけた。弥右衛門のいる炉部屋とは近いので、すぐ父の声が、日吉の耳を痺しびれさせた。

「こらっ、姉を打ったな。男のくせに、女を打ったな。——日吉っ。

ここへ来い。ちよつと、これへ来い」

壁の陰で、日吉は唾つばをのんだ。そして告げ口したおつみを睨にらみつけた。後からはいつてきた母は、またしても——と呆れ顔に、土間口で立ち止まっていた。

父親は怖かった。世の中で怖いものの第一が父親だった。

日吉は、畏かしこまって、

「何ですか」

と、弥右衛門の顔を仰いだ。

木下弥右衛門は、炉の前に坐って、麻箱ひじに肱ひじをついていた。

うしろの壁には、起居につかう杖が立てかけてある。廁かわやへ通うにも、その杖にすがらなければ歩けない彼であった。

常に坐っている彼の傍らにある麻箱は、そういう不具な体でも、

いくらかの家計を助けるために、気が向くと、麻つむを紡紡いで、それへ溜めておく内職道具の一つであった。

「日吉」

「はい」

「あまり母親おふくろに世話をやかさじゃないぞ」

「え」

「姉に向って、悪たいをつくのもよくない。男のくせに、女どもを相手に、何という体だ」

「何も……何もおらは」

「だまれ」

「……………」

「わしには耳がある。おまえが何処で何をやっているかぐらいのことは、坐っていても知っている」

日吉は、心のうちで顫おのいた。父のことばは、父のいう通りに思った。

だが弥右衛門は、この子が可愛くて堪らなかった。——戦場で片輪となった、この脚、この手は、二度と前の体に回かえすことはできないが、この子を通して、自分の血は百年先へも生かすことが出来ると信じるからである。

(……だが?)

と弥右衛門はまた、日吉を見ていると、情けない心地がした。

子を見ること親に如しかず——というが、いかにひいき目に見ても、この見るからに奇異な顔した洩はなたらしの腕白が、親以上の者になって、親の名折れを雪そそいでくれようとは——考えても考えられなくなるからであった。

とはいえ、これは一粒だねだ。弥右衛門は懸けられない期待を、

無理にも日吉に懸けているのだった。

「納屋の刀を、欲しいのか。——日吉」

「ううん……」

日吉は、首を振った。

「欲しくないのか」

「……欲しいことは、欲しいけど」

「なぜ正直にいわぬ」

「だって、おっ母が、いけないっていうんだもの」

「女は、刀嫌いだからな。よしよし、待っているよ」

弥右衛門は、坐ったまま、ぐるりと後ろを向いた。そして壁の杖につかまり、ちんばを曳いて奥へはいって行った。

この家は、貧乏百姓に似ず、間数はたくさんあった。日吉の母の縁者が住んでいた家だからである。弥右衛門の方には、ほとんど身寄りがなかったが、母の方の親類にはまだどうにか暮している家が何軒あった。

（何しに行ったんだろ？）

日吉は、叱言をいわれないのが、かえって気味悪かった。

弥右衛門はやがて、一腰の脇差を取り出して戻って来た。それは納屋の隅に錆びている物とは違って、袋にはいつていた。

「日吉。これはおまえの物だ。欲しければ、いつでも持て」

「え。おらの……？」

「だが、まだまだ、今のおまえでは、この刀は差せまい。差しても、人が笑う。——これを差して歩いてても、人が笑わぬようにはやくなれ。いいか、早くそうなってくれ」

「……………」

「この刀は、祖父さんが、鍛たせたものだ」

弥右衛門は、眼をねむって、ぼつりぼつり語り出した。

「祖父さんは、百姓だった。その百姓から身を起して、一旗挙げようとした時に、これを刀鍛冶に鍛たせなすった。その頃まで、木下家の系図という物もあったらしいが——一朝にして、焼いてしまった。祖父さんは、事を起す前に、領主に襲われて、討死してしまいなすった」

「……………」

「そういう人が、わしの子供の時分には、たくさんあった。乱世の慣いだ」

弥右衛門は、呟くようにいう。

いつのまにか、隣の部屋には燈心が灯っている。この部屋は、焔で明るかった。

日吉は、赤い焔を見つめながら父親のことばに聞き入っていた。

——弥右衛門もまた、日吉に分つても分らないでも、こういう真実を吐く相手には、妻でもいけないし、女の子のおつみでもいけなかった。

「——木下家の系図があればのう、おまえにも、分るように話せるが、……系図は焼けてしまっていない。だが、生きた系図は、おまえにも伝えてある。……これじゃ」

弥右衛門は、手頸の青い静脈を撫でていった。

——血だぞ。

と教えたのである。

日吉は、頷いた。そして自分の腕くびを握ってみた。自分の体にも、青い血管がある。はつきりと分った。これほど確かな——しかも生きている系図はない。

「祖父さんから先は、どんな人が御先祖だったか知れぬが、その

遠い御先祖のうちには、偉い人もいたに違いない。多分、お侍もいたろう。学者もいたろう。——そういう方たちの血が流れ流れて、わしからお前にも、伝わっているわけだ」

「……ええ」

日吉はまた、頷いた。

「だが、わしは偉くない。あげくに、この通りな不具者だ。……だから日吉、貴様は偉くなってくれよ」

「……お父さん」

日吉は、円い目をあげた。

「偉くなるって、どんな人になったら偉いの」

「それやあ、限りがないが……。せめて、槍二筋の武士になればなあ。……この祖父さんの遺物をさして歩けるようになってくれれば——わしは死んでも心残りが無いのだ」

「……………」

日吉は、当惑したように、黙ってしまった。自信のない顔つきである。父の眼から眼を反らして、きよときよとしていた。

七歳の子もだ。無理もない——と思いながらも、弥右衛門は、その頼りない挙動を見ると、

（やはり血ではない、境遇かなあ？）

と、心のうちで嘆息が洩れるのだった。

先刻から、日吉の母は、膳ごしらえをして、良人の話がやむのを、隅の方で黙って待っていた。

彼女の考えは、弥右衛門の考えとは、あべこべであった。

（侍になれ。偉くなれ）

と、子を励ます良人を、彼女は恨めしくさえ思った。そして密かに、

（こんな子に、無理なことばかりを。……日吉や、お父さんは、御無念なので、あんなことばかりいうけれど、おまえまでが、お父さんの轍を踏んではいけないよ。——愚か者なら愚か者でよいほどに、真面目に働いて、田の一枚でも持つような百姓になつてくだされや……）

胸いっぱい、子の行く末を、祈るのだった。

「さ、夜食にしようぞ。日吉もおつみも、寄ったがよい」

彼女は、子たちの父を中心に、炉のまわりへ、箸や椀をくばった。

「飯か」

いつものことながら、弥右衛門は貧しい稗粥の鍋を見るたびに、さびしい顔になった。妻にも子にも、満たしてやり得ない自責を——男親として、人知れず苦しむらしかった。

だが、日吉もおつみも、一椀の稗粥に会うと、頬も鼻も赤くして、美味そうに啜り合い、貧しさなどは思わなかった。これ以上の富貴は知らないからである。

「新川の茶わん屋様から味噌もいただいてあるし、乾菜も乾栗も、納屋に蓄えてあるほどに、おつみも日吉も、たんと喰べたがよいぞや」

子達の母は、そう云いながら、不具の良人が、家計を心配しないように、気を遣っていた。

そして彼女自身は、二人の子が腹いっぱい喰べ、良人も十分に済ました後でなければ箸を取らなかつた。

夜食がすむと、間もなく寝てしまう。何処の家でもそうなのだろう。夜の中村は真の闇だった。

——ところが、闇夜になってから、野や道を、人の足音がしきりとする。近国で戦がある時ほど、そうだった。

野武士の群れたの、軍馬だの、落人だの、密使の往来などが、夜を好んで動くのである——

「ウ、ウウム。……ウウム」

日吉は、よく驚かれた。

眠りの中に、闇夜の聲音が聞えるのか、天下の動乱が、彼の夢を、怯えさせて熄まないのか。

或る夜などは、側に寝ていたおつみを蹴とばし、おつみがびつくりして、泣きだすと、

「八幡っ、八幡っ、八幡っ」

と呶鳴って、いきなり寢床から跳ね上がり、眼ざめて、宥めても、まだ寝呆けて、何か昂ぶり続けるようなことがままあった。

「疳の虫だ。この項に、疳の灸をすえてやれ」

と、弥右衛門はいう。

だが、日吉の母は、

「疳の灸は、いくらすえたか知れませぬ。あんな子に、あなたが、刀を見せたり、御先祖のはなしなど聞かせるから、いけないんですよ」

と、いった。

×

×

×

そのうちに、この一軒にも、大きな変りが見舞った。

翌年——天文十二年一月二日に、弥右衛門が病死したのである。人間の死。

というものを、日吉は初めて、父の死顔に見たが、涙はこぼれなかった。葬式の中でも、飛んだり跳ねたり、遊んでいた。

その一周忌も過ぎて、翌年の九月頃。

日吉が九歳の秋だった。

この一軒にまた、人がたくさん集まった。餅をついたり、酒をのんだり、めでたいめでたいと歌ったりして夜を更した。

親類の一人が、

「日吉、今夜のあの智どのが、おまえの次のお父さんになる人だ。」

——弥右衛門どのとも、以前からの友達で、やはり織田家で同朋衆を勤めている筑阿弥どのだ。よいか、今度のお父さんにも、親孝行をせにやいかんぜ」

と、彼に云い聞かした。

日吉は、餅を喰べながら、奥を覗きに行った。いつになく、母がきれいに化粧して、知らない小父さんと並んで俯向いていた。それを見ると、欣しくなって、

「八幡、八幡、花抛れ」

と、日吉は、その晩も誰よりもはいやいでいた。

また、夏が巡^{めぐ}って来た――

とうもろこしの背が高くなった。日吉や村の悪童連は、毎日、庄内川で泳いだり、田で赤蛙を捕^とって喰^くったり、裸^{はだか}体で暮した。赤蛙の肉はうまい。朝鮮蜂の尻袋とは比較にならない。疳^{かん}の薬という母に、喰^くべることを教えられてから味をしめた物である。

だが、そうして彼が遊びに熱していると、間もなくきつと、

「――猿ウ。猿ウっ」

と、探しに来る者があつた。

義父^{ちち}の筑阿弥^{ちくあみ}である。

弥右衛門^{やえもん}の亡^ない跡^{あと}へ、聾^{むこ}として入^{にゅうふ}夫した筑阿弥は、ただ働く人だつた。一年たたないうちに、家計もだいぶ直^ちつて、飢^うえる日はなくなつた。

その代り、日吉も、家にいれば、朝から夜まで、手伝いをさせられた。

ちつとでも、怠^{いた}けていたり、悪戯^{いたずら}でもしていようものなら、筑阿弥の大きな手は、すぐ日吉の顔を撲^{はた}いた。日吉は、嫌^{きら}でたまらなかつた。仕事よりも、義父^{ちち}の眼から少しの間でも遁^{のが}れていたかつた。

毎日、筑阿弥はきつと午睡^{ひるね}をした。日吉は得^えたりとばかり、その隙間に抜け出すのである。やがて筑阿弥が、畑や堤に姿を現^{あらわ}わして、

「猿ウっ。うちの猿めは、何処へ行つたかあ」

と、探し来ると、日吉は、何ものも捨てて、とうもろこしの中へ滑^{すべ}り込んでしまった。

探^{たず}しあぐねて、筑阿弥がのこの帰^{かへ}つて行くと、日吉は躍^{はな}り出して、

「わあい」

と凱歌をあげ、晩に帰れば、夕飯も与えられず、仕置にあうことも、その時は頭にもなく、また、遊び狂^{くる}うのだったが――今日はそういうわけには行^いかなかつた。

「野郎」

筑阿弥は、とうもろこしの中を、彼方^{あっちこっち}此方、恐^{こわ}い目をして歩いて来た。

「こいつはいけねえ」

と、考えたので、堤をこえて、河原地の方へかくれた。

すると、一人ぼっち、於福^{おふく}が堤に立^たつていた。夏でも於福だけは、ちゃんと着物を着て、水にも泳^{およ}がず、赤蛙も喰^くべなかつた。

筑阿弥は、彼を見かけて、

「アア茶わん屋の坊^ぼっちゃんですか。うちの猿めは、何処へ隠^{かく}れたでしょうか」

と、訊^{たず}ねていた。

於福は、

「知らない」

と、何度も首を振^ふっていたが、筑阿弥^{ちくあみ}が、

「そんな嘘をいうと、てまえがお宅へ伺^{うかが}つた時に、旦那に吩咐^{いひつけ}ますぞ」

と、脅^{おど}したので、気の小さい於福はすぐ顔いろを変えて、

「あの舟の中へかくれて、苦をかぶっているよ」と、指さした。

小さい河舟が河原に引きあげてあった。筑阿弥がそこへ駆け寄ると、河童のように、日吉が中から跳ね出した。

「や。こいつ！」

筑阿弥は跳びかかって日吉を突きとばした。突シのめった日吉は、河原の石に唇を打って、齒から血を出した。

「痛えっ」

「あたりまえだ」

「ごめんよ。ごめんよ」

「猿め。今日という今日はもう……」

二ツ三ツ頭を撲いた末、筑阿弥は彼よりも何倍も優った力で、日吉の体を吊し上げ、わが家のほうへ駈けて行った。

猿々と、憎悪して呼んでいるように聞えたが、筑阿弥は何も、日吉がそう憎いわけでもなかった。貧乏を直そうと焦心するために、誰へもやかましくなり、日吉の性質をも、強いて矯め直そうとするのだった。

「もう十歳にもなりおって。……この野郎、この野郎」

引っ吊して、家に帰ると、また二ツ三ツ拳をくらわせた。

彼の母が止めると、

「おまえが甘いからいけないのだ」

と、どなりつけ、姉のおつみが一緒に泣くと、

「何を泣く。わしの折檻は、この拗ね猿を良うしてやろうと思うから撲るのだ。この世話焼かせめ」

と、また撲った。

日吉も、初めは、撲られる度に頭をかかえて、謝っていたが、

「なんだい、なんだい、他所から来やがったくせにして、お父さんみたいな顔して、威張ってやがら。……おらの、おらの、ほんとお父さんは」

と、囁言みたいに、泣き泣き悪たいを云い出した。

彼の母は、

「これっ……そんなことを」

と、真つ蒼になって、彼の口を抑えたが、筑阿弥は、

「この早熟め」

と、激怒して、今度はゆるさなかった。裏の納屋の中へ抛りこんで、晩飯もやってはならぬぞと云った。

納屋の中から、暗くなるまで、日吉の喚く悪たいが聞えた。

「出しておくれよ。……よう。……出しておくれたら。……ばか野郎。唐変木。……みんな聾づらしてけツかるな。出してくれなければ火をつけるぞう」

そして、わあん、わあん、と吠えるように泣いていたが、夜半近くにになると、泣寝入りに寝てしまった。

すると、耳もとで、

——日吉や。日吉や。

と、呼ぶ声がした。

彼は死んだ実父の夢を見ていたので、うつつに、

「お父さん！」

と、叫んだが、眼の前に立っている姿を見ると、それは母のお奈加だった。

母は筑阿弥の眼をしのんで持って来た食物を与えて、

「さ。これを喰べて、朝まで大人しくしておいで。朝になったら、お父さんにお詫びしてあげるから」

と、いった。

日吉は、かぶりを振って、母のふところへしがみついた。

「嘘だ、嘘だ。おらには、お父さんはねえやい。お父さんは、死にしまったじゃねえか」

「これ、またそんなことをいう。なぜおまえは、そう聞きわけがないのだろ。いつもいつも、私があんなにいつて聞かせておくのに」彼の母は、身を切られるように、辛かった。けれど、母がなぜ身を慄かせてそう泣くのか、まだ日吉には分らなかった。

夜が明けると、日吉のことで、筑阿弥は彼の母を朝から唸鳴りつけていた。

「おれの眼をぬすんで、夜半に飯をくれてやったろう。そういう親馬鹿だから、いつまで、あいつの根性は直りやしないっ。おつみも、今日は納屋のそばへ寄っちゃあならぬぞ」

夫婦の中で、小半日も、何か揉めていた様子だったが、そのうちに日吉の母は、独りで泣く泣くどこかへ出て行った。

陽が西になりかけた頃、お奈加は帰って来た。光明寺の住僧がひとり一緒だった。

(何処へ行っていた?)

とも訊かず、筑阿弥はまず顔して、おつみを相手に働いていた外の庭に坐りこんでいた。

光明寺の僧は、

「筑阿弥どの、きょう御家内が見えて、こちらの息子どのを、寺へお小僧に出したいとの頼みじゃが、御同意かの」

と、訊ねた。

筑阿弥は、黙ってお奈加のほうを見た。彼女は背戸の外で、両手を顔に当てて泣いていた。

「ふうむ。……それもよからうが、寺入りには、証人も要るが」

「幸い、藪山のすそに住んでござる加藤殿の嫁御は、こちらの御内儀とは、御姉妹じやということであるしな」

「あ。加藤へ行ったのか」

筑阿弥は、なおさらほろ苦い顔をしたが、日吉の寺入りには、反対しなかった。

「よろしいように」

と、ひと事のように、彼はおつみへ用をいつけたり、農具を仕舞ったり、日暮を忙しげに働き出した。

その間に、日吉は納屋から出されて、母に懇々と何か諭されていた。

一晩中、納屋の蚊に食われどおしでいたので、彼の顔は大きく腫れ上がっていた。寺へ奉公に行くのだと聞かされた時、日吉はふと、涙を溜めたが、すぐ元氣になって、

「お寺の方がいいや」

と、いった。

明るいうちにと、光明寺の住僧は、日吉に支度させて、連れて出た。

筑阿弥も、さすがに少し、淋しい顔して、

「猿。お寺へ上がったら、心を入れ換えて、よう修行せねばいかぬぞ。すこしは、読み書きも習うて、はやく一人前の坊さんになって見せい」

と、いった。

日吉は、うんと一つ、額いたきりだった。けれど、垣の外へ出て、いつまでも立って見送っていた母の姿へは、何度も何度も振り返った。

寺は、村外れから少し先の、藪山やぶやまという丘ほどな高い土地の上にあった。日蓮宗にちれんしゅうの小伽藍しょうがらんで、住職は老年で寝たきりだし、若い住僧が二人して維持していたが、戦乱つづきで、村は疲弊ひへいしているし、檀家だんかも離散するばかりなので、形こそ違うが、ここも貧乏の外ではなかった。

だが、少年日吉は、生活が変わっただけでも、刺戟しげきになったとみえ、生れ変わったようによく働いた。機転はきくし、はきはきしていた。住僧たちも可愛がつて、

「こいつは仕方んでやろう」

と、毎夜、手習させたり、小学や孝経を教えたりした。記憶力も至つていい。

「おい。日吉。きのう途中でおまえのおつ母さんに会ったから、日吉もよくやっているといつておいたぞ」

住僧の一人がいうと、日吉も欣うれしそうにこりと笑った。——母の悲しみはよく分らないが、母の歓びは、そのまま彼にも歓びだった。

けれど、そういう神妙な状態も一年とはつづかなかった。十一歳の秋頃になると、日吉には、この伽藍がらんも狭くなつて来た。

二人の住僧が近郷へ托鉢たくはつに出て行くと、日吉は、隠しておいた木剣や、手製の采配さいはいを腰に差し、

「やあい、敵の奴ども。どこからでも攻めて来い」

と、麓ふもとで待機している戦遊いくさあそびの友達へ向って呼び立てた。時刻でもないのに、突然、鐘楼の鐘がこんこん鳴った。

寺の丘から、石が飛んでくる。瓦が落ちてくる。

麓ふもとの者は、驚いて、

「何じゃ、何じゃ」

寺の丘を仰ぎ合つた。

畑に、働いていた百姓の娘に飛んで来た瓦あたが中つて大怪我をした。りした。

「……光明寺のチビ僧めが、またおらどもの腕白わんぱくをあつめて戦遊びをやりおるな」

麓の家の人たちは三、四人して登つて行つたが、本堂の前に立つと、開いた口がふさがらなかつた。

本堂は灰だらけだ。外陣も内陣も乱脈ていな態である。

香炉こうろは割れて落ちている。

旗にでも使つたのか、金欄きんらんの帳とばりは裂いて棄ててあるし、太鼓の皮はやぶれている。

「庄坊やあい」

「与作やあい」

親たちは、子を探したが、チビ僧の日吉も見えなければ、腕白わんぱくたちも、忽然こつぜんとみな姿をかくして見当らない。

「この寺の猿と遊ぶと、もう家へ入れないぞ」

親たちが、麓へ降りて行くと、すぐにまた、わアっと、本堂が震動し、藪やぶがうごき、石が飛び、鐘が鳴り出した。

——日が暮れると。

わアン。わあん……

と、手を折つたり、瘤こぶをこさえたり、血だらけになって降りて行く子が、多勢の中にはきつと二、三人ずつ出来た。

一日中、托鉢に歩いている二名の住僧は、毎度尻をもちこまれるので、もうさじを投げていたが、その日は、本堂へ立つと、

「……あつ」

顔見あわせて愕然がくぜんとした。

内陣の前にある大香炉が真つ二つに割れているのだ。

この大香炉は、寺にとつて、今のところ唯一の檀家である新川の茶わん屋捨次郎が、つい三、四年ほど前、

(これは伊勢松坂のさるお方から、特に焼いてくださった物。わしとは深い御縁があるので、生き遺物とも思ひ召し、思い出の地の山水を絵付けして、特に丹精をこらして製られた香炉じゃが、寺に納めておけば、末代まで長く什宝として伝わるであらうから——)と、云い添えて、寄進してくれた物なのである。

平常は、箱に納めて、珍重していたが、つい七日ほど前、その茶わん屋の御寮人様が、仏参に見えるというので、その折、出して用いたまま、つい仕舞いもせずにあつたのである。

それが割れているのだ。

「……?」

住僧は、顔いろを失った。老師の耳に入れたら、病が重るだろうと、そこまで心配は走った。

「猿じゃな」

「そうだ。他にこんな悪戯をする童はない」

「どうしてくれよう」

二人の住僧は、すぐ日吉を引き摺って来て、香炉を突きつけた。

日吉は、この本堂で暴れたのは自分だけではないし、自分がした覚えはなかったが、

「ごめんなさい」

と、謝った。

謝られると、住僧はかえってかっと怒った。日吉の天性の顔つきが、平気でいっているように見えたからである。

「この外道め」

二人がかりで、日吉をうしろ手に、縛り上げてしまった。本堂の丸柱へ、日吉はくりつけられた。

「幾日でもこうしておいてやる。鼠にでも喰われてしまえ」
と、住僧は罵った。

だが、日吉には毎度のことだった。辛いのは、翌る日になって友達が出来ても、遊べないことだった。

「やい、縄を解いてくれよ。解かないと、ぶん撲るぞ」

日吉は脅したが、日吉さえ罰せられているのを見ると、みな逃げに行った。

たまたま、参詣にのぼって来る年よりや村の女たちも、

「あれ、猿が」

と、指さして、

「よい気味や」

と、笑い合ったり、からかつて逃げた。

いつとなく彼の小さいたましいは、今にしろ、今にしろ、と呟くことを独り慰めにしていた。

また、その小さい肉体は、伽藍の太柱を背に背負って、かえって体じゅうに、沸り立つような強い血をよび起した。

その二つのものを、唇にむすび、自分の憂き目へ向って、

「なにくそ」

と、不敵な顔を作った。

柱によりかかって、彼は睡ってしまった。——そして自分の涎に目がさめた。

恐ろしく日が永い。

日吉は、退屈してきた。

そのうちに彼はふと、まだ眼のまえに突きつけたまま置いてある

——二つに割れた陶器の大香炉に眼をすえ出した。

香炉の底には、

五郎大夫ごろうだゆう

祥瑞之シヨウズイこれをつくる製

と、小さい文字で作者の名が記してあった。

瀬戸村は近いし、尾張付近は陶器の産地である。そんな物も
とより何も彼の興味をひきはしないが、その大香炉の腰に描いてあ
る藍あい絵えの山水が、

「どこだろ？」

と、退屈な眼に、想像をほしいままにさせたのである。

白磁はくじに藍一色で画かれていた山や石橋や、楼閣や人物や——そ
して日本では見たこともない船の型や人間の着物が——ひどく彼の
頭をなやました。

「どこの国だろ？」

日吉には、分らない。その分らないのを、少年の旺さかんな智慾は、
飽くまで知ろうとし、想像を駆けめぐらした。

「……こんな国って、あるのかしら？」

思いつめているうちに、彼の頭にひらめいたものがある。それは
何日いっ、誰に、教えられたか、聞いたか、彼自身も忘れていたもの
であったが、苦しまぎれに飛び出した記憶であった。

「そうだ。唐からだ！……唐の国の絵だ」

日吉はただ一人で、愉快だった。染付そめつけの絵を見ていると、たま
しいは唐の国へ飛んで遊んでいた。

日暮れがた——

また、托鉢たくはつから帰って来た二人の僧は、日吉が泣きしおれてい
るかと思いのほか、前へ行くと、にやりと笑ったので、

「もういかん。折檻せつかんもむだなことだ。こいつは未怖ろしい。親元

へ帰したがようござろう」

と、嘆息してしまった。

寺入り証人の加藤家は、この藪山やぶやまのすそなので、晩になると、
僧の一人は、日吉に飯を与えて、山から連れて降りた。

加藤弾正は、短檠の灯を背にして、一間に寝転んでいた。明け暮れ、戦の中に身をおく武人は、たまたま、家に帰ってつるぐ日も、身をつつむ家居のすべてが、余りに和やかに過ぎて、かえってこの平和や居心地に馴れることが恐かった。

「おえつ」

「はい」

と、返辞は遠く台所のほうです。つい一兩年前に、結婚したばかりの新妻であった。

「誰か……枝折をたたいておるが」

「また、栗鼠ではごさいませぬか」

「いや、訪れらしいぞ」

「……ほんに」

おえつは、手を拭きながら、門口へ出て行つたが、すぐ引き返して、

「光明寺のお坊さまが、日吉を連れてお見えなさいました」

と、瑞々しい眉に、ふと愁いを見せながらいった。

弾正は聞くと、

「ははあ、さては猿に、お暇が出たとみえる」

と、予期していたように笑った。

この加藤家と、中村の木下家とは、当然、親戚の間であった。妻の姉の息子というので、寺入りの時、証人に立っているの、事情

を聞くと弾正は、

「僧侶に不向きとあれば、ぜひもないこと。当家から中村の親元へ帰すとしましよう。お世話がいもなく、御迷惑ばかりをかけて——」

と、夫婦して詫びを述べ、日吉の身は、その晩に引き取った。

「では、親御へは、そちら様からどうぞ悪しからず」

光明寺の僧は、肩の荷を降ろしたように帰って行った。

日吉は、ぽつねんと置き残されたが、物珍らしげに、室内を見まわし、

「誰の家だろ？」

と、考えていた。

寺入りの時は、直に寺へ連れて行かれたので、ここへは立ち寄りなかつた。また、近くに親類があると知ると、辛抱がし難くなるであらうとおえつが嫁いで来ていることも、彼の耳へは聞かせてなかつた。

「小僧。晩の飯は喰べたか」

やがて、弾正が前へ来て坐りながら、にやにやいう。

「喰べた」

かぶりを振ると、

「菓子を喰え」

と、甘い物をたんとくれた。

日吉は、ボリボリそれを喰べながら、長押の檜を仰いだり、具足櫃の紋を眺めたり——それから眼のまゑに坐っている加藤弾正の顔を、穴のあくほど、じろじろ見つめたりした。

（この息子、すこし足らないのかな？）

弾正は疑った。なぜならば、余りに自分を見るので、試みに、彼も目をこらして、睨め返したところが、日吉の目は、横に反らし

もしなければ、俯向きもしないのである。——といって、まったくの白痴ほど無反射でもないが、ただにやにやと愛嬌をたたえているからであつた。

「はははは」

彼の方が、先に目を反らしてしまひながら、

「いつの間にか、大きくなつたなあ。日吉、わしの顔を覚えてるか」

そういわれて、日吉はかすかに思い出した顔つきだつた。——これは七歳の頃、河原で頭を撫でてくれた小父さんなのだ。

武人の慣いとはいへ、良人の弾正は、ほとんど、清洲の城内か、戦場で寝泊りしていた。

結婚してから、まだ日も浅いが、妻とふたりで、家庭を楽しむようない日すら滅多にない。

その良人は、たまたま、きのうから家に帰つて、休養していた。そして明日はもう清洲の城へ詰め、また幾月かは、この家で共に暮す日もない——と思つていた折も折なのである。

「……ま。困つた子が」

と、おえつは当惑の眉をひそめた。

棟は離れているが、この小屋敷には、良人の老母もいるし、家族もいる。

(こんな童が、姉の子にいるのか)

と、思われるのも、嫁の身には、肩身の縮む気がするのだった。だがその日吉は、良人の居間で、先刻から頓狂な声を出しつづけていた。

「あ！ じゃ小父さんは、いつか河原で、大勢のお侍と一緒に、馬に乗つてたろ。あのお侍の中にいたんだろ」

「ウム、思い出したか」

「覚えてらい」

急に甘たれ声で——

「そんなら、おらの家と親類だもの。おらのおつ母さんの妹と、おじさんと、許婚だつたんだろ」

と、馴々しくなる。

下婢を相手に、茶の間へ、食膳を出していた彼女は、日吉の言葉づかいや、野良で出すような大声に、冷々していたが、

「もし……お食事の支度ができましたが」

と、襖をあけて、良人を呼んだ。

見ると、良人の弾正は、日吉を相手に、腕角力を取っているのだ。

日吉は顔を真っ赤にして、蜂のように尻を立てているし、弾正も子どもみたいにそれに応じていた。

「……あなた」

「飯か」

「汁が冷えますから」

「待て。……いや、おまえ先に独りで喰べてしまえ。この小僧、すぐ本気になるからおもしろい。はははは、どうもおかしな奴だぞ」

と、夢中である。

日吉の天真爛漫に、弾正はひき込まれている姿だった。馴れやすい日吉はもうこの叔父さんを手玉に取つて遊ばせていた。指人形だの物真似だの、子ども仲間でする遊戯を、次々にやって、弾正に腹をかかえて笑わせた。

翌日、清洲城へ立つ時、弾正は鬱いでいる妻へ云い残した。

「親どもが承知なら、屋敷へ置いて養つてくれてはどうだ。物の役には立つまいが、ほんものの猿を飼うよりは増しだろう」

——だが、おえつは欣ばなかった。枝折戸まで、良人を送り出しながら、

「……いえ、やはり中村の姉へ帰しましょう。もしお姑様などへ、粗相があるといけませんから」

「それやあ、どっちでも、其女のいいようにするがよいが」

一步、家庭を出れば、もう生きて帰るか帰らぬか、心は主君と戦にのみあつて、妻には、余りにも素気なくさえ見える良人だった。

「あんなにも、男は、功名ばかりが、大事なものかしら!」

おえつは、後ろ姿を見送つて、また幾月かの淋しさを思つた。用事がすむと、彼女は早速、姉の子の日吉を連れて、中村へ出かけて行つた。

その途中。

「おう、これは」

と、向うから来て、おえつに丁寧なあいさつをした人がある。

商人だろう。しかし商人にしては、大家の主人にちがいない。きらびやかな短羽織を着、脇差を一腰さし、小桜革の足袋を穿いて、四十がらみのにこやかな人だ。

「加藤様の御寮人ではございませんか。どちらへお越しなされますな」

懇意とみえておえつは、

「中村の姉の家まで参ります。この子を連れて——」

と、日吉を抱えよせた。

「ホ……。その坊んちでござるかの。光明寺から追われたお小僧と
いうのは」

「もう、お耳にはいりましたか」

「いや今も実は、そのことでの、ちよつと寺まで行つて参つたので」

日吉は、何だか間が悪くなって、眼をきよときよとせずにいられなかった。坊ンちと呼ばれたのは、生れてから初めてである。顔が熱くなるほど恥かしかつた。

「オヤ。この子のことで、お寺へお出かけ下さいましたのですか」

「そうですよ。光明寺から宅へ謝りに来ましてな。——何かと、理を聞けば、わしが寄進した大香炉を割つてしもうたとか」

「ほんに、この悪戯坊が困つたことを致しました」

「何のさ。御寮人までがそういうわせられな。陶器が割れるのはあたりまえじゃ」

「でも、稀れな御名器というおはなし……」

「ただ、惜しいのは、わしがお伴いたして、長らく明国に渡つておいでなされた松坂の伊藤五郎大夫様のお作なのじゃ」

「祥瑞と仰つしやるのは、その方でございますか」

「ところがもう、御病氣でお果てなされた。近頃、染付ものの陶器に、祥瑞五郎大夫製とよく銘に書いてはあるが、それはその後の人々で、ほんとに明国へ渡つて、あの陶器の作法を伝えて來られたお方は今ではもうこの世にいませんぬ」

「世間のうわさゆえ、どうか存じませぬが、お宅様に引き取つてお育てになつてゐる、於福さまという坊ンちは、その祥瑞様が、明国から連れ歸つて來たお子じやとやら……」

「はい。どうして知れたか、童たちと遊ぶと、唐人子唐人子とかかわれるとかで、この頃は、ちつとも外に出ませぬわい」

茶わん屋捨次郎はそういつて、にやにや日吉の顔をながめた。友だちの於福の名を聞いたので、日吉はよけいその人を、何だろうと考へた。

「ところが、この日吉どのだけは、いつも於福を庇うて下さるそう

な。その日吉どのが、寺を追放されたと聞き、於福までがわしへ詫びをいいますので、実は今、光明寺へ行つて、どうぞ宥ゆるしてあげてくれと頼んだところ、先で申すには、香炉の罪ばかりではない、云々しゆじかのこともある、いやこれこれの事情もあると、受けつけそうもござらぬので、引き退つて来たところすわい。……はははは」

と、捨次郎は、胸をそらして笑い、そしてまた、こう附け加えて云つた。

「親御のお考えもおざろうが、もしまた、奉公に出す場合、宅みたいな所でもよい思おもひ召めしなら、いつでも世話して進ぜます。どうして、なかなかこのお子は、見どころがありますよ」

また、初めのような丁寧なあいさつを交わして、その人は別れ去つたが、日吉は、おえつの袂たもとにつかまりながら、幾度も振り返つた。

「おばさん。今のは誰」

「茶わん屋捨次郎といって、諸国の陶器やきものを捌さばいている問屋さんです」

「ア。それで茶わん屋っていうのか」

いちど黙つて、おえつと共に、てくてく歩み続けていたが、また、

「明国みんこくって、どこさ。明国って——」

と、今の聞きかじりを思い出して、出しぬけに訊ねた。

「唐からのことでしょ」

おえつは簡単にいったが、日吉がたてつづけに、

「どっちの方？」

だの、

「どれくらいな広さ？」

だの、

「明国にも、城があつて、侍がいて、戦いくさをするか」
だのと訊き出すので、

「ま、うるさい。少しは黙つて歩くもんですよ」

と、おえつは袂たもとを振つた。

だが、この叔母さんの叱言こじごぐらいは、そよ風ともひびかない。

日吉はぐんと首を仰向けて、頻りに青空をながめていた。

彼は、ふしぎでふしぎで堪たまらなかつた。どうして空はあんなに蒼あおくて深いのか。なぜ人間は地面ばかりにいるのか。もし人間が鳥みたいに翔かけられたら、香炉こうろの絵で見た明国へも、一足飛びに行かれるだろうに。

だから香炉の絵でみても、鳥のかっこうは尾張の国の鳥とちつとも変つていない。人間の着物も、船の型も変つていなければならない。鳥は同じだ。鳥には国がない。いや天地がみんな一つ国だ。

「見たいなあ、方々の国を」

彼には、これから連れて帰されるわが家の狭さや、貧乏などは頭の隅すみつこにもなかつた。

やがて——眼で見て初めて、穴蔵あなぐらみたいに、昼間でも暗いわが家の奥をおえつと共に覗きこんだ。

用達ようたしにでも出ているのか、筑阿弥ちくあみは留守だった。おえつの話を聞いて、母は、

「困つた子よのう」

と、つくづく溜息ためいきをついて、日吉の暢気顔のんきがをながめたが、その眼は、彼を責めているのでなく、二年近くも見なかつた間に、めつきり大きくなつた子の姿に、氣をとられていた様子でしなかつた。日吉はまた、母の乳ぶさに吸いついている乳のみ兒に、怪訝いぶかするような眼をすえていた。いつの間にか、自分の家にまた一人子が殖ふ

えていたのだ。彼はいきなり、その子の顔を持って、乳くびから挽ぎ離してのぞき込んだ。

「おっ母、いつ生れたの、この子」

「おまえは、兄さんになったんだよ。慥りしなければいけませんよ」

「なんてえ名？」

「小竹」

「変な名だな」

頓狂な声でいったが、しかし彼は痛切に、何か感じたらしかった。弟というものに押し出された兄の意識だった。

「あしたから、おらが負ってやろうね。ええ小竹や小竹や」

余り彼がいじくったので、小竹は泣き出した。

おえつが帰って行くと、入れちがいに義父の筑阿弥がもどって来た。母がさつき妹のおえつに愚痴をこぼしていたのによると、筑阿弥はこの頃、貧乏の立て直しにくたびれて、酒ばかり飲んでゐることだったが、今も赤い顔して家にはいつて来た。

そして、日吉を見出すと、すぐ呶鳴った。

「野郎っ、また追ン出されて来たか！」

家に帰ってから、一年の余はいつか経った。日吉は十二になった。「猿っ、薪を割ったか、野郎、何でまだ、水手桶を畑へ抛ったらかしておくか」

筑阿弥は、彼のすがたがちよつとも見えないと、探し廻って、呶鳴りつけた。

「今、やりかけてるところだよ」

「口ごたえでもしようものなら、

「えい。またつべこべ」

と、土荒れした頑固な掌が、すぐ日吉の横顔へびしりと鳴った。

子を負って、棉を摘んだり、麦を踏んだり、炊をしたりしている母は、そんな時は、強いて背中を向けて黙っていた。しかし、自分が打たれるより、悲しい辛い顔であった。

「もう十二にもなれば、どこの童でも、家業の手助けは当りまえだ。親の目ばかりぬすんで、遊びたがってばかりいると、腰骨をぶち折ってくれるぞ」

そんな調子に、筑阿弥は絶えず口ぎたなく日吉をこき使ったが、母の甘い慾目ばかりでなく、実際、寺から帰って来た後の日吉は、生れ変わったようによく働いた。

（他人の御飯をたべると、こつも急に変わるものか）

と、母は傷々しくながめたが、生なか庇い立てすると、かえって、筑阿弥の荒い手や言葉が、日吉へ苛酷に当るので、見て見ぬ振りをしているのだった。

そのくせ以前とちがって、筑阿弥は畑には滅多に出ず、家にもいない日が多かった。町へ行くらしいのである。そして酔って帰っては、子をどなり、妻に当って、

「いくら働いたって、この家の貧乏は直リッこねえわ。喰いつぶしは多いし、年貢は増すし。餓鬼さえなければ、おれも野武士の仲間にもはいって、うまい酒も飲めるが、こつ足手纏が多くつちやあ……」

と、口ぎたなく云いちらした末、なけなしの金を妻に算段させて、夜夜中でも、おつみや日吉に酒を買いにやらせるのだった。

その義父のいない時、

「おっ母、おらあまた、奉公に行きたい」

と、日吉が母に洩すと、お奈加はそういう日吉を抱きしめて、
「……いておくれ、今おまえが家にいなかったら」

と、後の言葉は、云い得ない涙になって、ホロリと一雫、横を
向いて眼を拭うだけだった。

母の眼の一しずく――

それを見ると、日吉はもう、何もいえなくなってしまう、家を飛
び出そうかという考えも、不平も、辛さも、胸から捨ててしまった。

だが、そんな可憐しい気持ちが起るかと思うと、少年の天性のう
ちには、遊びたい、喰いたい、知識を得たい、遠くへ奔りたい
――さまざま欲望の芽が、雑草の伸びるように旺んになるので
あった。そこへ義父の筑阿弥が、母へいう無理だの、自分の頭に
うける拳だのの衝動もあって、

「くそをくらえ」

と、不敵なたましいが、彼の小さい体を燃やし、それが度重なっ
て、

「お義父さん、おらを、奉公にやってくれ。おら、こんな家にい
るより、奉公に行きてえや」

と、恐い筑阿弥へ、直にぶつかって云いきるほどな感情を、駆り
立たせた。

「何。奉公に出たい。ようし、何処へでも行って、他人の飯をまた
喰って来い。その代り、こんど追い出されても、家には入れぬぞ」

と、筑阿弥もむきになって云った。子どもと思いつながら、性格の
くい合わないせいか、彼は十二の日吉と五分になって、いつも怒り
を激発させるのだった。

村の紅花屋へ奉公に行った。紅花絞りの職人たちから、

「口ばかり達者で、小生意気で、日向で臍の垢ばかり取ってやが
る」

と、排斥されて、間もなく、世話した者から、

「どうも役に立たないので」

と、日吉は家に帰されて来た。

筑阿弥は、睨めつけて、

「どうだ猿。汝のような穀つぶしは、世間様でも飼ってはくれま
い。親のありがたさがわかったか」

と、いった。

日吉は顔を膨らせて、

「おらが悪いんじゃないやねえや」

と、云いたそうな顔して、義父の睨む眼を見返した。

そして、かえって、

「お義父さんこそ、百姓もしないで、馬市でばくちしたり、お酒
のんだりしないがいいよ。よその人がみんな、おっ母が可哀そうだ
っていつているぜ」

と、意見した。

「何をいう！ 親に向って」

筑阿弥は、一喝で日吉の口を黙らせたが、心のうちでは、
「だんだん摺れからして来やがったわい」

と、日吉を見直した。

他人の中へ出て、家へもどって来るたびに、子の姿は目立って大
きくなっている。そして以前と違って、親を観る眼も、家庭を見る
眼も、急に育って来たように思われる。筑阿弥は、その大人みたい
な眼で自分を観察されるのが、うるさいし、恐いし、嫌でならなか
った。

「はやく奉公口を探して出て行け」

翌日、もう日吉は、次の雇主の所へ行っていた。

やはり村の桶屋だった。

桶屋のおかみさんから、

「こんな末恐ろしい子は、わしが所へなど置けん」

というて、ひと月ばかりで帰された。

日吉の母は、何が末恐ろしいのか、世間の人のいう意味がわからなかった。

左官屋の手伝いにも行つた。馬市の弁当売りにも行つた。鍛冶屋へも行つた。どこも三月か半年だった。

身装は、だんだん大きくなる。中村のうちではもう、

「ああ筑阿弥どんの家のせがれか、あの白痴猿ときては、口巧者ばかりで、使いものになりやあせん」

と、定評がついて、もう世話してくれる人もない。

その世間へ、母のお奈加は、間が悪くて、肩身がせまくて、日吉のうわさを人がいえば、すぐ、自分から先に、

「あの子はもう、何にしたらよいやら、百姓は嫌うし、家には落ちつかないし……」

と、極道者の卵みたいなのに、自分から先に卑下して、人に謝ってばかりいた。

十五の春である。

寡れた母は、沁々と日吉を膝によせて、

「今度こそは、辛抱しやい。また出るようなことになる、お世話してくれた加藤殿へも、妹が顔向けならぬし、世間でも、またかと笑いますぞ。……いや今度、落度でもして、先様から出されたら、誰よりもこの母がききませぬぞ」

云い聞かせて、次の日、新川の大家へ、敷山の叔母に連れられて目見得に行つた。

茶わん屋捨次郎の家だった。

そこには、幼友達の於福がいた。於福はもう、十七、八の色白の青年で、養父の捨次郎の家業を助け、茶わん屋の若旦那として、実直に手伝っている。

商家でも、主従のけじめは、厳しかった。

若主人の於福の前へ、彼がはじめて目見得に出た時は、日吉は板の間にかしこまり、於福は座敷の中で、養父の捨次郎だの、美しい御寮人などと、茶うけの菓子など喰べながら、話に興じているところだった。

「おや。弥右衛門とこの小猿だね、おまえ。ああお父さんは死んで、村の筑阿弥が、次のお義父さんになつたんだってね。——こんど家へ奉公に來たのかい。よく働かなくちゃいけないよ」

於福のことばや物ごしはもう見違えるほど大人びていた。

「へい」

日吉はすぐ、下僕たちのいる部屋へ退つた。茶の間で、主人の家族たちがその後で笑っている声がした。

友達の於福が、ちつとも友達らしい顔もしてくれないのが——日吉にはさびしかった。

日が経つと、於福は、

「おい、小猿」

使い馴れて、よけいに言葉なども、ずけずけいった。

「あしたは、早く起きて、清洲まで行つといで。お役所へ御用の品を持って行くんだからいつもの手押し車へ荷を積んでね。——それから帰りは船間屋へ廻って、肥前から陶器の荷が届いているか

どうか、聞きあわせておいで。——また、道くさして、こないだみたいには夜おそく帰って来ると家へ入れないぞ」

日吉は、それに対して、

「はい」

とか、

「へい」

とかしかいえないのだった。古くから来ている奉公人ほど、

「かしこまりましてござります」

と、額を板の間にすりつけていう程なのである。

那古屋や清洲の城下へは、のべつ使いにいった。その度に彼は、お城の白壁と高い石垣を仰いで、

「どんな人があの中に住んでるのだろ。——どうしたらあんに住めるんだろ？」

と、漠として考えた。

虫ケラのように小さな惨めな自分が、幼稚な心の中にも、口惜しく思われるのだった。

そして陶器の荷を積んだ、重い手車を押しながら町を行くと、

「あれ。猿がゆく」

「猿が車を押して行く——」

などと被衣した麗人だの、都めかした町娘だの、若いきれいな御寮人たちが、囁いたり指さしたり、じろじろ眺めて行ったりした。

きれいな女と醜い女との見分けはもう日吉にもついていて。少年の心にもっとも辛く思えたのは、そうした美しい女性の群れから、奇異な眼で眺められることだった。

その頃、清洲の城にはまだ、室町大名の斯波義統が城主として

住み、織田彦五郎信友がその家老だった。

城のお濠と、五条川を中心にして、ここには古い足利文化のにおいと、戦乱の中にも持ち続けて来た繁昌が、国郡第一の都府という名に恥じなかった。

さけは酒屋に

よい茶は茶屋に

女郎は

清洲のすがぐちに

その須賀口には、妓楼や茶屋が軒をならべていて、昼間は、禿たちが鞠をつきながら、往来で唄っていた。

少年日吉は、荷を積んだ手車を押して、鞠唄の中を、うつつに通った。

ぼんやりと——

「どうしたら偉くなれる？」

まだ、その解決もつかめていないのに、ただ一念に、

「今にしろ、今に」

と、漠とした希望に、さまざまな妄想を描きながら行くのだった。

美味そうな食物、豊かそうな家、絢爛な武具、馬具、衣裳、宝

玉などを売っている店——彼には縁のないあらゆる物資がこの町には軒なみに積んである。

中村の家にいる姉のおつみの青い瘦せた顔を思い泛べると、饅頭屋の蒸籠から立つ湯気を見ても、

（姉やにも買ってやりたいなあ）

（おっ母に、老舗の薬屋の前を通って、

（おっ母に、あんな薬をいつもやれたら、もっと丈夫になるだろうに——）

と、その藥草囊に見恍れたりした。ただ筑阿弥のことだけは、べつにどうとも、考え出されなかった。

（おらが偉くなれば）

と思う底には、世間の誰と見較べても、余りにみじめな、母とおつみとを、幸福にしてやりたいという気持も、多分にあつた。

——で、彼は城下へ来ると、ふだんの望みや空想が一ぱい大きく強く燃えて、

「今に！ 今に！」

と心でつぶやき、

「どうしたら。どうしたら」

と、それのみ思つて、いつも歩きつづけるのだった。

「ばか者っ」

と、日吉はふいに、人ごみの中でどなられた。繁華な辻を曲りかけた途端である。

乗換馬を曳かせ、槍を持った供の者を、十人以上もひき連れた馬上の侍に、手車をぶつけてしまったのである。

わら苞に巻いてある鉢だの皿だのは、くずれ落ちて粉々に碎けたし、日吉の体も、手車と一緒に踰めいた。

「盲かッ」

「うつけ者めが」

馬も、従者も、碎けた瀬戸物の上を、そう罵りながら、ばりばり踏んで行つてしまふ。往来の者も、誰ひとり、寄つて来てはくれなかった。

割れた欠片を、拾いあつめ、また、手車を押して歩きながら、彼は人中の間のわるさと、憤りに血を熱くして、

「どうしたら彼奴らを、おらの前に土下座させてやれるだろうか」

と、幼稚な空想のなかで——しかし真剣に思いつめた。だが、少し経つと、主人の家に歸つてからの叱言だの、於福の冷たい顔などが目に見え出し、大鵬の翔けるが如き大きな空想も掻き消えて、けし粒みたいな小さい心配にも、囚われてしまうのだった。

とつぷり日が暮れていた。彼は手車を小屋の中へ押しこみ、井戸端で足を洗っていた。

この近郷で、陶器やまものやしきとよばれているだけあって、茶わん屋の構えは、大きな土豪の家ほどあった。

母屋は広く、棟は幾つにもわかれ、倉も並んでいた。

「小猿う。小猿ッ」

於福おふくが、近づいて来た。日吉は石井戸の蔭から身を起して、

「おい」

と、返辞した。

於福は、何が気に障さわったのか、持っていた細竹で、日吉の肩を打ちすえた。日吉は拭きかけていた足をよろめかせて、また泥によごしてしまった。

「主人に向つて、おいという返辞があるか。いくら云つても、言葉の直らない奴だ。わしの家は百姓じゃないぞ」

雇人の長屋を見廻る時だの、倉で働いている者へさしずに来る時は、この若主人はいつも、細竹を持って歩いている。日吉がそれで打たれたことは、きょうばかりではない。

「なぜ黙ってるのか」

「……………」

「これ、はいといえ」

「……………」

「いわないな。こいつ」

日吉は、また一つ打たれるよりも、喉のどを宥なだめて、

「はい」

と、云い直した。

「清洲からいつ帰ったんだい」

「今帰りました」

「うそをいえ。台所の者にきいたら、もう御飯をたべたというじゃないか」

「眼がまわつて、仆れそうになったんで」

「どうして」

「腹が減へつちまつて、やっと歩いて来たもんだから」

「なんだ、腹が減へったぐらい。帰つて来たら、すぐ主人に帰りましたとなぜ挨拶あいさつに來ない」

「足を洗ってから」

「言い訳するな。そのうえ今勝手元の者に聞いたたら、清洲のお屋敷先へ届ける陶器を、途中でたくさん欠いたというじゃないか」

「ええ」

「正直に詫わびようともせず、わしへ何と嘘をいっただらいいだろうと、勝手の衆へ、げらげら笑いながら訊いていたろう。今夜は、堪忍かんにんしないぞ、やい」

於福は、日吉の耳たぶを引張つて、歩き出しながら、

「さ。来い」

「御免なさい」

「くせになる。うんと糺きゆうめい明めいしてやるから来い。お父さんのところへ来い」

「かにん、かにん」

於福は手を離さない。井戸端にいた二、三人の雇人も、日吉の謝る声が猿の啼き声そっくりだといって見送っている。

父の捨次郎へ告げ口する気であろう。広い家の横を廻って行った。倉の前から庭口へと行く道は孟宗竹が茂っていて、裏からも母屋からも見通せなかった。

そこまで来ると、日吉はふいに踏み止まって、

「やいッ」

と、於福の手を払い、また、

「やいッ」

と何度も云って、

「話があるから聞け！」

と、於福の驚いた顔を、大きな眼をして睨みつけた。

「こら、何するんだ」

「なにが何だ」

「主人に向つて、お前は——」

と於福は、青ざめて、顫おのきながら、

「わ、わしは、主人だぞ」

「だからいつも、従順すなおにしているが、きょうはいつてやるぞ。やいッ」

「……………」

「やい於福。てめえは、以前のことを忘れたか。おらとお前とは、友達だったろ」

「そんなことは、前のことだ」

「前のことは、何でも、忘れていいものか。唐人子、唐人子って、皆からてめえが虐められていた頃に、誰がいつも、庇かばってやったか、覚えてるだろう」

「覚えてるさ」

「覚えてたら、その時の恩も少しは考えるッ」

小さい日吉は、ずっと自分より大きな於福を、こう睨めすえて、どっちが年上だか分らないように威張った。

「ほかの雇人でも、みんな云ってるぞ。大旦那はいけれど、若旦那の於福は、生意気で、人情なしで思い遣りがないって」

「……………」

「てめえみたいな、御苦労なしの坊んちこそ、貧乏して、困つてみて、他人の家の飯をちつと喰べてみるといいんだ」

「……………」

「この先も、奉公人いじめをしたり、あんまりおらに辛くあたると、どうしてくれるか知れないぞ。おらの知っている小父さんは、御厨みくりやの野武士で、千人も手下を持つてるんだから、その小父さんに来てもらつて、こんな家、一晚で踏み潰つぶしてしまふからそう思つてろ」

と、日吉は口から出放題にいつて、脅おどしたに過ぎないのであったが、生来氣の小さい於福は、日吉の眼光と、口吻くちふりに氣をのまれて、慄ふるえ上がつてしまった。

——母屋のほうで、

「於福様あ」

「若だんな。若だんな」

と、先刻さつぎから、召使の男や女がさがしていた。——けれど於福は、それに答える勇氣も失せて、日吉の眼に縛りつけられていた。

「呼んでら」

日吉は、教えるように呟つぶやいて、

「もう行つてもよし。だけど、今いったこと忘れるな」

云いすてて、彼は先に、元の裏口の方へもどつてしまった。

だが日吉は、後では胸がときどきしていた。

——今に奥から、呼びに来はしまいかと虞れて。

しかし、何事もなかった。

いつかそんなことも忘れているうち、年が暮れた。彼は十六の年を迎えた。

百姓は百姓なみに、町人は町人なみに、十六となれば、元服のまね事をし、若い者の仲間入りをするのであったが、彼には、そんな祝い事はおろか、扇子一本、くれる者もなかった。

ただ、正月なので、広い台所の板敷の隅っこで、ほかの下男たちと共に、水ッ漬をすすりながら、栗の雑煮餅を、めずらしく喰べただけだった。

それでも彼は心の裡で、

「おっ母や、おつみは、このお正月、餅を喰べているかしら？」

と、ふと思いやった。

栗を作る百姓でいながら、餅もなく送った正月を、何度も覚えていくからである。

彼が、そんなことを思い出しているうち、他の下男たちは、

「今夜はまた、旦那さまの客呼びで、おらたちまで、お末に畏

つて、長談義を聞かねばならぬ晩だぞ」

「嫌だのう。せつかくのお正月を」

「腹いたでも起して、寝ているとするか」

などと、何かこぼし合っていた。

年に二度か、三度。

初春とか、えびす講とか、何ぞの折というと、茶わん屋捨次郎はよく客を呼んだ。

瀬戸の職人たちの、那古屋や清洲のとくい先の家族だの、武

家だの、親類先のまた知りあいの者だのと——ずいぶんな客が夕方からぞろぞろ集まった。

「ようこそ。……ようお越し」

捨次郎はその日、とりわけ機嫌よく、そして腰ひくく、自身で接待したり、日頃の疎遠など詫びあうのである。

彼の美しい妻女はまた、茶席をもうけて、珍らしい器や、心入れの花など挿し、

「御所望ならば」

と好む者へは、茶をたてて清雅なもてなしをした。

東山殿が茶事の数寄を称えられてから、その余風が、いつか民間にも移っていた。その影響がまた、民家の畳とか障子とか、床の間とか、箸茶碗の好みにも、自然と変化を促して来て、知らず識らず茶は生活の中へはいっていた。

わけて瀬戸村一帯で焼かれる特色のある陶器は、その淡雅な味が、茶の用器に多く需要されだしてきたので、職人たちでも、茶をのむことを知っていた。——また、狭い小部屋の中で、一輪の花と、一服の茶だけで、その間、戦乱の世の中も、苦悩の人生も、ふと忘れて、濁世のなかにも気を養うという術を、理窟なく覚えていた。

「これは、お内儀どのか」

四十がらみの骨太な武士であった。次々と集まる客の中に入り交じって来ていた一人なのである。茶席へはいって来ると、茶わん屋の妻へいんぎんに挨拶をして、

「てまえば御親類の米野の七郎兵衛どのの知合でござる。七郎兵衛どのの御案内で参る約束でござったが、生憎と、その七郎兵衛どのがお風邪気とやらのため、不勝手ながら、一人でお招きへ寄せてもらいに参った」

と述べ、

「御厨の渡辺天蔵で」

と、辞儀でいねいに、後から名を云い添えた。

もの腰もやわらかい。郷土くさい武骨さもあるが、茶を一ぷくと望むので、妻女は、黄瀬戸の茶わんに、茶を立てて出した。

「作法はわきませぬ」

と、いうことは弁えたもので、天蔵は気らくに服みながらそこらを見まわし、

「さすがは、評判なお物持ち、結構なお道具ぞろいだ。失礼なれど、そのお水挿に用いておられるのは、世にいう、赤絵とやらではござらぬか」

「お目にとまりましたか。そのような物だそうでございます」

「ふーむ」

と、感じ入った眼をそれにすえて、

「赤絵とあれば、堺の商人の手にでもかかれば、千金もいたすであらうに。……いや値などとはとにかく、近頃、眼の保養をいたした」などとなかなか腰を上げないでいたが、そのうちに、奥の支度ができましたから——という迎えに、

「どうぞ、あちらへ」

と、妻女は案内して、共に広間のほうへ出て来た。

ぐるりと何十人前の膳が、広間の襖や壁に沿って輪になって並んでいた。亭主役の茶わん屋捨次郎は、その真ん中に坐ってあいさつを述べ、妻女や女童の酌で酒がすむと、捨次郎はいつものように、

「では、てまえもお裾をいただいて——」

と、自分の席につく。

そしてそれから、彼が壮年時代に見聞して来た「明国ばなし」の長談義がはじまるのだった。ほとんど、その頃の日本では、何人と知らない明国の知識を話したために、彼は客呼びをして、こんな馳走もするのだった。

家内中をあげて、接待したり、馳走をしたり、暇をつぶしてまで、茶わん屋の主人捨次郎が、こうした客呼びを年に幾度かする気もちの中には、自分のもっている明国の知識とか、渡洋した体験とかを、世間へ誇ろうとすることよりも、実はもっと痛切に、べつな意味があつたのである。

それは、わが子として——いや生みの子以上にも、可愛がつて育ててきた於福への、大きな愛の一つなのであつた。

なぜかというに——

於福がもともと彼の実子でないことは、誰でも知っているが、同時にまた、純粋な日本の生れでもない素姓を、いつか世間では、めずらしげな噂にしている。

で、幼少から、遊びに出ても遊び仲間の子どもらから、

(唐人子。唐人子！)

と、からかわれたり、泣かされて帰って来たり、内気な於福は、よけい内気になる傾きがみえた。

捨次郎は、そのたび胸をいたためて、亡き五郎大夫の依嘱にすまない気がするのだった。

於福の生みの母は、明国の産で——梨琴という氏素姓もひくい一中国婦人であつた。長年、日本から景德鎮へ陶業の留学に渡つていた伊勢松坂の人で——祥瑞五郎大夫とのあいだに生じた子が於福なのである。

楊景福

それが、於福の幼名なのだ。

五郎大夫が、いよいよ日本へ帰となった時、下僕の捨次郎は、その楊景福を負^おつて、長江や玄海の千里の船路を、日本まで連れて来たのであった。

ところが祥^{シヨンスイ}瑞五郎大夫は、日本へ帰るとまもなく病^{やまい}にかかって亡くなってしまった。多年、明国で研究してきたものを土台に、祖国の陶器^{やきもの}工芸に一生面を拓^{ひら}こうとした理想も途中で終ってしまつたし、梨琴とのあいだに生^なした子の育つのも見ずに逝^しつてしまつたのである。

(於福はそちに頼む)

と、その主人から、捨次郎はいまわの際^{きわ}に、託されたのだ。

日本へ来てからは、もちろん「楊景福」ではおかしいので、福太郎と名を改めてはいたが、松坂あたりの人々のあいだでは、

(あれは、唐人子や)

と、隠れもないこととされていた。

祥^{シヨンスイ}瑞の亡き後、捨次郎はその松坂を去つて、郷里の尾張^{おわり}へひき移り、この土地の瀬戸村で産出する陶器をはじめ、諸国の窯^{かま}の製品も扱つて、那古屋、清洲、京、大坂あたりまで手びろく商^{あきな}いをしていたのであったが、於福の生い立ちと、その母が、日本の女でないということは、諸国へ往来の繁しい土地がらだけに、ここでもいつか人の耳へ伝えられていた。

(世間の衆が、明国の事情をよく知らないからだ。また生半可^{なはんか}、隠しだてするから奇異な目で見たがるのだ)

捨次郎は、こう考えた末、

(世間へ、明国とは、こういう国だということを、教えてやろう。……そしたらかえって、於福も自覚をもって、自分のうけた血に、

恟々^{おどおど}せず、内気がなおるかもしれない)

——彼の客呼びと、彼の得意にする明国はなしは、そういう心理からも起つていたわけであつた。

さて。

それはとにかく、当夜の来客たちも、如才なく、酒がすすむにつれて、

「御主人。ひとつまた、明国のおはなしでも」

と、客のほうから促^{うなが}した。

天竺^{てんじく}とか、唐^{から}とかいうと、夢の国のように思つていた民衆も、近ごろは、鉄砲が渡来されたり、自鳴鐘^{じめいしょう}という物を知つたり、縞^{しま}や更紗^{さらさ}などの織物を見たりして来て、この天地のうちには、日本のほかに、そういう大きな国々もほんとに在^あるのだということを——漠然とではあるが——一般に知られかけてきた時代である。

捨次郎は、一座の客に向つて、

「ぼるとがるとか、すべいんとか、おらんだとか、そういう紅毛人の国々と明国とを、同じように考えてはいけませんよ。なぜならば明国と日本とは、東洋というて、国こそちがうが、皮膚の色から、髪^{かみ}の毛、文字や宗教や道徳や——また、血までがまったく似ている国がらなのでしてな」

と、まず話した。

それから。

秦^{しん}の時代や、漢^{かん}や唐^{とう}の頃にも、かの地から日本へ、多くの者が移住して来て、日本に帰化していること。その帰化人たちは、日本人の妻をもち、子を生み、そして日本の文化にも、いろいろな功績を残して来ていること。

また、日本からも、そのむかしは遣唐使^{けんとうし}をのせた船が、頻りに、

海を往来して、知識や物産を交易し、ほとんど、ふたつの国のあいだがらは、齒と唇のような関係であつたということ。

たとえば日本で、日常よく喰べる豆腐みたいな物にしても、かの地の土産ものだし、食物ばかりでなく、山川風物も、人情も道德も、また美術でも文学でも、すべてが不思議なほどよく似通っている国がらなので――。

ただ、まったく違っている点といえ、日本は、上に、一系の皇室をいただいて、連綿とかわることがないのにひきかえて、かの国では、余りな大国のせいもあるが、何千年来、王覇の争いがたえず、興る者がみずから帝王を称えて、民心の帰一するところがないために、その歴史は乱脈で複雑で、従つて、国情というものが、大きに異っている。

ひと口にいえ、^{はとう}霸道の国。

乱れても、戦い合つても、日本において、朝廷という御中心は確固として、幾千代までも御中心である。民の心のなかにも常に中心となつてゐる。そういう安らかさは明国にはない。

「――思えばありがたい国にわたしたちは生れたもので」

捨次郎は、そんなふう、日本と明国とを、比較して話したりした。

そしてそれとなく、於福に向つては、卑屈な氣を持つなと教え、世間に向つては、明国と日本との密接な關係を諭した。

だから於福も、近頃は、内氣どころではなくなつた。奉公人も世間の者も、決して彼をからかわなくなつた。

「いや、ご馳走になりました。こん夜もいろいろと、耳新しいお話をうかがつたりして」

「もう十分に、頂戴いたしました。夜も更けましたれば、この辺で」

「ぼつぼつ、お暇を」

「そうじゃ、おひらきといたそうかの」

無事――その晩の招き事も終つて、客は次々に歸つて行つた。奉公人たちは、その後がまた、一しきり忙しい。

「やれ、やつと仕舞つたか」

「お客には、珍しいかもしれぬが、明国のはなしも、わしらには年中なのでな」

などと欠伸まじりに、大勢であと片づけにかかり出すのだった。もちろん日吉も、追いまわしに使われて、その中でぐるぐる働いていた。

ひろい厨の灯も、広間や主人たちの部屋の灯も、やがてみな消されて、茶わん屋の家を囲む土塀の門にも、頑丈なかんぬきが横に懸けられた。

武士の屋敷はいうまでもない、町人の住居でも、少し財産家と見られるほどな家なら、必ず土塀をめぐらすとか、濠で周りをかこむとか、そして門の内にも、二重三重に、盜賊に備える要害をしていた。

そういう夜の不安は、^{おうにん}応仁の乱あたりから後は、都会でも地方でも、もう当り前のことになつて、誰も怪しもうとはしない。

日が暮れたら寝る。

それが習性になつていた。

寝るのが、ただ楽しみのような雇人たちは、各々の寝小屋へもぐりこむと牛のように正体もなかった。――下男部屋の片隅に、木の枕をかつて、薄い藁ぶとんをひきかぶっている日吉のほかは。

「……オヤ？」

日吉は、眠られぬままに、ふと首をもたげた。

彼も、今夜の客呼びのお下しものほうで、主人の捨次郎の大明国のはなしを熱心に聞いていたが、さなくても空想の多い彼のことなので、大きな感動をうけた後はいつも、軽い熱病のようになかなか眠りの中に落着けないのであった。

「何だろ」

身を起すと、日吉はふとんの上に坐ってしまった。

たしかに今、裏のほうで、木でも折れるような響きがした。——その前もぴたぴたと人間の蹺音あしおとのような気配がしたと思って、耳をたてているうちにである。

台所から日吉はこっそり戸外をのぞいてみた。大瓶の水も凍り、板いた廂びさしから剣のような氷柱が垂れている寒空の冴えた夜半だった。

——ふと、裏の巨おおきな木のうえを仰ぐと、それへ攀よじのぼっている人間がある。今の大きな響きは、その人間が足をかけた梢の一つが裂けたものとみえる。

日吉は体じゅうを眼にして、樹の上の人間の奇怪な行動を見つめていた。

その男は、螢ほたるほどな小さい火を、くるくる宙に振っていた。それは火縄にちがいあるまい。赤い渦巻から微かな光の粉が風にふきこぼれ——何かの合図でも外へしているらしく思われた。

「あッ、降りて来る——」

日吉はとび出して、鼪いたちのように物蔭へかくれた。木から這り降りた男は、とたんに大股な足を移して、表のほうへ廻って行く。それをやり過して、日吉は後から尾けて行った。

「や。宵に見えたお客さまの一人だぞ」

彼は、ありえないことのようにつぶやいたが、やはり覚えのある人間だった。

それは、この近郷の御厨みくりやの渡辺某であると名のつて、御寮人の茶席へも通り、主人の捨次郎のはなしも始終、熱心に聴いて帰った郷士の客にちがいない。

客はひとり残らず帰ったはずなのに、今頃まで、どうして、どこに残っていたものだろう。しかも今見れば、身み拵こしらえも宵とはちがつて、草鞋わらじをはき、袴はかまの裾すそを巻き括り、太太刀を横よこさまに帯びて、角鷹つのかのような険けわしい眼をあたりへ払っている様子——見るからに殺伐さつぱな血のおいをすぐ思わせる扮装いでたちなのだ。

「待て、待て。——今、かんぬぎを外すから、静かにしろ」

云いながら、その奇怪な人間は、門の内側へ寄つて、そこを開けにかかったが、その間も、外にひしめいている大勢の囁ささやきや手が、門をがたがた揺ゆがしていた。

土匪どひの襲来？

そうだ。野武士の頭かしらが、いなごの群れのような数多の手下を闇から呼んで、掠かすめにやって来たのだ。

日吉は、物蔭で、

(泥棒！)

と感かんじると、とたんに自分の血しおの沸たぎりで、自分が分らなくなっていた。

だが、その忘失も、その恐怖も、自分の仕えている主家の大事——という観念の以外に——である。いや、それだけが、彼の頭を占めてしまったので、他の考えも危険もまったくなくなっていたという方が正しい。さもなくては、その時、日吉が取った行動は、余りに豪胆ごうたんすぎるし、白痴はくちの所作しよさというしかなかった。

「おじさん——」

のこのこと、物蔭から歩き出して行くと、どう思つてか、彼が、

こう呼んだものである。

今、——その門を開いて、大勢の手下を迎え入れようとしていた野武士の渡辺天蔵の背なかへ向って。

「……？」

ぎょツとしたような顫えが、天蔵の足から背すじへ、明らかに走った。まさか十六歳のこの家の童僕とは思えなかったに違いない。

「……………」

見れば、猿のような顔をした不思議な少年が、妙に馴ッこい眼をして近づいているのである。野武士の天蔵は、ややしばし穴のあくほど見つめていたが、

「何だ、汝は？」

と、どう考えても、解釈しようのない顔つきで、やがて訊ねた。

日吉は平然と——いや平然と見えるほど、危険を忘れていたのだろう。ニコともしない代りに、格別、どうという顔色もせず、

「おじさんは、何だい？」

と、訊きかえした。

「なに？」

天蔵は、いよいよ自分の智恵と取り組んで解釈に苦しんだ。そして、

（馬鹿かな？）

と、疑って見たが、気のゆるせない眸ひとみを感じるし、その眸が、子どものくせに、妙に此方を圧して来るのだった。

で、天蔵は、日吉のその視線を払い退けるように、つよく睨め返して、

「知れたこと、おれたちは、御厨みくりやの野武士だ。声をたてると、ぶツた斬るぞ。餓鬼どもの生命いのちなどを取りに来たのではないから、

踏みつぶされないように、薪小屋まきじやにでも引っこんでいろ」

抜く手まねでもしたら横ッ飛びに消えてゆくであろうと、天蔵が、大太刀の櫛くしを一つたたいて見せると、日吉は、にやつと白い歯を出して、

「じゃあ、おじさんは泥棒なんだね。——泥棒なら、欲しい物さえ持って行けばいいんだろ」

「うるさい。彼方あっちへ行け」

「行くけれど——その門を開けたら、おじさん達は、一人のこらず生きて帰れないぜ」

「なんだと」

「知らないだろ。誰だって知らないけれど、おらだけは知ってるんだ」

「小僧、汝われはすこし、気が狂っているな」

「自分のことをいつてら。おじさんこそ頭が悪いぜ。こんな家へ泥棒にはいつて来るなんて——」

門の外では、かかることも知らないの、その開くのを待ちしびれて、天蔵の仲間が、

「まだか、まだか」

と、扉を鳴らしていた。

野武士の渡辺天蔵は、

「待てよ。ちよつと待て」

と、門の外の者を、制しておいてから、また、日吉へ向って、「この屋敷へはいると、生きて帰れないと今てめえがいったが、ほんとか？」

「ほんととき」

「それは、どういうわけだ。いい加減なことをぬかしたら、素ッ首そくび

をひき抜くぞよ」

「ただは教えてやらないよ。おらに何かくれなければ嫌だ」

「ふう……ム」

天蔵は呻いて、日吉に向けていた疑心暗鬼を、茶わん屋の家全体に向け直した。星の空は吹き研がれて、明るいばかりだったが、土塀にかこまれたこの家の一劃は、屋の棟も下がるという丑満の闇に沈んでいた。

「――何が欲しい」

試みに彼がいうと、

「物なんか、欲しくない。おらを手下にしてくれれば」

と、日吉はいった。天蔵は、眼をみはって、

「じゃあ汝は、おれ達の仲間にはいりてえのか」

「うん」

「盗賊になりたいのか」

「うん」

「幾歳だ」

「十六」

「なぜ盗賊になりたい？」

「この主人は、おらをこき使ってばかりいるし、ここの奉公人は、おらを猿々と虐めてばかりいるから、おじさんみたいな野武士になって、仕返ししてやりたいんだ」

「よし。手下にしてやってもいい。――だが、それは汝が証を立ててからだぞ。さあ、前に云ったことの理をいえ」

「この家へはいると、みな殺しになるといったわけかい」

「そうだ」

「おじさんの謀事がまずいからさ。おじさんは宵のうち、お客に

化けて、大勢の中へ交じって来ていたろ」

「うむ」

「誰だか、おじさんの顔を、知っていた者がいたよ」

「そんな筈はない」

「ないッていったって、御主人がちゃんと知ってたもの。――だからおら、宵の口、まだお客さんがいるうちに、御主人の吩咐で、敷山の加藤清忠様のおやしきまで走って行き、きつと夜半におしかけて来るにちがいないから、お願いしますと、知らせてあるんだぜ」

「敷山の加藤？……アア、織田の家中の加藤弾正か」

「弾正さんとうちの御主人とは、親類づきあいだから、すぐ近所に住んでる侍。衆を十人以上も集めて、みんなこのお客に拵え、

宵のうちに来て、家の中で待ちかまえているんだ。嘘じゃないよ」

真実らしい。――いや信じきった様子が、渡辺天蔵の狼狽えた

顔いろに見て取れた。

「ううむ、そうか……。してそいつらは、どうしている」

「車座になって、今し方まで、お酒をのんで待っていたけれど、もう襲って来ないらしいぞといって、思い思いに寝ているよ。――おら一人、こんな寒い中に、張り番に立たせておいて」

「では汝は、見張りをいつけられて、立っていたのか」

日吉が頷くと、同時に、天蔵は飛びかかって、

「喚くと、生命がないぞ」

と、大きな掌で、彼の口をふさいでしまった。日吉は、もがいて、「おじさん、おじさん。約束がちがうよ。騒ぎはしないからこの手を放しておくれよ」

賊の天蔵の手に、爪を立てながら、塞がれている口でわめいた。天蔵は、首を振って、

「いや、おれも御厨^{みくりや}の渡辺天蔵だ。汝^{われ}のはなしを聞けば、この家にも備えがあるそうだが、そうかといって、空手で引き退つては、手下の者へも、顔向けがならねえ」

「だから……だからさ」

「どうするとうのだ」

「おらが、おじさんの盗み^わたい物を、持ち出して来てやるから——」

「汝^{われ}が取つて来ると」

「ああ。……そんならいいだろ。斬つたり斬られたり、危ないことをしなくてもすむし」

「きつとか！」

日吉の喉^{のど}をぎゅつと締めつけて天蔵が念を押した。

門のあくのが遅いので、門の外では、天蔵の手下たちが、不審を抱いて、恐れたり疑つたりしながら、

「頭^{かしら}。……頭」

「どうかしたんですか」

「門は、どうしたんで？」

などと頻りに、その扉をまた、ごとごと揺り出していた。

天蔵は、かんぬきを半分ほど抜いて、その隙間から外へ、

「すこし模様が悪いから静かにしている。そして、てめえたちはかたまつていねえで、そこらへ影をかくしていたがいいぞ」

さては——と疑いの怯^{ひる}みを衝かれて、手下たちは、さつと群れを解き、草むらや木蔭や、思い思いの闇をさがして、身を潜^{ひそ}めてしまった。

日吉は、渡辺天蔵から吩咐^{いいつ}けられた品を、家の中から持ち出して来るために、元の下僕部屋の口から、そうつと、母屋のほうへはいつて行つた。

見ると、いつも夜半はついていない筈の主人の居間に、灯^{あかり}がさしていた。

「旦那さま」

日吉は、板縁に畏^{かしこま}つて、声をかけた。——返辞はなかったが、主人の捨次郎も、御寮人も、そこに起きて坐っている気配がする。

「もし、御寮人さま」

もいちどいうと、

「……誰？」

と、御寮人の声である。——明らかに顫^{ふる}えをおびている。さつきからの微かな物音や人声に、主人が妻女かが、眼をさまして、一方をゆり起し、土匪^{どひ}の襲来^{せうらい}を覺^{さと}つて、観念の眼をふさいでいたところにちがいない。

そこへ、日吉が障子をあけてはいつて来たので、主人の捨次郎も御寮人も、眼をみはつてしまった。——恐怖のさめきらない不安の顔いろのうちに、啞^{あぜん}然と、彼を見まもる眼を大きくすえていた。

「野武士がやって参りましたよ——多勢して」

日吉は、告げた。

主人夫婦は、ごくりと唾^{つば}をのんだだけで、何もいわない。——いや云い得ないほど白々と齒の根を噛んだ顔しているのである。

「——踏みこまれたら、それこそ大変です。旦那さまも、御寮人さまも、縛り上げられてしましましょう。五人や六人の人死^{ひとじに}や怪我^{けが}人は、きつとできるにきまつています。……ですから、私が計りごとを考え、野武士の頭^{かしら}を、外に待たせておきました」

賊の渡辺天蔵にいった通りのことを、日吉は、主人夫婦へそのまま告^つげて、

「——ですから、旦那さま、野武士の頭が、欲しいという物を、

出して遣やつてしまふとようございますよ。私が持つて行つて、渡してやれば、それで帰つてしまいますから」

と、いった。

——ややあつて。

「日吉。いったい、野武士の頭は、何をよこせというのだね」

捨次郎が口をひらいた。

日吉は答えて、

「はい。賊の渡辺天蔵が目をつけて来たのは、御当家で御秘蔵の

——赤あか絵の水挿みずさしだといっていました」

「えつ。赤絵の水挿を」

「それを渡せば、帰つてやるといっています。こんな安いことはございせんから、渡してやろうじゃございませんか。……といつても、それは此方の計略ですから、私がこつそり、持ち出して渡してやる振りをして」

日吉は、得意げに、主人夫婦へすすめたが、捨次郎は固もとより御寮人の眉のあたりは憂いと恐怖に、黒ずんでしまっている。

「赤絵の水挿つていうのは、きょうのお招きに、蔵から出して、茶席でお使いになつていたあの陶器やきものでございましょう。……野武士の頭なんて、ばかな奴でございますよ。何を欲しがるかと思つたら、あんな物を持つて来いっていうんですから」

日吉は、くすくす笑いたいほどな顔して、そういつたが、御寮人は化石してしまつたように無言だし、捨次郎は、大きな吐息をついて、

「弱つたのう」

と考え込む。

「旦那さま、どうしてそんなに考えるんですか、陶器やきもの一つで、血

を見ずにすむことを」

「あれは、わしが商売に扱っているような、ざらにある陶器ではない。明国みんこくにももう滅多にない品だ。その明国から、苦心して日本まで持つて来た物だ。また亡くなられた祥瑞しょうずい様のお遺品かたみでもあるし」

捨次郎がつぶやくと、御寮人も一緒になつて、

「堺さかいあたりの茶道具屋では、千金もするという高価なものだよ前……」

恨みがましく、云いはしたものの、殺伐な野武士はなお恐かつた。

抵抗して皆ごろしに遭い、家屋敷まで焼かれてしまつた実例など

——何処の国々でもめずらしくない今の世の中だつた。

やはり、男はこんな場合、ふつりと思いきりがいい、捨次郎もしばらくは、断たち難がたい愛着を断ちかねていた様子だつたが、やがて、
「ぜひがない！」

同時に、少し生気を取りもどして、塗筆ぬりだんす筥の小ひきだしから、土蔵の鍵かぎを出し、

「持つて行つてやれ」

ことばと共に、それを日吉の前へ、抛ほうり出した。

年に似げない才覚、よく計つたと——日吉の仕方を、心では思いながら、むざむざ失う赤絵の水挿みずさしへの執着に、忌々いまいまさがこみあげて、賞ほめられもしなかつた。

日吉は、一人で蔵をあけた。そして一箇の箱を抱えて来て、鍵は主人の手へ返し、

「もう灯あかりを消して、そつとお寝やすみになつていたほうがよろこびますよ。心配はありませんから」

とまで、注意をして、再び外へ出て行つた。

どうか？——と半ば、疑いながら待っていた渡辺天蔵は、日吉の手から、赤絵の箱を受け取ると、品物の容態を^{あつた}検めて、

「ウム。これだ」

と、顔の筋を^{ほど}解いた。

「じゃ、おじさん達、はやく引き揚げたほうがいいぜ。今、蔵から探し出す時、^{ろうそく}蠟燭をつけたもんだから、加藤様やほかのお侍たちも、眼をさまして、一廻り屋敷のまわりを見廻ろうかといつてたから」

追い立てると、天蔵は、急にあたふた、門の外へ飛び出して、

「小僧、いつでも御厨^{みくりや}へたずねて来いよ。手下に使ってやろう」

云い捨てて、闇へと、影を消してしまった。

猫の飯

怖ろしい一夜は明けた。

——あくる日の真昼間ごろ。

まだ松の内なので、御慶^{ぎよけい}の客はちらほら絶えないが、茶わん屋の奥には、妙にしいんと冴えない陰が漂^{ただよ}っていて、主人の捨次郎もむっそり顔しているし、いつも陽気な御寮人の姿も見えない。

その義母^{はは}の部屋へ、息子の於福^{おふく}は今、そと来て坐っていた。

彼女は、ゆうべの悪夢の怯え^{おび}からまだ醒^さめないように、青白い顔して、病人のように寝籠^{ねこも}っていた。

「義母^{かあ}さん、今、お義父^{とう}さんにも話して来ましたから、もうご安心なさいまし」

「そうかえ。そして、何と仰っしゃったえ？」

「初めは、私のいうことを、半信半疑でいらっしゃいましたが、私が日吉の日頃の素振りから、いつぞや私をつかまえて、家の裏で——御厨^{みくりや}の野武士をよんでくるぞ——と現に^{おと}あいつが、脅^{おど}し文句をいったことまでお聞かせすると、ウムそうかと、びっくりしたご様子でした」

「すぐに、暇を出すといっておいでたかえ」

「それもなかなか仰っしゃらないで——見どころのある小猿だが——と思案していますから、泥棒の手先を家の中に飼っておく気ですかつて——私が云って上げたんです」

「第一、わたしは、最初からあの日吉の眼つきが嫌いなんだよ」

「それも云いました。そしたらやっと、そんなに皆が性に合わないというなら、暇を出すしかあるまい。けれど、藪山の加藤殿からおひき受けした手前もあるし、自分からは云いにくいから、お前たちで、何でも談合して、当り障りないよう、暇を出してくれと云い残して、お義父さんは、出かけておしまいになりましたよ」

「ああそれでよかった。わたしはもう半日でも、あんなお猿の妖怪みたいな子を使っておくのは嫌で嫌でたまらない。……日吉は今、何している？」

「蔵で荷造りを手伝っていますが——何ならすぐここへ呼んで来て、云い渡ししようか」

「よしておくれ。顔を見るのも嫌だから。お義父さんがそう仰っしゃったなら、おまえから、きょう限り暇を出すといって、帰してしまったらそれでいいではないか」

「はい」

於福は、内心ちよつと、怯むようであつたが、

「畏りました。——手当のことは、どうしてやりましょうか」

「元より給金など遣る約束で抱えたのではなし、ろくな働きもできないのに、喰べさせたり、着物を着せたり、それだけでも、あの子の分には過ぎています。けれど……そうだね、今着ている着物をくれてやって、塩の二升も施しておやり」

於福は、自分一人で云い渡すのは、何だか日吉に対して不気味な気がしたので、ほかの雇人を連れて、一緒に外の陶器蔵へ歩いて行つた。

蔵の中を覗いて、

「小猿。いるかい」

呼ぶと、頭から藁ゴミをかぶって働いていた日吉は、

「はい。何ですか」

いつもより元氣な返辞をして飛び出して来た。

人にいつてはよくないと考えたから、誰にも話していないが、ゆべのことは、彼自身で、心のうちに、得意に思っていたのである。きつと今に主人から、改めて、賞めてくれるにちがいないと、密かに待っていたほどだった。

於福のそばには、雇人のうちでも、腕ぶしの強い——日吉がふだん一番怖れている手代が、突っ立っていた。

「小猿」

「へ？」

「おまえな。もう今日から、帰ってもいいよ」

於福のことばだった。

日吉は、怪訝な眼をして、

「どこへです？」

「どこって、自分の家へさ。——家はあるんだろ。今でも」

「家はあるけれど……？」

何故？——と日吉が云い出さないうちに、於福は、云いかぶせた。

「きょう限り、お暇が出たんだ。今、着ている着物はくれてやるから、すぐ出ておいで」

すると、側にいた手代が、日吉の寝衣の包に、二升の塩を添えて、

「これも、御寮人さまのお情けで、おまえに下さるとのことだ。お礼はいわなくてもいいから、ここからすぐに出て行きなさい」

「……？」

日吉は、茫然としていた。

かつと熱いものが顔にのぼって来る。その眼は、於福へとびつき
そんな怒りをあらわした。

「……分ったかい」

於福は、後ずさりながら、手代の手から寝衣包と、塩の袋を取
って、地へ置くと、あわてて行ってしまった。

日吉はなお、その姿へ、飛びかかって行きそんな眼をやっていた
が——その眼には涙がいっぱいにあふれて来て、何もかも見えなく
なってしまう。

野火のように暴れ狂ってやりたい憤りと——同時に彼の頭には、
すぐ母の悲しげな顔が泛^{うか}んでいた。

（こんどまた、奉公先から出されたら、藪山の加藤殿のお顔にもさ
わるし、この母も、世間へ恥かしゅうて、誰へも顔向けがならぬぞ
よ——）

茶わん屋へ来る前に——そういつて涙ぐんだ母の顔が——あの
貧乏と、子を生むたびに、目立って寢^{やつ}れてくる母の姿が——彼の
憤怒する血の中に、脆^{もろ}い涙と、情痴^{はな}な涙を啜^{すす}らせて、その身を、
どうしていいか分らないように、しばし棒立ちにさせていた。

「猿」

「どうしたい」

「何かまた、しくじったな。お払い箱だっていうじゃないか」

「もう十八だ。どこへ行たったって、御飯ぐらいは喰^くわせてくれるさ。

男だ。ベソ掻^かくな、ベソ掻^かくな」

笑いながら、他の雇人だの、居合わせた人々が、彼を真中に、あ
っちこっちで、働いていながら云った。

日吉の耳には、ただ笑って囁^{はさ}されたような覚えしかなかった。け
れど彼は、誰にだって泣き顔などは見せもしなかった。かえって白

い歯を見せて、そこらを振り向き、

「誰が、ベソなんか掻くもんかい。——おらはもう、茶わん屋奉公
など飽^{あき}々だ。こんどは侍屋敷へ行って、侍奉公をするんだよだ！」

寝衣包を背なかに背負い、そこらに落ちていた細竹に、塩の袋
を差して、ひよいと肩に担^{かつ}いだ。

「侍奉公するとよ」

「あははは。あんな捨てぜりふをいつて行きやあがる」

憎めないが、誰ひとり同情の眼で、彼の出てゆく背を見ていた者
はなかった。日吉もまた、一步その土塀を出ると、青空の碧^{あお}さに
心を吸われて、解^{ほく}れた気持のほか何もなかった。

——去年の八月、小豆坂^{あずさざか}の合戦で、敵の今川勢のなかへ駈^かけ入
り、功をあせつたために、弾^{だんじょう}正は重傷を負って、やっと帰った。

それ以来は藪山の家に寝たつきりで——妻のおえつの看護^{みとり}をう
けていたが、年暮^{としくれ}の寒さをこえて、この正月になつては、腹部に
うけた槍傷が毎日痛むらしく、苦しげな呻^{うめ}きがのべつ洩^もれていた。

——その血膿^{ちうみ}に汚れた良人の肌じゅばんを、おえつは、屋敷の
中を通ってゆく流れで洗っていたが、ふと、

「誰であろう？ ……暢^{のんき}気らしゅう……」

と、腹の立つように、身を伸ばして、声のする方を見まわした。
光明寺山^{こうみんじやま}の中段にある屋敷なので、土塀の外へ顔を出すと、麓^{ふもと}

の道も見える。中村の耕地も見える、庄内川^{しょうないがわ}や尾張の平野もひろ
びろと眺められる。

寒々と、正月の陽は、平野の果てにうすずいて、きょうも暮れか
けていた。

糸を繰^くるのも

よるといい

日の暮るるをも

よるといい

くるくるしくも何かせむ

くるより待つこそ

久しけれ

ヤヨ

久しやな

大きな声であった。今の社会のけわしさも人間苦も知らない者の声だった。室町末の人々に謡い飽かれた歌が、この尾張あたりへ伝つて来て、農家の娘の糸繰歌などに訛つてよく謡われている。

「……おや。日吉じゃないかしら？」

おえつは、麓から今、そう謡いながら登つて来る者を遠くから見てびっくりした。

弾正から頼んで、おとし頃、茶わん屋へ奉公にやつてある姉の子の日吉にちがいない。何か、汚いふろしき包を背なかに背負い、竹の棒にも何やら差して肩に担いながら暢氣そうにやつて来るのだ。

「まあ、すこし見ないうちに、大きゆうなつて……」

それにも眼をみはつていたが、その大きな身なりになつても、相かわらずらしい暢氣さに、呆れていたのだった。

よしや辛かれ

なかなか

人のなさけは

身の仇よ

ヤヨ……

「やあ、叔母さん、そんなところに立っていたんですか。……今日は」日吉はそこへ来ると、ぺこんとお辞儀をした。歌をうたいながら歩いて来た心身の弾みが、わざと作る気もなく、ひょうきんに挨拶をさせるのだった。

だが、若い叔母は、笑いを忘れた人のように、晴れない顔をしたまま、

「めずらしいこと。——上の光明寺さまへでもお使いに来たのかえ」と、いった。

「いえ」

日吉は、とたんに、頭を掻いて、少し云い難そうに、

「茶わん屋から、お暇が出てしまったんで……。叔父さんに知らせなければ悪いと思つて、寄つたんで」

「え。……また？」

おえつは眉をひそめて、

「またおまえ、追い出されて来たんですか」

「だって……」

日吉は、理を話そうと思つたが、何だか面倒くさくなつて、

「叔母さん。……叔父さんはいるの。いたら、会わしてくんない。

おねがいがあるんだから」

と、甘えた調子でいった。

とんでもない——良人はそれどころか、小豆坂の戦で深傷を負つて、きょうかあすかを案じている重態。おまえなどに会つていられるものではない。

若い叔母は、つけつけと、

「ほんとに、おまえみたいな辛抱なしの子を持つて、中村の姉さんも、かわいそうだね」

と、沁々しみじみという。そう聞くと日吉は悄気しよげて、

「じゃあ、叔父さんに、お願いしてみようと思ったけど、だめだろうなあ」

「何をだえ」

「叔父さんは侍だから、こんどは何処か、侍屋敷へ奉公に、入れてもらおうと思って」

「いったい、おまえは今年、幾つになったんですか」

「十六さ」

「十六にもなったら、少しは世間が分りそうなもの」

「だからもう、つまらない家には奉公しないんだ。叔母さん、どこか口がないだろうか」

「いい加減におし」

と、野放図もないと、たしなめるように、おえつは、女の眼で睨ねめて、

「侍屋敷では、侍の家風に合う者でなければ、使いはしません。おまえみたいな野育ちの暢気のんき者を何処で——」

そこへ下婢かひが来て、彼女に告げた。

「ごしんぞ様。ちょっと急いでお越し下さいませ。旦那様がまた、

お苦しみの御様子ですから」

おえつは、聞くとすぐ、日吉の姿など眼のうちにないように、何もいわず家の中へ駈け入ってしまった。

置き捨てられた日吉は、ちょっとぼつ然ねんとして、尾濃びのうの平野に暮れてゆく雲を見ていたが、やがて土堀口からはいりこんで、加藤家の台所の外に佇たまたすんでいた。

すぐ中村の家へ帰って、母の顔を見たかったが、義父ちちの筑阿弥ちくあみを思うと、わが家の垣いばりにも、茨いばらが感じられる。

（次の奉公口を、先にきめてから——）

というその辺の思慮と、藪山のこの家へは一度、耳に入れておくのが順序だとも考えたりして、来てみたのであるが、その弾正は、重態だというし……。

「どうしようかなあ？」

飢ひもしい腹を思いながら、日吉は漠然と、今夜からの寢床を思案していた。すると彼の冷たい足に、何か柔らかなものが絡かみついた。ふと見ると愛らしい小猫なのだ。日吉は、抱きあげて、台所の端に腰かけた。

「汝われも、腹が減ってるのか」

夕方の薄ら陽が、彼と小猫のまわりに寒げに映さしている。小猫は、日吉のふところにがたがた顫ふるえていたが、少し温ぬくんでくると、彼の顔をペロペロ舐なめだした。

「よせやい。よせやい」

日吉は顔を逃げながら猫へいった。彼は、猫はあまり好きでなかった。けれど今、彼にこんな親しみを示してくれるものは猫しかなかった。

「あら……？」

ふと、日吉は耳をそばだてた。小猫の眼も、びっくりしていた。そこからすぐ向うに縁先の見える部屋から、病人かんの痢かだかい唸鳴り声うなりがふいにしたからである。

——と、やがて台所へ、おえつが眼を泣き腫はらした顔して退さがって来た。何か、良人の気を損ねたのであろう。煎薬せんやくの土瓶をこん炉へかけながら袖口で涙をふいていた。

「叔母さん……」

気を遣つかいながら、日吉は猫の背をなでながらいった。

「この猫、腹が減って、顫えてるよ。ご飯をやらないと、死んじゃう……」

実は自分の空腹をも、訴えているのであった。けれど彼女は、猫の御飯どころか——と、

「おまえ、まだそんな所にいたのかえ。陽が暮れても、家には泊めておかないのですよ」

といって、また、袖に涙の目をかくした。

薬を煎じながら、つきつめた胸をひとり抱いて、泣いている若い叔母のすがたには、二、三年前の幸福そうな、新妻の美しさはもう、雨にたたかれた花みたいに褪せている。

猫を抱いて、猫と共に、飢えと寢床に行きはぐれていた日吉は、（泣いてるんだから、叔母さんも、何か心配があるんだろうな）

と、相手の身にもなつて、まじまじと彼女のすがたを見ていたが、ふと、その若い叔母の体つきに、或る異様なものを感じて、何気なしに、

「叔母さん……叔母さんはお腹が大きいんだね。妊娠なのけ」

と、訊ねた。

泣いていたおえつは、自分がいちばん悲しんでいることを、いきなり突拍子もないことばで、訊かれたので、頬でも打たれたように、はっと顔を上げたが、

「男の子のくせに、そんなませたこと、いうものじゃありません。いやらしい子！」

と、よけいに悲嘆をいらだたせられたように、

「はやく、陽のあるうちに、中村へでも何処へでもお帰りよ。……」

わたしは今、そ、それどころではないのだから」

と、咽びかける声をのんで、部屋のうちへ隠れてしまった。

「……帰ろ」

自分で自分へつぶやいて、日吉は立ちかけたが、小猫はなお、彼の温かなふところから離れたがらなかった。するとさっき彼が云ったので、下婢が気がついたものとみえ、小皿に冷飯を盛り、汁をかけて、それを見せながら外で呼んだ。

飯を見ると、小猫は、日吉のふところを捨てて、そのほうへ飛びついて行った。日吉は、口にいっぱい唾液をためながら、猫の飯と猫に見慌れていた。

「……………」

彼には、飯が与えられそうもない。中村の家へ行こうと心に決めた。そして空腹の身を起して、庭先を歩きかけると、閉じこめてある病人の居間から、耳ざとくその足音を咎めて、

「だれだッ」

と、呶鳴る声をした。

はっ——と立竦みに、日吉はすぐ、それが弾正と知ったので、日吉でございまずと答えた。それから、ちょうどよい折とも思ったので、茶わん屋から暇を出されて帰って来たことも、ついでにそこから告げた。

「おえつ。そこを開けろ」

と、弾正の声が内でする。

けれど彼の妻は、夕方の風がはいって冷えるともた、傷口が痛むからと、しきりに宥めているらしく、その障子は開こうともしないのである。

すると、弾正が、

「ばかッ、十日や二十日、生きのびたとて、何になる。開けろッ」

と、ふたたび癩癧を起したので、おえつは、泣く泣く障子をひ

らいて、

「日吉、御病氣にさわるから、ごあいさつしたら直ぐ帰るんですよ」

「はい」

日吉は立ったまま、病室へ向ってお辞儀をした。弾正清忠は、蒲団を重ねてそれへ重症の体を凭せかけていた。

「茶わん屋を出されたか。——日吉」

「はい」

「むむ。よからう」

「……………」

「暇を出されたことは、少しも恥辱ではないぞ、不忠、不義さえしなければ」

「ええ」

「そちの家も、以前は武士だ。武士はな、日吉」

「はい」

「飯のため、飯に使われてあぐせくせんのが武士だ。天職のために、御奉公の本分のために、生涯する。飯はつき物、人間の天禄だ。」

——頼むから、貴様あ、飯を追って一生うろうろ送るような人間になつてくれるなよ」

塩

もう夜半に近い。

疝のつよい、そのくせ体のひよわい小竹は、泣きぬいていたが、やっと藁ぶとんの中で、乳を離れかけた。

「母さん。——起きたら寒うて凍えてしまうがな。そのまま寝でいなされや」

姉娘のおつみは、母を労って止めたが、お奈加は、

「何の、父さんも、まだ帰らぬのに」

と、起き出して、おつみと共に、宵から仕残してある夜業仕事を、炉のそばで、せつせとやりだした。

「父さん、どうしたのやろ。今夜もまた、戻らぬのかしら」

「お正月じゃほどに」

「でも、家の者は、母さんはじめ——餅一つ祝うでなし、こうして寒々、夜業して暮してるに」

「男は、交際というものもあるしのう……」

「いくら主だからというて、働きもせず、お酒ばかり飲んで。帰ってくれば、母さんばかり虐め、わたし、腹が立つ……」

おつみも、もう年頃だった。ふつうなら嫁にも行く年だったが、この母を残しては嫁げもせず、この家計を知っていては、春着一枚はおろか、紅白粉などさえ、夢にも思えなかった。

「いうてくれるな」

と、母は涙もろい。

「父さんは、ああいう人じゃでな、あてにはならぬが、日吉もやがてよい若者になる程に、そしたら其女も、嫁入りさせよう。……だが、この母を見ても、良人はよくよく選ばぬと」

「母さん、あたし、お嫁にゆくことなど、まだ考えていませぬ。いつまでも、母さんの側にいて」

「女子はのう……そうもゆくまい。今の父さんには内密じゃが、前の良人弥右衛門様が、戦で傷を負うた時、御主君からいただいたおかねのうち、青ざし一貫文だけは、其女が嫁入りの代に思つて取つてある。心がけておいた屑糸も、鞠にして七つも溜つた。あれで小袖の一つも織つてやりましょうぞ……」

母のことは遮つて、

「あッ。母さん。……誰か土間へはいつて来たようですよ」

「父さんか」

おつみは、そこから、身をのばして、土間の方を覗きながら、

「……いいえ」

「では、誰じゃ」

「誰だろ？ ……黙って」

気味わるげに、おつみが、声を嚙んでいると――

「おつ母」

日吉の声だった。

暗い土間に立つたままで。――そしてじつと、いつまでも、上がつて来ようとしなかったのであった。

「おやッ。日吉じゃないか！」

「……うん。おらだよ」

「ど、どうして、今頃」

「茶わん屋から暇が出たから帰つて来たんだよ」

「えッ、お暇が出た……」

「かにんして。なあ、おつ母さん。かにんして……」

土間の闇に、すすり泣きがする。――お奈加も、おつみも、そこへ転ぶように出て行つた。

「お暇の出たものを、今さうしようぞ。さ、お上がり。……なぜいつまで、立っているのじゃ」

手を取ると、日吉は首を振つて云つた。

「いや、上がらずに、おらはまた、すぐ行くよ。一晚寝たらまた、おつ母のそばを離れるのが嫌になるから……」

この貧苦と、事情の複雑なところへ、日吉がふいに、暇を出されて帰つて来たことは、彼の母には、胸にこたえる当惑だったが、上がりもせずすぐにまた、この夜の夜中、出て行くという彼の言には、なおさら胸を傷めて、驚きの目をみはつた。

「どこへ行くのじゃ。――今から？」

「分ないけど、こんどは、侍奉公して、きつとおつ母にも、姉さんにも、安心させるよ」

「侍奉公に」

「おつ母は、侍にはなるものじゃないといったけれど、おらはやっぱり侍になりたい。藪山の叔父さんもいった。――今だぞといった。――おらは侍になる」

「それにしても、まあ上がつて、あしたの朝、よう義父さまにも、ご相談してみやい」

「会いとうない」

日吉は、かぶりを振つて、

「――おつ母、おらつてえ子を、十年ばかり、ないもんだと思つてな。体を丈夫にしといてよ。いいかな。……姉ちゃん、おまえもお

嫁にも行かないで、悪いけど、辛抱してなあ。……その代りおらが偉くなったら、おつ母には絹を着せ、姉ちゃんには、繻珍の帯を嫁入りに買うてやるでな」

「……………」

「……………」

母も、おつみも、嗚咽おえつしているだけだった。——日吉がこんなことをいうようになった！——そう思うだけで、胸は涙の湖になって、身も溺れる心地だった。

「ここになあ、おつ母、茶わん屋から貰うて来た塩が二升あるで、置いて行け。おらが二年働いて稼いだ塩だ。姉ちゃん、後で台所へやつといておくれ」

「……あ、ありがと」

母は、日吉がそこへ置いた塩の袋を拝んだ。そして沁々しみじみ、

「おまえが、世間へ出て、初めて働いて取ったお塩——」

と、見入って云った。

日吉は、満足した。

母の歎よろこぶすがたを見ると、彼も体が浮くように欣うれしかった。そして、また何かで、この母を、これ以上にも、歎うばせてやりたいと心に誓う。

——そうだ、塩になろう！

我が家の塩だ。いや我が家ばかりでなく村々の塩に。いやいっそのこと、天下の塩だ。

日吉は、肚はらの中で、そんなことを呟つぶやいた。だがいつも、何気なく思うことを、思うままいうと、世間の者から、すぐほら吹きといわれる。そのせいで、この頃彼は、いわない癖がついていた。

「——じゃあ、おつ母、姉ちゃん。当分、帰らないよ」

日吉は、土間の口まで、後退あとしきりに退った。その間も、眼は、母とおつみの姿から離れなかった。

おつみは、いきなり伸び上がって叫んだ。——日吉の片足が、土間の外へ、跨またぎかけたからである。

「あつ、お待ち……日吉や、待って」

そして、母へ縋すがって、

「母さん、さっきいった青ざしの一貫文。あたしは、お嫁入りにも、何もいらない。いいえ、お嫁になんか、行かいてもよいから……日吉に、その金を遣やって」

咽むせびかける唇を袂たもとに抑えて、母は奥へはいって行った。そして一さしの銭を日吉に渡した。

「いらない。いらない」

日吉は、首を振ったが、おつみは姉らしい思いやりを声にこめて、これから世間へ出るのに、おかねがなくてどうするかと叱った。

日吉は、かねよりも、も一つ欲しい物があつた。

「おつ母、これよりも、おらにお父さんの持っていた刀をくんないか。お祖父じいさんの時からあるあの刀を——」

七歳の頃、実父の弥右衛門が見せたあの伝来の刀を、日吉は、忘れてなかったとみえる。

——が、彼の母は、どきっと胸を衝かれたように、

「刀よりは、おかねの方が、身の護りになる。刀は、思い止まっておくれ」

と宥なだめすかした。

日吉は、すぐ察して、

「ないの」

と訊ねた。

「……ああ。ないよ」

云い辛そうに、母はいった。筑阿弥ちくあみの酒の代に、それはとうに売り払われてしまったのである。

「じゃあ、あれでいい。——おっ母、物置小屋の中の錆刀さびがたなならあるだろう」

「あ……。あれなら」

「いいかい。持って行っても」

日吉は、母の顔いろに、気がねをしながら、念を押した。

やはり七歳の時だった。そのボロ脇差を見つけて、どうしても欲しいと駄々をこね、さんざん母を泣かせたことをも……彼は覚えていたからであろう。

「……………」

お奈加も、その時のことを、今ふと思い出していた。侍になるな、戦いくさする身になるな——と、あの頃は、日吉の行く末に祈ったものであったが、自分で生んだ子も、成長するにつれて、どうにもならないものだということを、今はもう観念していた。

「持っておいで。……だけど日吉や、おまえはあれを、決して人様へ向って、抜いたりなどしまいね」

「えッ、いいの?」

「おつみ、持って来ておやり」

「いいよ。おらが取って来る」

日吉は、裏の物置小屋へ駆けこんだ。そして、そこらの物を踏台ふみだいにして、壁の梁はりに吊ってある一腰のボロ脇差を取り下ろした。

すぐ腰に差した。

七歳の時に泣き喚わめいた自分のすがたが——遠い以前に振り返られた。急にすつくと、背の伸びたような成長感が、彼の胸を通りぬ

けた。

「日吉や、母さんが、もいちどおいでって」

おつみが、穿物はきものをはいて、物置の方へ告げた。戻って見ると、母は壁の神棚へ、燈明を上げ、小さい木皿へ、一つまみの粟あわと、それから日吉の齋むらちした塩とを盛って、掌てを合わせていた。

「そこへお掛け」

上がりがまち框へ、日吉を腰かけさせておいて、母は神棚から、剃刀かみそりを下ろした。

日吉は、それへ眼をまろくして、

「おっ母、何するんだい」

「元服して上げるのじゃ。形ばかりではあるけれど、おまえの門出を祝うて」

と日吉の髪へ剃刀を当てた。そして新らしい藁わらを水に浸し、切り上げた根もとを結び直して与えた。

生涯、忘れることの出来ない感銘が、そうしている間に、日吉の血へ沁み入っていた。頬に耳に、時折触れる母の荒れた手を、傷いたましく思いながらも、彼は、

（おらも、もう人なみだぞ）

と、自覚を持った。

野良犬の声が、どこかで頻りとしている。戦国の深い闇に、殖ふえてゆくのは、犬の声ばかりだった。日吉は、外へ出た。

「おっ母。……じゃあ」

達者に——というべき後も、喉のどにつまって、それしか出なかった。母は神棚の前へ、背を曲げていた。泣きだした小竹こちくを抱いて、おつみは外へ追いかけて出て来た。

「……あばよ、あばよ」

日吉の影は、黒く小さく、後も見ずに駈けて行った。霜のせいか
明るい夜だった。

卍の一族

清洲から数里。那古屋からでも西へ十里とはない。

その蜂須賀村へはいると、すぐ何処からでも目につく笠形の丘がある。夏木立の鬱蒼としているこの頃の昼間はただ蝉の声だった。夜は、大きな蝙蝠の影が月をかすめてまま飛び交う。

「おうウイッ」

何者かが、闇でこう呼んでいる。餌のように丘の木立の中でも、「おういッ……」

と、同じ調子に答えている。

よほど近づいてみないと、ちよつと気づかないが、丘の崖や大樹を繞って、蟹江川の水を引いた濠が、自然の古池のように蒼い水草がいっぱいなのだ。

その水草はまた、古い石垣と、土塀とを抱いて、何百年かの間、この主の地位と勢力と子孫とを、守り続けて来たものである。

丘一帯の宅地は、何千坪か、何万坪あるものか、外からはちよつと想像もつかない。勿論、邸の主は、この海東郷蜂須賀村の土豪で、姓名も代々、蜂須賀といい、小六と称している。

ここへ土着した中興の祖は、小六正昭。

今の当主小六正勝。

彦右衛門ともいう。

応永年間に、足利の姓を改めた家系だともいうし、応仁の大乱をうけて、この地方へ土着したのだともいわれているから——その

是非はとにかく、何しろ古い家すじであることに間違いはない。

「おうウイッ。開門ッ……」

濠の外で、再び四、五人の人影が呶鳴っている。

何処からか今、立ち帰って来た主の——小六正勝と、その家来。といっても、小六は今も、またその先代からも、正しい主筋も持っていないし、領土の権も、領政も施していない——いわゆる一土豪に過ぎないから、その家来といっても、主といっても、どこか粗野な風がある。

家長と家の子、といったような親しみぶかいところもある代りに、頭目と手下と呼び合ってもおかしくない、野人ぶりもあった。

「何をしておるか」

小六が、呶くと、

「まだかッ。門の者」

と家来がまた呶鳴った。

すると、

「おうウい」

と、三度も同じ返辞がしてから初めて、その木戸がどーんと開いた。

同時に、左右から、

「誰方だ？」

と、燈火を向ける。

薄金で作った吊鐘形の——それに把手が付いているので——戦場にでも雨の夜行にでも持ち歩けるがん燈とよぶ燈具だった。

「小六だ」

がん燈の光を浴びながら、木戸を固めている者へ、小六は尋常にそう答える。

分り切っている筈だが、たとえ主でも、これほど厳密でなければならぬ四隣の現状だった。

「お帰りなさいまし」

初めて、一斉に礼儀をする。その小六に従いて、供の面々も、

「稲田大炊助」

「青山新七」

「長井半之丞」

「松原内匠」

といちいち名乗って、がん燈の検めを浴びながら、門の内へ通った。

小六と、その一族四人はずしずしと跣音重く、暗い大廊下を、奥へ通って行った。

「お帰り」

「お戻り遊ばせ」

廊下の角々で、従僕の顔、女の顔、妻子達の顔——どれほどいるのか分らない大家族の中に住む一部の顔が——外から戻って来た家長を出迎える。

「うむ。……うむ」

小六は、いずれへも一様に、「瞥を与えながら、広間へ来て、円座の上へどかと坐った。

——機嫌が悪い？

短檠の明りが、明らかに、小六の顔の筋を、横から照らしている。

白湯。それから茶、黒豆の菓子など、そこへ次々に持ち運ぶ女達も、恟々として、気をつけていた。

「大炊」

とやがていう。

四名の端にいた稲田大炊助を振り向いてである。

「はあ」

「いい恥をかいたな。今夜の招きでは」

「……さればで！」

と、四人とも、苦^{にが}りきる。

小六の不機嫌は、やり場がなかった。

「内匠^{たくみ}。半之丞。——おぬしらの考えはどうだ？」

「どうと仰せられるのは」

「こよいの恥をだ！——蜂須賀の一族として雪^{すす}がずばなるまいが」

四人はまた、沈黙にふさぐ。

蒸暑い夜だ。そよ風もない。蚊やりの煙が、徒^{いたず}らに眼に沁みて立ち迷う。

事情はこうだ。

今日。

織田一家のさる大身から、茶事の招きをうけた。小六は元より、そういう趣味は全くない。だが、同席の客は、この尾張ではみな歴々な人物なので、顔つなぎにもよい折だし、また欠席したため、（土豪といえ、ていはいが、いわば野武士の頭目。茶の招きには恐れたのだらう）

などと嘲笑^{あざわら}われるも心外と——一族四人を連れて、特に威儀を張って、出向いて行ったのである。

——ところが、その席で。

端^{はし}なくも、主^{あるじ}が自慢の、赤絵の水挿^{みずさし}が、客の目をみはらせたはいいが、話のはずみから、

（はて？ この品は、茶わん屋捨次郎^{すてじろう}の宅で、見たことがある。

同家で野武士に盗まれたという名品と同じじゃが）

と、つい口^{くちすべ}にらせた客がある。

主は驚いて、

（滅相もない。これは近頃、堺^{さかい}の茶道具屋から、千金に近い値で手に入れた物——）

と、書付まで示すと、客もことばの手前、

（では、盗んだ野武士が堺の商人へ売りとばしたのが、転々して、御当家へ廻って来たのでござろう。茶わん屋へ押し入った野武士は、御厨^{みくりや}の渡辺天蔵と、名まで知れておることで、間違いはない）

と明らさまにいったので、席はいとど白けてしまった。

なぜなら、そういった客は、もちろんそこに居合わせた蜂須賀小六の、どんな存在か、また、どんな係累^{けいるい}を持つている者か、などということは、知らなかったに違いないが、御厨の渡辺天蔵といえ、小六の甥^{おい}にあたる者で、同時に、彼の土豪的勢力を構成している一族の、その一人であるということは、主も客の大部分も、かねがね^{かねま}弁^わえていたからである。

（いずれ後日、小六から改めて、ごあいさつ致すであらう）

と、彼は、自分の汚名のように主へ誓って、その恥と憤^{いきどお}りを、眉に抱いて帰ったのである。

どうだ？

おぬしらの考えるところは。

と、小六から今、沈痛に問われはしたが、さて、稲田大炊助にも、青山新七にも、半之丞や内匠にしても、

（こうなされては）

と、すぐ答えられるような名案もなかった。

これが、自分たちのような、家来筋ならば、何とでもいえる。また、どうにでも、処分はつく。

だが、その処分すべき人間が、主人の小六とは、血のつながっている甥おひの天蔵なのだ。御厨村に住んで、蜂須賀一族のわかれとして、常々、飼かい侍さむらいの二、三十人は家に置いてある渡辺天蔵である。

だが、小六はかえって、血のつながっている人間だけに、

「不埒ふらちな——」

と天蔵の悪事を、心から憎んで止まないのだった。

「迂闊うかつだが、思いあわせれば天蔵の奴、近ごろ身に綺羅きらをかざり、女など幾人も蓄たくわえているとか、不審なかども目に見えてあつた。

——家の名にかけても、彼奴きやつを、捨ててはおかれぬ」

すこしの間まをおいては、こう憤りうめの呻うめきのように、小六はひとり呟つぶやいた。

「……さもなくしてさえ、土豪という家門のかなしさには、蜂須賀一族もまた、野盜の野武士ずれや、破廉恥はれんちな浮浪人どもと同視されて、この小六正勝の耳にすら——あれは野武士の頭目と——世上の声が、まま聞えてくる折も折」

「ご推察すいさついたしまする」

松原内匠まつばらたくみが云った。

半之丞も大炊助も、俯向うつむいた。——ふと、小六の眼がしらに光った悲涙を見て、はっと、胸を打たれたのだった。

「聞けよ。おぬしらも」

小六は、顔を向け、

「——この邸の屋根瓦には、卅まんじの紋が苔こけさびてあろう。遠祖源頼政公みなもとよりまさが、義兵をあげられた時、高倉宮より賜った家紋と伝え聞いておる。その末が、足利將軍に仕え、蜂須賀太郎以来、失脚

して野に下り、今のわしという者にまで——土豪とよばれて来ておるものの、これは時だ」

「……はい」

「血までは、野に朽果くちはてておらぬ」

「……………」

「土豪よ、野武士の頭かしらよと、いわれればいわるる程、小六正勝は、ひそかに誓うて、今に！——と、この血を、この家名を、世人に示し直す日を待っていたのだ」

「いつも、伺っているお言葉にございまする」

「……さればこそ、おぬしらにも平常、野には住むとも、武ぶを怠るな、身を戒いましめよ、弱きを扶たすけよと、厳やかましく沙汰してあるに……。

何ぞ知ろう、血のつながる甥おひめが、今なお、性根を改めずに、町人の家へ襲よせて、夜盜を働いておろうとは！」

屹きつと、唇を噛むと、その時もう小六の肚は、決っていた。

「大炊助。新七」

「はい」

「二人して、すぐ行って来い。御厨みくりやまでだ」

「はっ」

「わしの命をもって、天蔵めを、ひき連れて来い。だが、騙だまして呼びよせて来いよ。手飼の者もおるし、武力では、一すじ縄なわではゆかぬ天蔵のことだ」

「心得ました」

主人の肚に、その決意がすわれば、何の造作もないことと、稲田大炊助と青山新七のふたりは、すぐ御厨村へ立つて行った。

森の丘は、鳥のさえずりに暁あける。——土豪蜂須賀の砦とりで造の中の一棟に、早くから朝の陽があたっている。

「松。……松ッ」

小六が、眼をさましたらしい。

妻の松波が、

「お目ざめでございますか」

寝所をのぞくと、紙蚊帳のうちで、小六は横になったまま。

「ゆうべ御厨へ遣った使いの兩名は戻って来ないか」

「まだ立ち帰りませぬが」

「……ふむ？」

と、案じ顔に呻く。

悪い事をする奴だけに、頭のするどい甥の天蔵。まづくすると、

感づいたかな？——ちと遅いが——と独り思う。

妻は、その間に、紙蚊帳のつり手を外しかけた。その蚊帳のすそに戯れていた亀一は、まだ満二歳にもならなかった。

「亀よ。来い」

小六は抱きよせて、高々と差しあげた。絵に描いた唐子のようによく肥えた亀一は、若い父の腕にも重かった。

「どうした。瞼が赤う腫れておるが——」

と、小六は、亀一の眼を舐めてやる。亀一は、父の顔を引っ掻いて膝の上であばれた。

「蚊に喰べられたのでございましょう」

「蚊ならよいが」

「寝ても暴れて、蚊帳の外へ、ころげますので」

「寝冷えさすな」

「はい」

「庖瘡に気をつけよ」

「仰せまでもございませぬ」

「夫婦が仲の初の児。いわばおぬしと俺との、これは初陣の賜物」
「ホ、ホ、ホ」

開けひろげた寝所へ、夏の朝風が吹き流れてくる。カーン、カーン、と何処かで鍛冶の鎚音がたかく響くのも、寢覚の耳には、快かった。

その鎚音を聞くと、

「どれ」

小六はもう、わが児を膝から捨てて顧みなかった。妻の笑顔も、眼になかった。

風雲の裡へ。

動流の中へ。

今や、麻のごとく乱れていると知る天下の一角へ。

小六の若い血、逞しい体は、大きな野望を期しているもののよう、和やかな一時を振り棄てて、その室から出て行った。

書院に坐つて、朝の茶を静かに啜るでもない彼である。衣服をかえ、顔を洗うと、もう外庭へ出て、大股に歩いてゆく。

鎚の音が近くなる。

小道をはいつて行くと、森の中に、祖先以来、斧を入れなかった大木を伐採して、新しい平地を拓き、そこに二棟ほどの鍛冶小屋が並んで建っていた。

小六が泉州堺から密かに呼びよせた、鉄砲鍛冶の国吉が、弟子と共に、仕事していた。

「どうだな？ 仕事は」

彼が立つと、国吉や弟子は、仕事場の土間に、平伏した。

「まだ、巧くゆかぬな。——見本の鉄砲と同じような物が、何とか出来ぬものか」

「ああしたら、こうしたらと——寝食もわすれて、苦心は致しておりますが」

——無理もない。

小六がそういうように頷うなずいていると、母屋おもや使いの小侍が追って来て、

「お頭様かしら。ただ今、御厨みくりやへ行ったお使いの御両所が、戻られましたか」

と、告げた。

「なに。帰って来たと」

「はい」

「して、大炊と新七は、天蔵めを連れて来たか」

「甥御おいごさまにも、御一緒にお越しなされました」

「よし！」

うまく誘い出したな——と小六はまず、首尾を心で頷うなずきながら、

「待たせておけ」

と、いった。

「いつもの御書院へ」

「そうだ。直ぐ行くから」

「はい」

小侍は、駈けて戻って行く。

奇策縦横の人物——と一族からは信賴されているが、小六の半面にはまた、ひどく気の弱いところもあった。

義には強いが、涙には勝たれないという弱さなのだ。わけて骨肉の情には脆もろい小六なのである。粗野で兇暴で荒削りな——土豪の家長として睨にらみも押しもきく骨太い性格の中に、それだけに本能的な涙と、また、怒ったら野火のように止らない血を持っていた。

その彼が、

（——今朝は甥おいを斬らねばならない！）

と今、胸をすえている。

だが決して、気のすすむ顔色ではなかった。告げに来た小者が去っても、彼は鍛冶小屋の前に立って、いつまでも、国吉と弟子の仕事ぶりをながめていた。

「——無理もない。何せい、鉄砲が渡来したのも、天文十二年、つい七、八年前のことだからな。それ以来、諸国の武家豪族どもが争って、この新武器の製作を計ってみたり、或いは、蛮船ばんせんから買い入れようと競きそっているが——この尾州びしゅうあたりはまだ地の利を得ておるものの——甲州こうしゅう、越後えちご、奥州おうしゅうあたりの山武士やまざむらいのうちには、鉄砲とはどんな物か、まだ見たこともない者が多かろう。——職人にしても、手馴れぬのは当りまえだ。急がずともよい、みつしり工夫を積んで、つくり出したら、いくらでもつくれるよう、他日の備えに間に合えば——」

そこへまた、さっきの取次が、

「お頭様」

と、小道の露に身を屈かがめて、彼の足を促うながしに来た。

「もう御一同、書院にお揃いなされて、お待ち申しておりますが」

小六は、振り向いて、

「今、行く」

「は」

「すぐ参るから、待たせておけばよい」

「はい」

取次の小者は、多くをいうことも出来ず、引き返して行つた。小六の胸には、馬謖ばよくを斬るの気もちで——甥おいの成敗せいばいを決心して

いながらもまだ——情と正義とが、割りきれずに、乱れ合っていた。
で、彼は去りがてに、

「国吉」

とまた、小屋の中へ話しかけた。

「……だが、年内には、使える鉄砲が、十挺や二十挺は出来るだろうか」

「左様で——」

と、鍛冶の国吉は、責めを問われたように、職人気質な苦痛を、煤まみれな顔にあらわして、

「ただ一挺でも、これでよいと思う物が出来さえいたせば、後は四十挺でも百挺でも、一つ物をつくるのは、やすいことでございますが……」

「その一挺だな。——難しいのは」

「お手当ばかり戴いていて、心苦しゅう存じますが」

「よけいな氣遣いはするな」

「ありがとうぞんじまする」

「来年、さらい年、また、来る年も、来る年も。合戦はやむ間もなからう。大地の冬草がみな萎み果て、新しい芽に萌え代るまでは。

——で、鉄砲も急ぐのだ」

「この上とも懸命に、やってみまする」

「しかし、密かにだぞ」

「心得ております」

「鎗音が少し高過ぎるな。濠の外まで、聞えはせぬか」

「それも、気をつけまする」

「むむ」

小六は、去りかけたが、またふと、鞆のそばに立ててある一挺

の鉄砲に目をとめて、

「それは」

と、指して訊ねた。

「見本の方が、出来た品か」

「新品にございますが」

「どれ、見せい」

「いえ、お目にかけるまでには、まだなかなか」

「いやいや。ちょうど、試し物があるのだ。——撃てぬことはあるまい」

「弾は飛びますが、関金の噛み合わせが、どうやっても、原品のようにつくれませぬ。もう一息、工夫いたせばと思っておりますが」

「試すのも、工夫の一つだ。よこせ、その鉄砲を」

小六が国吉の手からそれを取って、銃の腹を脇に乗せ、物を狙うような姿勢をしていた時である。

三度目の迎えが来た。

が、今度は、小者の取次ではなかった。ゆうべ御厨へ行って帰って来た稲田大炊助なのである。

「まだ、御用はおすみになりませぬか」

大炊の声に、小六は、鉄砲の台尻を肋骨に当てたまふり顧つて、

「おお。稲田」

「お早くお越しねがいとう存じます。弁口をもって、天蔵殿を召し連れては参りましたが、妙な？——と氣どられたか、落着かないご挙動。悪くすると、檻を破る虎になるかも知れませぬ」

「よしッ、参ろう」

大炊助に鉄砲を持たせて、小六は、森の小道から書院の庭のほ

うへ、大股に歩いて行つた。

成敗^{せいばい}

何の急用か？

——疑うように、渡辺天蔵は、書院の端に坐つて、落着かない目をしていた。

青山新七。

長井半之丞。

松原内匠^{たくみ}。

それに今、叔父を迎えに立つた稲田大炊助^{おおいのすけ}といい、揃いも揃つて、蜂須賀党の腹心たちが、自分のそばに坐りこみ、自分の眼のうごき、手の微動にも、監視をそいでいるらしく思えるのだ。

——はてな？

変だわえ、と天蔵はここへ通るとすぐ感じていたのである。口実をもうけて、帰ろうかとさえ考えたが、その間に、庭のほうに小六の姿が見えてしまったので、

「おう。叔父御で」

と、彼の方から、強いて笑顔を作りながら、迎えかけた。

小六は、鍛冶小屋から今、持って来た鉄砲を、地に立てて持ったまま、

「天蔵。庭へ出ぬか」

と、外から呼んだ。

その様子は、常の小六と変ったところもないので、天蔵はいつもの狎れ癖^{なぐせ}をすぐ出して、

「何か、急にたまえに、御用だというお迎えで参じましたが」
「うむ」

「何の御用で」

「まあ、降りて来い」

「はあ」

沓ぬぎの藁草履をはいて、天蔵は庭へ出た。半之丞や内匠も、彼について出た。

「そこに立て」

小六は、甥の天蔵へ、そう命じてから、自分は庭石の一つへ腰をかけた。手の鉄砲を立てて持ったなりに——である。

天蔵はとたんに、叔父の眸から自分を射て来た或るものを直覺して、はっとしたが、もう遅かった。

叔父の腹心たちは、碁石のように、四方に立って、囲みの形を取っていた。——天蔵の顔は見えているまに、蒼くなった。

「……………」

「……………」

小六の体から、目に見えない憤りの炎が立っている。日頃、狎れやすい天蔵にも、その眉は、むだ口ひとついわせなかった。

「天蔵ッ」

「は。……………」

「おぬし、小六が日頃、いつてある言葉を、よも忘れはしまいな」
「覚えております」

「人と生れてだ——今の世の乱国に生れてだ——最も恥すべきことは徒衣徒食と良民いじめだ」

「……………」

「諸国の土豪という輩が、みなそれなのだ。野武士という奴が、

みなその類だ。——だが、小六正勝の一家は、それではならぬぞ。……と堅く、戒めてあるはずだが」

「はい」

「おれの身内だけは、志を大きいところへ持とう。百姓いじめや、野盗のまねはやるまい。そして一国一城を持ったら、お互いに栄えよう。……そう誓つてあるな」

「あ、あります」

「それを破つたのは、誰だ」

「……………」

「天蔵！ おのれは、そのためにおれが養わせておく武力を悪用して、夜盗を働いたな。茶わん屋へ押し入って、赤絵の名器を盗んだな！」

「……………」

逃げかかる天蔵へ、小六は、大喝をあげせながら突ツ立った。

「醜しいッ！ 坐れッ」

「坐れッ。それへ！」

と、もう一度、小六は呶鳴りつけて、天蔵の気を呑んでしまつてからまた、

「逃げる気か。おのれは」

と、責めた。

「に……にげなどは、いたしませぬ」

芝の上へ、腰をついたように、べたと坐って、天蔵は顫え声で云つた。

「縛れ——」

小六は、四方に立っている四人へ向つて命じた。

松原内匠と、青山新七とが、すぐ左右から飛びかかつて、

「おことばでござる」

と、うしろ手に捻じあげ、刀の下緒で腕ぐびを巻きつけた。

はつきりと身の危険と、事の露頭を覚ると、天蔵は蒼白な顔に、奮然と、太々しい反抗をあらわして、

「あッ。お……叔父御。なんだってこの天蔵を！……。いくら叔父御でも、無体だッ。余りといえは」

「やかましい」

「覚えはないッ。この天蔵には今叔父御がいったような、盗みをした覚えなどは」

「やかましいッ」

「誰に……。誰がそんなことを、告げ口したのかッ」

「まだ黙らぬか」

「叔父御も、叔父御じゃござらぬか。なぜ一応、うわさがあるならあると、天蔵に仰っしゃった上で」

「女々しい言い訳を」

「でも。——多くの身内を抱えている一族の頭目が、ひとの告げ口などに惑わされて、よく吟味もせず」

吠えたけるのを、小六は、耳に嫌いながら、手についている鉄砲を、肱へ上げて云った。

「こやつ。国吉の鍛ったこの鉄砲の試しには、ちょうどよい生き物だ。彼方の牆のそばへ引き立て、木に縛って立たせておけ」

新七と内匠は、天蔵の背を突いたり、襟がみを持つたりして、庭の果てまで連れて行った。弓矢では、よほどな射手でもない、矢の届かない程な距離であったが、

「叔父御ッ。いうことがあるッ。もう一言、いわしてくれーッ」

と、そこから死にもの狂いとなる天蔵の声は、よく聞えて来た。

「……………」

が、小六は耳もかさない。

大炊助が持つて来た火縄を取ると、弾ごめして、直ぐそう叫び狂っている甥の姿を狙い澄しているのだった。

「わ、悪かった。叔父御ーッ。白状するッ。もういちど天蔵のことを聞いてくれい。いうことがあるッ」

的に立たせられて喚いている者の声をよそに、四人は、小六の鉄砲の手元を、しいんとして、唾をのみなから見まもっていた。

刻。一刻……

彼方に狂っている天蔵の声はかすれてしまう。

そして、

（だめだ！）

と死を観念したか、がくりと天蔵が首を垂れたと思うと、

「大炊」

と、小六は鉄砲から眼を逸して、うしろに控えている彼を呼んだ。

「——関金を引いても、弾が出ないぞ。どこかこの鉄砲にはまだ狂いがあるらしい。ちょっと小屋へ走って行って、鍛冶の国吉を呼んで来い」

鍛冶の国吉は、小屋からすぐ飛んで来た。

小六は鉄砲を示して、

「今、撃ち試してみたが、どこかまだ、不出来な箇所があろう。弾が飛ばぬのだ。すぐ直せ」と、いった。

と、いった。

国吉は、検めて、

「すぐには直りかねます」

「いつまで」

「夕刻ごろまでは」

「もっと早くいたせ、試しにかけける生き物が、待っておるのだ」

「えッ？」

国吉は、そういわれて初めて、木へ縛しつけられている渡辺天蔵が、的に立っているのに気づいて、

「……あッ、甥御様を」

「余事を申すな」

と、小六は耳を逸らして、

「そちは鉄砲鍛冶。一日も早く、ただ鉄砲の製作に成功するよう、精念すればよいのだ。——この一挺は、そちに取っても、それが成就するか否かの、大事な試作であらうが」

「はい……」

「悪人とはいえ、天蔵も身内の一人、犬死さすより、せめて鉄砲の試しにでも、役立たせてやれば、幾分でも世の多足になろう。はやくして来い」

「へ。……へい」

「何を洪っておる！」

炬のような眼で、くわっと睨まれた心地がしたのである。その眼すら仰げないで、国吉は、

「はいッ、急ぎまする」

と鉄砲を抱えて、鍛冶小屋の方へあたふた戻って行った。

「内匠。——的の生き物には、水でも与えておけ。鉄砲の直るまで、小者三名ほど、見張につけておくことも、いうまでもないぞ」

云い残して、小六は、母屋へ上がってしまう。それから、彼の朝飯であった。

内匠、大炊助、新七たちの腹心も、それぞれ庭面から姿をかく

した。

長井半之丞は、その日、自分の郷土へ帰ることになっていたので、間もなく暇を告げ、松原内匠も、用事で出かけ、後には稲田大炊と青山新七のふたりだけが、丘のやしきに残っていた。

陽が高くなる。

きょうも暑い。

丘は蝉の声につつまれ、庭石は焦けて、動いているものは蟻だけの炎天になった。

鍛冶小屋のほうから時折、烈しい鈍音がびびいてくる。必死に、鉄砲の関金を作り直しているのだろう。天蔵の耳には、それがどんなに聞えて行くか。

二、三度。

「まだか。鉄砲」

と、小六の部屋から、催促の声がした。そのたびに、控部屋から青山新七が炎天を駈けて行って、やがて、

「もうしばらく……」

と、縁先へ戻って来ては、鍛冶小屋の仕事ぶりを伝えていた。

その間に、小六は、自分の部屋に大の字なりになって昼寝していた。新七も、夜来のつかれが出て、ついうとうとと居眠っていると、突然、

「にッ、にげたッ。新七どの！ 逃げたッ。き、来てくれッ」

と、庭先から、誰か喚いた。新七はびっくりして、裸足のまま飛び出すと、番に付けておいた小者の一人が、

「お、甥御様が、後の二人を斬り仆して、に、逃げ出しましたッ」と、まるで粘土のような青い顔して、舌の根も、わの空に、告げるのだった。

「えッ。逃げたと」

のめるように、新七は、その番人と共に、駈け出して行きかけたが、振り向いて、

「お頭目ッ。お頭目ッ。——甥御おいでの天蔵てんざうどのが、番の者を斬りすてて、逃げたと申しますぞッ。天蔵てんざうどのが逃げましたぞ」

ふた声ほど、呶鳴なうめいった。

蟬せみしぐれに包まれた母屋の一室で、快こころよくげに昼寝していた小六は、

「なに！」

がばと、起き上がるなり、眠る間も抱いていた刀をそのまま小脇に、横縁から飛び下りて、もう新七のすぐ後に続いて駈けていた。

——来てみると。

さつき天蔵を縛り付けておいた木に、天蔵のすがたはなく、ただ木の根がたに、一筋の麻縄が、解き棄ててあるばかり。

足数にして、約十歩ばかり先に、一箇の死骸が、朱あけになって俯うつつ伏ふしているし、ずっと土塀へ寄った際きわにも、頭を柘榴割ざくろうわりにされた番の者が、塀の根へ寄りかかったまま死んでいた。

そこらは、ぶち撒まいたように、血がこぼれていた。炎天なので、土や草に乾いた血は、すぐ変色して、漆うるしみたいにくくみえるが、生々しい臭においに羽虫が寄りたかって、面おもても向けていられない。

「番の者ッ」

「へ。……へい」

生き残って、今知らせに駈けて来た男は、小六の声を浴びただけで、それへひれ伏してしまつた。

「両の手くびを、下緒さげおで縛り、そのうえにもなお、麻縄をかけておいた天蔵が、どうして縄を抜けたのだ？ ……。この縄を見れば、

断ち切つたようでもないが」

「はいッ……。と、解いて上げたのでございます」

「だれがッ？」

「あれに、殺されている、番の者の一人がで」

「何で解いた？ 誰のゆるしをうけて解いたか」

「もとより、初めは、耳にもかさずにおりましたが、甥御様が……尿がしたい、尿をする間……と余り苦しがって仰つしやいますので」

「ば、ばかな！」

と小六は、地だんだをふまないばかり、罵ののって、

「なぜ、そんな知れきつた手に乗って——ええ！ たわけがッ」

「お頭目様。おゆるし下さいまし……。ですが、甥御様が番の手前どもへ仰つしやるには——あの情にもろい叔父が、どうして甥のおれを、ほんとに殺すものか。これはおれを意見するために、仕置しちしているのだ。糺きやうめい明だから、晩にはゆるされる。——それを貴様たちが、おれのいうこともきかずおれを苦しめるなら苦しめてみる。……と、こう脅おどかしなさるので、一人がつい解いて、彼方の木陰へ、尿いばりをしに連れて参りました」

「そして……」

「ギャッ——という声が出した時はもう二人とも、殺されてしまったので、手前は、後も見ずに、お知らせに」

「くどいッ。——天蔵はどう逃げたか、それを先にいえ！」

「土塀へ手をかけていましたから——多分そこを越えて、外へ飛び下りたに違いございませぬ。どばーんと、濠ほりの水音が、その時したように思いまする」

小六は、聴く間も、もどかしそうに顧みて、
「新七。追討ちしてしまえ。村の道へも、すぐ手配をしろ」

いいつけると、彼自身も、その手配のために、表門の方へ恐ろしい勢いで駆け去った。

今が今——というように、小六から性急にいつけられて、鍛冶小屋へ飛んで戻るなり、鉄砲の関金を鍛ち直していた国吉は、邸のうちに何が起ったのも、時が経ったのも、物音も一切知らなかった。

ただ鉄砲。それしかない。

汗にまみれ、鞆の火塵を浴び、そしてようやくヤスリ掛けから仕上にまで来て、

「さあ。出来たが?」

と、ほっと一汗、肱でこすったが、果たして弾が思うように飛ぶか否か——は、まだ十分に自信がない顔だった。

空銃を壁へ向けて、

ばしッ——

と、関金の調子を試し、

「うむ! 良さそうだ」

初めて、呻いた。

だが、小六の前へ出てから、また不備があったりしては面目ない。

国吉は、念のためと、それに弾ごめして、銃口を地へ向けて一発撃ってみた。——ぶすッ、と勢いよく地面へ小さい穴が掘れた。

「しめたッ」

待ちかねている小六の顔を思いながら、国吉はすぐ、小屋から飛び出した。

そして、庭の方へ。——樹木のふかい小道づたいに、急いで行く

「おい。おい」

誰か呼んだ。——木蔭に人影がちらと見えた。

国吉は足を止め、

「……誰だ?」

「おれだよ」

「おれとは」

「渡辺天蔵だ」

「えッ……。甥御様で」

「何をびっくりした眼をするのだ。……ははあ分った、今朝おれが、木に縛し付けられて、鉄砲の試しになろうとしていたのに、ひよいと出て来たから仰天したのか」

「ど、どうなされましたので」

「どうもこうもないさ。叔父甥の仲だ。脅かされたのよ。とんだ折檻を喰わせやがった」

「……へエ?」

「ところでだ。たった今、村の白旗の池で百姓と隣村の地侍とが、喧嘩を起した。叔父御も、大炊も新七も、すぐ駆けつけて行つた。おれにも直ぐ後からつづいて来いとのこと。——鉄砲は仕上ったか」

「出来ましたが」

「よこせ」

「お吩咐でございましょうな」

「もとよりのこと。はやく出せ。相手が逃げたら試されぬ」

天蔵は、引っ奪るように、国吉の手から鉄砲も火縄も奪って、森の間に走りこんだ。

「……はてな?」

手はなしてしまってから、国吉は変に感じて、彼の後を尾行てゆくと、天蔵は、表門のほうへは行かず、殊さら樹々の梢でうす

暗い裏手の土塀をのりこえて、外の濠ぎわへ跳び下りた。

そして、濠の腐った水の中に、胸の辺まで、体が浸ってしまうのもかまわず、野獣のように、じゃぶじゃぶと渡って行くではないか。

「やッ？ 逃亡だッ、出会いなされ！ 出会いなされ！」

国吉は、土塀の上から、大声で呶鳴った。その時もう泥鼠のようになって、向うの岸へ這い上がっていた天蔵は、一発、彼の顔を狙って撃った。

ぐわアツン！

水のそばのせい、凄まじい音がした。国吉の姿は土塀から転げ落ちた。すぐわらわらと駈けつけて来る蹻音が彼へ迫った。だが、天蔵の影は、まるで豹が跳ぶように、畑や野の土を蹴って、やがて消えてしまった。

矢矧川
やはぎがわ

布令がまわった。

家長の蜂須賀小六の名をもってである。

——集まれ！

というのだ。

晩方までに、土豪蜂須賀の丘の住居は、門の内外、野武士で埋まった。

「合戦か」

「何事だろ」

「何が起ったのか」

集まって来た者はみなこれ、物の具を取れば、一くせある面だましいの者ばかりだったが、平常は、野に住んだり、畑を打ったり、繭買いをしたり、馬を飼って市へ出したりなどしている、ただの農民や商人と変りがない。

ただ彼らは、根からの農民や商人ではなかった。血のなかに、多分にまだ、祖先の勇武と、現代への不満を抱いて、時しあらばふたび、弓箭のなかに運命の風雲を捲き起そうと——かねてから結びあっている家党的輩なのである。

そのうちに、

「お庭へまわれ！」

「静粛に——」

「中門をくぐって」

と、小六の腹心、稲田大炊助、青山新七たちが出て来て、指図した。

その腹心たちは、すでに武装していた。もとより土豪の一族なので、本鎧ではないが、籠手脛当をつけ、差料も大振りな陣刀に代えていた。

「さては、出触れだな」

と、一同は早くも察していた。

どこからどこまで、という確とした領土もない代りに、どここの城に所属しているとか、誰に隨身しているとかいう、明瞭な味方も敵もないのが土豪である。

だが、——それにしても時々、合戦には出る。

同じ土豪から、自分の一族の勢力圏内を犯されたとか、或いは、国主から味方に頼まれるとか——折入って遠国の大名からでも、通謀を依頼されるとか——などの場合。

しかしそれは多く、金や報酬に依ってうごくのだが、小六はまたかつて利のために動いたことはない。

それはこの近国の織田家でも認めていた。三河の松平家でも、駿遠の今川でも知っていた。だから、土豪とはいえ、自然重きをなしていたし、蜂須賀党を土地から除こうとする者もなかった。

その家長からの触れなので、すわとばかり、一族は駈けつけて来たが、広庭へむらがって、ふと築山を仰ぐと、小六正勝は、折から、薄暮の空に見える二日月の下に、黒革の胴を着こみ、大太刀を横たえて、軽装ながら、どこか家党の頭目らしい貫禄をそなえて、石像のように、黙然と突っ立っていた。

そして、水を打ったように、数百人の一族が、ひそまり返ると、甥の渡辺天蔵を、きょう限り義絶する旨を宣言して、その始末を、明

白に述べた末——

「が、これは、家長たるおれの不行届でもある」

と、不徳を謝し、

「天蔵は、逃げうせたが、草の根を分けても誅罰せずにはおかん。もし、彼を生かしておいたなら、土豪蜂須賀は、百年の後も、野盗の徒と過られるだろう。お前らは、お前らの面目のために、祖先のために、子孫のために、天蔵めを、打ち殺せ。——おれの甥だなどと思うな。彼奴は蜂須賀一党の賊だぞ！」

云い渡しているところへ、物見にやつた者が駈け戻って来て、告げることには、

「……御厨村のほうでも、渡辺天蔵とその一類が集まって、一戦をも辞せずと、物々しく固めている由にござります」

と、あった。

敵が、渡辺天蔵と聞いて、彼らはすこし張合いぬけた様子だったが、事の顛末と、

——一族の名のためだ！

と小六から聞かされると、奮い立って、真っ黒に、武器蔵へなだれて行った。

武器蔵には、驚くばかり多量な武器が、貯蔵してあった。

源平、建武、応仁の乱とつづいて、何百年かにわたって作られて来た武器は、合戦のたび、山野にも捨てられたが、その数は、夥しいものに違いなかった。

わけて、近頃では、国々の合戦はやむまもなく、人の住む所には、不安と暗黒が漲っているのだ、その心理が、武器を大切にした。

どんな百姓の家にでも、武器があった。また、槍や、刀なら、食物の次に、すぐ金にもなって売れた。

蜂須賀党の武器蔵には、先祖以来の物もずいぶんあったが、急激に殖えたのは、小六の代になってからであった。——しかしまだ、その中に鉄砲は一挺もなかったのである。

が、せっかく成功しかけたその鉄砲は、天蔵が盗んで行った。小六の憤怒は、絶頂に達していたといっている。

「この上にも、一戦をも辞せぬなどとは、八ツ裂きにしても飽きたらぬ人非人。彼奴の首を見ぬうちは、この革胴を解いては寝ぬぞ」

小六は、門出に云った。

そして、人数を率い、御厨村へ向つて殺到したが、村近くまで来ると、

「あッ、火の手だ」

と、一同は、足を止めて、夜空を見まもり合つた。

水田の彼方に、土橋が見える。赤い夜空に、点々と人影がうごいている。さては敵か——と先鋒から一人放つて見せにやると、

「天蔵の徒が、火を放つて、掠奪を始めたので、逃げ惑うて来た村民だそうでございます」

と、いう報告。

人数を進めて行くと、なるほど、嬰兒の声などもヒイヒイ聞える。村民たちは、家財や家畜や、病人などを担つて、逃げて来たところへ、さらに、

「蜂須賀村の人数」

と聞いたので、ふるえ上がっていたが、小六の腹心青山新七が行つて、

「おれ達は、掠奪に来たのではない。一族の渡辺天蔵とその手下どもを誅罰に参つたのだ」

と、諭すと、ようやく鎮まつて、口々に、天蔵の暴悪を怨んで

訴えた。

彼らの泣訴するところを聞くと、天蔵の悪事は、茶わん屋へ夜盗にはいっただけの一事には止まらない。国主へ年貢を納めるほかに、私に法を立てて、村民から田や畑の「守護銭」と称して、二重の税を取つたり、池や川の堰を、自分の手に奪つておいて、「水銭」を取つたりしていた。そして、不平を鳴らす者があれば、手下をやつて、田や畑を荒してしまふ。

もし、領主へ密告すれば、その一家をみなごろしにすると脅していた。国主は、戦備と戦争に追われているので、年貢の取立てには見廻つても、平常の治安にまでは手がまわらない。

天蔵の一味は、よいことにして、博奕場を開いたり、神社の境内で、牛や鶏を屠殺して喰つたりしていたらしい。また、邸には、女をあつめ、神社の拝殿は、武器の隠匿場に使っていたという。

「して、その天蔵の人数は今夜、どんな配備をしているか」

新七が糺すと、村民たちはまた、口を揃えていった。

「神社から槍や長柄を持ち出して、酒をくらい、戦つて死ぬと吠えておりましたが、遽かに、家々へ火を放け廻り、荷駄の背に、金目な物や、武器や喰べ物など、積めるだけ積みこむと、一団になつて、逃げ落ちてしまいました」

戦つて死ぬ——と云い触れさせたのは、逃げのびるための、天蔵の策であつた。

「また、後手を喰つたか」

と小六は地だんだを踏んだ。

が、彼は、

「村民どもを先へ、家へ帰せ」

と、下知した。

協力して、消火に努めた。そして天蔵が、博奕場^{ばくちば}にしたり、人獣の血をながしたりしていた神社の拝殿を明け方までに浄めさせて、小六は、そこに額^{ぬかず}き、

「一族の端くれたりといえども、天蔵の悪行^{あくぎよう}は、やはり蜂須賀一党の罪。後日必ず誅罰^{ちゅうばつ}を正し、村民をなぐさみ、神帛^{しんぱく}を捧げて、お詫^わび仕るでござろう」

と、祈念した。

そのあいだ彼の一族と手兵は、肅として両側に整列していた。この秩序と、彼の敬神の行をながめて、

(野武士の頭目^{かしら}が?)

と、村民たちは、むしろ怪訝^{けげん}な顔して、ながめていた。

渡辺天蔵は、蜂須賀の名をもつて、何事も振舞っていたし、小六の甥ということも知れ渡っていたので、その頭目^{かしら}と聞いただけでも、戦慄していたのであろう。

だが、小六は、神と民とを味方に持たなければ、世に立てないことを知っていた。

やがて物見が帰って来た。

それによると、

「天蔵の一味は、手下を加えて約七十人ばかりの同勢。東春日井の山道へかかって、美濃路^{みのじ}へ逃げ越えてゆくらしい足どり」

と、ある。

小六は、そこで、

「人数の半数は、蜂須賀村へ帰って、留守をまもれ。残る半数の半分は、この村に止まって、焼け出されの村民を救護したり、治安に当れ。——後の人数は、おれに尾いて来い」

と、命じた。

——で彼の手兵は、わずか四、五十人しかなかった。

その小勢で、小六は、天蔵を追いかけた。

小牧、久保一色^{くぼいしき}を経て、ようやく先の敵勢に追いつきかけると、

道々、物見を残して歩いている天蔵の方でも、

(来たな!)

と覺^{さと}つたらしく、急に山道を迂回^{うかい}して、瀬戸峠から、足助^{あすけ}の町のほうへ下って行くとの報せ——それが、山中ばかり追い歩いた四日目の午頃^{ひるごろ}だった。

夏だし、道は嶮岨^{けんそ}だし、具足着ではあるし、追う方も追うほうだったが、逃げまわる天蔵の同勢も、逃げつかれて来たものとみえ、道々、荷を捨て、馬を捨て、だんだん身軽になつて百月川の谿谷^{けいこく}で、空腹^{すきばら}へ川の水を入れ、ぐったり一汗ふいていた。

——ところへ。

わっと、小六の人数が、両側からなだれ落しに、挟撃した。

人間のかかる前に、無数の岩石が降って行つた。谷川はもう血の脂^{あぶら}を流していた。

「うぬッ」

「おのれッ」

「退^ひくな」

「何の!」

突く。

斬りなぐる。

取っ組む。——川へ墜ちる。

同じ一族と一族との撃突であった。敵の手下と、小六の手兵のうちには、血のつながる叔父と甥、従兄弟^{いとこ}と従兄弟、日頃は仲のよい友達の顔もあった。

が——ぜひもない!

同じ五体の者なればこそ、その病根は断たなければならぬのだ。小六は、わが血にひとしい敵の鮮血をかぶりながら、

「天蔵ッ。天蔵ッ出合え」

と喚きながら、誰よりも勇壮に駆けまわった。

百月川の谿谷は、一瞬で真っ赤になった。

小六の手兵も、十人ほど死んだが、敵はほとんどみなごろしにした。

しかし、小六はなお、

「あの峰。あの道を」

と、血眼だった。

肝腎の天蔵の姿は、死骸のなかになかった。彼は逸はやく、手下を捨て、峰づたいに、恵那山脈のふところへ、逃げ去ってしまつたらしいのである。

「彼奴! 甲州領へ目ざして行つたな」

歯がみをして、小六が、峰に立っていると、突然、四方の山の罅を呼んで、グワーン! と一発の弾音がした。

鉄砲だ。

彼を嘲笑うごとき鉄砲の音だった。

「……………」

小六の頬に、涙がながれた。無念はいうまでもないことだ。しかし、彼は悪鬼のような甥を、その時になつても、自分の五体以外のものとは思えなかった。自分の不徳に、悔いの涙がわいたのである。

惘然として——

その、峰に立つて考えてみた時、小六は、まだまだ自分が、いかに野望を抱いても、土豪の位置を脱して、一箇の国持となるに

は、日の遠いことを知った。その資格がないことを覚った。

(——身内のひとりすら治めることを知らないでは)

(武力ばかりではだめだ。治策がなければ。……また、日頃の庭訓がなければ)

とも、考えた。

翻然と、彼は、涙の目から、苦笑を光らした。

「畜生めが、おれを訓えて行つたわえ!」

小六は、峰から呶鳴った。

「おういッ。引き揚げろ——」

その日。

三十余人に減つた人数をまとめて、百月川の谿谷から挙母の宿場へと下った。宿場の外れに野営して、翌日、岡崎の城下へ使いを立て、通行の許しを得、そこを立つたのがすでに遅かつたので、岡崎の城下を通つたのは、もう夜半近くだった。

街道すじへかかると、国々の出城本城などのほかに、柵や砦も、鼻のつかえるほどある。人数を率いて、通行のできない要所もあるし、日数もかかる。

で、矢矧川を舟で下り、大浜から半島の半田へ上がる。そして常滑からふたたび舟便で海をよぎり、蟹江川を溯つて、蜂須賀村まで帰ろうという道どりを取つたものである。

ところが。

矢矧川まで出てみると、夜半でもあつたが、舟は一艘もなかった。

橋もない。

水瀬は早く、川幅は二百八間とかいわれている。建武の年の新田足利の合戦をはじめ、岡崎の要害として、ここはいくたびか

古戦場となつて来たし、今も——つい数年前には、織田信秀と、松平家の軍とが、大戦の血をながし、天文十四年から十六年にわたる合戦の果て、織田の尾州勢が大敗して退いた所である。

太平記印本には、

「矢矧川の橋を引き、楯を搔てふせぎ戦ひける

と、あるから、遠い昔や、江戸の治世になつては、諸人往来のため、二百八間の大橋が架つていたものとみえるが、その年、天文二十一年の夏の頃には、まだまだこの地は、乱世乱麻の合戦の真ツただ中。矢矧の大河は、とうとうと押し流れてはいたが、矢矧の大橋はなかったのである。

小六と、一党の者は、当惑顔に、附近の木蔭に屯していたが、

「下る舟がなければ、渡しに乗つて、対岸へあがろう」

と、一人がいうし、

「いや、もう夜が更けた。朝を待てば、舟があるう」

と、いう者もある。

だが、ここで屯するには、もう一度また、岡崎の城へ届けに行かなければなるまい——と、小六が分別を与えて、

「渡舟を探せ、渡舟一艘さえあれば、かわるがわる越えて、夜明けまでに、舟で下る道程ほどは歩けよう」

と、指図すると、

「いや、お頭目。その渡しの小舟さえ、どこにも見当らないので」と、誰かがいう。

「ばかな！」

小六は、叱りとばして、

「一艘の小舟さえないと。そんな筈があるものか。——これほどな大河、昼中は、何で往来するか。戦のため、河止めというような、

非常な時にせよ、そこらの蘆間や、河原草のなかに、物見舟は隠してあるものだ。よく眼をあいて、探し直して来い」
と訓えた。

呶鳴られた勢いで、彼の手兵は、河の上下へわかれて、五、六人ほどばらばらと駈けて行つた。

その中の一人が、

「あッ。あつた！」

と、さけんで足を止めた。

洪水の時にでも、土を濡われて行つたらしい断岸に、楊柳の巨きなのが、根を露出して、水のうへへ屈み腰に枝を垂れている——

その樹蔭に、一艘の舟が、繋いであつた。

こんもりと茂つた夏柳の葉蔭は、川の水も、瀬のように穏やかで、そして暗かつた。

「……手頃だ」

小六の部下は、すぐそれへ跳び乗つて、一同のいる下流の岸まで、流して行くつもりでもあつたか、そう呟くと、柳の根に巻いてある舟のもやいを解きかけた。

——すると。

「……?」

その兵は、ぎよつとしたように、眼の下の舟を見すえてしまった。舟は、荷足舟ぐらいな、脚の浅い舟であつたが、もう壊れかけていて、水あかに浸されてみるとみえ、危ないほど傾いている。それでも、渡しに使用しないこともないが、見ると、腐った苦を敷いて、舟の端に、高いびきで眠っている男があるのだ。

「何者……?」

と、その兵は、眼をみはってしまったのである。

なぜならば、ふしぎな服装と、ふしぎな容貌と——そして余りに不敵なほど——快げに眠っているからだだった。

袖も短い、裾も短い、白晒布のよこれぬいた着物ひとえに、手甲脚絆をつけ、素足にわらんじを穿いた——大人かと思えば大人でもなく、子供かと思えば子供でもない男が——虚空へ向って身を仰向け、眉や睫毛に、夜露を置いて、まったく放心の姿で寝ている。

「……おいッ」

兵は、呼び起してみたが、覚めようとしなかったので、槍の石突で、その男の胸のあたりを、

「おいッ！」

と、もう一度、呼び起しながら、軽く小突いた。

眼をあいた男は、槍の柄をにぎって、くわッと、兵の顔を睨めかえしながら、

「なんだッ？」

と、寝たままで云った。

蜩

流れる水のすがたにも似ている今の境遇を、矢矧川の柳の蔭に寄せて、腐れ苦を被いで一夜を舟に過していたその男は、中村の家を出たきり、便りも知れなかった日吉であった。

去年の一月、霜の夜——

母に、一袋の塩をのこし、自分は父が遺産の銭一貫文をもらって、(偉くなって帰る)

と、姉にも、母へも、そう誓って家を出た彼だった。

もう今までのように、商家や工匠の徒弟になって、転々とする気もちはない。

(侍奉公を！)

と、一途に求めた。

けれど、氏素姓も定かでない——また、見るからに風采の貧しい彼を、侍屋敷では、どこでも抱えてくれなかった。

清洲。那古屋。駿府。小田原——と歩く先ざきで、

(紺屋の手伝いなら)

とか、

(馬飼の厩掃除なら、世話してやるが)

などと、いわれるだけで、たまたま、勇をふるい起して、侍屋敷の門前に立ち、

(わたしを使って下さい)

と、自分の身を、押売りしてみても、笑われたり、呶鳴られたり、

乞食あつかいされて、竹箒たけほうきで追われたりするだけだった。

わずかな銭は、すぐなくなりかけた。世間の實際は、藪山の叔母がいったとおりであって、日吉の考えは、夢にすぎないものだった。

しかし日吉は、その夢を離さなかった。なぜならば、自分の望んでいるものは、誰に聞かれても、恥かしくない立派なことだと、かく信じているからである。

草に寝、水に枕しているまも、その望みは忘れない。——世のなかでいちばん不幸者ふしあわせものと彼の思っている母を、どうしたら、いちばんの倖しあわせもの者にしてやれるだろうか。

また、嫁にも行けないでいる可哀そうな姉を、どうやって喜ばしやろうか。

勿論、日吉にも、たくさん慾望がある。殊に、もう十七歳の若者だ、胃ぶくろは、喰っても喰っても食い足りない氣持だし、大きな屋敷を見れば、あんな屋敷に住んでみたいと思ひ、豪華な武家の身装みなりを見れば、自分の身装かえりが顧みられ、美しい女達を見れば風のなかの香においを強く感じる——

とはいえ、どんな慾望を思うよりも先に、母を幸福に——という念願が、常に前提として彼にはあった。だから彼は、その第一の希望が達しられないうちに、自分の慾望を先に満たそうとは思わなかった。

それにはまた、彼には彼のみの、べつな楽しみがあったから、物の慾には我慢も出来たということもいえよう。その楽しみというのは、流浪の行く先々で、飢えを思う違いじまもなく、

——識しらないことを識る。

と、いう楽しみだった。

世間の機微、人情、風俗。——それから時勢の相すがただの、諸国の

武備だの、百姓町人の生活くらしの様だの。

武者修行する者は、応仁頃から室町の末になるほど、流行はやりもののように、多くなつて来たが、日吉も、ここ一年半ばかりは、ちょうど、それと同じような辛苦と生活をして歩いて来た。

けれど彼は、武術を目がけて、長剣を差して歩いて来たのではない、わずかな金で、問屋から針を仕入れ、木綿針や絹針を小さなたとうに包み、それを行商しながら、甲州、北越のほうまで歩いて来たのだった。

——針はいらんか、京の縫針ぬいばりじゃ。買うておかんか、木綿針、絹針、京の縫針

日吉は、諸国の町を呼び歩きながら、わずかな利で、生きて来た。しかし。

零細な針売りの利益で口は喰べても、針の穴から世の中を見るような、小さい人間にはならなかった。

小田原の北条。

甲州の武田。

駿府の今川だの、北越の城下城下などを、ずっと見て来て感じたことは、

（今に、世のなかには、大きく揺れだして、大変な変り方をするぞ）と、いうことだった。

今までの、小さな、内輪揉うちわもめみたいな戦乱とちがつて、日本全体の姿勢を立て直すような、正しくて大きな戦争が、これから起るという予感だった。

（——すると、俺だつて）

と、密ひそかに、彼は思った。

（俺は若い、これからだ。——世のなかには、足利幕府の、年寄の

仕事にだれてしまい、混乱してしまい、老衰してしまっている。若い俺たちを、世のなかは待っている！

漠然と、そんな考えを抱いて、針イ——、針イ——と呼びあるいて来た。

北陸から、京都、近江^{おうみ}とまわって、一わたり世間の風にふかれて、元の——尾張を過ぎて岡崎へ来たのは、ここの城下に以前、父の弥右衛門の身寄りがいたと聞いていたので、それを頼って来たのであった。

といっても、決して、日頃は親類や知るべを頼って、衣食の方法を受けようなどと、さもしい考えを出す彼ではなかったが、この夏の初めから、食^{しょくあたり}中^{ちゆう}にかかって、ひどい下痢をわずらいながら歩いて来たつかれと、かたがた、中村の家の様子を聞きたいために——であった。

ところが。

尋ねる先は見つからないし、きのうも今日も、照りつける炎天をさまよい歩いて、生胡瓜^{なまきゅうり}を喰^くったり、井戸水をのんだりしたため、また腹が洩り出して、黄昏^{たそがれ}、この矢矧^{やはぎ}川の畔^{ほとり}に辿^{たど}りつくと、その痛む腹をかかえたまま、舟の中に寝入ってしまったものであった。

……腹がごろごろ鳴る。

微熱^{いねつ}のせいか、口が乾く。茨^{いばら}の棘^{とげ}を頼^{たの}ばっているように、口の中が、熱に刺され、そして唾^{つば}がなかった。

そういううちにも。

母——

彼の^{まふた}瞼^{まな}は、母を描き、彼の眠りには、母が訪ねて来ていた。

が、——いつのまにか、昏々^{こんこん}と深く眠り落ちていた。その母もなく、腹の痛みもなく、天地もなく。

ところへ不意に、

おいッ！ と呼びさまされたと思うと、誰か、自分の胸を、槍^{いしづき}の石突^{いしづき}で小突いた者があったのである。

——だれだッ。

日吉は、無意識に、槍^{やり}の柄^えをつかんで、体に似げない大声を出した。

胸は、男のたましいの有り所である。五体のなかの神棚にひとしい所だ。槍の石突で、そこを小突かれたことは、相手の誰であるに^{かかわ}関らず、日吉を、むツとさせたに違いなかった。

「小僧ッ。起きろッ」

小六の部下は、つかまれた槍の柄を、引きながら云った。

日吉は、槍をつかんだまま、舟のなかに身を起して、

「起きろッ？ この通り、起きているのが分らないかッ。どうしろというのだ」

と、云い返した。

「おや。この野伏^{のふせり}め」

槍の柄を通して、日吉の力と、その反抗を感じると、小六の部下は、恐い顔を見せて、頭^{おと}から脅^{おど}しつけた。

「出ろというのだ。——立てッ、その舟から！」

「この舟から、立てだって」

「そうだ。その舟が要^いるのだから、とつとと空^あけて、消^きえ失^うせろ」すると日吉は、なおさら、つむじを曲げたらしく、舟の上に落着

き直して、

「嫌^{きら}だッ」

と、いった。

「な、なに」

「嫌だ！」

「嫌だと？」

「おお。嫌なこった」

「こいつ……」

「何がこいつだ。——人がよく眠っているのを、いきなり槍の先ッぽで小突き起して、——その上、舟が要用だから、立てとは何だ。消えて失せろとは何だ！」

「ちいッ……。小理窟をこねる奴だ。やいッ、風来」

「なんだ」

「われわれを、誰だと思う」

「人間である」

「知れたことを！」

「訊く奴があるか」

「口の達者な小僧め。後で、その口を曲げて、縮みあがるなよ。われわれは、蜂須賀村の土豪。お頭目の小六正勝様について、一党数十名で、こよい矢矧^{やはぎ}へかかったが、舟がない。そこで渡舟^{わたし}を探し求めているうち、おのれの舟を見つけたのだ」

「舟を見ながら、人間は見えなかったのか。ここは俺の住居^{すまい}だぞ」

「見えたればこそ起したのだ。四^しの五^ごをいわずに立て。出て失せろ」

「やかましいッ」

「何を。もう一度いってみろ」

「何度いっても同じことだ。嫌だッ、嫌だッ。この舟は、くれてやれぬ」

「いったな」

小六の部下はぐツと槍の柄^えを引いて、槍の柄ぐるみ、日吉を岸へ

引きずり上げようとして踏ん張った。

頃を計って、日吉が手を離れたので、槍の柄で、柳の葉を、払いながら、小六の部下は、後ろへよろめいた。

かッ、としたらしく、

「おのれッ」

と、槍を持ち直すと、その兵は白い穂先をひらめかして、日吉の影へ、突いて行った。

腐った舟板だの、ア力汲みだの、苦^{くる}などが、舟の上から飛んできた。——その間に、

「ばかッ」

と、二度ほど日吉の罵^{のの}る声も、飛んで来た。

すると、そこへ仲間の誰彼が、わらわら駈けつけて来た。そして、

「待てッ」

「何だ」

「何者だッ」

口々に云い合いながら、そこへ立ちむらがつた時、さらに、小六とその部下のあらましも、後から後から駈け続いて来た。

「舟があったのか」

「あるにはあったが……」

「どうしたのだ？」

がやがや噪^{さわ}ぐ部下の者を退けて、小六正勝は、静かに前へ出て、柳の蔭の暗い舟へ眼をそそいだ。

小六の影を仰ぐと、日吉も、これはこの者どもの頭目^{かしら}だなと覺^{さと}つたらしく、やや居住^{いすま}いを改めて、じつとその顔を正視した。

「……………」

「……………」

小六の眼は、いつまでも、彼へそそいだきり、ものもいわなかった。

小六は、日吉の容貌やその身なりを不思議がったのではない。

——自分の眼を射てくる、彼の眼に、愕おどろいたのである。

で、小六は、心中、

(こいつ、身なりに似あわぬ不敵もの)

と思つて、殊さらに、眸ひとみをこらして見つめたが、見つめれば見つめるほど、日吉の眸も、闇夜に見るむささびの眼のように光つて、反それようともしないのであつた。

遂に——小六は眼を紛まぎらして、同時に、当りまえな音おんじやう声で呼びかけた。

「子ども」——と。

「……………」

日吉は答えない。

まだ口を結んでいる。

そして、射るようなその眼も、小六の顔から離さなかつた。

「……これ。子ども」

すると、日吉は、

「おらか」

膨ふくれ返つた顔していった。

小六がいう。——そうだ、おまえよりほかには、舟の中には誰もいないではないかと。——すると、日吉は、肩を少し昂あげて、

「おらは、子どもじゃない。元服しているッ」

と、いった。

突然、小六は、肩をゆすぶつて笑い出した。

「——そうか。汝われは大人おとなか。……だが、大人だとすると、その扱

いをするが、いいか」

「大勢で取りまいて、おら一人をどうする気だ。野武士だな、おまえらは」

「貴さま、いうことがなかなかおもしろい」

「おもしろくない。おらは、いい気もちで眠つていたところだ。おまけに、腹がいたい。誰が来て、何といおうが、ここを動くのは嫌だ」

「ふム。……腹が痛い」

「痛い」

「どうしたのだ」

「水みづあたりか、暑あつさ気あたりだろ」

「故郷こくは何処だ」

「尾張の中村だ」

「中村か。——して中村の何という者だな」

「親の名はいえない。おらの名は日吉という。……だが待て待て。ひとの眠つてるところを起して、ひとの素姓を洗いだてばかりしていいものか。おぬしは何処の何という者だ」

「汝われと同じ、尾張かいとうごうの海東郷、蜂須賀村の蜂須賀小六正勝というものが、汝われのような大人が村の近くにいたとは知らなかつた。何か、商あきないでもして歩いているのか」

——それには答えないで。

「あッ。おじさん達は、海東郷の衆か。そんなら、おらの村からも遠くない」

日吉は急に、人なつかしい顔を示して、早速、中村のうわさでも聞きたそうであつたが、

「じゃあ、同じ故郷こくにの衆だ。さっきは、いやだといったけれど、

舟を空けてやろう」

と、枕にしていた商いの物を包を、斜めに背負って、岸へ上がって来た。

その様子——一挙一動を、小六は黙ってながめていた。

物売りの世間摺れ——旅ずれした小童の、減らず口——と、小六も初めは見たのであったが、心が解けて頷くと、少しも悪びれた様子はなく、舟を去って、日吉はすこすこ立ち去ろうとした。

「待て。日吉とやら、汝はこれから、何処へ行くのか」

「舟を奪られたから、寝る所はない。草の中へ寝れば、夜露にぬれて、病んでる腹がよけいに渋るで、仕方がないから、夜明けまで歩くん」

「ならば、おれと一緒に来い」

「どこへ」

「蜂須賀村へ。——屋敷において飯も食わそう。病も手当してつかわそう」

「ありがと」

日吉は、神妙にお辞儀したが、自分の足もとを見ながら考えているふうだった。

「……すると、おらを、屋敷へおいて、抱えてくれるというのかね」

「汝の面だましいに見どころがある。この小六に随身する気があれば使ってやる」

「ない」

顔を上げた。そして彼は、はつきりいった。

「おらも、侍奉公したいと、心がけているんで、諸国の侍の風や、大名たちの威勢ぶりを見て来たから、侍奉公するからには、主人を選ぶのが第一と分って来た。うかつには、主は持てぬ」

「ははは。いよいよ面白い。この小六正勝では汝の主人には不足か」

「使われてみなければ、それも分らないことだけど、蜂須賀村の蜂須賀といえ、おらの村では、良くいわない。また、おらが仕えていた前の主人の家へ、泥棒にはいった男も蜂須賀の一族といった。おらが泥棒の手下になったら、おッ母さんが悲しむから、そんな者の屋敷へ、奉公はできない」

「では、汝は茶わん屋捨次郎の家にいたことがあるのか」

「どうして分ったかね」

「茶わん屋へ押し入って、悪事をした渡辺天蔵は、いかにもわしの一族の者だが、わし自身は、そういう不埒者は捨ておかん。天蔵は逃がしたが、その一味どもを成敗して、蜂須賀村へ帰るところだ。汝達の耳にまで、小六一門の名が、そのように過られてるか」

「……うむ。おじさんは、そういう人間じゃないらしいな」

日吉は、十七にしても、ませた口吻で、彼の顔を見ながら云った。そして、ふと思ひ出したように、

「じゃあおじさん、何の約束なしに、おらを蜂須賀村まで連れてってくれるかね。——そしたら、二寺の親類の家まで行きたいが」

「二寺といえ、すぐ蜂須賀村の隣村だが、そこに知るべがおるか」

「ああ。桶大工の新左衛門という人は、おッ母さんのほうの縁つぎだ」

「桶大工の新左は、侍の果てだ。では汝の母は、侍の末だの」

「お父さんだって侍だった。おらはこんな事をしてるけれど」

いつの間にか、舟の中には、乗れるだけの者が乗り込み、舟棹をさして、頭目の小六が乗るのを、待ちうけていた。

「日吉、ともかく乗れ。二寺へ行きたくば二寺へ行け。蜂須賀村にいたければ、蜂須賀村におるもよし」

肩を抱えて、舟の中へ伴れて下りた。

日吉の小さい体は、林のように立ち並んだ槍と大きな男どもの間に隠れた。舟は大河の流れを横切っていたが、流れが早いので手間がかかった。

日吉は退屈顔に立ち忪えていたが、ふと、小六の部下のひとりの背に止まっている蛸を見つけ、手を籠にして捕えると、その明滅を無心に見ていた。

天高し

蜂須賀村へ引き揚げてから後でも、小六正勝は取り逃した甥の天蔵を、そのままに放ってはおかなかった。

或いは、部下を変装させて、刺客として放ち、或いは、遠国の土豪と、聯絡を取って、その後の彼の行方をさがすなど、やがて秋の頃となつてもなお、手を尽していた。

しかし、効はなかった。

うわさによれば、渡辺天蔵は、恵那の山づたいに甲州へ落ちのび、例の小六が苦心して製作させた鉄砲を献物として、武田家へ取り入り、甲州の乱波者の組（しのび・攪乱隊の称）へはいったということであつた。

「甲州へ潜り込んで——」

と、小六もさすがに、諦め顔につぶやいたが、しかし、無念そうであつた。

すると、その噂の聞えた日頃。

「主人が参るべきでござるが」

と慇懃な使者が、門を叩いた。

この事件が起るまえに、小六が茶会によばれた織田一族の者の家来だつた。

その折、問題になつた「赤絵の水挿」を携えて来て、主命として使者がいうには、

「この一品より、同族の間に、御騒動があつたとやら承る。ついて

は、この名品も、買い求めたものとはいえ、家蔵といたしおくのも心苦しいゆえ、御当家より茶わん屋へおもどし遣わされては如何。

——小六どのの御一分も、それにて立つことと存ぜらるるが」

とのことであった。小六は、好意を謝し、

「後日、ごあいさつ申すでござろう」

と、受けておいた。

そして、答札の使いをやる折に、水挿の価に倍する黄金と、見事な鞍などを持たせてやった。

その日である。

使いを出した後で、また、松原内匠をよんで何やらいいつけていたが、やがて自身、縁へ出て来て、

「猿ッ。猿ッ」

と、庭へ向って呼んだ。

日吉は、

「おいッ」

と答えながら、木陰から小迅ッこく走って来て、

「お呼びですか」

と、膝をついた。

ここへ来てから、二寺へも行ったらしいが、直ぐ帰って来て、

その後、何とはなしに居着いていた。

機転がきく。何でもする。人は彼を小馬鹿にするが、彼は人を馬鹿にしない。口が達者なほど心は決して軽薄でない。——で、小六は、庭使いにして愛していた。

庭使いは、箒持ちの小者の仕事のようではあるが、事實はそうでない。主人の身近に働いて、朝夕主人の眼にふれるし、夜は夜の守り役をもすることになるので、決してよそ者などは使わないもの

である。それを小六は、庭へ飼った。猿々と呼んではいるが、愛している証拠であった。

「新川の茶わん屋の宅へ行って来い。内匠について、道案内をいたしながら」

「茶わん屋へですか」

「なんで、迷惑そうな顔するのじゃ」

「でも……」

「汝が二の足をふむのは分っておるが、きょうの使いは、茶わん屋の旧蔵だった水挿を、無事に戻して遣わすので行くのだ。で、汝を付けてやれば、汝の顔もよからうと思っていいつけるのじゃ。行ってこい」

日吉は、そう聞くと、土の上に坐り直して、両手をついた。

「ありがとうございます。御恩は忘れません。欣んで行って参ります」

茶わん屋へ着いた。

彼は、供として来たので、家の外で待っていた。

以前の朋輩が、

「猿が来た」

と、怪訝がつて、かわるがわる、覗きに来た。

日吉がこの家を追い出された時、笑ったり、打ったりした奉公人の顔も見えたが、日吉は忘れてしまったもののように、

「こんにちは。——今日は」

と、その顔のどれへも、笑顔を見せながら、陽なたに蹲って、松原内匠が帰るのを待っていた。

やがて、内匠は、使いをすまして奥からもどって来た。思いがけない盗難の「赤絵の水挿」が返って来たので、茶わん屋の夫婦は、

夢かよろこび、使者の草履をそろえたり、夫婦して、門脇^{もんわき}まで走り出て、なお、礼を繰り返したり、下へもおかない待遇だった。於^お福もいた。

チラと、日吉の顔を見、ぎよつとした顔つきだったが、それへ向つても、日吉はにやつと白い歯を見せただけだった。

「蜂須賀様へは、いずれ日を改めまして、お礼に参上いたします。何とぞよろしゅうお伝え上げねがいます。また、わざわざ今日のお使い、ご苦労までございました」

茶わん屋夫婦、その子、奉公人たちが、一同頭を下げる中を、日吉は松原内匠の後について、手を振って出て行った。

(……藪^{やぶ}山の叔母さん。どうしてるだろうな。叔父もあの大病。もう死んだかもしれない)

光明寺^{こうみょうじ}の山を仰ぎながら、日吉はそんなことを考えながら歩いた。

中村は、もうそこだ。

当然彼は、母やおつみの顔を、さっきから胸に思い出して、ちょっと駈け出して行ってみようかとさえ思うほどだった。

けれど、霜の夜、誓って出たことばがある——。今行つても、母を欣^{よろこ}ばしてやる何ものもまだ自分の手にはなかった。

その中村の方へ背を向けて、うしろ髪をひかれながら、彼は内匠について歩いていった。すると途中で、

「おや、弥右衛門^{やえもん}どのの件^{せがれ}じゃないか」

足軽ていの男が声をかけた。

「どなた様でしたっけ」

「日吉だろ。お前は」

「はい」

「大きくなったなあ、わしは弥右衛門どのの友達の乙若^{おとわか}だよ。織田様に仕えていた頃、同じ足軽組にいた者だ」

「思い出しました。そんなに私は大きくなりましたか」

「見せたいなあ。……死んだ弥右衛門どのに」

そういわれて、日吉は、ほろりと涙をこぼしかけた。

「私のおふくろに、近頃、お会いになったことがございましょうか」

「つい無沙汰しているが、中村へは時折行くので、よそながら噂は聞いている。相変らず、よく働いていて結構だの」

「じゃあ、病氣もせず、丈夫で暮しておりますか」

「お前こそ、どうして家へ行かないのだ」

「偉くなったら帰ります」

「顔だけでも、見せてやれよ。女親にはな」

「ええ……」

熱い瞼^{まぶた}が、堪らなくなつて、日吉はもう顔を外向^{そむ}けていた。

——気がついてみると、乙若の姿も、もう彼方^{あな}へ歩いているし、松原内匠も先の方を歩いていた。

残暑も、薄らいで来た。朝夕は秋を覚える。芋^{いも}の葉^はが目立って大きくなった。

「この濠^{ほり}は、五年も浚^さ渫^せってないぞ。槍や馬の稽古ばかりしていたって、足もとに、こんな泥を溜^{ため}めているようじゃあ……だめだ」
今。

村^{しのが}の篠刈^りの家へ、使いに出て、戻つて来た日吉は蜂須賀家の古い濠^{ほり}をのぞいて独り呟^{つぶや}いていた。

「なんのために、濠があるんだ。小六様にひとつ云つて上げよう」

竹竿を突つ込んで、水深をさぐって見た。水草でいちめんなので誰も気づかないが、日吉が察した通り、底は何年となく、落葉や泥

の堆積^{たいせき}に埋まって、何尺もなかった。

二、三カ所でそうして、竹竿^{はう}を抛り捨てて、横門の橋へかろうとすると、

「御小人^{おこびと}」

呼ぶ者がある。

日吉の身なりが小さいから御小人^{おこびと}といったわけではない。大家に仕える小者のことをそういうのである。

「誰だい？」

橋の上から、日吉は振り向いた。

見ると、濠^{ほり}のそばの、椎^{しい}の木の下に、薦^{こも}を敷き、鼠色の着物を着て、尺八を差した男が、ひもじいような顔して、膝を抱えていた。

「ちょっと……」

と、男は手招きした。

この村へも、時々、はいつてくる虚無僧^{こむそう}である。薦僧^{こもそう}とも呼んでいる。

ずっと後の、江戸時代のそのように、その頃の薦僧^{こもそう}には一定した宗服^{しゅうふく}もなかったし、掛絡^{かけら}や袈裟^{けさ}なども、あんな美^び々^びしい粧^{よそお}いはしていなかった。どれもこれも、薄^{うす}ぎたなくて、不精髻^{ふしょうひげ}を生やして、負^おい薦^{こも}に尺八一本持つて歩いていた。——中には本格的に鈴を振って、普化^{ふけ}禅師^{ぜんじ}をまねて凜々^{りんりん}と遊行^{ゆぎやう}していた者がないこともなかったが。

今、日吉へ、手招きした薦僧^{こもそう}もまた、汚^{よご}れ腐^くった着物に、不精髻^{ふしょうひげ}を生やしている組だった。

「お布施^{ふせ}かい。……それとも、お腹が減^へって、動けないのかい？」

日吉は、小馬鹿にしながら、戻^{かへ}って来たが、苦しい旅の味はよく知っているの、腹が減^へっているなら飯を、体でも病んでいるなら

薬を、貰^{もら}ってやろうと直ぐ頭の中では思^{おも}いやっていた。

「……ちかう」

薦僧^{こもそう}は、顔を横に振った。

じっと、日吉を見上げて笑う。そして、敷^{こも}いている薦^{こも}の席を、半分譲^{ゆず}って、

「ま、お坐り」

「いいよ。立^たっていても。用事は何か」

「おぬしは、御当家の召使^{めいし}か」

「ちかう」

今度は、日吉が真似^{まね}して、顔を振った。

「おらは、ここ懸^{かかり}の人^{やうど}だ。小六様に飯はいただいているが、まだ奉公人にはなっていない」

「ふむ。……でも何か働^{はたら}いてはいるのだろう。台所か、お表か」

「庭掃除さ」

「庭番か。そうか。それでは小六殿にも、目をかけておられるな」

「どうか」

「今は、お在^いでか」

「お留守だよ」

「御不在か。それは生憎^{あいにく}な……」

と薦僧^{こもそう}は、落胆^{らくたん}したように呟^{つぶや}いて、

「今日中には、お帰りじやろうか」

と、訊^きねた。

日吉は、それだけの会話のうちに、この薦僧^{こもそう}の様子に不審^{ふしん}を見出し、急に、口数^{くすう}を控^こえてしまった。

「お帰りはいつだな」

重ねて、訊^きくと、日吉はそれには答^{こた}えず、

「薦僧さん。おまえは、お侍だろ。薦僧なら、なりたての、新米だろ」

非常な驚きを顔にあらわして、薦僧は日吉の顔を見つめていたが、やがて、

「どうして、わしが侍か、また新米の薦僧と、おぬしに分ったか」

日吉は、事もなげに、

「分らなくッてさ！ ひどく陽に焦けているけれど、指の股が、白いじゃないか。耳の穴が、まだ割合にきれいじゃないか。侍という証拠には、そうして菰の上に坐っていても、具足を着て、胡坐を組んでる恰好だよ。癖だから、どうしても膝頭が上がって大坐になる。——物乞や薦僧なんかは、背骨を曲げて、ぺたんと坐るものだから、直ぐわかるさ」

「ウウム……その通りだ」

薦僧は、菰のうえから起き上がったが、立ち上がりながらも、日吉の顔から眼を離さなかった。

「おそろしい烟眼だ。これまで敵地の木戸や関門を通って来る間にも、それ程までに、わしを見抜いた者はなかった」

「盲千人だからな。——だけと薦僧さん、何の用だい。お頭目に」

「実はな」

と、声を密めて、

「わしは美濃から来た者だ」

「美濃」

「斎藤秀龍の家中で難波内記といえは、小六殿には分つておる。人知れず、このままでお目にかかって直ぐ引き返したいのだが、御不在なれば仕方がない、昼間のうち村々を流して黄昏にでもまた、出直して来るといたそう。——もしお帰りになったらそつと、お前

から耳打ちしておいてくれ」

云い残して、薦僧が歩きかけると、日吉は呼び止めて、

「嘘だよ、薦僧さん」

「え？」

「留守といったのは、そっちの素姓が分らないからだ。実は、馬場にいらつしやる」

「あ。いるのか」

「うん。もう見届けたから、案内して上げよう。おらに尾いて、此方へおいでなさい」

「飽くまで、おぬしは、抜け目がないのう」

「弓矢の家にいるからには、これくらいな氣くばりは当り前だよ。美濃衆は、こんなことぐらいに感心するほど皆、ぼんやりしているのかね」

「そんなことはない」

薦僧は、舌打ちした。

濠を繞って、畑を通って、森のうしろへ廻ると、広い馬場があった。乾いた土が、空へ揚っていた。

小六以下、蜂須賀衆の人々が、駒を曳き出して、猛烈な騎馬の練習をやっていた。騎乗ばかりでなく、鞍と鞍とを寄せ合つて、棒で撲り合っていた。——激戦の場合の突撃を擬しているのであろう。

「ここで待っておいでなさい」

日吉は、薦僧をおいて、一人で駆けて行った。

しばらく、様子を見てみると、小六が汗の顔を拭きながら、休息所の小屋へ、湯を飲みに来た。

「お湯ですか、お頭目」

日吉は、すぐ湯を汲んで、熱くない程に、水を割って加減し、盆

に乗せて、小六の床几しょうぎの前に跪ひざまずいた。

「汝われも見ていたか」

「はい」

答えながら寄って、

「美濃家の密使を案内して参りました。連れて来ますか。お頭目かしらからお運びになりますか。密使は、森の蔭に待たせておきました」と、早口に告げた。

「なに。美濃から……?」

斎藤家の密使と聞くと、小六はもう、多言を待たず、床几から立つて、

「猿」

「はい」

「案内せい」

「ここへですか」

「いや、おれの方から出向く。どこへ待たせておいた」

「森の向うがわに」

指さしながら、日吉は先に立って歩いた。

美濃の斎藤家と蜂須賀とは、公おおよけな関係ではないが、かなり長

年の間、一つの密盟を結んでいた。

美濃に事ある時は、蜂須賀から手を貸して援けたす、蜂須賀に事あらば、美濃の勢力が後から援護しよう。

また、経済的には、年ごとに二百貫の領を、美濃から貢ぐ。

そういう条約だった。

織田信秀おだのぶひでや、三河の松平や、駿府の今川家などの、勃興ぼつこう勢力

のなかに挟まれて、ぼつねんと、島のような存在でありながら、そのどれからも併呑へいどんをまぬがれて、蜂須賀党が蜂須賀党として、土

豪ながらも四隣に屈せずにいられるのは、遠く、稲葉山の居城から、斎藤道三どうさんひでたつ秀龍というものの睨にらみがきいてお陰でもあった。

地の理を隔てながら、どうして蜂須賀党と、道三秀龍とが、そんな条約の下に結ばれていたか——ということについては、ひとつの話が聞えている。

それは、小六の先代、蔵人正利くらうぢまさとしが頭目かしらに立っていた時代のことであるが——

或る夜。

蜂須賀家の門前に、行仆ゆきだおれていた病人がある。武者修行でいの侍だった。正利が憐あわれんでやしきへ引き入れ、医療を尽して恢復を見た後、路銀まで与えて立たせてやった。

(……御恩は忘れおかぬ)

寡やうれた武者修行は云った。そして別れて立つ日にもまた、

(いつか、自分が志を得た後には、消息いたして、今日の御芳志にきつと酬むくいる)

と、誓った。

その時、云い残した名は、松波まつなみ莊九郎と聞いていたが、やがて年経てから、その莊九郎からよこした書簡には、斎藤山城守秀龍としてあった。

(あの人が)

と、後では驚いたことだった。

そういう旧縁から、小六の代になっても、秀龍との盟は、依然結ばれていたのである。

その秀龍からの密使!

何事かと、小六がすぐ立って行っただけは当然だった。

薦僧姿の密使、難波内記なんばないきは、森かげに待っていたが、小六を見

て、

「おう」

と、礼儀をした。

小六も礼を返し、そして双方が眼と眼とを、正しく交わしながら、片方の掌を、拝むように胸に当て、

「てまえが、小六正勝」

「それがしは、稲葉山の家人、難波内記にござる」

名乗り合ってから、もちど低く頭を下げるのだった。秀龍は幼少の頃、妙覚寺に入り、頭密を学び、前身は僧であったこともあるので、美濃衆の合言葉にも、頭密の語が用いられたり、こういう隠し作法にも、どこか寺院臭さがあつた。

作法を交わして、お互いが、

（この者は、間違いない）

と見極めると、初めてうち寛いで、何でも話し合うのだった。

「猿。——誰が参つても、森へ入れるな。おれが許すまでは」

小六は、いつけて、内記と共に、森の中へはいつて行った。

森の中の二人の会見に、どんな密談が交わされたか、密書が開かれたか、日吉には知るよしもなかったし、知ろうとする気ももとよりなかった。

彼はただ、忠実に、森の外に立って、張番していた。

使に行けば使いに。庭掃除になれば庭掃除に。張番に立てば張番に。——彼は持った仕事の人間になりきった。

彼に限っては、どんな仕事でも仕事を愛することが出来た。それは、貧しく生れたからばかりではない。現在の仕事は、常に、次への希望の卵だったからである。それを忠実に抱き、愛熱で孵す時に、希望に翼が生えて生れることを、彼は知っていた。

（今の世のなかで、身を立てるには、何がいちばん大事か）

日吉は、考えてみたことがある。

それは、系図だ。家がらだ。

しかし、彼には、それが無い。

家がらの次には、いうまでもなく、金と武力だが、その二つも、彼は持たない。

（では、何をもって、おれは世に出たらいいか）

と、自分に訊ねてみると、悲しいかな、肉体は、先天的に矮小だし、健康も人並より優れていないし、学問はないし、智慧は当り前だし……一体、何がある？

忠実。

それしか、考え出せなかった。それも、何を忠実に、などと考え分けてするのではなく、何でも忠実にやろうと決めた。忠実なら、裸になつても、持てると思つた。

だが、その忠実を、どういうふうに行つてゆくか、と自問自答して、

——なりきる！

というところへ、彼の肚が据つた。どんな職業でも、与えられた天職に、なりきつてやろう。庭掃除でも、草履取りでも、厩掃除でも、なりきつてする！

将来の抱負をもつていても、その希望のために、現在の足腰を浮かすまい。

現在から遊離して、将来のあるわけではない。希望は、なりきつている下っ腹において、上面に出すものではない。

ピピ、チチ、チチ……

森の小禽は、日吉の上で、囀っていた。だが日吉の眼は、小禽

の啄^{ばい}んでいる木の实を見なかった。

「——やあ。御苦勞」

やがて、小六が、森の奥から出て来て云った。

機嫌^{きげん}がいい。野望的な眼^めがかがやいている。そしてどんな重大なものを齎^{もたら}されたのか、緊張した後の醒^さめた面^{おもて}が、まだいくらか上氣^{あせ}していた。

「すみましたか」

「すんだ」

「薦僧^{こもそう}さんは？」

「もう帰った。べつな道から森を出て——」

小六はそういつてから、ふと日吉を顧みて、

「他言^{いまた}するな」

と戒^{いまし}めた。

「はい」

「難波内記^{なんばないき}が——あの薦僧^{こもそう}が、ひどく汝^{われ}を賞^ほめちぎっておったぞ」

「そうですか」

「いずれ一かどの者に取り立ててやる。いつまでも、蜂須賀におれよ」

その日、美濃の密使^{もいたし}が齎^{もたら}した問題^{もんだい}についてに違^{ちが}いない。夜になると、小六の邸^{てい}には、一族の重立^{ちゅうたつ}った者のみが寄^よって、更^ふくるまで密議^{もくぎ}をしていた。

その晩も、日吉は、星の下に立ちきりで、忠実な張番役^{ちやうばんやく}だった。

稲葉山城

稲葉山の斎藤道三^{さいとうどうさん}秀龍の密使は、いったい、どんなことを齎^{もたら}して来たのだろうか。

もとより厳秘^{げんひ}だ。

一族の者でも重立^{ちゅうたつ}った者にしかその内容は洩^はらされていない。

だが——

密かな評議^{へうぎ}があつた夜の翌日頃^{あしたのころ}から、蜂須賀党^{はちすかとう}のうちでも腕^{うで}がきくとか、頭^{かぶ}がするどいとか、敏捷^{びんしやう}だとかという特質^{とくしつ}のある者が、次々に変装^{へんさう}しては、蜂須賀村から消えて行^いった。

岐阜^{ぎふ}へ。岐阜^{ぎふ}へ。

誰^{たれ}となく囁^{ささや}かれていた。

小六の舍弟^{せてい}に、蜂須賀七内^{はちすかぢゅうない}という者があつた。その七内も、何か一役持^{ひとえ}って、岐阜^{ぎふ}へ忍^{しの}んで行くこととなり、日吉は、その七内の供^{きよう}をして行^いけと吩咐^{ふんぷ}けられた。

「何か、戦^{いくさ}でも始^{はじ}まるんで、その探^{たん}りにでも行くんですか」

日吉が、訊^きねると、

「よけいなことをいうな。黙^{もく}っておれにくつついて来^きればいいんだ」と、七内は、何も話^わしてくれなかつた。

この人のことを、邸^{てい}の小者^{せうしや}でも、台所^{だいしよ}の者^{もの}でも、「あばたの七内様^{やう}」と陰口^{いんぐち}して、誰も煙^{えん}たい——というよりも憎悪^{ぞうお}していた。兄^{あに}の小六^{せうろく}のような情味^{じやうみ}が、このあばたの七内様^{やう}にはちつともないからだつた。大酒^{だいしゆ}呑^のみで生意氣^{しやうぎ}で、すぐ腕^{うで}自慢^{じまん}するといったふうな人間^{にやうだん}だ

った。

「……嫌だなあ」

日吉も、正直そう思った。

だが小六から、

「ほかの小者では、心許ない。先頃、難波内記も賞めておったし、そちらならばと、思われるので」

と、いわれたので、嫌も文句もいかなかったのである。

一飯の恩、一宿の義理である。蜂須賀党の端くれに加わって、働くまでの決心はまだつきぎらないが、

「畏りました」

——云ったからには、七内様でも、あばた様でも、飽くまで誠意をもって、供をして行こうと、日吉は思いきめた。

さて。

出立の日となると、蜂須賀七内はすっかり髪容まで変えて、清洲の油問屋の注文取という旅拵をして出かけた。

日吉は、この夏、着て歩いてきた、針売りの行商着をそのまま着て、少しばかりの荷を背中に負い、油屋の七内とは、道中の道づれという態で、美濃路へ向った。

「猿、往来調べの木戸へかかったら、おれの側を離れて通れよ」

「はい」

「てめえは一体、口達者で、口数が多いから、何を訊かれても、なるだけ黙っているんだぞ」

「へい」

「ボロを出すと、おれは知らん顔して、捨てて行ってしまうぞ」

街道の木戸は、次々にあった。尾張の織田家と、美濃の斎藤家とは、舅と舅との親密な関係にあって、味方同志のはずだが、

なかなかそうでない。

いや、尾張美濃の間には、国境もあるから、そうした警戒をどっちがしていても、そう不自然ではないが、美濃へはいつてみると、美濃一国の内にも、お互いを疑い合うような眼が、どこにも光っていた。

「なぜでしょ？」

日吉が、七内に訊くと、

「知れたことを訊く奴だ。斎藤道三様と、その子の義龍とは、もう何年も前から、睨み合っている仲じゃねえか」

一国の中で、二つの勢力が反目し、一族のなかで、父と子とが闘っていることを、七内は何のふしぎとも思わずにいうのだった。

日吉は、七内の頭を疑った。

武門の上では、源平の頃でも、父と子とが、弓矢のあいだに、敵味方に立った例もないではないが、そこにはそれ以上の苦悶と理由があつてのことだ。

「どうして、斎藤道三様と、子の義龍様とは、仲が悪いんですか」
腑に落ちない顔して、そこでまた、彼が訊くと、
「うるせえな」

七内は、舌打ちして、

「そんな事あ、人に訊け」

と、相手にもしてくれない。

日吉が、美濃の国の土を踏む前に第一に抱いていたものは、彼の気持に反く、その疑問だった。

だが、岐阜の里は、山水明媚な城下だった。町並びも麗しかった。

紅葉した稲葉山は、小雨に濡れたり、陽に映えたり、折から秋

も更けた頃だったので、朝夕に見ても見飽かなかった。

べつの名を「金華山」とも呼ぶように、まるで錦の崖だった。町と田野と長良川の水の際から、突兀と急に聳え立っている絶頂に、一羽の白鳥でもうずくまっているかと思まう白壁が、ポチと小さく見える。

「高い山城だなあ」

日吉は眼をみはった。

城下からそこへ登るのには、七曲、百曲、水の手要害堅固であるとも聞かされ、難攻不落というのは、こういう城地をいうのだらうと感心したが、日吉は直ぐ、

「城ばかりで国は持たない」

と、胸の中で呟いた。

七内は、繁華な町の辻の商人宿に、宿を取ったが、日吉には、

「おまえは、この裏の木賃宿へ泊れ。そのうちに、用を吩咐ける。

遊んでは、人に疑われるから、用が出来るまで、毎日、針売りに出て歩いていろ」

といって、わずかばかりの銭をくれた。

「はい」

日吉は、神妙に、銭にお辞儀して、すぐ裏町の汚い木賃へ行つて泊り、結句、独りでこの方が気楽だった、

（そのうちに、用が出来るといったが、一体、何の用事だろう？）

今もって、分らなかった。

木賃には、旅芸人だの、鏡磨だの、木挽だの、雑多な者が泊つては入れ交わって行った。日吉の皮膚は、蚤虱にも鍛えられていたし、そういう人種の持つ特有なにおいにも馴れていた。

日吉はそこから、毎日、針売りに出て、帰りには塩物と米を買つ

て帰って来た。木賃暮しは皆、自炊だった。竈だけを借りて、薪代と屋根代を払えばいいのである。

七日ほど過ぎた。

だが、七内からは、何にも云って来ない。七内も毎日、ぶらぶらしているのだろうか。彼は自分だけ捨てられたような気がしていた。

——と。或る日。

彼が屋敷町の小路を、針はいらんか、京針はいらんか——と商いして歩いていると、向うから、羽壺の革袋を脇に掛けて、二張三張の古弓を肩に担った男が、日吉よりはよく徹る声で、

「弓の直し。弓の直し——」

と、呼びながら歩いて来た。

そして近づいて来ると、オヤと眼をみはりながら、弓直しは立ち止つて、

「あ。猿じゃねえか。何日、誰と此方へ来ていたんだ？」

と、訊ねた。

日吉も驚いた。

その「弓の直し屋」は、小六正勝の部下で、仁田彦十といい、ついこの間まで、蜂須賀村のひとつ邸にいた男なのである。

「彦十様。あなたこそ、どうしてそんな商売をして、この岐阜にいますか」

「おればかりじゃない。仲間の蜂須賀党が、少なくとも三、四十人はもう入り込んでいます。——だが、猿まで来ているとは思わなかった」

「わたしは、七内様について、七日ほど前にやって来ましたが、用が出来るまで、針売りをして歩いていくので、こうやって針売りをしていますが、一体全体、これは何のためにやっているんですか」

「まだ聞いていないのか」

「七内様は、何も話してくれないので。——人間、目的の分らないことをやっている程、苦しいことはございません」

「そうだろう」

「彦十様には、その目的が、分っているのでございませよ」

「分らなくて、弓の直しなんかして歩けるか」

「お願いですから、一つ聞かせて下さいませんか」

「こんな所で、立話はできぬ。……だが、七内殿も意地悪な。何のためかも知らず、うろついていたりしたら、汝の生命も危ない」

「へエ。生命にかかりますか」

「汝が捕まれば、この地へ入り込んでいる一党の密計が露見してしまう。……そうだ。仲間一同のためでもあるから、汝も呑みこんでおくように、説いてやろう」

「ありがとうございます」

「だが、ここでは人目につく」

「あの社の裏ではどうですか」

「うむ。……ちょうど腹も空いた。弁当でも喰いながら」

彦十は先に歩いた。日吉も従って行った。何神社か、森に囲まれて、ひっそりしていた。

二人は、携えている弁当を解いて、喰べ始めた。銀杏の葉が舞っている。真つ黄色な梢を仰ぐと、木立の彼方に、秋の名残を燃え旺っている紅葉の稲葉山と、絶頂の城廓とが、くつきりと碧空に聳えて、斎藤一門の覇権を誇っていた。

「目的は、あれよ」

彦十は飯粒のついている箸の先で、稲葉山の城を指した。

「はあ……?」

日吉は、口を開いて、わざと、ぽかんとした顔をしながら、箸の先に眼をやる。

彦十が見る稲葉山の城と、日吉の眼に映じたそれとは、一つ対象ではあるが、心は大きな相違をもって、しばらく眺め合っていた。

「——じゃあ、あの城でも、蜂須賀党で乗っ取ってしまおうという算段ですか」

日吉がいうと、

「ばかアいえ」

と、彦十は、彼の馬鹿馬鹿しい質問に、箸を折って、竹の皮と共に地へ抛ちながら、舌打ちした。

「あの城には、斎藤道三殿の子、新九郎義龍がいて、この要害の地に、四隣を抑え、京都と関東の通路を扼して、内には兵を練り、新しい武器を蓄えて、織田も今川も北条も、所詮、歯が立つものじゃあない。まして蜂須賀党などが、どうなるものか。——馬鹿も休み休みいえ。せっかく、話してやろうと思うことも、張合いぬけして、嫌になるから」

叱られて、日吉は、

「へい。もうよいいなことは云いません」

素直に口をつぐんだ。

弓直しの仁田彦十は、

「……誰も来やしまいな」

拝殿の横から、境内を眺めまわして、さて、唇を舐めた。

「おれたち蜂須賀党の者と、斎藤道三秀龍様との深い関係は、汝もいつか、聞いているだろうが」

「……………」

日吉は、前に懲りているので、返辞もただ頷いてするに止めて

おく。

「ところが、その道三秀龍様と、養子の新九郎義龍とは、ここ数年、互いに不和になつてゐる。なぜといへばだな——」

彦十は、日吉に分る程度に、斎藤一門の内訌と、美濃の紛乱している実状とを、ざっと、次のように掻いつまんで語つた。

道三秀龍は、前名を長井利政ともいい、西村勘九郎といった頃もあり、松波莊九郎と名乗つたこともあるし——また、名もない油売りであつたり、武者修行に歩いたり、寺にいたこともあるという——何しろ経歴の混入つてゐる人物で、その強か者ということ、彼が美濃一國に蟠踞してから、まだ、一尺の地も、外敵に譲らないのを見てわかる。

だが、肚は黒い。

何しろ油売りから身を起して、空手で美濃一國をわが物とした男だけに、最初に仕えた主人土岐政頼を殺し、次の主人頼芸をまた、国外へ追つて、その妾を奪つたりなど——残忍酷薄な数々の経歴は、挙げて語つたら限りもない。

ところが、酬いか。怖ろしいのは宿命である。

彼が奪つて自分のものとした——主人土岐氏の妾が生んだ子は、今の新九郎義龍で、道三秀龍は、多年、それが自分の実の子か、主人土岐氏の子か、悩んでゐた。

子は長じて行き、彼は老いてゆく。悩みは、深くなる。

すでにその義龍は、身長六尺余り、膝長一尺二寸という堂々たる青年となり、稲葉山城の主君として君臨し、道三は、長良川向うの鷺山の城へ、隠居の身とはなつてゐる。

鷺山と稲葉山と、川を隔てて、業のふかい宿命の父子は、今や睨みあつてゐた。——時めく義龍は、やがて自分の素姓を悟るに及ん

で道三を怨み、道三をないがしろにした。老いゆく道三は、義龍を疑い、義龍を呪い、遂には義龍を廃嫡して、二男の孫四郎を立てようと計つた。

だが、その企ては、義龍のほうで逸はやく知つてしまつた。義龍は、癩病で「癩殿」と陰口をいわれたりしているが、宿命の子だけに、性格はつむじ曲りで、智謀も勇もある。

(その儀ならば)

と、鷺山へ向つて、防寨を堅固にし、一戦をも辞していない。

道三のほうでも、勿論、

(あの癩殿を除かねば)

と、浅ましくも、おのが五体に等しい義龍に向つて、いつでも、流す血を覚悟している。

「——そんなわけだ」

と、彦十はひと息ついて、

「そこで、先頃、蜂須賀村へ密使が来たわけだ。で、道三様からの頼みというのは、鷺山の家来方では、顔も知れてゐるから、おれたち蜂須賀党の手で、この城下に、火を放つてくれというのだ」

「え。——火を」

「といつたつて、いきなり放火したつて役には立たない。その前に、種々なことを云いふらし、稲葉山城の義龍や家来が、不安な兆しを起した頃、風をつよい夜を計つて、この城下を火の海にする。

——そこへ道三様の兵が長良川をこえて一挙に襲せようという計略なのだ」

「ははあ……」

と日吉は、大人びた頷きをして、感服したような、しないような表情で、

「では何ですか、わたし達は、この城下へ、流言を放ったり、火つけ役をするために、頼まれて来たというわけです？」

「そうだ」

「つまり、乱波ですね。人心を攪乱し、その機に乗じて、事を謀る——」

「ま。そんなものだ」

「乱波といえは、下賤の者がやる仕事でしょ」

「仕方がない。道三秀龍様からは、多年、貢がれている蜂須賀党だからな」

彦十は、単純であった。何といつても、やはり野武士は野武士だなと、日吉は、その顔を見てしまう。

が、彼には、そう単純になれないのだ。その野武士の家の台所で、冷飯を喰べても、自分の身は、珠とも思っているのである。これから世に出す身を、そうぞんざいに分別はできなかった。

「——で、七内様は、何しに来てるんですか」

「指図役だ。何しろ三、四十人もちりぢりばらばら入り込んでいるから、誰か締めくくりをつける者がいなくてはならないからな」

「なるほど」

「もう、あらまし分ったろう」

「分りました。——だが、もう一つ分らないのは、てまえ自身です」

「ム。お前か」

「わたしは一体、何をする役目なんでしょ。七内様からは、流言を放てども、何を探れども、吩咐かっておりません」

「多分、汝は、迅くくて小粒だから、大風の晩に、火でも放ける役の方に置いてあるのだらう」

「ははあ。火放けですか」

「何しろ、そういう密命をもって、この城下へ来ているわけだから、寸分も油断はならぬ。弓の直し屋をして歩くにも、針売りをして歩くにも、よくよく気をつけて、言葉の端にも、気どられぬことだぞ」

「知れたらすぐ捕まりますか」

「あたりまえだ。道三様の方では知っていることだが、もし義龍の方の侍にでも、嗅ぎつけられたら、すぐ血祭だ。いや捕まったら汝だけですむことか、俺たちにとつても、大事だぞ」

何も知らぬのは不慙と思つて、こう打ち明けたものの、彦十は、もし、猿の口から秘密が漏れたら——と、急に不安を覚えてきたらしいのである。

日吉は、彼の顔色を察して、

「だいじょうぶです。旅には馴れていますから」

「抜かりはあるまいが」

彦十はなお、だめを押して、

「敵地だからな。ここは」

「よくわかりました」

「どれ……。そういつている間にも、人目に怪しまれるといかねえ」

腰が冷えてきたと見え、彦十は立ち上がって、二、三度腰ぼねを叩きながら、

「猿……汝の泊っている宿屋はどこだ」

「七内様がいる旅籠の、ちようど裏にあたる横丁の木賃で」

「そうか。じゃあそのうち、おれも一晩泊りに行くが、合宿の人間には、特に気をくばれよ」

破れ弓を担って、弓直しの仁田彦十は、その一言を合言葉に、町の方へ立ち去った。

日吉は、残っていた。

「……………」

そしてなお、拜殿の横に腰かけたまま、ぽかんと、銀杏林の梢越しに、城の白壁を、遠くながめていた。

今。——彦十の口から、この国土の主たる斎藤家の内争と、その悪行ぶりを聞いてから、ふたたび、城を仰ぎ見た時、その鉄壁も、嶮崖の要害も、日吉の眼には、何の権威にも見えなかった。

むしろ、彼は、

（——誰が次には、この城の主となって坐るだろうか）

などと考えて、また、

（鷺山の道三もだ！ ろくな末路を遂げまい）

と、信じた。

君臣の道もないところに、国土の堅固がどうしてあろう。父と子とが謀りあい、猜疑し合っているような領主の下に、どうして民の信望があろう。

文化的には、ここは沃野をかかえ、嶮山を負い、京都諸地方への交通路を扼して、天産に恵まれ、農工も旺んだし——水は麗しく、女もきれいだが、日吉は心のうちで、

（腐えている！）

と、観た。

信じて疑わなかった。

だから彼の頭は、その腐えたる文化の中にうごめく蛆についてなど考えている違がなかった。一足跳びにすぐ、

（次の城主は誰か？）

に、思い至っていた。

同時に。

彼は一つの滅失にぶつかった。それは今、自分が飯をもらっている蜂須賀小六にである。

野武士、野武士と、世間とはかくよくいわないが、小六その人を直接に知ってみると、彼は正義の男だし、遠い家系の血をひいて卑しくないし、人物もまず一かどといってよいし、日吉も日常、彼に頭を下げて、吩咐を受けることを少しも恥としなかったが——さて、ここで少し考えさせられる。

斎藤道三とは、多年、貢がれもし、交誼も深い間がらには違ひなからうが、道三の人物を知らぬはずはない。悪逆非道な行いを見ていないことはない。

だのに、その道三と結び、父子の内争に、乱波の役をひきうけてやるなどは——どう考えても、日吉には与せなかった。

（盲千人。小六もまず、盲のひとりか）

と、嫌気がさして来ると共に、急にその小六の仲間からも、この城下からも、逃げ出したくなった。

それは、十月末の、から風の強い日であった。

日吉が、いつもの木賃から、行商に出て行こうとすると、裏町の辻に、鼻を赤めて佇んでいた弓直しの彦十が、

「猿、これを」

と、側へ寄って来て、彼の手に一通の廻状を握らせ、

「——読んだら直ぐ、噛みつぶして、河の中へでも吐き捨ててしまえよ」

と、注意するなり、もう素知らぬ振りして、右と左に別れて行ってしまった。

「何だろ？」

およそ仲間の廻文という見当はついていたが、日吉は、気にかかつて、いやな動悸を打っていた。

この仲間から去ろう。この土地から逃げ出そう。それは何度も、考えてみたが、ここに踏みとどまっているよりは、逃げる場合のほうが、遥かに、生命の危険があった。

なぜなら、自分は自分ひとりで、この木賃に泊っているつもりでいたが、自分の出這入りや行動には、絶えず、蜂須賀党の仲間の眼が、どこかで見張っているからだだった。

その見張にもまた、見張が付いているのだ。つまり鎖の一環のよう、単独に脱けることは許されない仕組にできていることを、近頃、彼も知ったのである。

「いよいよ、やるのかな？」

かねて、彦十から聞いてはいたが、いざとなると、日吉は、気持が暗くなった。

気が小さいのか、兇悪な乱波となつて民衆を惑わし、城下を攪乱し、火の海を魔みたいになつて活躍することなど——どうも出来そうもない気がする。

第一、それを聞いてから、小六への尊敬を失ってしまったし、斎藤道三に利益する気にもなれないし、なおのこと、稲葉山城の義龍にも味方する情熱など少しもない。

もし、味方すれば、城下の民に味方したい。どこに同情をもつかといえ、やはりそんな場合には、真つ先に戦禍をうける、町人百姓、わけても、子のある母親へ、彼は痛切に、同情をもつ！

「なんの、まだ開けてもみないうちに、取越苦勞をしておった。……とにかく、読んでみてからだが」

針イいらんか——京針イ——いつもの声で流しながら、日吉はわざと、屋敷町の人目のない横丁へ曲って行った。

と、小川がある。行き止りだ。

「おや、こいつはいけねえ」

わざと聞えよがしにいつて、見廻すと、折よく、人影もなかった。でも、念のため。

彼は、小川へ向つて、尿をしながら、しばらく悠々と、附近の様子を見とどけ、さてと、おもむろに懷中から廻文を取り出して読んでみると——

こよい、戌の下刻

風。西か南なれば

常在寺うらの森に集合のこと

風。北に変わるか

風やむ折は、集合もやむ事

「……………」

予想はやはりあたっていた。日吉は読み終ると、細かに裂いて、口のなかに丸めこみ、紙団子になるまで噛んでいた。

「――針売りッ」

ふいに、何処かで呼ばれたので、日吉はうろたえ、口の中の物を、川へ吐き捨てるいとまもなく、掌へ吐いて握った。

「へい。どちらですか」

「ここだ。針を買ってつかわすから、はいって来い」

声は聞えるが、誰か、何処か、一向その人の姿は見当らなかった。

――いくら見廻しても、姿の見えない筈。

声の主は、彼方の侍屋敷らしい構えの中だった。低い堤の上へ、二段に繞らしてある築土のうちから、その声はしたのである。

「針売り針売り。こっちへ廻って来い」

築土の横手の、小さい潜り門が開き、そこから若党らしい者が、首をさしのべていた。

「……へい」

日吉は答えたが、ちよつと、様子を計っていた。

この界隈の侍屋敷なら、問わずとも、斎藤家の家中とは知れきっている。それも、道三方の家臣ならよいが、義龍の直臣でもあつたら、小気味がわるい。

「針売り、針を求めてつかわすと仰っしゃる。こっちへはいって来い」

求めてくれる人は、その若党ではないらしいのだ。いよいよ、気が進まなかったが、ぜひなく近づいて、

「ありがとうございます」

後に従いて、日吉は、潜りの内へはいった。

そこは裏庭らしく、築山の後を巡って従いて行く。かなり大身の屋敷とみえ、母屋は幾棟にもわかれ、建築の宏壮、泉石の清楚、日吉は足を竦めた。

誰だろう？ 針を買ってくれるという当人は。

若党のことばでは、主人筋らしいが、これ程な屋敷に住む大身が、奥方であろうと、御息女であろうと、自身、針など求めるはずはない。また、外を呼び歩く物売りなどを近づけるわけもない。

「針売り」

「はい」

「暫時、そこで待っておれ」

若党は、彼を庭の一隅へ残して行ってしまった。――見ると、母屋からは、かけ離れた一棟がある。

その一棟は、下が書斎、上が書庫にでもなっているらしく、荒壁で塗り廻した中二階造りになっていた。若党は、その中二階を仰向いて、

「十兵衛様、呼び入れて参りましたが」

と告げた。

狭間のように、壁を四角く切り抜いた窓がある。十兵衛と呼ばれたのは、二十四、五歳の白皙明眸な青年で、書庫の書棚から、本でも索し出していたところか、数冊の書を手にかかえながら、その窓口に、半身を見せていた。

「む、今参る。――階下の縁先にでも待たせておけ」

十兵衛は、下の若党へ、そう返辞して窓口から姿をかくした。遠くから、日吉は見ていた。なるほど、あんな所に人がいたのか、

とその時気づいた。彼処あそこからなら築土つじの外も見える——

先刻さつきからの自分の挙動を見ていたに違いない。何か疑って自分を調べるつもりだろう。すると、此方こつちもその覚悟でいないと飛んだ目に遭うかも知れない。

日吉が、そう臍はらを決めていると、若党は彼方から手招きした。そして、

「今すぐ、御当家の甥御様おいじさまが、そこへ見えられるから、お縁先を離れて、謹んでお待ち申しておれ」

と、いった。

いわるるまま、日吉は、その家の縁先から少し離れた所に坐っていた。勿論、土へじかにである。

そしてしばらく手をつかえていたが、なかなか出て来ないので、そつと首を擡もたげた。

日吉は、目をみはった。

室内は、書物で埋まっていた。机のまわり、壁の書棚、二の間まも二階も、書物の庫くらになっっているらしく思われる。

(ここの主人か、その甥か。よほどな学者だとみえる)

日吉には、書物など、見るのも珍しかった。——しかし、長押ながおしを仰げば、そこには見事な檜、床の間をのぞけば、そこには鉄砲が立て懸けてあった。

やがて、その人は出て来た。

静かに、机の前へ座を占め、頬杖をついた。そして、庭前に屈かがまっている日吉の方を、書物の文字を見るような叡智えいちな眼で、しげしげ見ていた。

「はい。今日は」

——それとは、まるで正反対な、開けッ放しな顔を上げて、日吉

は、

「ありがとうございます。てまえが針売りで——。針をお求め下さいますか」

十兵衛は頬杖をついたまま、机の上から頷うなずいて、

「うむ。求めて遣つかわすが、その前に、ちと訊ねたいことがある。

——そちは針を売るのが目的か、それとも、御城下を探るのが目的か」

「もとより、針さえ売ればよいので」

「ならば、こんな屋敷小路などへ、なぜはいって来たか」

「抜け道かと存じまして」

「嘘を申せ」

十兵衛は、少し身をねじ向け、

「見るところ、旅摺たびずれた面構え、行商あきないも今日やきのうのことではあるまい。およそ侍屋敷などで、針など売れるものか否か、心得ておる筈」

「そうとばかり限りませぬ、稀たまには……」

「稀に——ではあろうか」

「でも、売れることは、売れますので」

「では、それはまず措おいて。——かような人気がない所へ来て、何を讀んでいたのか」

「へ？」

「辺りに人がおらぬと思うて、そちは密ひそかに紙片かみきれを手に使っていたが、およそ天地草木の生々と生きづく所、神の眼のない世界はない。声のない物象はない。……何を見ていたか」

「手紙を見ていました」

「何の密書を」

「おっ母さんから来た手紙を読んでいた」
意外な答えだった。

そしてけろりとしていた。

勿論、十兵衛は、その理性的な眼ざしで、
(こやつ、言葉巧みに)

と、なお、疑いを濃くしたが、わざと優しく、

「そうか。母の手紙か」

「はい」

「しからば、その手紙を、見せい。御城下の掟^{おきて}として、不審の者は、見当り次第、縛^{から}めて、問注所^{もんちゅうしょ}へ突き出す定めになっておる。明らかにせねば、不慙^{ふびん}でも、役所へ引き渡すぞ。証立^{あかしだ}てのため、その母の手紙とかを、これへ見せい」

「喰べてしまいました」

「何」

「生憎^{あいにく}、読んだ後で、喰べてしまったので」

「喰べた？」

理をもつて、優しく、しかしするどく、徐々に責めていた十兵衛も、常識負けした形で、呆れ顔^{あきがお}してしまった。

「はい」

日吉は、なお、真面目に、

「わしにとれば、おっ母さんは、神様より仏様より、生きているだけになお、尊いおっ母さんでござります。ですから……」

「だまれッ」

一喝^{かつ}を投げて、十兵衛は、後はいわさぬ顔を示した。

「秘密の手紙ゆえ、噛み捨てたのであろう。それだけでも、不審な奴、さてこそ！」

「いえ、いえ。お考え違いをしては困ります」

日吉は、あわてて、手を振って云い足した。

「神仏よりもありがたい、おっ母さんの手紙を、持っていて、つい涙^{はな}を cand してしまった、往来へ捨てて、人の足に踏まれたりしたら、勿体ない、罰が当たる。——そう思うので、いつも私は、喰べてしまうのが癖なんです。嘘ではございません、遠く離れている母の文字、喰べてしまいたいほど、懐かしいのは当たり前でございます……」

「……」
嘘だ。虚言だ。

十兵衛は見ぬいていた。

しかし、嘘にせよ、人並すぐれた嘘をいう男もあるもの——と思

った。

それと——

十兵衛にも、故郷^{のこ}に遺^{のこ}してある母があつた。郷里、美濃^{みののくに}国、恵那郷^{えなごう}明智^{あけち}ノ庄^{しょう}の明智城^{あけちじょう}にひとりの老母が待っている。

(嘘も、根からの嘘はいえないものである。母の手紙を喰べてしまったなどということは、出たら目でも、この猿に似た小男にも、親はあるにちがいない)

十兵衛はまた、そうも考えて、相手の無教養らしい野性をも、かえって、慙^{あわ}れに思った。

しかしまた、得^えてこいう、無知であけない顔をした男が、いったん策士に利用されて、騷擾^{そうじょう}の火でも放^つけると、野に出た野獣のような兇暴に変わるものである。

わざわざ、問注所へ突き出すほどの者でもないし、斬り捨てるには慙^{あわ}れ過ぎる。——といって、このまま、放つのもどうかと思う。

「……………」

黙って、日吉の挙動を、細かな眼で見ている間、十兵衛はそんな観察をしたり、処理に迷っていたらしかったが、やがて、

「又市、又市」

と、以前の若党を呼んで、

「奥に弥平治どのは、お在でられるかな」

「いらつしやると思いますが」

「恐れ入るが、ちょっとお顔を拝借したいと申して来い」

「畏りました」

又市は、駈けて行つた。

程なく、その弥平治は又市を伴つて、大股に奥から歩いて来た。

十兵衛よりは、もっと若い青年だった。十九か、二十歳ほどであろう。この大きな屋敷の主人、明智光安入道の嫡子で、弥平治光春とよばれていた。

十兵衛とは従兄弟仲である。

十兵衛も、姓は同じ明智で、名のりは、光秀といった。叔父光安のやしきに寄食して、ひたすら學問に没頭していた。

故郷もとは、母もあり、明智城もあつて、食客をしなければならぬような境遇では決してなかったが、何分にも、恵那郷の山地では、読みたい書物を手に入れるのもままにならないし、それに、刻々と進みつつある文化に遠かった。

いや、そういうよりも、十兵衛光秀の内に燃えている青年の慾望に、恵那の明智城は、余りに小さく、余りに文化の光や、時勢のうごきに、遠すぎたのである。

叔父の光安も、よく、わが子の光春に向つて、

（ちと、十兵衛を見習え）

というほど、彼は謹厳で、勉強家だった。

ここへ身を寄せる前にも、すでに十兵衛光秀は、京畿のあいだから、山陰、山陽の地方など、隈なく旅して来た。——近ごろ多い武者修行の群に伍して、知識を求め、時代の流れを見、生活の中に、進んで苦しみを迎えることもして来たのである。

わけて、泉州堺に止まつて、鉄砲を研究して来たことは、逸はやく、この美濃の国防と兵制に多大な貢獻をしていた。だから叔父光安始め、誰もが、年はまだ若い、すでに老成の風を備えている新知識の秀才として、尊敬を払っていた。

「十兵衛どの、何か、拙者に御用だそうですが」

「お、弥平治どのか。お呼び立てするほどのことでもないが」

「何ですか」

「あなたに、ご処置をお願いするのが、よからうと思つて」

と、光秀も外へ出て来た。そして、日吉のぼかんとしている側で日吉の処分を相談していた。

弥平治光春は、十兵衛から仔細を聞いて、

「ほ。この下人ですか」

と、日吉に一瞥をくれ、

「怪しいとお認めになるものなら、又市に申しつけて、一責め、弓の折れで撲らせてみたら、泥を吐きましよう。何の造作もない」といった。

「いや」

と、十兵衛は、弥平治の眼と共に、もいちど日吉の姿を見直して、「なかなか、そんなことで、有様に口を開く男とも見えませぬ。しかし、不愍なところもあるのだ」

「不愍をかけておつては、口を開かせることは出来すまい。ならば拙者が、四、五日預かつておいて、物置小屋にでも押し籠めてお

きましよう。自然、飢^{ひも}じさに、実を吐くかも知れませぬ」

「お手数だが」

十兵衛が同意すると、

「縛^くり上げましょうか」

と、若党の又市は、すぐ日吉の側へ立ち寄って、その手を捻^ねじかけた。

と、日吉は、

「あ、待って下さい」

あわてて、身をかわしながら、十兵衛と弥平治の顔を仰いで、

「今聞^きけば、撲^うつても、有^{あり}様^{よう}にものをいわぬ男——と仰^{おほ}つしやいました、訊^きいて下されば、何でもいいです。訊^ききもせず、幾日も、暗^くい所へ抛^{ほう}り込まれては堪^たりません」

「申^ますか」

「申^まします」

「然^{しか}らば問^とうぞ」

「はい。どうぞ」

「……いかん」

と、弥平治は、日吉のけろりとした顔に、力負^{ちから}けたように、

「こいつ、どうも、おかしな奴^{やつ}ですな。少^{すこ}し頭^{あたま}脳^まが悪いのかも知れぬ。人^{ひと}を弄^なつておるような」

と呟^{つぶ}いて、十兵衛の顔を見ながら苦笑^{くせう}した。

十兵衛は、笑いもしなかった。むしろ惧^{おそ}れに似たものを日吉に抱いた。

で——十兵衛と弥平治とが、駄^だ々な子をあやすように、こもこも何かと質問^{しつもん}すると、日吉は、

「それなら、今夜大^{だい}変^{へん}が起^おくことを、教^{おし}えますが、私^{わたし}はその仲^な間で

も何^{なん}でもありませんから、私の生命^{せいめい}は、保^{たも}証^{しょう}してくれませんか」

「よろしい。そちの一^{いっ}命^{めい}などは取るにも足^{たり}らん。大^{だい}変^{へん}とは、何^{なん}事^じか」

「火^{くわ}事^じがあります。今^{いま}夜^やの風^{ふう}次^じ第^{だい}で——」

「火^{くわ}事^じ。……何^{なん}処^{ところ}から」

「それは分^わりませんが、わたと同じ木^き賃^{しん}に泊^とつていた野^の武^ぶ士^したち^{たち}が、密^{ひそ}談^{だん}してました。——今^{いま}晩^{ばん}風^{ふう}が西^{せい}か南^{なん}だつたら、常^{じょう}在^{ざい}寺^じの森^{もり}に集^あまり、手^て分^わけして、城^{しろ}下^かへ火^{くわ}を放^{はな}けようと」

「えっ」

弥平治も愕^{おどろ}き、十兵衛も息^{いき}をのんで、日吉の顔を見まもった。

——半^{はん}ば、信^{しん}じ難^{がた}いような面^{おも}持^{もち}で。

が、日吉は、二人の顔いろなど気^きにかけているふうもなかった。

自分^{おのれ}はただ合^あ宿^{しゆく}の野^の武^ぶ士^しが囁^{ささ}き合^あつていたのを、チラと聞^きいたただけで何^{なん}も知^しらない。自^{おの}分の願^{ねが}いは、早^{はや}く針^{はり}を売^うり上^あげて、故^こ郷^{きやう}の中^{なか}村^{むら}へ帰^{かえ}り、一^{いっ}刻^{こく}も早^{はや}く、母^{はは}親^{おや}の顔^{おもて}を見^みたいことしかない——というような意味^{いみ}を、より以上^{いじやう}真^ま顔^{がほ}になつて述べた。

愕^{おどろ}きの色^{いろ}を、顔^{かほ}に醒^さまして、十兵衛と弥平治とは、しばらく、黙^{もく}り合^あつていたが、やがて、

「よし。そちの身^みは、きつと放^{はな}してつかわすが、夜^よまでは出^ですことならぬ。——又^{また}市^{いち}、この小^こ男^{おとこ}を、ど^{どこ}ぞへおいて、飯^いでも与^よえておけ」

と、十兵衛は命^{いのち}じた。

風^{ふう}は、相^あかわらず、吹^ふき募^{もつ}つていた。——しかも風^{ふう}向^{むか}きは、西^{せい}南^{なん}である。

急^{いそ}に、その風^{ふう}が、耳^{みみ}について、二人は胸^{むね}騒^{さわ}がしくなった。

日吉の身^みを、若^わ党^{たう}の又^{また}市^{いち}にあずけて、そこら追^おい立^たてると、弥平治はすぐ、すり寄^よって、

「十兵衛どの。この風に乘じて、野武士どもが、何を謀むのでござろうか」

と、不安を湛えた眼で、雲脚の迅い空を見あげた。

十兵衛は黙然と、書斎のぬれ縁へ腰を下ろし、緻密な思慮をこらしているように、じっと、一所を見つめていたが、

「光春どの」

「何か」

「叔父上から、何ぞ、この四、五日中に、変ったことでも、聞いておいでなさらぬか」

「さ。……べつに何も、父から耳にしたこともないが」

「はてな？」

「ただ……。そういわれれば、今朝、父が鷺山のお城へ出向く前に、こんなことをいわれた。——御主君道三様と、義龍様との御不和、近頃、わけてもお険しい事情にあるゆえ、いつ何時、いかなる事変が起るうも測り難い。常時、備えは怠りあるまいが、郎党どもも、不意の変に当って、武具馬具の用意など、あわてふためかぬよう、くれぐれも、早速の合戦に構えおれよ——と」

「叔父上がか」

「父が」

「今朝だな」

「いかにも」

「——それだ！」

十兵衛は、膝を打って、

「叔父上は、それとなく、今夜にも合戦があるぞと、暗に其許へ、注意して行かれたのだ。兵の謀略は、肉親にも洩らさぬが常。……しかし、叔父上だけは、すべてをご承知のことにちがいない」

「え、今夜にも……合戦が？」

「こよい、常在寺の森に集まる野武士というのは、道三様が、外部から引き入れた、乱波の輩かと思われる。——恐らくは、蜂須賀村の衆であろう」

「では、いよいよ、義龍様を、稲葉山からお取除けと、ご決意を遊ばして」

「そうだ」

と、十兵衛は、自分の判断に、自信をもって、強く頷いてみせたが、暗澹と、唇を噛んで——

「……だが、道三様のお考えどおりに、巧くは運ぶまい。義龍様にも、かねて期しておらるることだ。……それに、御父子のおん仲で、戈を把つて、血みどろに戦うなど、人倫の道がゆるさぬ。必ずや、天道のお罰があるう。いずれが勝つも負くるも、流されるのは骨肉、同族の血。——そしてしかも、斎藤家の領地は尺土も殖えはせず、かえって、隣国に虚を窺われ、それが動機となつて、さしもの御城地も崩壊に瀕するであろう」

彼は、そういつて、長嘆をもらした。

「……………」

弥平治光春も、沈黙して、ただ、暗い乱雲と風の翔ける空を見ていた。

主君と主君との争いである。臣下の身にはどうしようもなかった。そして弥平治には父、十兵衛には叔父にあたる明智光安入道といえ——これは鷺山の山城守道三方の腹心で、義龍廃嫡の急先鋒であつた。

「……そうだ。どうあつても、さような、人道に外れた御合戦は、お止めせねばならぬ。臣下の道は、それしかない。——光春、其許

は、すぐ鷺山へ馳せつけて、死をもって、父光安殿にすぎり、光安殿とふたりして御主君道三様の思い立ちを、御諫止申せ」

「はいッ。心得ました」

「わしは、日暮を待って、常在寺の森へ行き、野武士たちの謀拳を喰い止める。——死をもって、きつと、喰い止めるから。よいか！」

火の粉・風の子

大竈が、三つも並んでいた。

炊事小屋である。

何俵という米も一度に炊いてしまいそうな大釜が、三つも懸っている。

その釜の蓋が、持ち上がりそうに今、糊と湯気を噴きこぼしていた。

これだけの飯を、一度に喰べてしまうのかと思うと、静かなようでも、この明智家の築土の中に生活している奥侍や、郎党や、その家族らの人数は、百人以上にもものぼるのではないかと、日吉はさつきから、眼をみはっていた。

——そして密かに。

「こんなに豊富にある米が、中村にいる母や姉には、どうして、腹のはる程も、手に入らないのだろう」

と、不審になった。

母を思うと、飯を思い、飯を思うと、母の飢えを思うのが——今彼の習性のようになっていた。

「ひどい風だのう」

台所頭の老人が、すぐ向う側の厨からやって来て、竈場の火をのぞき、飯炊仲間や小侍の仕事ぶりを見まわして注意した。

「日が暮れても、風はやまぬようじゃから、火の元をよく気をつけてくれよ。——それと、一釜あがったら、すぐ後釜をかけての、手

の空いておる者は、側から飯を握りにかかれ」

「心得ております」

「抜かりはあるまいが、夜明けまでは、一切、帯紐ゆるめて、懈怠はならぬぞ」

「はい。その儀も」

「確とな——」

云い残して、老人は、ほかへ行きかけたが、ふと、足を引き返して竈場の竈の前につくなんて、火にあたっている小男を見て怪しみながら、

「これこれ」

と水屋仲間を顧みて、訊ねていた。

「そこにおる、猿のような顔した町人は、どこの何者じゃ。見馴れぬ男だが」

「十兵衛様からのお預り人だそうでございます。——あれに若党の又市どのが逃がさぬように、番に付いておいでなさいます」

「ほ、甥御の十兵衛様から？」

と、老人は、竈場の中へはいって来た。そして、隅の薪置場に腰かけている又市の姿に気づいて、

「やあ、御苦労で」

と、何の理も分らず、世辞をいってから、

「あれにいる男は、何か、不審でもあって、捕えたものでござるか。それとも何か……？」

と、訊ねはじめた。

又市は、

「いや、仔細のほどは、何か知らぬが、ただ、十兵衛様のいいついで」

と、のみ答えて、多くをいわなかった。

台所頭の老人は、それきり日吉のことは忘れてしまった。そして、頻りと、主人の甥にあたる十兵衛光秀の人物を、称え始めて、「——実に、お年に似合わず、思慮分別のそなわったお方だな。ああいうお方を、俗に出来ている人間——というのじゃろうな。とかく学問はないがしろになり、ただ、何貫目の棒を使うとか、悍馬に乗ってよく槍をつかいこなすとか、どこの戦場で何人斬ったとか——そんなご自慢を華としてござるが、十兵衛様はそうでない。いつあの御書斎をのぞいても、しいんと、湖水のように静かに学問してござられる。しかも、火術や兵法などにも、人一倍の実力をお持ちでいながら……。何とも、ゆかしい、末頼もしいお方であろうな」

と、口を極めていった。

又市は、十兵衛付の若党であった。直接の主人である十兵衛のこゝとを賞めそやされると、悪い気持はしなかった。

で、台所頭の老人の口に、彼も合槌を打って、

「いや、仰せの通り。手前などは、ご幼少から、十兵衛様には、身近に仕えておるが、あんなお優しい方はない。しかも、母君にはご孝行だし、こうして当地にご遊学中も、諸国をご遍歴中も、母君へのお便りは欠かしたことがない程で」

「総じて二十四、五といえ、剛直なれば大言壮語。おとなしければ柔弱で怠け者。木の股から生れたように、親の恩など忘れて生意氣ぶるものだが」

「——では、お優しいばかりかと思うと、あれで、恐ろしく強いご氣質もあるので、それは滅多に色にはお出し遊ばさぬだけに、怒ったら、きかないご気性ですよ」

「そうじゃろう。おとなしいといわれる者ほど、一たん^{いちど}忪えがつかぬとなると」

「今日なども、感じました」

「ム。今日な……」

「事に当って、是か非か、じつと考え込まれる時には、考えておられるが、決すると、堰^{せき}を切ったように、従兄弟^{いとこ}様の光春様へも、すぐ指図して、こうなさい、あななさいと、きびきび指図してしまふ」

「将器^{しょうき}じゃの。いわゆる大将^{だいしょう}の器^{うつわ}というものじゃろ」

「光春様も、十兵衛様には、心服^{しんぷく}しておられるので、お指図^{さしず}どおりに、すぐ肚^{はら}をきめて、早馬^{さば}で鷺山^{さぎやま}のお城へすぐ駆けつけて行かれました」

「一体、どうなるのじゃろ」

「さ。その儀はな？」

「飯^いをうんと炊^たけ、兵糧^{へいりやう}として握^{にぎ}っておけ。ひよっとしたら、夜半にも、合戦^{がっせん}となるかも知れぬから——と、光春様は云い残して、あわただしゅう、早馬^{さば}でお出ましになったが」

「万一の準備にな」

「万一ですめばよいが、鷺山と稲葉山城との御合戦では、わしら奉公人は、いずれへ弓^{ゆみ}を引いてよいやら——いずれへ引いても、友や骨肉^{こつにく}がおるしのう」

「ま、そんなことは、万が一にも起りますまい。十兵衛様にも、何やら決心もあり、喰^くい止める策^{さく}をお立てになつておるらしいから」「神かけて、わしらも禱^{いの}る。——これが隣国^{りんこく}となら、真^まつ先に、白髪首^{しやうかくび}を、投げ出してもよいが」

——外はもう暗い。

そして、空は真^まつ暗^{くら}だった。

吹き入る風に、大きな竈^{かまど}口の火は音をたてて、燃え熾^{さか}っていた。その前に、しゃがみ込んでいた日吉は、大釜^{おほく}の飯^いの焦^こげつく匂^{にお}いに、

「あ、飯^いが焦^こげる。お小人衆^{こじんしゆ}、釜^{かま}の飯^いが焦^こげつきますぜ」

と、飯炊^{めしたき}仲間^{ちゆうけん}たちへ教えた。

教えてくれた礼^{れい}も忘れて、

「退^どいた退^どいた」

と、仲間^{ちゆうけん}たちは、大竈^{おほかまど}の火を落し、やがて、梯子^{はしご}を懸^かけて、桶^{たすき}へ飯^いをうつし取ると、手の空^あいた者はみな寄^よつて来て、櫛^{くし}鉢^{はち}巻^{まき}でにぎり飯^いを、無数^{むすう}にこしらえ始めた。

日吉も、その中に交^まじつて、握^{にぎ}り飯^いをにぎっていた。勿論^{もちろん}、自分の口へも、二つや三つ頬張^{ほくちやう}つたが、誰も、何ともいう者はない。

ただ夢中で、飯^いを握^{にぎ}りながら人々のいつていることは、

「戦^{いくさ}か」

「戦^{いくさ}にならずにすむか」

であった。

そして、自分たちの握^{にぎ}っている兵糧^{へいりやう}が、むだになることを、そのうちの大部分^{たふぶん}の者が、願^{ねが}っていた。

やがてもう戌^{いぬ}の刻^{とき}頃^{ころ}。

十兵衛光秀が、又市^{またいち}の名を呼^よんでいた。又市は外へ出て行^いったが、すぐ戻^{もど}つて来て、

「針^{はり}売り。針^{はり}売り」

と、大勢^{たいせい}の中に交^まじつて、一緒に兵糧^{へいりやう}の飯^いを握^{にぎ}っている日吉を、呼^よび立てた。

日吉は、指^{ゆび}の飯^いつぶを舐^なめながら、飛^とんで来た。

一步、炊事小屋の外へ出ると、相かわらず風は烈しく、暗い夜を翔けまわっていた。

「はい。お呼びですか」

「あちらだ」

「え」

「十兵衛様がお待ちだ。つづいて来い」

又市は、先に立つて行く。——見ると、その又市は、いつの間にか、身軽い武装をして、足^{あし}拵^{しら}えも、そのまま、戦場へ出るように固めていた。

何処へだろう？ 日吉には行き先も分らなかった。何しろ暗い。

やっと、中門へ出て、見当がついた。広い邸内の裏庭をずっと廻って、表へ来たのだ。表門を出ると、誰か、騎馬の人影が一つ、烈風のなかに立つて待っていた。

「又市か」

十兵衛の声である。

昼間のままの服装で、鞍の上に在^あった。手綱を片手に、長槍を小脇にして。

「はッ。又市です」

「針売りの男は」

「召し連れしました」

「そちと一緒に、先へ駈けろ」

「心得ました。——針売りッ」

と、振り向いて、そこからまた、タツタと闇の中を駈けた。その歩速に合わせて、後からは十兵衛の駒と、槍の穂先が背を追って来る。そして辻へかかると、

——右へ。

——左へ。

と、後ろの十兵衛が、馬上から声をかけた。

常在寺の門前まで来て、日吉はやつと気がついた。蜂須賀七内をはじめ、岐阜^{ぎふ}に入り込んでいる乱波^{らんぱ}の衆が、戌^{いぬ}の下刻^{げこく}に集まることになっている場所だった。

ひらりと、駒を降り、

「又市、そちはここで、待っておれ。何、大事はない」

と、手綱を渡して、

「戌の下刻までに、弥平治^{さぎやま}のが、鷺山^{さぎやま}からこれへ見えるはずだが——もし約束の時刻までにお見えなければ、万事は休すだ。御城下^{しゅら}は修羅^{しゅら}の巷^{ちまた}……どうなるか、人間の智慧では臆測^{おくそく}もつかぬことになるであろうが」

語尾は、憂いに消えて、十兵衛の眉には悲壮なものが漲^{みなぎ}っていた。

「針売り」

「はい」

「案内に立て。——先に歩いて」

「へ。どこへで？」

日吉は、烈風に立ち泳^{こら}えながら、十兵衛のその悲壮な顔を見まもった。

「森へ。——蜂須賀村の乱波どもが、こよい集まるといふ裏の森へだ」

「さ？……私も、どの辺^へだか、場所は存じませぬが」

「場所は初めてでも、そちの顔は、先の者がよく見知っておるであらう」

「えッ」

「かくすな」

「……………」

日吉は、うまく彼を騙^{あざむ}いたつもりでいたが、十兵衛の叡智^{えいち}の眼は、何もかも観^みぬいていることを、明らかに示していた。

（これはいけない。騙^{だま}された顔していても、騙^{だま}しきれない人だ）

日吉はすぐ覺^{さと}つたので、もう言い訳も口答^{くた}えもせず、はいといって、先に歩き出した。

一点の灯も見えない。ただ伽藍^{がらん}の大屋根を、木の葉の疾風^{はやて}が、舳^{ふなべり}を洗^しう飛沫^{しぶき}のように打^ぶつけていた。

その——常在寺裏の林は、まるで荒れ狂^{わだつみ}う海原^{うな}だった。木々の唸^{うな}り、草の嘯^{うそ}き、耳も眼も、奪^{うば}われてしまふ。

「針売り」

「はい」

「森の中に、もう仲間が集まっているか」

「分りません。何しろ、このひどい風では——」

「いや、来ている」

「そうでしょうか」

「ちょうど、時刻もはや、戌^{いぬ}の下刻に近^いかろう。——そち一名が、いつまで、見えぬので、仲間の者が皆、案^あじているにちがいない」

寺裏の大きな五輪^{ごりん}の台石に腰かけて、十兵衛は云^いった。

小脇^{こわき}に持っている槍^{やり}の穂^ほ先^{さき}が、日吉のすぐ足の先で、風に研^とがれていた。

「仲間へ、顔を出して来い」

十兵衛は、先手先手と打^うつように、日吉の考えを、始終、先を越して云^いった。

「——明智^{あけみ}光安^{みつやす}の甥^{おい}、十兵衛^{じゅうべえ}光秀^{みつひで}が、これにて待つておると申^{まを}せ。

そして、蜂須賀衆のうちで、誰ぞ、重立^{ちゅうたつ}った者一名に、折入^{せいり}って、談合^{だんごう}したいことがあるから、これまで来てもらいたいと伝えて来い」

「畏^{かしこま}りました」

日吉は、頭を下^さげた。

しかし、すぐ行^いこうとはせず、

「集^あまっている一同の者へ、そう伝えればよろしいので？」

「そうだ」

「そのために、私を、これまで先に立たせて来たわけですね」

「はやく行^いけ」

「参^{まゐ}ります。——けれど、これきりお目にかからないかも知れませんが、私にも、ここで云^いい分^{ぶん}をいわせて貰^{もら}いましょう」

「何、云^いい分^{ぶん}を」

「いわずに去^さるのは、口惜^{くし}しゅうございます。何となれば、あなたは飽^あくまで手前^{てまへ}を、蜂須賀一類^{いちるい}の手先^{てさき}と見^みている様子^{ようす}です」

「それに相違^{さいち}あるまいが」

「あなたはお賢^{さとし}いが、あなたの眼^めは、鋭^{えい}すぎて、観^みる物^{もの}を、突き抜^ぬいてしまいます。釘^{くわい}を打^うつにも、止^とまるところで止^とまっているからよろしいので、過^かぎたるは及^{およ}ばざるが如^{ごと}し、というのは、お前^{まへ}様の智^ち慧^えのことです」

「……………」

「なるほど、あなたが観^み破^{やぶ}っているとおり、私は、蜂須賀村^{はすけむら}の仲間^{仲間}と共に、この岐阜^{きふ}へ流^{なが}れて来た一人にはちがいありませんが、しかし、心^{こころ}はあの衆^{しゅう}と団体^{だんたい}ではありません。中村^{なかつむら}の百姓^{ひやくしやう}に生^なれ、針売^{はりうり}りなどして、未^{いま}だに志^しを得^えませんが、土豪^{たうご}の冷飯^{れいふ}に飼^かわれて、生涯^{しやうがい}終^はる気^きもなし、乱波^{らんぱ}を働^{はたら}いて、けちな恩賞^{おんしょう}にありつこうとも思^{おも}っていません」

「……………」

「もし、御縁があつて、次にまた何処かで、お目にかかる時があったら、あなたの眼が行き過ぎで、手前の云い分が、嘘でないことが証拠だてられましょう。——では手前は、約束どおり、これから蜂須賀七内様へ、お言伝^{ごんでん}だけ致しまして、そのまま、当地を退散いたしますから、あなたさまにも、ご機嫌よう。ずいぶんお大事に、ご勉強なされませ」

生来、口の達者な日吉が、思い切つてそう述べ立てている間、十兵衛は遂に、一言も吐かなかつた。

——気がついて、

「針売り、待てッ」

と呼んだ時は、日吉の姿はもう、木の葉の暴風を衝いて、真つ暗な木立の奥へ走つていたため、十兵衛の声も届かなかつた。

駆け抜けて行くと木立に囲まれた少しの平地がある。風も、ここは池のように、強くは当らなかつた。

——見ると。

牧^{まき}の野馬^{のうま}のように、寝そべつたり坐つたり、漫然と立ったりしている、一団の人影が黒々とあつた。

「誰だッ？」

立つて、四方を睥^ねめまわしていた一人がいった。——日吉の跽^{あしおと}音へである。

「おらだ」

「日吉か」

「うむ……」

「どいめ。寝^ね呆^ぼけたような返辞をして何処をまごついていたのだ。汝^{われ}一名が見えぬため、皆で心配していたところじゃねえか」

まず、頭から叱られて、

「すみません。どうも、遅くなりまして」

と、日吉は、一同の側へ、おずおずと見える足つきで、近づいて行つた。

「七内様は」

「あれにいる。謝^{あやま}つて来い。ご立腹だぞ」

「へい」

その日吉の声に、周^{まわ}りの四、五名と何か首を集めていた蜂須賀七内が、

「猿か」

と顔を向けた。

日吉が、そこへ行つて、遅くなった詫^わびを云いかけると、

「何していた？」

「昼間から、斎藤家の御家中の邸に、捕まっていましたので」

「えッ。捕まっていた？」

七内の眼ばかりではない。辺りの眼は皆、愕^{がくぜん}然と、日吉の顔に集まつて、

（すわ、大事が洩れたか）

と、動揺^{どうよ}めきかけた。

七内は、いきなり、

「この間抜け」

と、日吉の襟^{えり}がみをつかんで、手元へ寄せ、荒々しく次を質^たした。

「どこで、誰の手に、捕まつたのだ。——捕まつたとあるからには、俺^{くわだ}たちの企てを、喋^{しゃべ}舌^べつたであらうが」

「話しました」

「なにッ」

「話さなければ、生命がありません。ここへ戻って来ることも出来ません」

「こいつ」

と、小突き廻して、

「忌々しい馬鹿だ。生命欲しさに秘密をもらしたとみえる。――

野郎、こよいの血祭ものだ」

七内は、突放して、足蹴にかけようとしたが、日吉はひょいと、飛び退いて、その足先を躲かしていた。

だが、左右の仲間は、彼の両手を把って、捻じ上げていた。日吉は、その手を振りのけながら、

「慌てないで下さい。話はよく聞くものですよ。捕まっても喋舌つても、それは大事な屋敷なのです。……なぜなら、稲葉山の斎藤義龍の家臣ではなく、蜂須賀党とは同腹の道三秀龍様方の御家来ですから」

と一息にいった。

一同は、ややほつとした面持だったが、なお、疑いは霽れない眼いろで、

「いったい、その屋敷とは、どこの何者の住居」

「明智入道光安様とか聞きました。けれど、おらが手にかかった人は、その主ではなく、甥の十兵衛光秀とか申しました」

「ア、明智の居候か」

と、呟く者があった。

「そうです」

日吉は、そこへ顔を向けたが、また、一同の上へ眼を移して、洒然といった。

「その十兵衛様が、誰かこの中の、頭分の者に会いたいということとで、おらと一緒に、そこまで来ておりますが……七内様、行ってお会いなさいですか」

「明智光安の甥、十兵衛光秀が、一緒に来たというのか」

「へい」

「ほんとか」

「ほんとです」

「十兵衛へは、こよいの企てを、残らず話したか」

「いわないでも、観抜いていました。怖ろしく頭脳のいい人ですから」

「何しに來たのだ」

「それは分りません。おらはただ、ここへ案内しろといわれたただけなんで……」

「で、案内して來たわけか」

「仕方がございませんから」

「ちエツ」

「ああ。――まだ風がひどい」

日吉と。

一方は七内と。

そう二人が問答を交わしている間、周りの仲間は、唾をのんで聞いていたが、七内が最後に、ちエツと舌打ちして口を結んだのをきっかけに、

「どこにいる。その十兵衛とかは――」

と、急に脚を動かし、七内一人で会うのは危険だから、われわれも共に行こう。いや、七内殿と十兵衛と会っている周囲を、蔭にかくれて、遠巻きに警戒していよう。――などと口々にざわめき立つ

た。

——すると、後ろで、

「あいや、蜂須賀衆。人目にふれてはなるまい。十兵衛からこれへ参った。七内殿にお目にかかろう」

と、いった者がある。

驚いて、振り向くと、それは問わでも知れている人影だった。いつの間にか、十兵衛は近くに来て、その静かな眼で、この物々しい動揺を見ていたのである。

「あ、……おぬしが」

七内は、やや慌て気味だったが、一同の頭に立つ者として、ずんぐりした体に、草鞋裁付を着けた身装を前へ進めた。

「蜂須賀七内どのか」

「左様」

七内は、急に、頭を高く持った。仲間の見ている手前もあるが、平常でも、主持ちの士とか、少し身分のある武士に対すと、下風にはつかぬぞ、諂いはせぬぞ——と殊さらに態度を持して示す——野武士たちの通有性でもあった。

それに反して。

一筋の槍こそ小脇にしているけれど、十兵衛光秀は、頭も低く、ことばも慇懃に、

「初めて、お目にかかるが、かねて小六殿の尊名と共に、お名は承知いたしています。——それがしは、道三秀龍様の幕下、明智光安が宅におる懸人——甥の十兵衛と申す若輩にござります」

相手の丁寧のあいさつに、七内は少し痺れ気味だった。

「で、——御用とは」

「いよいよのことだ」

「こよいのことは、はて、何だろう？」

空嘯くと、

「そこにおける針売りから委細承って、驚きのあまり、馳せつけて来たのです。こよいの暴拳は——暴拳といつては失礼だが、兵法から按ずるも、道三様のお企てとも思えぬ下策。思い止まっていたきたいが」

「ならぬ」

七内は傲然と、

「わしの指図でするのじゃない。道三様のお頼みをうけた小六の指図でいたすことだ」

「ごもつとも」

と、逆わずに、十兵衛は、語調も常のとおりにいった。

「当然、ご一存では、見合わせもなりますまい。——で、従兄弟の弥平治光春が、鷺山のお城へ参って、一方、道三様をお諫め申しあげ、追ツつけ、これへ参り合わせる事になっておる。それまで、一同ここを去らず、お待ち願ひとうござるが」

丁寧も、慇懃も、相手の常識に依ることである。かえって、相手を思いあがらせてしまう場合は、往々に多い。

——が、この構えは、その人間の個性にあることで、臨機応変にゆける者は稀だ。

十兵衛光秀は、性格的に、誰へも丁寧で慇懃だった。剣道でいうならば、いつも下段に構えて人に対する方だった。

しかし、肚は、別問題である。

（ふふむ。程の知れた小冠者。少し学問をかじって、理窟だけは達者な青二才の手輩だろう）

七内は、そう観たので、

「待てぬ！ 要らざることだ」

と、呶鳴った。そして、膠もなく、

「十兵衛殿とやら、よけいなところへ、出しゃばるものじゃない。

おぬしは、まだ部屋住同様な——しかも明智入道の懸人の分際ではないか」

「分を顧みる遣はありません。主家の大事です」

「大事と思つたら、具足兵糧の用意でもして、おれらが揚げる火の手を待ち、道三様の敵義龍の稲葉山へ、まっ先に、攻めかかるがい」

「いや、それが出来ぬゆえ、臣下として、われわれは苦しむのだ」

「なぜ」

「義龍様は道三様の立てた御嫡子ではないか。道三様が御主君なら義龍様も御主君であらせられる」

「でも、敵となれば」

「浅ましい。御父子のおん仲に、左様な弓矢が交わされてよいものか。天が下、鳥獸の類すらだに」

「面倒だ。帰れ、帰れッ」

「帰らぬ」

「なに」

「弥平治が、これへ来るまでは帰らぬ」

慇懃だとばかり思っていたこの青年の声に、七内は、その時初めて断乎とした力を耳に聞いた。

また、小脇に引っ提げている一槍の鋭い気ぐみを、その眼に見た。ところへ。

「十兵衛どの、そこにか！」

と、息を喘って、駈けて来た若い武士がある。待ちかねていた

弥平治光春だった。

「おうッ、これにおるッ。弥平治どのだの。御城内の決定、如何になったか」

「残念だが……」

弥平治は、肩で喘ぎながら、従兄弟の手を握って、唇を噛んだ。

「御主君には、何としても、お聞き入れはないのだ。道三様のみかお父上もまた、部屋住の分際で、お汝らが知ったことではないと——」

「叔父御までが」

「かえって、ひどい御立腹。——でも、死を賭して、今まで頑張っていたが、やがて鷲山一円では、密かに、出兵の備えらしく、凡ならぬ様子が見えたに依つて、御城下に火の手が揚つては、もはや大事と、駒を急がせて、戻つて来た。十兵衛どの、何としますか」

「ウウム。では、どうあつても道三様には、稲葉山を焼き立てるお心か」

「ぜひないこと。……この上は、われわれも、ただ一死をもつて、臣下の道を尽すほかはありませんまい」

「嫌だッ……。いかに御主君であらうと、左様な、非道の軍に与して死ぬことは、人として口惜しい。犬死に等しい」

「では、何とするか」

「火の手さえ揚げねば、鷲山の兵は動くまい。——その火元を、火にならぬうち、消し伏せる！」

別人のような、十兵衛の語気なのである。——そう思ったかと思ふと、彼はふいに、蜂須賀七内や、その他へ向つて、小脇の槍をぴたと付けた。

柔弱な青侍とのみ思っていた十兵衛が、突然、自分たちへ、槍を

向けたので、七内も蜂須賀党の輩も、驚いて、さっと輪を開いた。

「何とする！」

七内は、ひとりその槍の正面に立って、吠える風にも負けない声でいった。

「おれ達に、槍を向ける気が。そのへろへろ槍を」

「いかにも」

十兵衛は、凜という。

「ひとり残らず、この場は去らせぬ。——だが、汝ら、よく理をわきまえて、それがしの言葉を素直に容れ、こよいの暴拳を思い止まつて、蜂須賀村へ帰るとあれば、生命も助けよう。また、それがしから出来るだけの手当もして遣わそうが、どうじゃ、いずれを選ぶか」

「なんだと。では俺たちに、この場からすぐ引き揚げろというのか」
「斎藤家御一門の崩壊の危機。稲葉山、鷺山、共に亡びんとするこよいの大事を防ぐためには——」

「ばかなッ」

七内ではない。周りの誰かが怒って叫んだ。

「そんなことができるかッ。青二才の分際で、要らざる喙、大事の妨げすると、うぬから先に血まつりに捧げるぞ」

「一死、元より覚悟の前」

と、十兵衛の血相は、戦わないうちからすでに、白面の夜叉かのように眉を昂げ、

「弥平治どの。弥平治どのッ」

と、後ろの従兄弟に、その構えのまま声を投げた。

「斬死だぞ。よいか」

「おお。ご懸念なく」

弥平治光春も、もう大刀を抜いて、十兵衛と背なか合わせに、大勢へ備えていた。

でも、十兵衛は、なお、一縷の望みを七内らの理性につないで、「空しく、その方どもが、蜂須賀村へ帰るのは、一分が立たぬというなら、不肖十兵衛の身を、擒人として、連れて行くもよい。拙者が直に、蜂須賀村の小六殿へお目にかかり、よく理非をわけてお話ししたそう。——どうじゃ、さすれば、こよいの地獄も見ず、ここも互いの血を流さずにすむが」

彼の諄々と説く、道理なことばは、かえって蜂須賀党の輩には、彼の弱音として聞えた。

殊に、味方は二十余名。相手はわずか二人のことである。

「うるせえッ」

「耳を藉すな。もう、戌の下一刻は過ぎているぞッ」

二、三の者が、群れの中から叫んだのをきっかけに、わっと、関の声が沸く。

途端に、十兵衛と弥平治のすがたは、狼軍の牙につつまれた。牙にも似たる長柄、槍、刀——。それらの武器と喚きが、轟々と吹きさうなる風の音と一つになって、すさまじい乱戦の渦をそこに描き出した。

「や、闘った！」

日吉は、見ていた。

刀の折れが飛んで来る。逃げる血まみれを、槍が追いかける。

——そこらにいてはあぶないので、彼はあわてて、樹の上へ登った。樹の上から眺めていた。

一人や二人の斬合は、これまでも、出会ったことはあるが、こ

ういう小戦争は初めて目撃したのだった。しかも、この結果によっては、今夜のうちに、岐阜の里いちめんが火の海になるかならぬか？　また、鷺山城と稲葉山城との、大乱が起るか否かの——大きな分れ目と思えば、日吉の胸も、生れて初めての大きな昂奮を覚えずにいられなかった。

「——弥平治ッ」

「十兵衛どの」

呼び交わす声が、二度ほど、喚きの中で聞えた。

だが、その小戦争は、二、三名の死者ができると、忽ち、その死骸だけを残して林の中へ移ってしまった。

「や、逃げたのか」

また、引き返して来ては、危険と考え、日吉は用心ぶかく、なかなか木の上から下りずに様子を窺っていた。

十兵衛、弥平治のわずか二人に突き崩されて、逃げたものとすれば、蜂須賀衆も口ほどでもない雑兵級の者ばかり——と密かに蔑みながら、なお、耳を研いでいた。

彼のよじ登っていた木は、栗の木でもあろうか、手や顎すじへ何か針が触る。ばらばらと実や小枝が地へ落ちてゆく。——そして彼の体と、木全体は、暴風にゆさゆさと大きく揺れていた。

そのうちに、

「あッ、何だろ」

日吉は慌てた。

火山灰のような火の雨なのだ。勿論、日吉の周りにも——。

驚いて、梢から伸び上がった。蜂須賀村の者が火を放ったに違いない。森の二、三カ所から熾んな火が立ちはじめている。常在寺の裏の棟にも火がついたらしい。今、逃げ崩れた蜂須賀の者が、一

人一人、火を放って逃げたのだ。

「たいへん！」

日吉は栗の実の一粒みたいに、梢から跳び下りて駈け出した。この暴風に、この火の手、一刻を争わねば、森の中で黒焦げはきまっている。

夢中で、町まで駈けた。

町も火だ。

空も、火の粉、火の鳥、火の蝶々。

——稲葉山城の白壁が、赤く映えて、屋間より近く見えた。そこには、赤い戦雲が、鮮やかに動いていた。

「戦争だッ」

日吉は、どなつて町を駈けに駈けていた。

「戦争だ。お仕舞だッ。——鷺山も稲葉山も、亡んでしまえ。焼けた跡には、また草が出る。こんどの草は真ッ直ぐに——」

人にぶつかる。人が転ぶ。

空馬が跳んでゆく。

辻に、避難民がかたまつて戦っている。

そんな中を、日吉は——恐らくは無我夢中なのだろう——つつまれた昂奮のまま、予言者のような、また、童謡でも唄うような声を放ちながら、一目散に駈けて行つた。

——何処へ。

などという的はなかった。

ただ、もう二度と、蜂須賀村へ帰る意思のなかったことは、明白である。

また。

彼の性格が、最も忌み嫌うところの、陰鬱な領民、暗黒な領主、

骨肉の相剋^{そうこく}、清新のない文化など、腐^すえたる土壤の国に、何の未練もなく、そこを後に国外へ急いで去ったことも確実であろう。

そして、それからの一冬を、木綿布子^{ぬのこ}一枚の彼が、寒空に針など売って、何処をどう彷徨^{さまよ}った果てかは知れないが——年も明けて、翌天文^{てんもん}の二十二年、桃の花のさかり頃。

「針を買わんか。——京針。——京の縫針イ」

浜松の町端れを、至って暢^のンびりと、相変らずな顔して歩いてい
る彼のすがたが見出された。

松下屋敷

松下^{まつした}嘉兵衛は、遠州^{えんしゅう}の産で、根からの地侍^{じざむらい}であったが、今川家から封^{ほう}を受けているので、駿河旗本の一人であり、禄三千貫、頭陀山^{ずだやま}の砦^{とりで}を預かっている。

天龍川の流れは、その頃、大天龍、小天龍の二大脈に岐^{わか}れ、彼の邸は、頭陀山から五、六町東にある馬込川^{まごめがわ}——大天龍の岸にあつて、馬込橋を中心とする、その宿駅の代官役をも兼ねていた。
その日。

嘉兵衛之綱^{ゆきつな}は、馬込からそう遠くない浜松の曳馬城^{ひくまじょう}に、飯尾豊前守^{いのおぶぜんのかみ}をたずねて帰る途中だった。

飯尾豊前も、彼と同じ今川家の被官^{ひかん}なので、この地方の民治警備には、たえず連絡をもち、また、四隣の国——徳川^{とくがわ}、織田^{おだ}、武田^{たけだ}などの侵略にも、常に備えなければならなかった。

「——能八^{のうはち}」

嘉兵衛は、供を振り向いた。

馬上からである。

供の郎党は、三人いた。長柄^{ながえ}を持った髯面^{ひげづら}の郎党が、
「はッ」

と、駈け寄って、主人の顔を見上げた。

ちようと曳馬^{ひくまなわて}厩^{うま}から馬込^{まごめ}の渡舟^{わたし}へ出るあいだの街道だった。並木の松や雑木のほかは、見通しのよい畑や田だった。

「……はて。百姓でもなし、行者^{ぎやうじや}とも見えぬが」

嘉兵衛は、呟いて、駒の上から頻りと一方へ眼をこらしていた。主人が眼をやっている方角へ、郎党の多賀能八郎も眼を放った。――だが、咲き爛れた菜の花や、青い麦や、苗代田の浅い水のほか、何も見当らないのである。

「殿……何事でございますか。何ぞ、御不審な者でも？」

「うム。あれに――あの田の畦につくなんて、鷺とも見える白い人影。何をしているのじやろうか」

「え、鷺？」

能八は、主人のことばを、おうむ返しに受け取って呟きながら、主人の指さす先を見まもった。

なるほど、人がいた。

田の畦に屈みこんで――。

「質して来い」

と、嘉兵衛がいう。

能八は、はっと、駈け出して行った。

およそ、今は、どこの国々でも、少し不審と見られれば、すぐ調べられる。それ程、一国一國が、国境に対して、また、見馴れない人間に対して、神経が尖り立っていた。

「行って参りました」

能八は、すぐ戻って来て、嘉兵衛の馬前にこう復命した。

「あれは、針売りの旅商人で、尾張の者とか申しました」

「針売るか」

「垢じみた白木綿の腰切を着ていますので、ここから見ると、鷺のように見えますが、側へ参って近々と見ると、猿によう似た顔をした小男にござります」

「はははは。鷺でも鳥でもなくて猿だったか」

「口達者な猿で、物を質すと、あべこべに、おぬしは何者だなどと言を吐きますから――当地の御被官、松下嘉兵衛様でいらせられると、申し聞かされましたところ、ふーむと、怖れ気もなく腰を伸し、此方を無遠慮に見ておりました」

「そして、畦に屈んで、何を一体しておったのか」

「それも、質しましたところ、馬込の木賃に泊るので、晩の飯の菜に、田螺を採っているのだ――という返辞にござりました」

馬上のまま、能八の復命を聞いている間に、松下嘉兵衛が、ふと眼を移すと、その針売りの後ろ姿は、田の畦から街道へ上がって、もう先の方へ歩いて行く。

嘉兵衛は、それに眼を止めながら、また、能八へいった。

「では何も、不審なかどはない者だの」

「べつに、怪しい節も見うけられませぬ」

「そうか」

と、手綱を持ち直し、

「下賤の者らに、些細な無礼咎めなどはなるべくするな。さ、参ろう」

と、他の郎党へも、鞍の上から願をすくう。

駒の脚は、やや早目――

またたく間に先へ歩いている日吉に近づき、彼の側を、埃をたてて駈け抜けた。

(猿に似た小男)

と、さつき能八郎から聞いていたので、松下嘉兵衛は、何げなく振り向いた。

日吉は、勿論、道をよけて、並木の下にぼんやり土下座していた。

――と、嘉兵衛が馬上から振りかえったので、日吉も顔を上げて、

じつと見送っていた。

「ア、——待て」

嘉兵衛は、急に駒を締めて、うしろ向きに、郎党たちへ、
「今の針売り、これへ召し連れて来い。……異相だ！ 何とも異相な男ではある！」

と、半ば、独り語のような嘆声でいった。

郎党の能八は、主人の物好き——とは思ったが、すぐ駈け戻って行き、

「こら。針売り」

「へい」

「御主人がお召しだ。ちょっと、御馬前まで来い」

と、引ッ張って来て、嘉兵衛の前にひきすえた。

嘉兵衛は、じつと鞍の上から日吉を見ていたが、それは顔が猿に似ているなどという興味ではなかった。

そんなことは念頭になく、

（……異相だ！）

と、再びしげしげ見入ったのであった。

しかし、嘉兵衛が、日吉を一瞥して、直感したものは、それだけの嘆声では、まだ尽きていない。もっと複雑で無形な、靈感的なものが、彼を引き止めたのだった。

垢じみた木綿布子につつまれた小男の——一体どこに、そんな魅力があったかといえ、黙って、大地から嘉兵衛を見上げている日吉の眼だった。

眼は、心の窓という。

この萎びた小男のどこに取柄というものも見出されなかったが——何というすずやかな、そして意志の逞しい、無限に広い視力

をもっている眼だろうか。

しかも、その眼は、小皺をつくって、ニコと笑っているようなのだ。

（愛嬌がある！）

嘉兵衛は、好きになった。

彼が、もっと専門的な観相に詳しかったら、真つ黒な旅垢の下にかくれている、鶏血石のような鮮紅を持つている日吉の耳だの、若いくせに、一見、老人みたいに見える額の皺に、後年の大器がすでに顕れていたことを見出して、驚嘆したに違いないが、嘉兵衛の眼光は、その辺までしか、届かなかったのである。

——でも彼は、一見、日吉に対してふしぎな愛着と期待をもった。で、このまま、放し難い気持に囚われたのであろう、そこでは何も問わず、能八郎を顧みて、

「ついでのことに、邸まで連れて参れ。——邸まで」

と、云いすて、馬首をあげて、先へ駈けた。

大河に対つた門前に、家臣小者たちが四、五名、

「ア、お帰りなされた」

門扉を開いて待っていた。

駒繫ぎで、空馬が跳ねている。誰か、留守中に、客とみえる。誰方じゃ」

嘉兵衛は、そこへ来て、鞍から降りると、すぐ尋ねた。

「駿府のお館様よりお使いにござります」

「そうか」

聞きすて、嘉兵衛は、つつと邸内へはいってしまふ。

駿府といえ、主筋の今川家。使客はめずらしくはないが、その日、曳馬城の飯尾豊前とのあいだに議した問題もあり、嘉兵衛の

頭は、とたんに忙しかったとみえて、日吉のことも、忘れ果てたか、或いは後でというつもりだったか、とにかく黙って奥へかくれてしまった。

「こら、待て」

郎党たちに従いて、一緒に門内へ流れ込もうとした日吉は、早速、門番に発見されて、

「なんだ、その方は」

と、咎められた。

日吉は、泥だらけな手に、泥だらけな藁の苞を下げていた。

顔にも、泥のハネが、乾きかけているのでムズ痒い。門番は、嘲弄されているように、その動く鼻を見たのか、

「何だッ、こらッ」

襟がみへ、手をのばしかけた。

日吉は、少し退って、

「針売りだよ、おらは」

「針売りなど、みだりに入るところではない。抓み出すぞ」

「御主人に聞いてからにおしなさい」

「なにを」

「来いというから従いて来たのだ。今、奥へはいった騎馬のお侍が

——

「殿が、そんなことを、仰っしゃるはずはない。うろんな奴だ」

すると、郎党の能八が、思い出して、日吉を拾いに戻って来た。

「おいおい、門番。そいつはいいのだ。分っておるのだ」

「へ、よろしいので」

「猿、こっちへ来い」

能八が、猿と呼ぶと、門番たちはそのことばに笑って、

「なんだあいつあ。白い腰切を着て、泥苞を提げて、妙見様のお使いみたいじゃないか」

能八に連れられて行きながら、日吉は背中に、門番たちのどツという声を聞いた。しかし、彼はもう、生れてから十八年、あらゆる人中の嘲罵に馴れている。

感じないのか。麻痺したのか。

そうでもないらしい。

なぜなら、そういう嘲罵を背に聞く時は、やはり誰もと同じように、彼の赤ら顔が、なおいくぶんか充血する。殊に、耳は一層赤くなる。——裡に感情がうごいている証拠である。

だが、感情のうごきによって、彼の動作は変らない。馬の耳の如く平然たるところがある。むしろ少し愛嬌をふくむ。——みずからこういう逆境に歪められまい、自己を卑屈に育てまいと——心の莖に添竹の支えをもつて、静かに嵐の過ぎるのを待っている草花のようにである。

「猿」

「はい」

「あそこに、空いているお厩がある。目触りにならぬように、その辺で控えておれ」

能八にも、用があるとみえ、云いすてて行ってしまった。

黄昏かかると、お膳番の働いている台所の竹窓から料理を煮るにおいが桃の夕月へ流れていた。

使者との公式な対談もすみ、やがて、遠路をねぎらう饗応に、燭が増されたのであらう。

邸の奥からは、鼓の音が流れてくる。笛の音もはいる。猿樂でも舞っているとみえる。

自体、駿河の今川家は、名門の誇りが高く、歌道といわず、舞楽といわず、総じて京風な華奢の好みが、たとえば侍たちの装剣の具にも、女房たちの襟の下重にも見えていた。

この松下嘉兵衛などは、根が地侍だし、嘉兵衛自身が素朴な人だったが、それでも、清洲あたりの尾張侍の邸宅とは、そのたずまいからして違っている。どこことなく豊かなのだ。

「まずい猿楽だなあ」

空あきうま厩まわに藁わらをしいて、馬の代りに、日吉はぼつねんと、遠い囃子はやしを聞いていた。

舞楽はすきだった。いや音楽がわかるのではなく、彼は、楽から醸かもされる陽気なうつつの世界が好きなのだ。

何ものも忘れるからである。

が、忘れ得ないものを、今、彼は思い出した。空腹すきはらを満たすことだった。

「そうだ。鍋なべと火を借りれば……」

泥の藁わら苞ふとを下げて、御膳所ごぜんしよの口のぞを覗いた。

「すみませんが、鍋と焔炉こんろを貸してくれませぬかなあ。飯を喰べようと思ひますが」

台所方の小者たちは、異様な男がいきなり覗き込んだので、びつくりして、一応みな日吉の顔を見まもった。

「何だ。どこから一体、降って来たのだ」

「こちらの殿様が、来いと仰っしゃるので、途中からお供して来た者でございます。田圃たんぼで採った田螺たにしを煮て、それを菜に喰べようと思ひますので」

「田螺たにしかい、その苞ふとは」

「腹はらのくすりだそうぞ。毎日、田螺は喰べることになっています。生

れつきか、ややともすると、すぐ下痢げりをやりますので」

「味噌みそ煮にだろ。味噌はあるのかい」

「持っております」

「玄米こめは」

「玄米もございます」

「では、小者部屋の炉ろに、鍋も火もあるから、そこでやれ」

「ありがとうございます」

毎夜、木賃でやる通りに、少量の玄米こめを炊たき、田螺たにしを煮て、飯をすました。

腹がはると、眠ってしまった。厩うまやよりは寝心地がいいので、そこに寝た。するとやがて、夜半近くに、御用のすんだ小者たちが帰って来ると、

「この野郎。誰に断って、こんな所へ寝ていくさるか」

と、蹴おもてとばして、忽ち、戸外つまに抓つかみ出された。

で、元の厩うまやへ行つてと思つたら、そこには、使者のお馬が、(その方などの家ではない)

と、いつているように、威張つて眠っていた。

もう鼓つづみの音もしない。白桃の花に、薄い残月があつた。

宵かいすいに快睡かいすいしたので、眠くもなかった。日吉は、ただ漫然と、時を空費していらなかった。働くか、さまなければ、楽しむか、どっちかにはつきりしていないと、すぐ欠伸あくびが出た。

「この辺でも、掃はいているまに、夜が明けるだろう」

竹箒たけぼこを持って、厩うまやのまわりを掃き始めた。主人の眼が届かないところ程、馬糞や落葉や藁わらくずが溜たまりっていた。

「誰だ、今頃。……箒はらを持っている者は」

誰か、どこかで、そういった者があつた。

簀を休めて、日吉は辺りを見まわした。
すると、再び、

「ここじゃ。そちは昼間の針売りだの」

日吉は、ようやく見つけて、

「あ、殿さま」

口の裡で答えた

橋廊下の角にある雪隠の手洗所の窓からだった。嘉兵衛の顔がそこに見えた。

酒のつよいお使者を相手に、量を過したらしく、嘉兵衛は、醒め際を、つかれ気味に、

「もう、夜明け近いか」

嘉兵衛は、窓から消えると、縁の雨戸をあけて、残月を見ていた。

「まだ、鶏は啼きませぬで、夜明けには、ちと間がございまいよう」

「針売り、いや、猿と呼ぼう。汝はそも、夜も明けぬうちから、

何で庭を掃いているのか」

「することがございせんので」

「眠ればよからう」

「もう、寝てしまいました。手前は、きまった時刻だけ眠ると、どうしても体を横にしていられせん」

「履物があるか」

「ございまする」

日吉は、一走り、どこかへ走って行き、すぐ土のつかない草履を取って揃えた。

「これ、これ」

「はい」

「そちは、夕刻、邸内へ来たばかりで、その上、もう人並に眠りも摂ったと申すが、どうして、邸の勝手を左様に心得ているのか」

「恐れ入ります」

「何を恐れ入るか」

「決して、怪しい者ではございません。けれど、これくらいなお邸なら、物の在所、御地内の広さ、下水口、火の元、およそのことは、寝ていて物音を聞いていても考えられます」

「ふむ……なるほど」

「お草履も、どこにあるか、先ほど見届けておきました。なぜなら、床より下がって、地面に眠っている者は、てまえと馬しかございせん。戸が開けば、すぐどなたでもお草履と、お声がかかると思っていました」

「そうか。悪かったの。何も申しつけずにおいたので、そちは厭に寝たか」

「……………」

日吉は、笑って、何も答えなかった。無邪気らしい眸だが、嘉兵衛の人物を軽く見たようでもある。

が、嘉兵衛は、それから真面目に、日吉の身の上や生地を――そして奉公の望みがあるかないかなど熱心にたずね出した。

日吉は、

「あります」

と、答えた。

その望みを持って、十六の年から諸国を歩いたと云った。

「侍奉公したために、三年も諸国を歩いたというか」

「はい」

「今なお、針売りして歩いているのは、どういふ仔細じゃ。三年も

さがして、奉公口につけぬからには、何かそちに、欠点があるのではないかな」

嘉兵衛が、わざと問うと、

「人間ですから、てまえにも悪い性しやうがあるかもしれません。けれど、最初はどんな主人でも、侍屋敷でさえあればいいと思いましたが、世間へ出てから、そうでないと気がつきました」

「そうでないとは」

「善ぜん大将、悪あく大将、国々の武将や、武門のお端はしを見て歩くと、主を選ぶほど大事なものはないと考えさせられました。そこで、めッたに針売りは廃やされないぞと、ついつい、三年も経ってしまったので——」

おもしろい。利口者かと思れば、馬鹿ばかみたいな節ふしもある。

話しぶりにも、真実さがあるかと思えば、なかなか山気やまけもいう。まともにそのまま信じきれない言葉が往々出る。

だが、とにかく、どこか異ひっている。人凡ひとなみではない。

嘉兵衛は、そう観みた。

で、その朝から、日吉を、邸の小者として、召使うことにきめた。

「仕つかえるか」

念を押すと、

「働いてみます」

平凡な返辞だった。

案外、欣ばない顔いろが、嘉兵衛にはすこし不満だった。

しかし、この木綿布子もめんぬのこ一枚の放浪児の主人として、自身が不足であろうかなどとは、考えられもしなかった。

松下家もまた、当時のどこの武家と同様に、軍馬の訓練が厳しかった。

夜が明けると、邸内のお長屋から、槍やや韃とう（革のしない）を持った侍たちが、ぞろぞろと糶蔵もみくらの前の空地へ出て行った。

——えやあッ。

——うおう！

——や、や、ヤッ。

槍は槍と撲なぐりあい、韃とうは韃とたたき合っていた。

台所番の小侍から門を守る小者の末にいたるまで、朝は一度、こへ来て、交代に皮膚を赤くして行つた。

嘉兵衛から云い渡しがあつたとみえて、日吉が、小者の端に召し抱えられたことは、もう皆知っていた。

厩うまや仲間は、新参と見て、

「おい猿。これから毎朝、おれたちが厩の馬を、草を喰わせに曳き出したら、その後、すぐ厩を掃除して、馬糞を向うの竹やぶの坑あなへ埋いけるのだぞ」

と吩咐いっふけた。

「はい」

馬糞掃除を担当すると、

「猿、ちよつと来い」

と、老侍が、

「担に桶ないに、水を汲んで、方々の大瓶おおがめに漲はっておけ」

と、いうし、

「薪まきを割れ」

と、いうので、薪を割っていると、何をしろ、かをしろと、召使ばかりが重宝に召使う。

「あいつ、膨ふくれたことがないなあ。何をいいつけても怒らぬのが取柄とりえだよ」

若侍たちは、一面、彼を玩具的に愛して、時々、物など投げ与えた。

だが、そのうちに、邸内でもその若手から先に、日吉に対して、

「あいつ、生意気だ」

「小理窟をこねる」

「殿へ諂う」

「ひとを小馬鹿にする」

などという反感が、次第に昂まって来た。

そういう若輩が、小さい落度を大声でいうので、松下嘉兵衛の耳にも、時々、猿の誹謗がきこえた。

が、嘉兵衛は、

「今に、あれは使える。まあ見ておれ」

近臣へいって、取り上げたこともなかった。

嘉兵衛の妻、嘉兵衛の子達は、猿よ猿よ、と気に入りだった。それがまた、邸内の軽輩には、よけいに快くなかった。

「なぜだろ？」

日吉は、爪を噛んで、考えた。

忠実に働きたがらない人間の中に交じって、ひとり忠実たろうとすることは、実に難しいと思った。

今川往来

奉公人と奉公人との間の、小さい感情に取り巻かれて、そこに人間を学ぶと共に、日吉は、この松下屋敷を中心として、海道の大勢と、今川、北条、武田、松平、織田などの実力や趨勢にも、だいぶ通じることができた。

(やはり奉公してよかった)

と、思う。

針売りして歩いていたのでは、容易に分らないような内情も、ここでは、時折、知ることが出来た。

もつとも、彼が、ただ喰うため、生きる世渡りのための、碌々たる奉公人に過ぎなかったら、そういうことに触れても、深い実態が小者にまで知れるわけもないが、彼の眼、彼の耳、彼の頭脳が、常に何ものかを求めて、敏感にそれを感じるので、

(ははあ、そうか。……さてはこうだな、ああだな)

と棋客と棋客との対局を、盤の横から観ているように、一石一石の手が、日吉には分るのだった。

駿府の今川家の使者がここや岡崎や、小田原や甲府などへ頻繁に往来しているのでも、或る筋が読めた。

それは。

駿河の今川義元に、天下の覇権をにぎろうとする大望があることを示すものだと、彼は観ていた。

いや、その実現は、遠い将来であろうが、とにかく、理想をそこ

に置き、他日、京都に入つて、足利將軍家を擁し、自身、天下に臨もうとする——その下工作が、ぼつぼつと始まつてゐるに違ひない。だが、地形から判じると、駿河の今川の背後には、強国北条が小田原にある。

また、側面には甲斐の武田。——京へ伸びんとする足の先には三河の松平。

こういう国々のあいだにあつて今川義元の工作は、まず前面の、松平家を属国化してしまふことに成功してゐた。

三河では、松平清康が、今川家へ降つて、その与国に甘んじてしまつて以来、不幸つづきで、清康の死後、子の広忠も早逝し、嗣子の竹千代は、人質として今、駿府に養われている有様だった。

しかも、その城地の岡崎には、義元の直臣が派遣されて、領政事務すべてを管理しているし、松平家の譜代の家来は皆、今川家の軍役に、追いつかれてゐる状態。

三河の収入も軍糧も、経営費を余すのみで、全部が駿河の義元の居城へ運ばれて行つた。

(あれで、どうなるのだらう?)

日吉は、三河の将来を暗澹となつて考えたりした。

けれど、三河にはまだ、三河人の強靱な意思がある。日吉は商いして歩きながらよく知つてゐた。このままで屈伏してしまふ三河武士ではないと思う。

より以上、彼が常に、心をとめて見てゐたのは、尾張の織田であった。母のいる土、生れた故郷、当然、どここの国より、その盛衰が気にかかる。

今そこの土を離れて。

この駿河の一被官、松下屋敷から眺めてゐると、三河の松平を

除いては、国の貧乏も、領土の狭さもどこの国より惨めに見えた。わけて今川領内の華美な文化と、豊かな経済の中から見ると、よいにはつきりとそれがわかる。

(中村も貧しいわけだ。おらの家も貧乏なわけだ……だが?)

と、日吉はそれが、絶対な国運とは考えられなかった。貧しい尾張の土に、何か未来の芽ばえを感じ、貴紳の礼風を真似て、上下とも華奢な今川領の風俗に、むしろ軽い反感と、危うさをいつも思わせられた。

また、近頃、頻りと使者の往来がはげしいのは、今川家を中心に、駿、甲、相三カ国間に、不可侵協定の下談が、結ばれようとしている気配だった。

主唱者は、勿論、今川義元で、将来、覇業の大軍を率いて、上洛するためには、駿河の背後にある北条と、側面の強国たる武田の二家とは、善隣の誼みを厚うしておく必要がぜひともある。

で、義元は、甲斐の信玄の嫡男太郎義信に、自身の息女を嫁がせ、信玄の息女を、北条家に嫁がせることを、かねてから策してゐたのであつた。

その婚姻は、ようやく成功を見、同時に軍事、経済の協定も成ろうとして、今川家の勢力は、東海の大重鎮として、動かし難いものとなつたかの観がある。

それは、随身の侍の、一人の姿にも、いわゆる羽振りとなつて、光つてゐた。松下嘉兵衛などは、義元直参の旗下とはちがひ、地侍の被官だったが、それでも、日吉の知つてゐる清洲や、那古屋や、岡崎あたりの邸とは、比較にならぬ程、どこか豊かだし、客足も多く、奉公人たちは皆、わが世の春を顔に見せてゐた。

「猿——」

と、若党の能八郎が、中庭に立って、探していた。

「はい」

「おや？」

能八郎は、屋根を見上げ、

「何をしているか。そんな所へ上がって」

「屋根を繕つくろっております」

「屋根を？」

と、呆れ顔に、

「こんな暑い日盛りに、ご苦勞なやつだ。何で屋根屋のまねなどしておるのか」

「土用照りがつづきました。こんどは大雨です。雨が来たら屋根屋を呼んでも間にあいませんから、板のハせている所だけ見つけて繕つくろっています」

「だから貴様は、朋輩ほうばいに憎まれるのだ。日盛りの一刻は、皆、木蔭かげやそこで、昼寝しているのに」

「眼につく所で働いていると、皆様の昼寝を邪魔しますから、屋根ならよいと思って」

「嘘をいえ。実は、貴様あ、そこで、お邸の地形を見ているのだらう」

「さすがは能八様、よくお氣がつかしました。それをのみ込んでいないことには、いざという時、護るに即座の手配りがつきません」

「物騒なことを、大きな声で申すな。殿のお耳にでもはいると、御機嫌を損じるぞ——降りて来い」

「はい。何か御用で」

「夕刻、お客が着く」

「またですか」

「またとは何じゃ」

「どなた様が御到着で」

「こんせき今夕のは、お使者ではない。諸国を遍歴してあるく武芸者だ」

「ははあ。大勢で——」

日吉は、屋根を下りて来た。能八郎は覚書おぼえがきを懷中ふところから出して、

「されば、武芸者は、上州大胡じょうしゅうおおこの城主上泉伊勢守かみいずみいせのかみが甥おいで、

疋田小伯ひきたしょうはくという者を頭に、門下の同勢十二名。騎馬一領、荷駄三頭、槍七筋を持ったお客じやて」

「それは、えらい数でございますな」

「武道鍛錬の元氣者ばかりだし、それに、一行の馬や荷物も多いから、倉方くらかたの者がいる一棟むねを空けて、そこに当分、お住居のつもりだから、夕方までに、万端、掃除をしてお迎えするように」

「へエ。そんなに大勢で、よほど長く御逗留ごとうりゅうになるのですか」

「まあ。半年じやろうな」

と、能八郎は、懶だるそうに、汗をふいて云った。

やがて、夕方になると、

「疋田小伯殿の御一行、御到着にござりますぞ」

先触さきふれが告げた。

程なく、疋田小伯ひきた以下、十三名の一行が、門前に、駒を止め、塵ちりを払って立った。

松下家の若侍や老臣は、恭うやまつしく出迎えて、

「この度は、当家の乞いかをいれて、諸国武者修行の御途次おんみちすを、お立ち寄り下され、忝かたじけうぞんずる。主人嘉兵衛儀は、折ふし、公きみ用中にござれば、後刻、改めてご挨拶申すのことにござります」

「ご丁寧に」

と、受けているのが、疋田小伯であろう。まだ三十歳前後の人物

である。

「――必ずご斟酌^{しんしゃく}くださるまい。今般は、伯父伊勢守が心入れにて、若輩のわれら、世上の修行なすべしと、遍歴の途にのぼり、先頃までは、今川殿のご好遇に甘んじ、今度はまた、同勢召し伴^つれて御当家のお世話になりに参った。もとより武辺者、逗留中は、何かの失礼も、偏^{ひと}えにご寛大に」

と、双方の挨拶。

門前の礼が一応すむと、

「お通りを」

と、出迎えが、列を開く。

「御免」

と、曳馬や荷をあずけ、十三名はぞろぞろと、邸内へはいった。

日吉はぼんやり眺めていた。そして、今の双方の挨拶を聞いて、
(兵法が大流行^{おおはやり}だから、兵法者もだんだん厳^{いかめ}しくなった)
と、感心していた。

近頃、武者修行武者修行という声をしきりに聞く。それから、今まではそういうわなかつた剣術だの、槍術だのという言葉もよく聞く。
武田家の与族で、上州大胡^{おおご}の城主、伊勢守上泉秀綱の名は、わけて有名であった。また常陸^{ひたち}の塚原土佐守卜伝の名も、それに劣らないものだった。

武者修行の中にも、行脚^{あんぎゃ}の雲水^{うんすい}よりひどいものもあるし、また、塚原卜伝の如きは、道中、常に六、七十人の供人を連れ、家来に拳^{こぶし}に鷹をすえさせ、侍臣には、乗換馬^{のりかえうま}を曳かせて、威風堂々と、諸国を遊歴してあるくような、武者修行もいた。

だから日吉は、きょうのお客の人数には驚かなかったが、これから半年もいることだったら、随分また猿々と追い使われて、眼をま

わすことだろうと思いやられた。

案のじよう。

四、五日もたつとすぐ、

「やあ、猿。肌衣^{はだぎ}が汗くさくなくなった。洗っておいてくれ」

「松下殿のお猿。すまんが、膏藥^{こうやく}を求めて来てくれぬか」

などと、自分らの下男のように日吉を追い使った。

お蔭で、夏の短夜^{みじりよ}を、日吉の寝る間は、なお僅かだった。

梧桐の下に、倚^よりかかって、日吉は居眠^{いみ}っていた。

夏の真昼の陽^ひが、そこだけを僅かな日陰^{ひかげ}にしていた。乾ききった地面に、松葉牡丹^{ぼたん}がぱらりと、そこそこに赤く、動いているものは、蟻^{あり}の列だけだった。

「……………」

だらんと首を横に、腕ぐみしたまま、眠っているのである。連日の寝不足で、やがて正体もない。

日頃、日吉を、何かと目触^{めざわ}りにして、憎悪^{にくまれ}していた若侍の二、

三名が、稽古槍を持って、そこを通りかけた。

「猿だな」

足を止めて、

「よく眠っておるわ」

と、呟^{つぶや}いた。

「どうだ、この寝顔の、横着^{つら}そうな面は。――それでいて、お奥向や殿には、猿々と、至って気受けがよい。こういう態^{てい}を、ご承知なさらぬからだ」

「起してやれ。すこし油をしぼってやろう」

「どうするのだ」

「猿ばかりは、まだ一度も、武芸の稽古をしておらんじゃないか」

「日頃、憎まれているのを、自分でも知っているせいだろう。撲られるのを怖れて、どうしても、稽古せぬそうだ」

「それがいかん。およそ武家の奉公人たる者は、門番、お台所の末の者まで、必ず武芸を励むべし——とあるのは、御家憲だ」

「おれにいつても仕方がない。猿にいえ、猿に」

「だから起して稽古場へ、引っ張って行こうと思うが」

「うむ。おもしろい」

「よかろう」

一人が、稽古槍の先で、日吉の肩の辺りを、とんと突いた。

「こらッ」

それでも、眼を醒さないで、

「起きろッ」

一人はまた、足を掬った。

日吉は、梧桐の幹から、背を横へ^{すべ}らして、びっくりした眼をひらいた。

「あ、なんですか」

「何ですかじゃない。白昼、お庭で大^{おお}躰^{いびき}をかい、眠っている奴があるか」

「眠ってりましたか」

「わからんのか、自分で」

「では、眠るつもりもなく、眠ってしまったものとみえます。もう起きています」

「当りまえだ」

「はい」

「自体、そちは、横着だぞ。聞けば一度も、武芸の日課すら、勤めたことがないと申すではないか」

「武芸は下手ですから」

「ろくすッぽ、稽古もせぬに、下手も上手もあるわけではない。小者といえど、武芸鍛錬、怠るべからず、とは御家憲の御家憲だ。——さあ、来い。きょうからわれわれが、稽古をつけてつかわす」

「いえ。それには及びません」

「ならぬ」

「でも」

「拒むか、貴様あ、奉公人の身でありながら、御家憲を守らぬのか」

「ではございませんが」

「ならば参れ」

合法的に、撲りつけるつもりであるから、嫌も応もいわせない。若侍たちは、日吉を拉して、遮^{しや}二無^む二、^{もみくら}粉蔵の前の空地へ引っばって来た。

そこには今日も、逗留中の武芸者の一団と、家中の者とが、炎天の下に、各々槍を持って、喚^{わめ}き声^{こゑ}をあげていた。

無理に、彼を拉して来た若侍たちは、そこへ来るといきなり、
「それッ、木剣でも、槍でも持つて、かかって来い」

と、日吉の背を、突き放した。日吉は、前へ泳いで、辛くも踏み止まったが、そこらにある稽古槍にも韜^{とう}にも手を出さなかった。

「なぜ持たんッ」

ひとり、槍の先で、彼の胸をわざと小突いた。

「稽古をつけて遣^{つか}わすから、貴様も得物^{えもの}を持て。……それ、それッ、突き倒すぞ」

日吉はまた、蹠^{よち}めいた。

しかし、強情に突っ立ったまま、唇を噛んでいた。

——ちょうど、その一方では。足田小伯の門下の、神後五六郎

や柿市之丞^{さかきいちのじやう}やらが、松下家の家来たちの求めに応じて、真槍^{しんそう}で力試しをしていた。

汗止めの鉢巻した神後五六郎が、真槍^{しんそう}を把^とって積み重ねてある五斗入りの米俵を、槍にかけては、鮮やかに、宙へ刎^はね上げて、怪力を見せていたのである。

「なるほど、その御手練では、戦場で人間を、槍にかけて飛ばすくらいは、易々^いたるものでござろう。恐れ入った力だ……」

驚嘆している人々へ、神後五六郎は、

「これを、力^{ちから}技^{わざ}と御覧あるは、お考えがいでござる。力を入れたら、槍^えの柄^えが折れる。また、すぐ腕が疲れてしまう。——それでは、戦場を馳^ち駆^くして、何ほどの働きがなりましようや」

と、槍を休めながら、傍^{かたわ}ら、剣の理あいも、槍の理あいも同じであることを説き、そしてすべての武道が、ただ丹田^{たんでん}の気にあること、力なき力——力を超越した心力でなければならぬ——などと講義の弁をふるっていた。

「なるほど」

皆、感銘して、それに聞き入っていた——すぐ後ろでのことだった。

「強情な猿めツ」

若侍は、槍の柄を、横に振って、日吉の腰ぼねを撲りつけていた。

「痛いッ」

日吉は、半ば、泣き声でさげんだ。実際痛かったとみえ、顔をしかめながら、腰を曲げ、その辺を撫でまわしていた。

「どうしたのだ？」

後ろの一団は散らかって、日吉の周り^{まわ}に集まった。

「いや、どうにも、箸^{はし}にも棒にもかからん横着者だて」

と、日吉を撲^{なぐ}った若侍は、何といっても、日吉が武芸の稽古を拒^{こぼ}むということを、武家奉公の異端者であるとして、口を極めて、悪^{あし}ざまに人々へ披露した。

すると、また、

「いや、それは、わしも勧めたことがあるが、不器用だとか、何とかいって、どうしてもこの猿は稽古に來んのじゃ」

と、云い足す者もあつたりして、武家の奉公人として、不心得な奴、末の見込みのない奴、横着も直るまい——という判決を、日吉は、衆の中で口々から云い渡された。

先刻から、黙つて、神後五六郎の後ろに佇^{たたず}んでいた疋田小伯^{ひきたしやうはく}は、

「まあ、まあ」

進んで、人々を宥^{なだ}め、

「見うければ、まだ、どこやら乳くさい小冠者^{こかんじゃ}。生意氣ざかりという頃だ。しかし、御家憲^{ごけい}に反^{そむ}くのみか、武家奉公しながら、武道を嫌うては、この者の不幸でもある。穏やかに、わしから訊いてやろう。一同はお鎮^{しず}まりなさい」

そういうと、小伯は自身で、日吉の氣持をたずねてみた。

「小冠者」

疋田小伯は、日吉へ、呼びかけた。

日吉は、小伯の顔を見て、

「はい」

と、いった。

今までしていた返辞とは、返辞の声が変わっていた。

この人なら、どういふことでも、思うまま答えてもいいと、心で許している眼だった。

「おぬし、武家奉公いたしながら、武芸を嫌うそうだな。嫌いな

か」

「いいえ」

日吉は、かぶりを振った。

「——ではなぜ、折角、御家中の方たちが、親切に稽古をつけて下さるといふのに、稽古をせぬのか」

「はい、それはこういう理わけでございます。——槍の修行をしても一生、剣の修行をやっても一生、その道の達人となるには、どうしても生涯かかるでございます」

「うム、その気でなければならぬ」

「てまえも、人なみの一生涯しか生きられないものとする——刀術や槍術も嫌いではございせんが、まあまあ、その精神こころだけを知ればよいと思っております。なぜなら、他に種々いろいろと、学びたいこと、知りたいこと、やりたいことが、沢山にございますから」

「学びたいことは」

「学問です」

「知りたいことは」

「世間です」

「やりたいことは」

問答のように、小伯がたたみかけて問うと、日吉はそこで、初めてにこと笑って、

「それはいえません」

「なぜ」

「やりたいと思っても、やれなかったら、広言になりますから、また、云って見たところで、皆さんが大笑いに笑うに過ぎません」

「ふウ……ム」

変っているな——と、足田小伯は日吉の顔をながめていたが、

「なるほど、そちのいうところは、少し分る気がするが、そちは武道というものを、小さい技わざの修練と、穿はき違えておるらしい。武道とは、そんなものではない」

「どんなものですか」

「一能に達した者は万芸に達するという言葉もある。武は技わざでなく、心胆しんたんのものだ。心胆を深く養えば、世間を觀る眼、人間を識る眼、学問の道、經世けいせいの道、すべてに通じ得るものだ」

「けれど、ここの人達は、相手を突くことや撲なぐることが、何よりの芸としていましょう。あれは、足輕どもや雜兵にとつては、役にも立ちましようが、大将には要いらないことござ……」

云いかける横合よがしいから、

「何だと。無礼者ツ」

家中のひとりこぶしが、拳を固めて、いきなり日吉の頬骨を撲りつけた。

「アふー！」

と、顎はすを外したように、日吉は両手で口を抑えた。

「いわしておけば、聞き捨てならぬ雜言を申す。小伯先生、お退ひきください。癖になる。ただ置いては」

激昂げきこうしたのは、ひとり今、日吉を撲った者だけに止まらない。

今の日吉の一言を耳にした者のほとんどが、

「われわれを、侮辱したものだ」

「御家憲ごけけんを誹そしるも同じだ」

「免ゆるせぬ奴」

「いっそ、斬り捨ててしまえ。——殿も、よもや吾々の仕方を、無理とはなさるまい」

ほんとに、裏の藪やぶへ連れて行って、首にしまいそうな人々の

怒気だった。

小伯も、止めるのに困った。が、極力一同を宥め、辛くもその場だけは、日吉の首をつなぎとめた。

その日。黄昏——

能八郎が、そつと小者部屋をのぞいて、壁の隅に、悄然しよぼり坐つて、齒の痛むような顔をしている日吉を、

「おい。おい」

小声で、外から手招きした。

「へ、何ですか」

日吉の顔は、おかしい程、腫れ上がっていた。昼間、撲られた痕が熱を持って、ひね生姜の根みたいになつて腫れ出したのである。

「ひどく痛むか」

「そんなでもございません」

濡手拭を、顔に当てながら答えた。

「殿様が、お召しだ。そつと、奥のお庭の中木戸を開けて通れ」

「え、殿様が。……では誰か、昼間のことを、云いつけましたね」

「あんな雑言を吐きちらして、お耳に入らぬわけはない。疋田先生が先ほどまで、お部屋で話しておられたから、多分、疋田様からお聴きになったのだらう。……お手討かもしれぬぞ」

「そうでしょうか」

「奉公人たる者は、朝夕武道怠るべからず——というのは、松下家の鉄則じゃ。家憲の威厳を明らかにすると仰っしゃれば、もう首はないものと思えよ」

「では私は、ここから逃げ出します。こんなことで、死ぬのはいやです」

「ばかをいえ」

能八郎は、日吉の腕くびを捕えて云った。

「貴様を逃がしたら、おれが腹を切らなければならぬ。召しつれて来いという仰せをうけて来たからには」

「逃げることもできませんか」

「貴様は一体、口が過ぎる。少しはものを考えていうものだ。昼間の広言を聞けば、この能八郎ですら、小癩な猿と思う。……とにかく早く来い」

日吉を先に歩かせて、能八郎は後から、刀の柄を握りながら尾いて行つた。

黄昏の庭木の暗がりには、白い綿虫の群れがうごいていた。打ち水した書斎の縁先に、仄かな室内の灯が流れている。

「——猿めを、召し連れて参りました」

能八郎が、ひざまずいていうと、松下嘉兵衛は、端近く姿を見せ

て、

「来たか」

と、いった。

その声を、日吉は、頭のうえに聞いたまま、庭苔に、額をつけて、縮まっていた。

「猿」

「はッ」

「そちの生国の尾張には、桶皮胴とはちごうて、胴丸とかいう、新しい工夫の具足が、近頃行われておるそう。一領買うて来い。そちの生国じゃ、勝手はよう弁えておるであろうが」

「はい？ ……」

「すぐ立て、今夜にも」

「何処へで」

「胴丸を買い求めに」と、嘉兵衛は、手文庫を寄せて、金をつつみ、日吉の前へ投げてやった。

「……？」

日吉は、その金と、嘉兵衛のすがたを見くらべていた。

その眼に、涙が溜った。やがて頬を伝わって、ぼろぼろと手の甲へ落ちた。

「出立は急ぐがよいが、品は急いで持ち帰るには及ばぬぞ。何年でも、程よいのを探せ。よいか」

「……はい」

「能八、裏の木戸を開けて、そっと出してやれ。……そっと、宵のうちに」

尾張へ行って、胴丸の鎧を一領買って来い——。唐突である。

また、余りにも、意外な主人のことばである。

日吉は、ぞっとした。

松下家の家憲を素す者として、手計になるかと思いのほか。

（今夜にも立て）

と、若干かの金子まで、嘉兵衛は能八郎の手から、日吉へ授けて、いうのであった。

日吉が、襟すじから、ぞっとしたような顫えを感じたのは、嘉兵衛の情けが——人の恩義というものが——骨の髄まで沁み入るほど、身にこたえたからだだった。

「ありがとう存じまする」

主人の吩咐を、主人がまだ詳しく意中をいわないうちに、日吉にはもう分っていたので、つい、そういつてしまったのである。

こういう頭脳が、奉公人たちの中に混じっていたら、奉公人には目まぐるいであり、憎まれ嫉まれるのは当然である。——嘉兵

衛は、そう思って苦笑をうかべた。

「猿、何があるがたい？」

「は、わたくしを追放して下さるお氣もちと察しまして」

「その通りじゃ、だが猿」

「はあ」

「何処へ行こうと、その才智を、もちツと、内に包まぬと、そちは生涯出世がならぬぞ」

「自分も左様に存じておりまする」

「知りながらなぜ、昼のような暴言を申し、家中の者を怒らせたか」

「つくづく、至らぬ奴と、後で自分で自分の頭を叩きましてございまする」

「氣がついておるならもう何もいわん。惜しい才ゆえ、助けてつかわす——なれど、今じゃから申すが、日頃より、そちを嫉み憎しむ者が、筭が失せたといつては猿が盗んだといい、小刀印籠が紛失したと申しては、猿の仕業よと、つげ口の絶え間がない。……それ程そちは、人の嫉みをうける質じゃ。ようく心得て人中で働けよ」

「……はい」

「きょうのことも、家憲をたでに、家来どもが怒りおるとかいことじゃから、そちを庇うて助けおくわけにも参らぬ。また、公然、暇をつかわせば、当家の門を十町も離れぬうちに、追討ち喰らって、討たれるであらう。……で、先ほど、疋田小伯どのからそつと注意せられたので、まだわし自身、何も聴いておらぬことにして、そちを旅先へ使いに出すのじゃ。……わかったか」

「ようく分りましてございます。胆に銘じて……」

日吉は、鼻をつまらせて、何度も何度も嘉兵衛の姿を伏し拝んだ。

松下家の裏門から、その晩 日吉は出ていった。
振り顧って、

「忘れません。忘れません」

二度もつぶやいた。

人の恩の大きな愛と感激につつまれて、日吉は、いかに報いたらいいのかを――ぼんやり胸に抱きながら歩いた。

酷薄と、嘲蔑のなかに、常に彷徨って来た彼だけに、人の情けは人いちばい強く感じる彼だった。

「今に……。今に」

何か、感動するか、事にぶつかると彼は行者の念仏のように、今に！を胸の底で繰り返した。

だが、彼の境遇は、ふたたび喪家の犬のように、的なく、職なく、彷徨うしかなかった。

大天龍の河水は、まんまんと流れていて、人里を離れると、天地のさびしさに、日吉は何となく泣きたくなった。

そこから歩み出す運命の先は、彼も知らず、天地も星も水も、何の暗示もしていなかった。

信長のぶなが

「――おじさん」

先刻からこれで二度目である。何処かで、誰か、そう呼ぶような気がする。

織田家の足輕組の乙若は、昼寝の首をもたげて、
「誰だ？」

と、見まわした。

その日の彼は非番だった。

いつもなら城勤めだが、きょうは組長屋のわが家に在って、手脚を伸ばしていたのである。

「わたしですが……」

声は生垣の外だった。からたちの葉や棘に、昼顔のつるが絡んで、白っぽく埃の乾いている垣根越しに人影があった。

乙若は、縁側へ出て、

「わたしですがって、いったい何処の誰だよ。用があるなら、表からはいれ」

「表の木戸が開きません」

「おや……？」

と、背伸びして、

「猿じゃねえか。中村の弥右衛門のせがれじゃねえのか」

「はい。そうです」

「なんだ。日吉なら日吉と云やあいいに、幽霊みてえに、元氣のな

い声を出しやがって、どうしたんだ」

「表は、開きませんし、裏へ廻って、覗いてみると、おじさんは寝ている様子。——今、寝返りを打ったご様子なので、呼んでみたので」

「つまらねえ遠慮をしていやがる。女房が買物に出たらしいから、木戸を閉めて行っただろう。待てよ、直ぐ開けてやるから」

乙若は、草履をはいた。

そして、日吉に足を洗わせ、家の中へ入れると、ややしばらく、その姿を眺めていた。

「どうしたんだ一体。いつか途中で会ったが、あれからでも足かけ三年、生きてるのか死んだのか、音沙汰もないので、中村のおふくろも、ひどく案じているようだぞ。——無事な顔を見せてやったか」

「いいえ。まだ……」

「家へは帰らねえのか」

「家へは、ちよつと、行つて来ましたが」

「——だのに、おふくろに、まだ顔を見せないとは、どういうわけだ」

「実はゆうべ、そつと、我家の外まで行つて来ました。けれど、おふくろ様や姉の顔を、外から一目見ただけで、鬨は跨がずにもどつて来たんで……」

「妙な奴だな。自分の生れた家じゃねえか。なぜ、今帰つて来まして、無事な姿を見せて、みんなにも欣ばしてやらねえのだ」

「そうして、会いたいののは、山々ですが、家を出る時、——かどの男にならなければ帰らないと、誓った言葉がありますから——それに、義父にはなおさら、今の姿では会えせん」

今の姿——と、いう日吉のことばに、乙若はもう一遍、彼の身装

を見直した。

白木綿が、鼠木綿と紛うほど、埃と雨露に汚れていた。油気のない髪、日焦に瘦落ちている頬、どこことなく、志を得ない人間の疲れと困憊が纏っていた。

「何をして喰っているのだ。この頃は」

「針売りをしていました」

「針売り」

「はい」

「奉公したのじゃないのか」

「二、三軒、武家の端くれみたいな家へ、勤めてみました」

「相変らず、すぐに飽きてしまうのだらう。もう幾歳になった」

「十八でございます」

「鈍に生れついた性分なら仕方がないようなものの、阿呆もいい加減にしろ、いい加減に。——馬鹿には馬鹿なりの辛抱づよいところがあるものだが、貴様ときたびには、その辛抱もない。これじゃあ、おふくろが嘆くのも、養父が持て余すのも、むりはねえや。……猿、いったい貴様あ、何になるつもりなんだ」

腑がいなさに、乙若はつい、久しぶりに会った日吉を、会う早々、叱ったり、罵ったりしたもの、心のうちでは、多分に、同情をもっていた。

もともと、日吉の実父の弥右衛門とは、生前、仲のよかった間だし、その後、養父の筑阿弥が、弥右衛門のあとに入夫して、哀れな遺子たちに、辛く振舞っていることはよく知っていたので、義憤に堪えないものがあつたのである。

——で、せめて、猿でも一人前になつてくれたらと、密かに、亡父のためにも祈っていたが、その日吉が、十八にもなつて、まだ

こんなかと思うと、腹が立つてならなかった。

「まあ、誰かと思ったら、中村のお奈加さんの息子だね。お前さんも、そんなに自分の子みたいに怒鳴ってみたって、仕方がないじやありませんか。——可哀そうに」

やがて。

外から戻って来た乙若の妻は、取り做して、井戸に冷やしてある西瓜を上げ、日吉にも割って与えた。

「まだまだ、十八ぐらいじゃ、何も分りやしませんよ。お前さんだって、自分の十八頃を、考えてごらんさないな。四十を越えても、まだ足輕長屋から抜けられないのが、世間並じゃないか」

「だまっていろ」

乙若は、ちよつと、痛いところを衝かれた顔をして、

「おれはな。おれのように一生を凡々と終つちやならねえと思うから、これからの若い者には、よけいいうんだ。——十五、十六といえば、元服して一人前、十八といえば、男は「かどの面構えがな」くちやあならねえ。……たとえば、勿体ないが、御主人の織田信長公を見る。当年、お幾歳だと思う。あれでいて……」

と、云いかけて、急に、また女房との争論を恐れたのか、思い出したように話を逸らした。

「そうだ、あしたはまた、その御主人のお供で、朝から狩場巡り、お帰りにまた、庄内川で水馬や水泳のお稽古だろうて。——お鼻おれも野駈けの支度だぞ。膝行袴の紐や草鞋を見ておけよ」

先刻から俯向いて、叱言を聞いていた日吉は、

「おじさん」

と、顔を上げて、訊ねた。

「なんだ、改まって」

「べつに、改まってではございませんが、信長公は、そんなに度々狩や川遊びにお出ましになりますか」

「何しろ……申しては恐れ多いが、飛んでもない腕白坊でいらつしやるからなあ」

「暴れン坊なんですね」

「——かと思うと、ひどく、行儀の厳しいところもあるがね」

「どこの国へ行っても、信長公のことは、余りよく申しませぬね」

「そうか。いやそうだろうな。敵国の者から見たら」

日吉は、急に腰を上げて、

「せっかく、お休みの日を、お邪魔して、申しわけございません」

「おや。帰るのか」

「また、参ります」

「なにも、そう急に、帰らなくともいいじゃねえか。一晚ぐらいは泊って行きな。——おれのいったことが、気に障ったのか」

「そんなことはございません」

「帰るなら、止めもしないが、早く、おふくろだけにでも、無事を見せてやんなよ」

「はい。見せてやります。……今夜は、中村へ帰ります」

「そうか。それならいいが」

と、乙若は、門口まで出て、日吉の姿を送ったが、心のうちでは、何か、いい気持がしなかった。

中村へ帰るといって乙若の家は出たが、その晩、日吉の姿は、中村の生家には戻っていなかった。

どこへ寝たか。

恐らく、路傍の辻堂か、寺の廂か、そんな所へ、野宿したのであるまいか。

松下嘉兵衛から貰った金はあるはずだが、それは、乙若の家を訪ねる前の夜、中村の家の外まで行き、母の無事なすがたを垣間見、そっと投げ込んで来たので、身には一銭も持っていなかったし、夏みじかの短夜なでどこに明かすも、夜はすぐに白みかけた。

——その日の、朝まだきである。

日吉のすがたは、西春日井の部落から枇杷島びわじまのほうへ向って、そのそ歩いていた。

彼は、何か物を喰いながら歩いていった。腰にも、飯の握ったのを、蓮はすの葉につつま、手拭てぬぐいで巻いて結ゆわいつけていた。

今朝の食物と、昼の食物とを、一文の銭のない彼がどうして得たか。彼には常に、

（食物は、どこにでも得られる物だ。人間には天禄てんろくがあるから）

という信条と、

（鳥獸とりけものにすら、その天禄がある。けれど、人間たちは、世のため、に働けという天のご使命をうけている者だから、働かない者は、喰えないようにできている。——だから人間は、喰うためあくせくするのは恥辱で、働きさえすれば、当然な天禄が授かるのだ）

と考えていた。

だから彼は、飢うえると、食う食欲より先に、働くことを先にする。その場合、仕事がないということも、日吉の経験にはないことだった。働こうとする時は、町で普請場ふしんばがあれば、大工や土かつぎの手伝いでもさせてもらう。重い車を挽ひいてゆく者を見れば、後を押す。汚い門前を見れば、箒ほうきを借りて掃かせてもらう。

頼まれないでも、彼は仕事を見つけ、仕事を作り、仕事を誠実にするので、一椀わんの食物や、一銭のわらじ錢せんぐらいは、必ず人が酬むくいてくれた。

恥とは思わなかった。

なぜなら彼は、喰うために、牛馬のごとく身を卑いやしめたとは思わないのである。少しでも、世のために働いたので、当然な天禄をもらうのだと、信念していた。

——今朝も。

春日井かすがいの部落で、早起きな野鍛冶のかじの家が開いていたのを見つけ、そこで鍛冶場の掃除を手伝い、その飼牛かうし二匹を曳いて、草を飼わせ、また、裏へまわって、水瓶みずがめいっぱい、水汲みをしてやったので、子持ちのおかみさんに喜ばれ、朝の飯と、昼のにぎり飯とを恵まれて来たのであった。

「……きょうも暑くなりそうだ」

日吉は、朝空を仰いで、独りつぶやいた。そうして得た飯に、きょうの露命はつないでいたが、頭のなかでは、ひとの思いもよらぬことを考えていた。

「——この天気なら、きょうもぎつと、信長公は、河遊びにお出ましになるにちがいない。足輕の乙若も、きょうはお供のうちに加わる番だと、きのう話していた」

やがて。

草の彼方に、庄内川のきれいな流れが見え出した。彼は朝露にぬれた姿を、草から出て、河原に立たせ、しばらく、水の美しさに見恍みとれていた。

「信長公は、毎年四月から九月の末頃まで、水馬、水泳のお稽古を欠かすことなく、この辺の河へ出てなさるとのことだが……はてな、どの辺だろう。乙若に聞いておけばよかった」

河原の石は乾いてくる。

草の実くさや、露によごれている日吉の着物にも、やがて、陽が

んかんと照りつけてきた。

「ここらにいてみようか」

漫然と、独り云って、日吉は河原の畔ほとりの草むらに、坐りこんだ。

信長公、信長公。

織田の腕白どの。三郎信長公とは、いったいどんなお方か。

——この日頃。

日吉の頭には、寝ても起きてても、その人の名が、護符ごふのように貼はりついて、離れなかった。

「いちど見たい」

彼の念願だった。

それを今日、果そうとして、早くからこの河原へ来て見たのだった。

亡き織田おだ備後守びんごのかみの跡目を継がれたはよいが、あのわがままで粗暴な大うつけでは、とても、備後守信秀のぶひでの跡は持ちこたえてゆかれまい。

とは、一般的な世評であつた。

粗野で——癩持かんもちちな——

たわけ者たわけびた若殿。

行く末の案じられる跡継あとつぎよ。

と、信長の名が出れば、必ずそこでは、そんな陰口かげぐちを聞いたものである。

日吉も、幾年のあいだ、巷ちまたのうわさを信じ、貧しい国土と、不幸な国主を持った郷土に、悲しみを抱いていたが、諸国の実情を見て来て、

(いや、底の底は、分らないぞ。——合戦のある日ばかりが、戦争ではないから)

と考えられて来たのだった。

一国一国には、それぞれ国の性格があり、そこにはまた、虚きよと実じつがあつた。

表面、脆弱ぜいじやくに見える国でも、内部は案外、充実している国もあるし、権威富力の大きく見えている強国でも、案外、中の腐すえている国もある。

たとえば、日吉が歩いた範囲でいえば、美濃の斎藤、駿河の今川家のように。

そういう大国と強国のあいだに挟まって、尾張の織田、三河の松平などは、見るからに貧しい小国だった。——けれど、その小国のうちに、何か大国にない力が潜ひそんでいなければ、敵として、存在はしていられないはずだった。

世間でいうように、信長が愚かであつたら、どうして、那古屋なごやが保とう。

ことし、その信長は、ちょうど二十歳はたちになると聞いている。

父の備後守信秀を亡うしなつて、十六歳から那古屋の城に主君として立つてからでも、もう三年はたっている。その三年に、粗暴で、うつけで、何の能も才もない若大将が、どうして、小国とはいえ、亡父ちちの遺産の領土を失わずに、しかも半ば、薄気味わるく思われながら、国土を持つていことができよう。

もっとも、人にいわせると、それは信長の力ではなく、家臣に偉いのがいるからだという。

平手中務、林新五郎、青山与三右衛門、内藤勝介——などという良い家来を、備後守も、生前から阿呆な三郎信長の末を案じて、付けておいたので、その謀臣衆ぼうしんしゅうの協力が今日、織田の柱となつてるので、お若い主君は、いわば置物同様にすぎない。——だから

先君以来の老臣らがいるうちはよいが、ひとり逝きふたり死に、その柱がなくなる頃になると、織田の衰亡は、火をみるよりも瞭らかであろう。

それを、誰よりも待っている者は、信長の妻の父にあたる、美濃の斎藤道三であり、次いでは、駿河の今川家であると——このような見透しは、世間、どこで聞いても、一致していることだった。

「……おや？」

日吉は、草の中から、首を上げて見まわした。

関の声がする——

河すじの上流に、黄いろい埃が揚つていた。

「何だろ？」

立ち上がって、耳を澄した。そして顔いろを変えた。

「何も見えないが、凡事ではないぞ。……戦争か」

彼は、急に、草を蹴って、走り出した。

だが、五、六町も駈けて行くと、そうでないことが分った。彼が朝から待っていた織田家の家中が、上流の河原へ来て、もう合戦の稽古をしていたのだった。

川狩といい、鷹狩といい、水泳の調練といつても、この頃の名のやることには、すべて戦備の心がけがあつた。戦争を離れては、生活がなかった。

「……ウウム、始まっている」

草間隠れに、日吉は遠くからそれを眺めながら、大きく呻いた。河原の向う岸に、堤の蔭から上の草原にかけて、織田家の定紋のついた陣幕がめぐらしてある。三、四カ所のお小屋からお小屋へかけて、その幕は翩翻と風を孕んでいるので、無数の兵たちは見えるが、信長のすがたは生憎と見えない。

眼を転じると——
幕とお小屋は、此方の岸にもあつた。馬匹がさかに嘶いてい

る。
わあッ——うわあッ——

という武者押しの声は、その兩岸から起つて、川波を呼び立てているのだった。日吉が、立ち止った時、一頭の放れ駒が河の中ほどからザブザブと駈け狂つて、下流の陸へ跳ね上がって行つた。

「これが、水泳のお稽古か」

日吉は、頷けなかつた。

世評というものは、たいがい好い加減なものである。信長を、暗愚の殿だの、粗暴なうつけ者だのといつても、では誰がそれをつき止めたかといえ、誰も真を追つて突き止めてはいないのである。毎年四月頃から九月にかけて、川狩や水泳の稽古に城を出ることは誰でも見ているが、それだけを知っているに過ぎなかつた。

今、彼が現地へ来て、目撃したところでは、決して、腕白な殿の水遊びや避暑ではなかつた。

烈しい軍馬の教練である。

規模は大きくない。元より野駈けの軽装だし、軍馬の数も少ないが、やがて貝の音に兵が揃い、押太鼓がとどろくと、兩岸の人数が、どつと河の中でぶつかった。

いちめんに河は飛沫となり、その真つ白な水煙のなかで、武者と武者、足軽隊と足軽隊とが己になつて、合戦をしはじめた。槍はすべて竹槍であつた。大勢が旋風になつて戦うなかでは、突き合うよりは、撲り合うのだった。外れた槍からも、白い虹が無数に立つた。その歩兵群を蹴ちらして、一騎、二騎、三騎——すべてで七、八騎の騎馬の武将が采を振り、自身槍を揮い、また、

声をからして駈け巡っている。

「大介、見参」

と、その中で、凛々しい声を放った騎馬武者が、一きわ目についた。

白の涼やかな帷子に具足、綺羅やかな朱太刀を佩き、織田家の弓道槍術の師範で市川大介とよぶ剛の者の馬際へ鞍を駈け寄せ、無法にも、青竹の槍で横はたきに一撲りくれて行つたのだった。

「小癩」

と、喚きあわせて、槍を引つ奪つた大介は、それを持ち直して、相手の胸いたへ突き返した。

端麗な人だった。その若い武者は、顔を紅潮させ、大介の突いて来た槍を片手につかみ、片手を朱太刀にかけて、きかない眉を示した。が、一瞬、大介の力に引かれて、真逆さまに落馬し、姿はざんぶと河水につつまれた。

——日吉は思わず、

「あ……あのお方だ。信長公だ」

と、独り呶鳴った。

ひどい、思いきつたことをする家来もあるもの。

信長は乱暴な殿と世間ではよくいうが、乱暴なのは、信長よりは、その近臣のことではないのか。

日吉は、そう思った。

——が、遠方で見たことである。果たして落馬したのが、その信長だったかどうか。

日吉はなお、われを忘れて、伸び上がっていた。渡河戦の猛演習は、まだその河の真ん中で、双方とも押し合っていた。主君の信長が落馬したのなら、他の臣下が騒いで救い上げそうなものだが、戦

っている者は戦のほか、わき目もふらないのである。

そのうちに。

戦場となつてゐる辺より少し下流の向う岸へ、ざぶざぶ、這い上がった者がある。

見ると、落馬した若武者であつた。——やはり信長らしい人だつた。

「退くかッ。馬鹿ッ」

濡鼠のからだを、そこに突つ立たせるとすぐ、地だんだして、叫んでいた。

遙かに、さっきの市川大介が、それを見つけて、

「東軍の御大将、あれに流れついて在わすぞ、つつんで、生擒れや」

と指さした。

徒歩の兵が、

「御免ッ」

「御免」

云いつつ、しぶきを蹴立てて、信長の前面へ、駈けて来た。

信長は、渚の竹槍を拾つて、ひとりの兵を、真つ向にたたき伏せ、次の群へ、抛りつけた時

「寄せはせじ」

と、味方の一隊が、駈けつけて来て、彼の身边を、敵から隔てた。

信長は、堤へ駈け上がると、

「弓、弓ッ」

鋭い声で呼んだ。

お小屋の幔幕のあたりから、小姓がふたり、矢と半弓を持って、転ぶように、すつ飛んで来た。

取るが早い、

「この河、渡すな」

と、河原の兵を、叱咤しながら、一矢をつがえると、ぶつんと切つて放ち、すぐまた、矢を嚙ませては、びゅんと弦を翻した。

鏃のついてない稽古矢はあるが、顔の真ん中を射られて、倒れる敵もあった。そして、彼一人が射ているとは思われぬ程、たくさんな矢が急射された。

射てる間に、弦が二度も断れた。断れるたび、弓を換えて、すぐにまた、射つづけた。

が、——そのうち。

必死でそこを支えている間に、上流の防ぎが崩れて、西軍の兵が、どつと堤へ駆けあがり、信長の休息小屋を、包囲して、関をあ

げた。

「敗けたッ」

信長は弓を投げ捨てた。
その時はもう、莞爾と、笑っているのである。そして、敵方の凱歌を、かえつて、愉快そうに、振り向いていた。

兵学の師、平田三位と、弓槍の師範役、市川大介とが、馬をお小屋のわきへ捨てて、駆け寄つて来た。

「殿、どこも、何ともございませんでしたか」

「水の中だ。何ともあるものか」

信長は、大介を見るとやはり無念そうに、

「明日は勝とう。大介、あすは憂い目を見せてくるるぞ」

と、少し眉を昂げている。

平田三位が、傍らから、

「御帰城後、きょうの御戦法について、御講評申し上げるでござい

ましょう」

と、いったが、信長はよくも聞かないで、その間に具足をかなぐり捨てて、水着一重になつて、河の深い所へ行つて、涼しげに独りで泳ぎまわっていた。

狂児像きやうじぞう

信長は、端麗だった。

彼が血をうけた遠い祖先に、よほど美しい女性がいたか、容貌の秀でた人がいたろうと思われる。

彼のみならず、十二男七女子という、多くの兄妹が、みな氣品の香りを持つているとか、目鼻だちがよいとか、どこか文化人らしい垢ぬけした質を持つていた。

わけて信長は、色白く、眉目秀麗で、何かにふと、きつと振り向く時など、ひとみの底から、きかない氣の光が人を射ることがあった。

だが、自身が氣がつくと、
はははは。

その光をすぐ笑いつつんで、人がそれと氣のつく間も措かなかった。

「またかと、うるそう聞し召すやも知れませぬが、御先祖のことは、念仏申すよう、明けても暮れても、飯を噛むまも、お忘れあつてはなりませぬ。……そも、織田氏の御先祖様と申せば、越前丹生氏神、織田劍神社の神官に在しました。なお天文のそれよりも前をただせば、小松平重盛公のお血すじ、さらに、溯れば、畏れ多くも、平氏は桓武天皇よりわかれ給うところ、申さば、金枝玉葉の御血の雫をすら、今のお身に伝えておうけなされているのでござりますぞ。……爺が度々申しあぐるまでもなく、よくよく御自

覺なさりませねばなりませぬぞ」

こう彼は常に聞かされる。

亡父の織田備後守信秀が、彼を、彼が生れた古渡城から移して、那古屋の城におらしめた時から、守役として、側につけておいた四名のうちの一人、わけても忠誠な老臣のいうところなのである。

平手中務だ。

どうも信長は、その爺が、常に煙たくて、うるさいらしかった。

「ああ分つたよ。分つておるよ爺——」
と、横を向く。

顔を振る。

少しも沁々とは聞かないのであつたが、平手中務は、それこそ彼自身が、念仏を申すように、

「亡きお父上備後守様の御生涯をよう思い遊ばせや、この尾張八郡をお伝え遊ばすには、朝に北境の敵と戦い、夕べには東隣の国境に征馬をお向けなされ、ひと月のうち、具足を解いて、安々と、お子たちの中にさざめいてお暮し遊ばした日は、幾日とてもござりませぬ。——しかも涙ぐましく御忠誠に在したことは、この乱国の中、四隣に戦の絶え間もない中をも、すぐる天文十二年の頃には、この爺めを京へお遣わしあつて、内裏四面の築土の御修理をなされますやら、また、四千貫文を朝廷へ御献上遊ばし、そのほか、伊勢外宮の御造営にもお力をお尽しなされました……。そうしたお父上をおもちなされ、御祖先には」

「爺や。もうよい。分つておるよ、何度聞いたか知れぬことを」

信長は氣に入らないと、すぐ美しい耳朶を鮮紅にした。

けれど、吉法師といった幼名の頃から、何でも知っている中務

には、さすがに、それくらいしか、不機嫌を見せられなかった。

中務もまた、彼の気性は、よくのみ込んでいた。理窟で説くよりは、感動に訴えるほうがききめのあることを知っていた。

で、信長が耳を熱くすると、

「お口輪を取りましようかな」

と、すぐ穂先をかえた。

「馬か」

「さればで」

「爺、そちも乗れ。一鞭あてよう」

騎馬で駆けまわることは、信長の大好きなひとつだった。それも城内の馬場では心にみたく、城下から三里も四里もある所を、よく一氣に駆け、一氣にもどつて来たりした。

（——寔に人を人臭しとも思われぬ和子君で在すでなあ）

とは、信長の幼少から守役の平手中務が、何か持て余すたびに傍人へもらして来た嘆息だった。

十三歳で元服し、吉法師の字を三郎と改め、十四歳初陣して、十六で父信秀にわかれた上総介信長の、人を人臭いとせぬ面だましいは、長ずるにつれて、いよいよ、傍若無人になるばかりだった。

父の葬儀の日、その式場においてさえ、こんなことがあった。

——御焼香。

となった折、

席から立った信長の姿を人々が見ると、長柄の太刀脇差に、七五三縄を巻いていた。袴もはいていないのである。

「あれよ、また、狂態な跡とり殿が、何の不法法」

と、あきれていると、信長はずかずか、仏前へすすんで、立居のまま、抹香をつかんで、御仏へばらつと投げ懸けて、驚く人々を

しり目にさつさと帰ってしまった。

「ても、呆れたうつけ殿」

「こうまでとは思わなんだが」

情の薄い者はわらい、情の厚い者は織田家のために、眼に涙をたたえて、言葉もなく白け果てたということであった。

「同じ兄弟でも、御舎弟の勘十郎殿は折り目正しゅう、俯目に始終謹んでおいであるに」

と、なぜ跡取が、こうもあべこべに生れたものかと悔む囁きも聞えたが、その時、末席にあった筑紫の客僧の某が、ひとり呟くようにいったことには、

「いやいや、彼こそは、行く末の国持つお人よ。おそろしいお方ではある」

沁々と、そう洩らしていたと傍にいた者が、後に家中へ語り伝えたが、誰ひとり、そうかと信じる者はなかった。

また、十六歳の信長には、もう内室がきまっていた。父信秀が生前に、平手中務が肝煎して、ようやく成立した婚約であった。

それは、美濃の斎藤道三の娘なのである。織田家とは多年、兵火に兵火をもって、鎬をけずり合つて来た宿年の仇敵国であったが、その斎藤家との婚約には、勿論、戦国のならいといつてもよい、政略の意味も多分にふくまれている結婚であった。

が、先も名に負う道三秀龍という肚ぐるいのが舅殿である。

もとより織田家の政策であることをのみこんで、しかも四隣はおろか、京にまで近頃は名高い織田のうつけ息子殿に、最愛の娘をもくれるというのである。尾張八郡の将来を、その炯眼で見こしていた上の承諾であることはいうまでもない。

程なく、信秀は四十二を一期に世を去った。

信長のうつけ振り、粗暴、狂態は募るばかりだとある。それも思うつぼだった。

——そして、

今年天文二十二年の四月。

上総介信長はちょうど二十歳。

「いちど、智どのの顔みたい。——双方より出向いて、富田の国境で、智、智の初対面遂げたいが」

道三秀龍が云い出した。

「承知」

と、信長の即答。

富田ノ庄は、美濃尾張のあいだにある一向僧の坊主領であった。戸数七百ほどの村落で、正徳寺という寺院がある。会見はそこでときまり、四月の下旬、上総介信長は曠れの人数を率いて、那古屋の城を出、やがて木曾川、飛騨川の渡舟も打ち越えて、青葉若葉につつまれた富田ノ庄へ押しすすんで行った。

弓、鉄砲の者、約五百。三間柄の長い朱槍約四百、徒士の郎党、足輕組の者、およそ、三百人あまりと数えられた。

肅々と流れて来る——

その中に、一団の騎馬隊は、騎馬の信長を囲んで前後に備え立て、いざといえ、そのまま戦隊になるような配備だった。

麦の穂は青い。もう夏めいた四月である。今、越えて来た飛騨川から、爽やかな風が、その長い行列の上を燦々と渡ってゆく。

富田ノ庄は、家々豊かだった。荒土ながら、穀倉のある家が多い。平和な真昼の籬に卵の花がうなだれていた。

「来た」

「見えた」

村端れまで出ていた斎藤方の小侍が二人、遙かに行列の先頭を見るや否、どこかへ宙を飛んで行った。

村を貫いている樺並木に雀のさえずりが、長閑だった。

その路傍の、小やかな一軒——土民の家の前に、小侍二人は、ひざまずいて云った。

「織田どののお列彼方に見えました。やがてもう、これへさしかるでございましょう」

民家の土間には、その薄ぐらい煤だらけな壁とは、余りにもふさわしくない、綺羅びやかな太刀、袴羽織の人々が、一群になって、潜んでいた。

「よし。——そち達も、はやく裏敷へ身をかくせ」

道三秀龍の側衆たちである。——奥には——いや、炉部屋の側の竹窓がある小さい部屋には、その道三秀龍が、窓べりに凭れて、往來のほうを見まもっているのだった。

初めて会う智どの。

しかも、いろいろな風評の高い上総介信長。

「いったい、どんな態たらくで参るか、どんな男か、公式に対面する前に、ちょっと垣間みたい」

という道三らしい考えから、路傍の民家にかくれて、先刻から待ちぬいていたのだった。

土間、炉部屋の近臣たちが、

「大殿、尾張衆が、はや見えた由にござります」

早口に告げると、

「うむ」

道三は、頷いたまま、さらに竹窓の端へ身を寄せて、じっと、眼をすえていた。

表の土間戸は、逸早く閉めきって、家臣たちは、わずかな隙間、板戸のふし穴などへ、顔をつけていた。皆……しいんと黙る。

並木の小鳥の声。

その小鳥の群れも、ぱつと羽音をのこして、飛び去ると、もう微風の音もしなかった。水を打ったように、街道はひそまり返る。

——と、程なく。

よく揃った兵隊の足なみが徐々に近づいて来た。磨きぬいた鉄砲の列、小隊四十名ぐらいずつ、十段に分列して、林のように流れて行く朱柄の槍組などが、眼の前をゆく。

道三は、息もせず、その武器や、兵隊の足つきや、隊伍の組み方を、見入っていた。

だが、やがて続いて、その肅然とした足なみの次に、馬蹄の音だの、大きな話声が乱れて来たので、

「さては」

と乗り出すように、道三は眼も放たずにいた。

見ると、騎馬隊の中に、一際優れた馬格の駒がさしかかった。見事な螺鈿鞍に、華やかな口輪を噛ませ、紫に白を緋い合わせた手綱を搔把り、智殿信長は、何か嬉々と、うしろの家臣を振り向いて、話しかけながら見えたのであった。

「……や？ あの状態は」

道三秀龍は、喉のあたりで、そんな声をもらした。

ひどく驚いた眼いろだった。

行列の中に見えた信長の扮装が、彼の眼を奪ったのだ。いや、呆れさせたのである。

かねて、異様な姿で押し歩くとは聞いていたが——

今、見れば、聞きしに勝るものだった。

逞しい駿馬の鞍に、ゆらと、乗りこなしよく据って、茶筌むすびの大將髪、萌黄の打紐で巻きしめ、浴衣染帷子、片袖ははずして着け、熨斗つき刀脇差には例のごとく——何かの禁厭のように——七五三縄を廻している。

その刀腰にはまた、火打袋だの、小瓢箪だの、印籠だの、紐付扇子だの、馬の一刀彫の根柢だの、珠だの何だの——七、八種のをくくりつけて、虎の皮と豹の皮とを縫いあわせた半袴の下には、何やら金襴の衣裳がきらきらと見え、

「大介エ、大介エ」

鞍のまま、身をねじって振り向いていう。

「ここか。富田ノ庄とやらは、はやこの村カッ」

それは、民家の窓の中に、身を潜めている、道三秀龍の耳をも、突き抜いてゆくほど、大きな声だった。

騎馬隊の中に、護衛している市川大介が乗りよせて、

「されば、ここが富田ノ庄にござりまする。舅君の道三様と御会見の場所、正徳寺もすぐそこござりますれば、何かにつけお行儀ようなされませ」

「ははあ、そうか。ここがもう富田か。——本願寺の坊官どもが領分とやら、穏やかだのう。ここには戦争がないな」

そんな言葉が聞えた。

黙ると、信長は、櫂の並木を仰向いて、青空をよぎった鷹の影でも見送ったのか——ゆらゆらと鳴る腰の太刀や、七つ道具を響かせて、すぐ通り過ぎてしまった。

表戸を閉めて、隙見していた道三の側衆たちは、思わず、
「ぶッ……」

「うふ、ふ、ふ」

口を抑えて、おかしさを咏^{こゝろ}えるのに、苦しがつていた。
「皆よ」

道三は、呼び立てて、

「もはや行列は皆、過ぎたか」

「終りました」

「見たか。智どのを」

「よそながら」

「どう見ても、世評を裏切らぬうつけ者、容貌^{きりよう}はよし、骨柄^{こつがら}も一通^{ひととお}りじゃが、すこし足らぬ。……ここが」

と、道三は、自分の頭を、指でついて、満足そうに苦笑した。
と、裏口で、

「大殿、お早く」

と、ほかの家来たちが、急^せきたてて云った。

道三はすぐ起つて、

「おおさ、氣^けどられては、信長はともあれ、眼はしの鋭い他の家来に氣まずいものになる。先を越えて、正徳寺へ参つておらねばなるまい」

とやどやと、側衆に囲まれて、その裏口から出ると、抜け道を急いで走り、行列の先頭が、正徳寺の門前で停った頃、彼は寺の裏門から奥へ駈^{かけ}けこんで、取り澄していた。

「——お出迎え」

「お出迎えを」

側衆たちも、あわただしく、衣裳を着かえ、廻廊や間ごと間ごとを、云い触れる声に応えて、大玄関へ出て行つた。

尾張衆の多人数が着いた。

寺門は、人に満ちた。

お出迎えに——と美濃衆はみな立ち払つたので、本堂、大書院、客殿は風の通るだけで、人影もなかった。

「大殿には」

斎藤家の老臣、春日丹後は、まだ起たぬ道三に向つて、そつと意向を訊いた。

道三は、首を振つて、

「起つに及ばぬ」

と、いった。

客は智^{むち}、自身は舅^{しゅうと}。それでいいとすればよからうが、きょうは初対面の儀式である。

智の信長も、一国の主^{あるじ}。故に、対等の礼を執つて、美濃と尾張の国境にあるこの本願寺領の中立地帯まで、双方から出向いて来たのであるから、舅とはいえ、出迎えの礼は執らねばならないのではないか。

そう丹後は考えたので、一応きいてみたのであるが、

——それには及ばん。

と、道三がいうので、

「はッ。……では、てまえだけでも」

「いや、その儀には及ばぬ。堀田道空^{ほったどうくう}が出ておればよい」

「左様にござりましょうか」

「丹後、そちは、対面の席に居並んでおれ。——また、そこへ行くまでの廊下に、武者ども、七百余名、残らず威儀を作つて並べておけ」

「すでに、着坐いたしております」

「武者かくしには、猛者^{もさ}どもをひそめ、智殿が通つたら、わざと咳^{せき}

ばらいさせい、庭前には、弓鉄砲の兵、肅として立たせ、そのほか息づまるまで、威圧を」

「仰せまでもなく、美濃衆の御威勢を示し、賀どのを始め、尾張衆の胆を、気をもって挫ぎおくこと、今日よりよい機はないと致して——御家中の者どもみな、腹ふくらませて待ちうけてござりますれば」

「ウム。……」

道三は、大玄関の方の気配をふり顧って、

「思うていた以上、たわけな賀どの。何につけ張合いもない、馳走の膳部、応対の礼など、まずまず、好い程でよからうぞ。……どれ、わしも客殿で待とうか」

道三は、欠伸でもしたいように——軽い伸びをしながら起って行つた。

春日丹後は、主命のあるところを、もっと徹底せしめるべく、廻廊へ出て、武士たちの威儀を檢め、また、下役をよんで、何やら耳打ちなどしていた。

すでに。

大玄関のほうでは、その頃、信長が式台を踏んでいた。

ここにも、斎藤家の家中、老臣から目見得格の若侍まで、百名以上、所せましと、平伏して出迎えていた。

「どこじゃ。休息の席は！」

水を打ったように、ひそまり返っている出迎えの中で、ふいに、足を止めた信長が、無遠慮な声で云ったので、

「はッ——」

と、上目越しの顔が、一斉にうごいた。

つつつと寄り添った斎藤家の家老堀田道空が、信長の足もとに

平伏したまま。

「こちらで、何はともあれ、暫時の御休息を——」

指さして、

「彼方か」

「はッ、御案内申しあげます。——御免を」

屈み腰に。

信長の先に立ち、大玄関から右へ進み、橋廊下を渡る。

信長は、右を見、左を見、

「よい寺じゃなあ。見よ、藤の花が真盛りじゃ。——風が香う」
扇を胸にうごかしながら、自身の近侍たちと共に、一室へはいった。

休息の時間は約半刻ほどで、やがて信長は屏風の中から起つた。

「御案内たのむ。舅殿にお目見得いたそう。山城どのには、いずれに在すかや」

見ると、

茶筌髪は、折鬚に結い代えている。豹、虎の革の半袴は捨てて、正式の折目袴に、白綾の小袖、金糸の縫紋、そして濃い紫地に桐もようの袴を着け、帯びた小さき刀も、提げた太刀も、華奢な風雅男のすがただった。

「……あッ」

「お……」

と、斎藤方の家臣も目をみはり、日頃の道化した身装の彼ばかり見つけている、織田の家中も、びっくりした。信長は、ただ一人、ずかずかと大股に、橋廊下を踏み渡って、

「案内の者！」

と、前後を見、

「近侍たちを連れ纏うては寛ぎがならぬ。信長ひとりにて、舅殿へお目にかかろうぞ」

そこでまた、声を高うして云った。最前、出迎えに出た、家老の堀田道空は、信長が自分を眼にも入れていない様子に、むっとして、「こなたへ、お早うお出でられ候え」

と、少し子供扱いにして、それへ来合わせた春日丹後と共に眼くばせて、

「これは——」

と、本堂の両側に、ぴたと座を構え、わざと厳しく、

「斎藤山城守が家老職、堀田道空にて候。お見知りおかれませ」

「てまえば、老職春日丹後。——御遠路、つつがなくお渡り遊ばし、折ふし、日もうらかにきょうの御対顔、祝着にぞんじ上げ奉りまする」

左右から、こう色代しているまに、信長は、拭き磨いてある廻廊を、つつつと足を早め、

「ふム。……よう彫つてある」

欄間の彫刻へ、顔を上げ、そこらの武士——斎藤山城守道三が手飼の者ばかり数百名、ずらりと居並んでいる前を路傍の草ほどにも眼をくれず、真っ直ぐに通つて行つた。

そして、客殿の前まで来ると、尾いて来た道空、丹後の二家老を、後に見、

「いなか」

「御意にござります」

「うむ」

頷いて、ずかと、廻廊の板面から、一段高い畳のうえに踏み上がる、と、落着き払つて、設けの席に坐り、そのまま縁の中柱へ、ゆ

ったりと背を凭せかけていた。

すこし、顔を上げ気味に。

格天井の絵でもながめているかのような風である。その眼のすずやかさ。眉目の優しさ。

室町の京公達でも、こう整った姿と面ざしは少なからう。

しかし、それにばかり見惚れていた者は、天井を見ている彼のひとみの、不敵なものを見遁していた。

——と、その客殿の隅に、立てまわしてある屏風のうしろに、人の気はいがした。山城守入道道三は、その蔭から立つて、信長の上座に、鷹揚に着席した。

「……………」

信長は、そ知らぬ風情をしていた。——というよりは、うつつに、扇を袴の前で弄びながら、そら嘯ぶいていたといったほうが近い。

「……………」

じろと、道三は、横に見た。

舅からものいう法はない。そう自己を持して黙っていたらしい。

一瞬、妙な空気になった。道三の肩に、険しい針が立った。

——堪りかねた家老の堀田道空は、信長の側へすり寄つて、頭を畳へすりつけながら、

「それに在すお方こそ、山城守道三様にござります。——ごあいさつを」

いうと信長は、

「むう。左様にてあるか」

と、初めて、柱から背を離して、坐り直した。一礼して、

「これは、初めて御対面つかまつる。織田上総介信長にてござる。お見知りおきください」

彼から、改めて、こう挨拶すると、道三も気色を柔らげて、

「わしが山城じゃ。かねがね、一度はお会いせいでなまるまいと存じおったところ、今日、宿望を果して祝^{しゅうちやく}着^{ちやく}」

「信長も、近頃うれしいことの一つです。まずまず、舅殿には、老いて益々、御健勝に渡らせられ、何よりでござる」

「なに、老いてとな。山城もはや、ことし六十を迎えたが、まだまだ、老いた気はせぬ。お許^{こと}らはちょうど、卵の殻を出たばかりの雛鳥^{ひなどり}よ。はははは、男ざかりは、六十越えてじゃ」

「頼もしい舅殿を持ち、信長は仕合わせ者でござる」

「そうか。何せい吉い日^{よひ}ではある。道三もたと生きよう。次の会う日には、孫の顔など見せなされ」

「心得てござる」

「気のさくい賀どのよ。——丹後」

「はッ」

「膳部^{ぜんぶ}のしたくを。——お湯漬でも」

眼で——道三は何か、丹後に意をのみこませた。

「心得てござります。……ただ今」

と、春日丹後は、座をすべって行った。

はてな？

彼は、道三の眼じらさが、何を意味したのか、ちょっと肚を酌^くみかねていたが、最初の気まずい主君の顔が、途中から晴々して、むしろ信長の機嫌をとる態度に変わっていたので、さては、一度粗末でかまわぬと吩咐^{いっぷ}けた膳部^{ぜんぶ}を鄭^{てい}重^{ちゆう}にせいと、云い直したのであらうと、その通り心を配って出してみると、道三は満足の様子に見えた

ので、心のうちでほっとしていた。

舅^{しゅうと}の道三と、賀^{しゅうと}の信長と。

ふたりの間に杯^{さかずき}事^{こと}があつて、はなしはなお、気が楽になつてきた。

「そうそう」

信長は、思い出したように、突然云いだした。

「山城どの。いや舅どの。時にきようは、これへ参る途中、珍^{めづ}かな者に会つてござる」

「ほ。どのような？」

「されば、舅殿と瓜^{うり}二^{ふた}つの老いぼれが、民家の破れ窓^{まど}より、信長が行列を、覗き見しておつた。——初対面の舅殿なれど、初の御見^{ごけん}とは思えぬほど、はてさて、最前の老いぼれはよう似かようてござつた」

ははははと、その唇^{くち}を、信長は半開きの扇子で隠した。

道三は、苦汁^{くじゅう}をなめたように、黙つてしまった。堀田道空も、春日丹後も、肌着に汗をにじませていた。

湯漬を喰べ終ると、

「いや、長坐長坐、陽の入りまでには、飛驒^{ひだ}川^が越えて、こよいの宿舎^{しゆくさ}まで退^{さが}りとうござる。——どれ、お暇を」

「帰らるるか」

道三は、一緒に立って、

「賀どのの帰館とある、名残惜しい、そこまで、見送り申そうぞ」彼もまた、その日のうち、美濃の城地へ、帰るのだった。

三間柄^{さんげんえ}の朱槍^{しゆしやう}の林は、夕陽を背にして、東へと勢揃いして帰つた。美濃衆の槍隊は、それに比して、みな短く、何となく氣勢も昂^{あが}らなかつた。

「ああ、長生きもしようない。——今に見よ。この道三が子らも、あのたわけ殿の門前に、駒を繋いで、生を乞う日がやがて来よう。ぜひもない……ぜひもない儀だ」

その途中、道三秀龍は、駕籠かごのなかで口惜しげに、はらはらと落涙しながら、近侍の者にいったということであつた。

出仕

どうん。どうん——

武者太鼓が鳴る。法螺ほらの音が曠野こうやをわたる。

しぶきを上げて、庄内川に泳いでいた者、または野を駈けていた騎馬の者や、竹槍調練をしていた歩卒など、

「御帰城だ」

「引揚げ——」

と、一斉に、河原の仮屋を中心に馳せ集まって、またたく間に、三列四列、横隊になった軍馬が肅しよくとして、主君のすがたが鞍に乗るのを待っていた。

半刻はんときの余も、泳いでは河原に上がって、太陽に肌を焦やき、また、川へ躍り入っては、河童かっぱのように、存分水と戯たわむれていた信長は、

「帰ろう」

云い出すと、仮屋のなかへ駈け込んで、白の水着腹巻を捨て、肌のしずくを拭くがはやいか、すぐ下着、狩衣かりぎぬを着込み、小具足つけて、

「駒を、駒を」

と、その気短な吩咐いいつけは、彼の側を追いまわすように従いて歩いている近習たちに、いつも泡を吹かせるのだった。

何につけ、信長の手早いことと、性急なものには、日常心得ぬいている近習たちではあつたが、それでも面喰めんくらうことがしばしばだったし、また、青年らしい壮気と茶気の満々なこの若い主君は、それ

を知ってわざと不意を衝くようにも思われた。

けれど市川大介は、さすがに兵法者であった。信長がどう虚を衝いても、大介が命令一下に、貝が吹かれ太鼓が鳴ると、どんなに乱れていた兵も馬も、青田の早苗のように、揃って並んだ。

短気はいうが、信長の機嫌は、顔にあらわれ、満足そうであった。

——きょうも。

すでに朝から二刻^{ふたとき}ほど、烈しい教練をやったので、信長は、那古屋^{なごや}の城へ人数を向け、自身もその中の一騎となつて、庄内川の河原から引き揚げて来た。

ちようど、土用の太陽は、曠野^{こうや}の真上にあつて、火車のように灼けていた。水に濡れたままの兵や駒は、縦隊を作つて蛻^{うね}つて来た。キチキチキチ……と青い蝨^{はつた}が信長の姿に飛び交う。むうつと暑い草いきれが面を撫^なであげる。

水に浸^{ひた}つて、鳥肌になつていた顔には、もう汗のすじが流れ出す。信長は時折、馬上で顔の汗を肱^{ひじ}で横にこすつた。もうそろそろ常の特色が出て、粗暴で不良性で、うつけといわれる挙動が、眼づかいにも、することに、及んで来た。

「あれッ。何だろ。——待て待て、異^いな奴が、駈^かけて来るぞ」突然。

信長がそういつて、列を振り向いた時、それより早く、何事かに気づいた後方の武者たちが、列を脱^ぬけて、五、六名、ばらばらッと背よりも高い草むらの中へ、駈^かけこんでいたのである。

そこに、隠れていた者がある。

それは今朝からこの附近へ立ち廻つて、信長へ近づく機会を半日も待ち構えていた日吉^{ひよし}であった。

さつき、密^{ひそ}かに信長の姿を川に見て、折もあらばと、うろついて

いるうち警固の足輕に見つかつて、脅^{おど}されたので、帰城の道すじを考えて、道の辺^{みち}の深い草むらの中に潜^{もぐ}りこんでいたのだった。

(今だッ！)

と、彼は心に奮^{ふる}い立つと、その意志の前には、何ものも見えなかった。

ただ馬上の青年信長のすがたが、彼のらんらんたる眸^{ひとみ}のうちに、大きくいつぱいに在つただけであった。

——その時。

日吉は大声で、何か叫んだ。

が、何をさげんだか、自分でもわからなかった。生命^{いのち}がけである。

信長の耳へ、その声も届かず、近づきも得ないうちに、警固の者の朱柄^{あかえ}の長槍で、突き殺されるかもしれないのである。

それを怖^{おそ}れては、出来ないことなのだ。彼にとってはこの一瞬が、生涯^{うしお}の潮へ乗るか反^そるかであった。

草むらから身を起すと、信長の姿を目がけ、眼をつぶつて、駈^かけ出しながら、

「望みある者でございます。お召仕^{めしつか}いくださいましッ。——主と仰ぎ奉つて、身命^{なげう}を抛^なつて、働きたい望みある者でございますッ！」

自分では、

駈^かけつつ、それだけの言葉を、大声で訴えたつもりではあるが、非常な昂奮をしていたし、とたんに、予測していた警固の士が行列を出て、自分と信長のあいだへ、槍^{やり}を把^とつて遮^{さへぎ}つて来たので、気は上ずり、声は割れて、人には何と聞えたか、恐らく、意味をなしてはいなかったらうと思われる。

それになお――

彼の風体は、ただの土民より惨めだった。髪はよごれ、埃や草の実がたかっていた。顔は汗のすじを描いて、黒く赤く、眼ばかりが、飛びつくように、信長のほうを見て駈けて来たのである。

「こらッ、何処へ」

「無礼者ッ、突き殺すぞ」

日吉の眼には、遮る槍も見えなかった。

が――槍の柄で、向う脛を払われたので、信長の馬前から十歩ほどてまえで、一度、もんどり打って倒れた。

しかもまた、刎ね起きて、

「――望みあんなる！ 望みあんなる！ わが君ッ。わが君ッ！」

喚きつつ、槍のあいだを駈け、信長の駒の鎧へ、つかまろうとした。

「穢い奴めッ」

信長が、一喝した時、日吉のうしろから追いつた士の一人が、襟がみを把って、彼の体を、大地へ抛りつけた。

それへ向って、

「こいつ！」

と、槍が走ろうとした時、

「突くな」

信長がいった。

見も知らぬ――そして穢い姿をした異様な小男が――自分へ向って、家来でもないくせに、わが君、わが君、と呶鳴りながら駈けて来たのが、ふと信長の眼を注意させたのであった。

いや、もつと大きな理由は、日吉の満身に燃えていた、希望の焰が、信長をして、思わず、

――待て！

と、止めさせた最大な力であったかも知れない。

「問うてやれ、何か、いわしてみい」

信長の声が、耳にはいると、日吉は体の痛みも、近侍たちの眼も、ほとんど覚えなく、その人の姿だけを仰いで、懸命にいった。

「――父は元、御先代のお館、信秀様の足輕組に仕えおりました、木下弥右衛門と申すもの。てまえは、弥右衛門の子日吉といい、父の亡い後、中村で母と共に暮して来ました。年頃、ふたたび御奉公の折もがなと、伝手を求めておりましたが、所詮、御直訴のほかはないと、死ぬる気で参りました。――すでにここで突き殺されて死ぬる気でございましたから、後々、御奉公には、生命惜しみはしまいと、自分でも思われます。どうぞ、私の生命ひとつ、拾い取って、お召仕い下さるなら、草葉の蔭の父も、御領下に生れた私も、共に本望にぞんじまする」

早口だった。半ばは夢中だった。けれど日吉が、

（この君ならでは）

と、見込んで、生命を賭して訴えただけの情熱は信長の心へ、十分に届いた。信長はむしろ、日吉の言葉以上に、日吉の真実を買った。

しかし、苦笑して、

「怪態なやつよのう」

と近侍を顧みながら云い、そして、馬上から、

「我に、仕えたいというか」

「はい」

「して、汝は、何の能やある」

「何の能もございませぬ」

「何の能もなく、主取りして、何をいたそうと思うか」

「事ある時、死なんと思ふのほか、べつによき能も持ちませぬ」

信長は、すこし氣に入つたらしく、口ばたに、笑くぼを作つた。

——それからなお、じつと、見直して、

「よしッ。——したが其方^{そち}はただ今、我を目がけて、わが君と、再度まで呼ばわつたが、信長はそちを、家来とゆるしたことはない。

そちもまた、召仕われぬ身で、何故、我をわが君と呼ばわつたのか」

「御領土の下に生れ、日頃からまた、仕えるなら彼の御方^{おかた}と、胸に思い込んでおりましたため、つい、口にも出たものと思われます」

信長は大きく頷^{うなず}いた。そして、市川大介を顧みて、

「大介」

「はあ」

「おもしろいぞ、この男」

「いかさま」

大介も苦笑した。

「望みにまかせ、拾うてくれよう。日吉とやら、きょうより出仕せ
い」

「……………」

日吉は、声がつまって、咄嗟^{とつさ}にその欣^{よろこ}びを、口に出せなかった。

行列の武者たちは、

「また、わが殿の、物好きな」

と、驚いた顔したが、その中へ日吉がこのこはいって来たので、

「おい、もっと、列の後の方に従^{したが}け。荷駄^しの尻^ぽ尾^ぼへついて来い、

荷駄^しの尻^ぽ尾^ぼへ」

と、眉をひそめた。

「はい、はい」

唯々^いとして、日吉は、行列の最後方に尾^ついて歩いた。それすら彼は夢心地になるほど欣^{うれ}しかった。

信長の行列がかかると、那古屋の町々は、掃^はいたように、往来が開かれ、廂^{ひさし}の下や辻には、人間の頭がたくさん土下座していた。

日吉は、初めて、そういう往来の真ん中を歩いた。そして行列の前方に、遠く主人の背なかを見ながら、

（この道だ。この道だった）

と、思った。長いあいだ探^{さが}しあぐねた本道へ、今ようやく、出て来たという心地である。

だが、その主人は、武者を率^{ひき}いて、町を歩くにも、傍若無人だった。少しも取り澄^はしてはいないのだ。家来たちと、話はするし、笑うし、喉^{のど}が渴^{かわ}いたといつては、瓜^{うり}など齧^{かじ}って、馬上から、瓜の種を、吐きちらして歩いた。

那古屋城^{なごりやしろ}が、前に迫った。

濠^{ほり}の水は青く沸いていた。

唐橋を渡って、行列は城門へ蜿蜒^{うねうね}と隠れて行く。——日吉は、生れて初めての、橋を越え、門を潜^{くぐ}った。

秋の頃だった。

刈入れに忙しい人々を田の面^{おも}に見ながら、てくてくと中村へ急いでゆく小背丈^{こせだい}な若侍^{わかし}があった。

「おっ母さんッ」

若侍^{わかし}は、筑阿弥^{ちくあみ}の家の前まで来ると、恐ろしく大きな声で訪れた。

「まあ！ 日吉ッ……」

彼の母はその後、また、子を生んでいた。干し拵^{あずき}げている小豆

の中で、子を抱いて、弱々しい皮膚を陽なたに曝^{さら}していたが、「おお?」

振り顧^{かえ}つて、変ったわが子の姿を、突然そこに見ると、悲しいのか欣しいのか、彼女の顔に、一瞬、つよい感情がつきぬけて、眼は涙にくもり、顔じゅうの筋はびくびくふるえた。

「わしじゃ! おつ母さんッ。……みんな達者でか」

飛びつくように、母の薙^{むしう}へ——その乳の香のする懐^{ふところ}のそばへ、日吉が坐りこむと、母は片手の乳のみ兒と同じように、日吉をも抱きよせて、

「どうしやった。どうしやったぞ? ……」

「どうもしません。きょうは、一日お暇^{いそぎ}が出たので、お城へ御奉公に上がってから、初めて外へ出たのです」

「あ……そうか。……それで安心しました。突然来やったので、何ぞまた、不首尾でもでかして、お城を追われて来たのではないかと、わしは、胸がどきッとして……これこのように冷汗をかいてしもうたがの」

ほんと、安心したのであろう。彼女は初めて、笑顔を見せた。

そして沁^{しみ}々、わが兒の成長をながめ、また、垢^{あか}のついていない小袖や、髪^{かみ}の結いぶりや、刀、脇差などを見て、ほろほろと涙をながした。

「欣んで下さい、母上。やっと私も、信長公の御家臣の端^{はし}に加えられ、この通り、まだ御小人組^{おこびとぐみ}の端ではありますが、どうにか侍奉公する身にはなりました」

「ようなあ。……ようまあしやったなあ」

檻^{つづれ}褌^{つづれ}た袖口をあてたまま、彼女は顔を上げ得なかった。

その背を、今度は日吉が抱えてやりながら、

「きょうは、母上に欣んで戴こうと思って、朝から髪も結い、小袖も新しいのを着て来ました。……けれど、まだまだ、これからです。私が御奉公を見せるのも、ほんとに、欣んでもらうのも、——おつ母さん、どうか、長生きして下さいよ」

「この夏の頃、そなたが、庄内川の河原で、御領主様へ向って思いきったことしやったと聞いた時……わしはもう、そなたの生命^{いのち}はないものと、泣き明していたものを……こんな嬉しい目に会おうとは」

「その後、委細^{おとわか}は、乙若^{おとわか}どのから、言伝^{ことづ}てがあつたでしょう」

「おお、乙若^{おとわか}どのが来て、そなたが御領主様のお心にかない、御小人衆に抱えられたと聞かされて——もうそれを聞いてやれうれしや、死んでもよいと思いました」

「ははは。これしきのことで、そんなにお喜びなされては、これから先、どうしますか。——まず第一に、お聞かせしたいのは、御主君信長様から名氏^{みやうじ}を名乗ることをゆるされました」

「ほ。なんと? ……」

「姓は以前の木下^{きのした}。名は藤吉郎と改めました」

「木下藤吉郎といやるか」

「そうです。よい名でしょう。もうしばらくは、この茅屋^{あばらや}と檻^{つづれ}褌^{つづれ}の御辛抱をねがいますが、母上も、もっとお心を、確^{しか}と大きく持つてください。——木下藤吉郎の母であるぞと」

「うれしい。こんなうれしいことはない」

母は、そればかり繰り返して、藤吉郎のいう一言^{こと}ごとに、すぐ涙してしまうのだった。

(こんなにも、欣んでくれる人がある!)

藤吉郎は、それを大きな幸福に思った。世の中に誰あつて、こん

なに真実に、些細なことをも、大きく欣んでくれる者が、この母を措いてどこにあらうか。

三年、五年の漂泊も、その間の飢えや艱難も、むしろこの一瞬の幸福を大きくするために越えて来たもののようであった。

「時に、姉上は、どうしましたか。姉上の姿が見えませんが」

「おつみか。おつみは、よそへ刈入れの手伝いに行っている」

「丈夫ですか。元気ですか」

「変りはないが、あれものう……」

と、ふと母は等しい愛を、おつみの傷ましい青春へ思いやった。

「帰って来たら、そういつて下さい。姉上にも、長いご苦労はかけません。今に、この藤吉郎が一かどになつたら、縹珍の帯、金紋の簞笥、嫁入りに不足はさせぬと。……はははは、相かわらず、私のいうことは、とりとめない、母上もお思いでしょうな」

「もう帰るのかや」

「お城仕えは、いちだんと厳しゅうございます。……それにな、母上」

と、藤吉郎は、声をひそめて、

「おうわさ申しては、勿体ないですが、一国一城の御主君という身も、お側近くに仕えてみると、なかなか下々の思うているようなものではありません。世間から見ている信長公と、那古屋城の中の信長公とは、たいへんな相違ですよ」

「そうであらうな」

「お可哀そうなくらいです。ほんとのお味方という者は幾人もありません。譜代の家来も一族も肉親までが、あらかた敵です。その中にいらつしやる信長公は、まだ二十歳の孤君です。——百姓の喰えない苦しみが、一番辛いものだと思つたら、どうしてどうして、

そんなものではありません」

「勿体ないのう。……まだわし達は」

「そう思えば、御辛抱もできましよう。が、人間と生れたからには、それでいいものではありません。幸福の道を切り拓いてゆきます。

信長公も——それから藤吉郎も行く末には」

「その気持はうれしいが、余り、功に逸っておくれでない。たとえそなたが、どれほど出世しようと、わしの欣喜は、これ以上はない」

「では、御機嫌よう」

「もちつと、話して行かれぬのか」

「御奉公が大事ですから」

彼は黙つて、母の庭へ、なにがしかの金を残して立つた。そして頻りと、懐かしそうに、そこらの柿の木や、籬の菊や、裏の物置小屋などを、何度も見まわして帰って行った。

その年は、それきり来なかつたが、年の暮には、足輕組の乙若が来て、

「藤吉郎から頼まれたが」

と、一反の織物と、金子と、母の薬とを入れた包を届けて来た。

その折、乙若の話には、

「今は、御小人組の端だが、二十歳にでもなれば、もちつと、お扶持も増されようし、御城下のお長屋にでも住むようになったら、母上を側へ呼ぶのだといっている。あの息子も、ずいぶん突拍子もないところもあるが、割合に入づきあいはいいとみえ、朋輩たちにも、そう嫌がられてはいないようだ。……何しろ、庄内川であんな無茶をしたにしては、生命びろいをしたようなものさ。運のいい男だよ」

と、藤吉郎の近状を、そんな程度に伝えて帰った。

おつみは、その初春、初めて垢のつかない小袖を着たので、「弟が送ってくれました。……お城にいる藤吉郎が」

と、どこへ行っても、弟が弟がと、口に出さずにいられなかった。

じゃじゃ馬

どうかすると信長は、無口になって、終日鬱ぎこんでいる日があった。非常な癪癖を抑えるためにはまた、非常な無口と憂鬱の現象が、自然起るのかも知れない。

そんな時である。

「卯月うづきを出せ。卯月を」

いきなり呼ばわって、城外の馬場へ駈け出して行ったりした。

先殿様の信秀時代には、一年のうち半年以上も、たえず西に攻め東に護り、一生戦争に暮していて、居城のうちに落着いていられる暇もほとんどなかったくらいだが、そんな中でも、およそ朝は祖先の礼拝、近侍の受礼、講書や武道の稽古、それから夕刻まで領内の政務を見、また晩には、軍書に親しむとか、評議とか、寸暇を寛いで家庭の良い父になって興じるとか——一定の規律があったものだが、信長の代になっては、そういう定規じょうぎはなくなってしまった。

というよりも、信長自身の性格が、そういう定規にあてはまらないのである。

(やろう！)

と思い立つことも、

(止めよう)

とする意思も、彼の心のなかでは、常に、夕立雲の如く、唐突に去って、唐突に起ってゆくので、彼自身さえ、自身を規律で制していることができないらしかった。

あわてるのは近侍であつた。

きようは珍しく、書物に親しんでおられる——きようはまた可憐らしく、亡き御先代のために、お仏間にお坐りになった——。などと油断していると、雷の子のように、

「卯月ッ。卯月を曳けッ」

と、声がする。

声が出た時にはもう、そこにはいないにきまつていた。時を嫌わぬこの殿の行動に、近侍たちはあわをくって、厩へ駈け、馬場へ追いかけて、それでも、

（何を愚図愚図している）

と、いわぬばかりな顔をしている主人の前へ、ようやく駒を曳いて行くのだった。

卯月というのは、彼が乗り馴れた白い愛馬だった。しかしこの馬もやや老境に入つて、旺んな信長が乗り叩くには、彼も物足らなかつたし、馬も物憂くなつていた。

「……ち。ち。ちッ」

信長は、口輪を持つて曳きまわしていたが、

「重い。う。水を飼え」

と命じた。

「はッ」

馬柄杓を把つて、ひとり馬の口を開け、がくと水をぶっかけた。

信長は、馬の口へ手を突つこんで、馬の舌をつかんだ。

「卯月め、きようは悪い舌をしておるな。これでは脚の重いはずじゃ」

「風邪ぎみのようではございません」

「卯月も、老いて来たか」

「大殿のおかたみでございますから、はや馬齢もだいぶ」

「馬齢か。なるほど、那古屋の城には、卯月ばかりか、馬齢のみ取つてゆく老いばれども何と多いことじゃ。いったいに今の時勢が馬齢の世の末じゃ。十幾代にわたる室町將軍家を始め、規律づくめ、儀礼づくめ、嘘づくめ。腐っている。老ぼれておる！」

誰にいうのでもない。天へ怒るように独り語に云い、そしてぱつと、鞍へあがつて、袴を割ると、

「風邪ひき馬を、ひと鞭、汗とりしてくれよう」

と、馬場を駈け始めた。

騎馬の上手は、天稟だった。市川大介が師範であつたが、近頃は独り乗りこなして、むしろ大介を後に見ていた。

若い元氣いっぱいな信長にたたかれると、卯月はやがて、汗にぬれて来た。——と、彼の駒を、恐ろしい脚速で、鮮やかに追い抜いて行つた一頭の黒鹿毛があつた。

不意に、自分の駒へ、後塵を浴びせて追い抜いて行つた黒鹿毛を見ると、信長は、

「あッ、五郎左め！」

と、躍起になり、

「小癩な鹿毛」

と、競つて行つた。

五郎左という若侍は老臣の平手中務の子で、城内では鉄砲頭を勤め、優れた士のひとりだった。

先代信秀が、信長のために、傳役としておいた老臣の平手中務には、三人の男子があつた。惣領が五郎左衛門、次男が監物、三男を甚左衛門といった。

信長の気性が、その時、無意識に駆りたてられていた。

追い抜かれる――

ひとに遅れをとる――

後塵を浴びる――

おくびにも、そういったことは、そのままではゆるされない彼の気性だった。

びゅッ、びゅッ。ふた鞭ほど、彼は、烈しい鞭を自分の駒の卯月に加えた。

もう老いかけてはいても、卯月も名馬である。

大地は、蹄に鳴り、卯月の蹄が、大地を蹴るのが見えないほど、迅い脚で駆け出した。

卯月の銀毛のような尾が、真ッ直ぐに風を曳いて、五郎左衛門の鹿毛のそばを、勢いよく駆け抜けて、前へ出たので、五郎左は、

「殿、殿、お馬の蹄が割れますぞ」

と、注意した。

すると信長は、

「五郎左、もう続けぬのか」

と、すこし擲揄していった。

五郎左もまだ二十四、五の若氣であり、主人に上手のいえない士だった。心外な、という顔して、

「何の――」

と、ばかり追い込むと、信長も負けない気になって、駒の鎧をたたきに叩いた。

卯月は、織田の卯月と、敵国にまで聞えた名馬であり、値にしても、その馬格からしても、五郎左の飼っている鹿毛などとは、本来、比較になる馬ではなかった。

けれど鹿毛は若く、鹿毛の乗人はまた、平常、信長のように、主君扱いされて、驕っている者とはちがう。なお、馬に騎る修行も鍛練も、ずっと違う。

五郎左は、前を駆ける信長の卯月をめがけて、遮二無二、迫って行った。

二十間ほども越された距離の差が、十馬身ぐらいつまり、五馬身となり、一馬身となり、鼻ぐらいな差になって来た。

先人を越すは易く

後人に越されざるは難し

という古語のとおり、それを越されまいとする信長は、息がきれて来た。

そして、その息を――一息抜くまに、五郎左衛門の駒は、鮮やかに彼を追い越し、ぱっと、砂塵を後に浴びせて、なお、馬場を半廻りも先まで、馬の余勢なりで跳んで行った。

「ちいッ」

と、舌打ちしながら、信長は鞍をすてて、地上へとび降りていた。自分の本質をむき出して、しかも闘い破れた苦しい気持から、その面は、喘いでいる馬よりも、悲痛だった。

「ウウム。良い脚だ。あの鹿毛は……」

信長は、自分の敗因が、ただ鹿毛の脚にあるものと思って、独り唸っていた。

鹿毛と卯月とが、烈しい脚を競合って駆け抜けたのを、遠くから眺めていた家臣たちは、やがて敗れた信長が、途中で駒から降りてしまったのを見ると、

「やつ、五郎左に抜かれて、御気色を損じたに違いないぞ」

と、後の不機嫌を案じながら、あわてて此方へ駆け集まって来

た。——と、誰よりも早く、信長に近づいて、茫然としている信長の前へ、

「お水を。……お水を一口」

と、ひざまずいて、塗柄杓ぬりびしゃくをさし出した小者があつた。

それは先頃、御小人組の中から選ばれて、信長の草履ぞうりをつかむ小者にまで昇格した藤吉郎であつた。

草履取といっても、数多い御小人組のうちから、主君の足もとまで、身近く出られる身になったことは、破格な立身で、わずかな月日に、そこまで来た藤吉郎は、身を粉にして、現在の小者の職務に忠勤と誠意を打ちこんでいた。

——が、主人の眼というものは、常に見ているようで、そのくせ、一つや二つの気働きぐらいでは、眼もくれる風も見せない。

今も、信長は、藤吉郎が誰よりも先に駈けつけ、吩咐いひつけけられぬ先に、

(お水を)

と、すすめても、信長は、彼の顔などは見もしなかったし、ウムともいわなかった。黙って、塗柄杓ぬりびしゃくの柄えを取ると、一息に飲みほして、藤吉郎の手に返し、

「五郎左を呼べ。五郎左を」

と、命じた。

その答えは、近侍がした。あわててそこへ集まって来た家臣のうちから、一人がまた、彼方へ駈けて行つた。

五郎左は、馬場の柳に、駒を繋いでいたが、信長の召しを聞くと、

「ただ今、御前へ参ろうと存じているところ——」

と、答えた。

そして悠々と汗をぬぐい、襟えりをかき合わせ、刀の筭こうがいを抜いて、

乱れた髪の毛を撫でつけていた。

五郎左は、主君の前へ出るまでに、もう或る覚悟をきめていた。

信長の気色から推して、信長の近侍たちもまた、彼の身が、ただではすむまいと固唾かたずをのんで、差し控えていた。

「五郎左にございます。ただ今は、失礼を仕りました」

覚悟の程は、肚の底にすえていても——こういつてひざまずいた五郎左の物腰は、涼やかなものだった。

案外、信長もまた、彼の神妙な態度に、面おもてをやわらげて、

「五郎左、よく追つたのう。そちはいったい、いつの間に、あの有名な名馬を手に入れたか。あの鹿毛は、何と申すか」

と、訊ねた。

家臣たちはほつと気を安めた。

五郎左は、微笑の顔を、すこし上げて、

「お目にとまりましたか。実はてまえも、いささか誇りといったす愛馬なんぶで、南部なんぶの馬商人あきんどが、京の貴人へ、高値に売るとて、都へ曳ひいて上るのを、強たつて所望たいたしたものにございます。——が、値あたいほどの金子きんすを持ち合あわぬ身、よんどころなく、父より貰もらいおきました『野分のわけ』と銘のある家宝たからの茶盃ちawanを売り払い、それにて求めましたので、鹿毛の名もそのまま、野分と名づけて飼かい馴なれております」

「ふむ……。そうか。いや道理で、近ごろ優れた名馬とわしも見た。

五郎左、あの野分、信長が所望じゃ。信長にうれしい」

「は……」

「よからう。値はいくらでも取らずであらう。信長が貰もらうておくぞ」

「……いや。恐れながら」

「なんじゃ」

「お断りいたしまする」

「いけないのか」

「はい」

「なぜじゃ。そちはまた、よい駒をさがせばよろう」

「よい友は求め難いように、よい駒も、そうあるものではございませぬ」

「だから信長に譲れというのじゃ。信長とても、乗りつぶれぬ程な逸駿を、心がけていた折じゃ。強つて望む」

「強つてお断りいたしまする。——何となれば、てまえの愛馬は、ただてまえの自慢や遊び事の備えではございませぬ。事ある時は戦場において、男がいある御奉公も致さばやと、心がけの一として、飼ひ馴らしておるものです。折角、わが君のお望みにはござります、武士にとって大事な駒、差し上げるわけには相成りませぬ」

奉公のため、武士のたしなみのため——という彼の強いことばに、信長もそれ以上、無下によこせとも云い得なかったが、なお、執着とわがままは、捨てきれなかった。

「五郎左」

と、重ねて、

「嫌か。どうしても嫌か」

「この儀ばかりは……」

「そちの身分には、あの鹿毛は、ちと過物であろうが、そちも父の中務ほどの士になつたら、野分ほどの駒にも乗れ。——まだ若い身に、鞍負けするといふものじゃ」

「恐れながら、御意はそのまま、殿へお返し申しましょう。——お鞍の上で、串柿や瓜など喰べて、御城下をお練りあそばすには、何も、名馬のお選みは御無用かと存ぜられます。むしろ五郎左の如

き武士に飼われるこそ、野分も本望の筈と覚えまします」
と、いつて退けた。

五郎左は、つい、いつてしまった。馬を惜しむ心よりも、日頃の忿懣が、思わず、口について出てしまったのである。

孤君と老臣

五郎左衛門の老父、平手中務政秀は、二十日あまりも、門を閉じて、邸に籠っていた。

彼として、めずらしい例といわねばならない。

十年一日の如くというが、彼の奉公は、織田家二代にわたつて、四十年一日の如くであつた。

先代織田信秀から、その臨終に六尺の遺孤信長を、
(頼むぞ)

と、託されてから後は、信長の守役として、一国の藩老として、なおさら、彼は老骨に鞭打って仕えて来た。

その日。——もう夕方。

彼は、独り鏡を眺めていた。

「……………」

自分の髪の真つ白になつてゐることに、今さらのように、彼は愕きの眼をもつて、鏡の中の自分を見ていた。

白くもなる筈。もう齢も六十いくつかであつた。

が、その年すら、数えて閑を思ふ暇もなく来たのである。年を思い、髪の白さに気づいたのも、門を閉じた二十日あまりを、幽居の身となつたお蔭であつた。

鏡の蓋をして、

「勘解由、勘解由」

ふすま越しに呼ぶ。

小侍に、燭台を持たせ、次に、用人の雨宮勘解由が、そつと小暗い端に畏まった。

「勘解由、使いは出たか」

「はい、もう先刻に、遣わしてござります」

「では、見えような」

「程なく、お揃いで、お出で遊ばすことと存じますが」

「酒のしたくも」

「お珍しゅう、お揃いで」

「うむ。鬱はらしじゃよ」

「至極、結構に存じます。何ぞなお、温かい馳走など、作らせておきましょう」

勘解由は、去った。

二月の初めだったが、まだ梅のつぼみすら固かった。ことしはひどく寒く、池の面の厚氷は一日溶けなかった。

さつき使いを出して、呼びにやったのは、各々、べつに邸を持っている三人の息子たちへであった。

本来、こういう大きな邸では、総領は元よりのこと、次男三男でも、皆、大家族的に妻から孫まで一つに住んでいるのが、世間の慣わしだったが、中務は、

（朝夕、子や孫どもの愛にひかされては、少しでも、御奉公の懈怠になる）

といって、皆、べつに邸を持たせて早くから妻にも別れた身を、孤独で暮していた。

そして、先君の遺孤、主君の信長を、主と護るのみでなく、わが

子とも思いこめて、守役の大任を負いとおして来たのだった。

ところが先頃からその信長は、少しも爺よ爺よと、自分を慕わなくなった。——のみか、面を横にし、耳をふさいで、自分のことばをも、厭う風であった。

不審に思つて、近侍の者に糺してみると、

「御息の五郎左衛門殿と、お馬のことから実は——」

と、数日前、馬場であつた気まずい事件を、話してくれた。

「……さては、それで」

と、中務は、初めて解けたが、さてさて、困つたものと、当惑の顔いろだった。

不興を蒙つた五郎左衛門も、以来、出仕止めとなつて、謹慎しているらしいし、その余波で、自分の言は、まったく信長の耳へ、真つ直ぐに通らなくなつたように思われる。

柴田権六勝家、林美作などという、常に、一方に立つ家臣はまた、

（この機に）

とばかり、信長に媚びて、甘言をすすめるため、主君と中務父子の間は、なおさら濠を深められた形となった。

二十日あまりの幽居のあいだに中務はしみじみ、自分の老いを知つた。

君側には、柴田権六や、林美作などの、新しい勢力が興っている。その力は若かつた。

中務は、四十年の忠勤のつかれで、もうその人々と、闘う精はなかつた。

だが、自分の老いを知れば知るほど——孤君信長の前途と、主家の将来は、強く案じられて来た。

なお、その老後の骨を、孤君のために、用いようとして、この二十日余りを、籠こもっていたのであった。

「お二方、お揃いで、ただ今お見えになりました」

用人の勘解由かげゆが、やがてまた、彼の居間へ告げて来た。

「そうか。今参る」

と、答えておいて、中務は何か書きものをしていた。硯すずりの水も凍るような宵の寒さに、背を曲げて。

それは、きのうから、苦吟して書いていた、長い書面であった。きのう書いたそれへ、また筆を入れて、謹厳に、清書しているのであった。

書院では、総領の五郎左衛門と次男の監物けんもつが、父の使いをうけて、何事かと来て、火鉢を囲んで待っていた。

「ご病氣かと驚いた。不意に使いが見えたので」

監物がいうと、五郎左衛門は、顔を振って、

「いや、わしはそうも思わなかった、いつぞやのことが、お耳にはいい、さてはお叱言こしごだなと、すぐ感じた」

「だが、あのことなら、もう二十日も前に、父上のお耳へはいつている筈。——急にお呼びつけになるからには、何ぞほかに、御用があつてのことだろう」

幾歳いくつになつても、父は怖い。兄弟は、父の姿の見えるまでが、待ち遠しくもあり、心配でもあつた。

三男の甚左衛門は、他国の縁家へ行っているの、この宵には、来合せなかつた。

「来たか。寒いのもう」

父の中務は、やがて襖ふすまを開けて現われた。兄弟は、すぐ父の白髪と、めっきり痩せて来た面癩おもやづれに、眸を向けた。

「どこか、お体でも」

「いや、この通り、変りはないがな、お前たちの顔を見たくなくなったのだ。年のせいじゃろ、時折、世のさびしみを、思うようになった」

「では、べつに何ぞ、急な御用というわけでも」

「そんなわけではない。久しぶりに、夕飯など共にして、鬱うさでも語ろうと思うたまでのことよ。はははは。まあ、寛くわげ」

平常と、変りはなかつた。

外は、霰あられでもこぼれて来たのか、廂ひさしにたばしる音が聞え、燭しよくも、襖ふすまも、しんしんと冷えていた。

しかし、睦むつじい父子の酒盛さかもりは、やがてその寒氣も忘れさせていた。父が余りよい機嫌なので、五郎左衛門は、主君の御不興をうけたことについて父へ詫わびようと思いつつ云い出す折が見つからなかつた。

そのうちに、膳も退さげ、席をも改めて、中務は好きな薄茶を二ふく命じて、氣輕に飲んでいたが、ふと、掌てにのせている茶盃ちやわんから思い出したように、

「五郎左、わしがそちへ譲つた家宝の野分のわけの茶盃を、そちは人へ手放したときいたが、左様か」

と、訊ねた。五郎左は、ありのまま、

「はい。家宝の名器と伺つておりましたが、欲しい馬がございましたので、茶盃ちやわんを売り払つて、馬を求めました」

と答えた。すると、中務は、

「そうか。よからう。その心がけがあれば、わしが亡ない後も、御奉公向むきに心配はない。よく売り払つた」

叱言こしごかと覚悟していれば、かえってそれを、欣んでくれる父であつた。

「——だかの、五郎左」

中務は、賞めておいて、屹と改まった。

「茶盃を売って、名馬を購う、そちの心がけは、大いによいが、聞けば、馬場において、殿の卯月を追ひ抜き、君公から後に、そちの鹿毛をくれいと、お望み遊ばしたものを、そちは、お断りしたというではないか」

「そのため、実は、御不興をうけまして、父上にも、私のため、とんだ御迷惑をかけ、何とも」

「これ、待て」

「はッ」

「父のことなど、さておいてじゃ。なぜ君公の御所望に対して、物惜しみいたしたか」

「……………」

「いやしい奴め」

「……父上」

「なんじゃ」

「五郎左を、左様に御覧じなされますか。心外でござりまする」

「ではなぜ、折角、欲しいとお望みならば、信長公に差し上げてしまわぬか」

「生命をすら——君公のお望みとあらば、いつなりと、差し出す覚悟をしておる侍の身、何で物惜しみなど仕りましょう。——それに名馬を持つのは、私事の道楽ではございませぬ。一朝の場合、戦場で御奉公を尽そうためにござります」

「もとよりのことだ。それは分っているが」

「駒をさし上げれば、殿のお気には召しましょう。しかし臣下のそういう気持も無視して、ただ御自身の卯月より、逸足と見て、す

ぐお望み遊ばすわがままな御気性がてまえには、口惜しゅうてなりません」

「……………」

「今の織田家が、危ういこと、てまえなど申すまでもなく、父上にはなおさらようくお分りでございましょう。——時折は、図抜けた御大器と思われるような場合もままございますが、所詮、お幾歳になられても、どうやらあのわがままと放縦な御気質は、天性かと嘆かれます。あまりわれわれ家来達が、その御気性にははらして、わがままをお通し申すのも、忠義に似て、実はよくないことだと思っております。それゆえ、てまえもわざと、強情を張った次第でございます」

「いかん」

「いけませんか。てまえの心は間違っていたでしょうか」

「心底に忠義があっても、それではかえって、信長公の悪い御気性の方を、駆りたてておるようなものだ。——わしは、あの君様を、お乳の頃から抱き申し上げ、わが子のお前たちよりも多く、この手に抱いて、お育てして来た。それゆえ、よう御性質も分っておるが、自体、大器でいらっしやるだけに、細かい短所は人一倍お持ちでもある。そちが逆ったことなどは、いわばその大器の御天性から見れば、塵ほどもないことなのだ」

「そうでしょうか。申しては畏れ多いですが、わたくしも監物も、また家中の心ある士は皆、御奉公がいのない暗君と、嘆かぬものはありませぬ。——柴田権六、林美作などは、かえってその暗君ぶりを、勿怪の俤いと欣んでおりましょうが」

「そうでない。……ひとは何といえ、わし独りはそうは信じられぬ。おまえたちも、飽くまで、あの君のままに従え。わしが亡い後は、

なおさらのことぞ」

「その儀は、お案じなされますな。たとえ御不興をうけても何でも、節義にゆるぎはないつもりです」

「それ聞いて、安心した。——如何せん、わしははや老木、わしの接木となつて、御奉公を尽してくれよ」

——後で思えば、その夜の中務の言には、思い当るふしが幾らもあつたが、五郎左も監物も、まさか父が死を決していたとは気づかず、やがて霰降る夜更けを帰つて行つた。

平手中務の自害は、その翌朝、見出された。見事な自刃の姿であつた。

駈けつけた五郎左と監物の兄弟は、父の死顔から、何の心残りも苦悶の姿も見出せなかつた。

遺言は、昨夜の席で、生前の温い唇から聞いていた。遺族に対しては、だから何の遺書もなかつた。

ただ一通。

御主君へ——

と、信長へ宛てて遺書があつた。遺書はすぐ、城へ届けられた。

「何。爺が——？」

彼の死を聞いた時、信長の顔には、大きな愕きが走つた。

遺書は長文で、言々句々が、中務の真心をこめた、苦諫の文字であつた。

死をもつて、中務は、信長を諫めたのである。信長が天成の利器であることも、その長所をもよく知っている中務の諫言だけに、信長はそれを読んでゆくうちに、涙より先に、びしびしと、鞭打たれるような、真実の痛さを胸にうけた。

「爺よ。ゆるせ」

信長は、声をもらして泣いた。

中務に対しては、わがままの云いたい放題をいい、また、内外の苦勞をかけ通して来ただけに、君臣とはいえ、父以上な親しみを抱いていたのである。——たとえば今度のことなども、わがままを出しやすい彼へ、例によつて、知りつつわがままを振舞つていたのだつた。

「五郎左を呼べ」

すぐ命じた。

やがて、五郎左が見えて、平伏すると、信長は席を立つて、対坐になり、

「爺の云い遺したこと、一言もあまさず、信長の胸に沁みてぞ。終生忘れはおかぬぞよ。詫びは、それしかない。それしかない。……」

主君が臣下へ、手をつきかけたので、五郎左はあわてて、その手を取つて拝み、君臣抱き合つて泣いていた。

その年、城下に一字の寺を建立した。爺の菩提のために、という信長の発願からであつた。

「寺号を、何と名づけましょうか。開山の和尚に、撰号の儀、お命じなされては如何なもので」

奉行が訊ねると、信長はかぶりを振つて、

「寺僧の名づくるよりも、爺は、わしがつける寺号をよろこんでくれよう。わしが撰ぶ」

筆を取つて、政秀寺とすぐ書いた。

平手中務政秀の名のりを、そのまま取つたのである。

その後。

何か思い出すと、信長はよく唐突に、政秀寺へ行つた。行つても、

えこう
回向したり、読経の僧と共に坐っていることなど、滅多にない。

「爺よ。爺よ」

つぶやきながら、寺のあたりを一步きして、ふいと帰城してしま
うだけだった。

そうした感情が、時には、狂人じみて現われることすらあった。

鷹狩の折、突然、小鳥の肉を引っ裂いて、

「爺ッ、爺ッ。信長の捕った獲物ぞ。これを受けよ！」

と、虚空へ向って、投げつけたりした。

また、川狩の日に、いきなり足で川水を蹴上げて、

「爺ッ。成仏せよッ」

と、叫んだ声や眼ざしのただならぬ烈しさに、家臣たちが、呆
つ氣にとられたこともあった。

いばら
茨を拓いて

こうじ
弘治元年。

信長は二十二歳となった。

その年の四月、信長は、一族の織田彦五郎と乱を醸して、彼の
居城、清洲を攻め、占領後、那古屋から清洲城へ移った。
やったな！

藤吉郎は、ひそかに、そう思っ、信長の手際を見ていた。

右も茨。左も茨。

孤君信長を繞って虎視眈々な一族がたくさんいた。それが、叔
父だの兄弟だの身寄りだのという者だけに、荊棘を拓くのも、敵
以上であった。

家柄からいえば、清洲の織田彦五郎は、織田一族中の宗家だっ
た。しかし宗家の彦五郎は、信長を、

(油断のならぬうつけ)

と、警戒していた。そして事々に圧迫を加え、信長の自滅を計っ
た。

清洲城には、その前から守護家の斯波義統が養われていた。義
統の子義銀と、義統とは、信長に同情をもっていた。

それが、発覚したのである。彦五郎は、怒って、

「恩知らずの見せしめ」

と、守護家を斬ってしまった。子の義銀は、信長の所へ逃げて行
った。

信長は、義銀を、那古屋の天主坊へ匿^{かくま}つて、その日に軍馬を催して、清洲城へ殺到したのである。

「守護家を奉じて」

と、彼は将士を鼓舞した。

名のない戦^{いくさ}はしない。まして宗家を攻めるには、義と名分の旗じるしが要る。——が彼は、その機会に荊棘^{けいげき}の一方を、やっと切り拓^{ひら}いたのであった。

那古屋城へは、叔父の信光を、自分の跡に入れておいた。

が、何者にか、信光は暗殺されてしまった。

「佐渡、そちが行け。那古屋はそちららでは、信長に代つて、留守する者はない」

林佐渡守へ、命が下った。

「身命をもって」

と、おうけして、佐渡は那古屋へ赴いて、城代の任に就いた。

心ある家臣は嘆^{なげ}いた。

「ああ、やはり暗君^{あんくん}はやはり暗君でいらせられる。——時折は、ぎよつとするような御英気の閃^{ひらめ}きをお見せあるかと思えば——あの林佐渡守などを、お信じあるようでは……」

事実、佐渡の行動には、怪しいふしが多かった。

信長の父が生きていた頃は、彼も無二の忠臣といわれたもので、そのため、先代信秀^{のぶひで}から、平手中務^{なかつかき}と共に、遺子^{こども}をたのむぞ、と死後を託された一人だったが、その信長の放縦^{ほうじゆう}と、つかまえ所のない天性に、見限^{みきり}をつけてしまったものとみえ、専ら、信長の弟信行と、その母堂のいる末盛城^{すえもりじょう}へ近づいて、折もあらば、信長を廃嫡^{はいちやく}し、信行を主君の座に立てようと意図している男だった。

「殿には、佐渡の氣^けぶりを、ご存じないのであろうか」

「ご存じあれば、よも那古屋の城を、お預けにはなるまい」

眉をひそめて、憂いあう家中の者のささやきを、藤吉郎も、一度や二度でなく耳にした。

が、藤吉郎は、

（はてな。こんどの寸法は、どう遊ばすお考えかな？）

とは思ったが、他の家中のような心配は、すこしも抱かなかった。

清洲の城で、いつも明るい顔は、孤君信長と、御小人^{おこびと}仲間にいるひとりの草履取だけだった。

信長を、天性のうつけと見た先入観は、家臣の一部でも、なかなか脱^ぬけなかった。

林佐渡守、弟の美作守^{みまさかのかみ}、そして柴田権六勝家などの重臣が、それだった。

「何。美濃の斎藤道三^{さいとうどうさん}どのと、智^ち舅^{しゅうと}の初対面をなされた時の信長公の仕方は、なかなか平常のうつけとは違っていたとか。——ははは。あれはうつけの紛^{まぐ}れ当^{あた}りというもの。先が儀式張つてござったところへ、こちらが恐いもの知らずの無法と出たので、さすがの舅^{おやう}どのも、度胆を抜かれたまでのことよ。例にもいう。莫迦^{ばか}につける薬はないとな。その後の事々、御行状、どう眺めても、救いはない」

柴田権六などの観察はわけても徹底していた。所詮^{しよせん}、将来性はないときめているので、そういう放言も、次第に大びらになっていた。

その点で共鳴している林佐渡が、那古屋の城代になると、権六勝家は足しげく、那古屋へ往来した。そしていつか其処^{そこ}は、陰謀の苗^{ひょうしゅう}床^{ようど}となっていた。

「よいのう、雨夜は」

「かえって、茶には、一しおの趣を添えて」

茶によせて、佐渡と権六は、城内の庭木に蔽われた狭い一室にさし対っていた。

梅雨すぎだったが、まだはつきりしない夕空から、雨がこぼれ、青梅の実が、たまたま、ぽとツと地に落ちた。

「あすは霽りましょう」

梅若葉の下から、佐渡の弟の美作守が独り語のようにいった。
燈籠へ灯を入れたに出たのである。

「……………」

灯を入れた後もしばらく、美作はそこに佇んで、四辺を見廻していた。

やがて、離れへ戻つて来ると、声を低めて、

「異状はございませぬ。家来どもも遠ざけてござりますゆえ、お心おきなく」

と、兄と権六へささやいた。

権六勝家はうなずいて、

「では、早速、本題にかかうか。——実はきのう密かに、末盛城へ伺つて、親しゅう御母公様にもお目にかかり、勘十郎信行様とも、談合して参つた。……で後は、其許の心ひとつときまつたが」

「御母公には、何と仰せられてか」

「それはもう、異議のう御同意じゃ。何しても、信長公よりは、信行様のほうが、お可愛くてならぬお方じやて」

「ふム……。然らば、御舍弟信行様にはもとより御決心か」

「佐渡や権六が起つならば、織田家のため、信長公へ弓をひいても、是非あるまいと」

「専ら、お許が説いたのでござらうが」

「それや何しても、相手が御母公やら、気の弱い信行様のこと。その油をかけて力説せねば、動くはずもござらぬ」

「いや、おふた方さえ、承知とあれば、名分は充分にある。信長公の暗愚を憂い、お家の末を案じている家臣はわれらのみではない」

「尾張一国のため、織田家百年のため。——と、まず旗じるしはそれでよいが、軍備は」

「折もよし、那古屋へ移されたので、それも手早う進んだ。鼓を鳴らせば、いつなりと」

「そうか。……では」

権六が、一膝前に、身を揺り出した時だった。
ばらツ、と大地に何か音を立てて落ちた。

二ツ三ツの青梅の実。

雨は小やみであったが、雨以上のしずくが、風のたび廂を打つ。

——犬のような人影が、床下から這い出していた。今の梅の実は、梢から落ちたのでなく、その男が床下から頭だけ出して抛つたのである。

室内の眼が、それへ振り向いて、気を休めた隙に、忍びの者らしい男の影は、もう風と闇の中に紛れていた。

忍びの者は、城主の目であり耳であり足であった。

出るにも退くにも家臣に取りまかれ、城にばかり暮している城主なる者は、皆忍びの者を使う。

信長の側にも、そういう術に長けている男がいた。しかし、誰がその役目をしているか、近侍にも分らなかつた。

草履取は三名いた。お小人組に属しているが、役目から小屋を別にして、お庭近くに三名だけで交代勤めをしている、一人は又助、

一人はがんまく、一人が藤吉郎だった。

「がんまく、どうした？」

藤吉郎は相役のがんまくに、友誼^{ゆうぎ}を尽して交際^{つきあ}っていた。がんまくは、蒲団をかぶって寝ていた。何ぞというと、よく寝てばかりいる男だった。

「……腹が痛い」

がんまくは、顔も出さずに云った。藤吉郎は、夜具の襟を引っ張って、

「嘘をいえ。御城下まで出たついでに、美味^{うま}い物を買って来たから起きろよ」

「なんだ」

がんまくは、首を伸ばしたが、騙^{だま}されたと分ると、また夜具をかぶって、

「ばか、病人をからかうなよ。あっちへ行け。うるせえ」

「起きてくれ。兄貴。ちょうど又助がいらないから、訊きたいことがあるんだ。折入って」

がんまくは、洪々起き出して、

「折角、ひとが寝ているのを」

口叱^{くち}言^ごを呟^{つぶや}きながら、裏へ出て、奥庭の泉水から流れてくる水で、含嗽^{うがい}していた。

藤吉郎も尾^おいて出た。小屋の中は鬱陶^{うつとう}しいが、清洲城の奥なので、あたりは幽邃^{ゆうすい}だし、遠くは城下を見晴らしているし、心までが大きくなった。

「なんだ、俺に訊きたいことというのは」

「ゆうべのことだが」

「ゆうべ」

「とぼけても、藤吉郎は知っている。那古屋へ行ったらう」
「え」

「お城へ忍んで、御城代の林佐渡や柴田権六の密談を、探って帰って来たのだろう」

「おい、おい。猿。……滅多なことをいうなよ、滅多なことを」

「じゃあ、ほんとのことをいつてくれ。友達^{ともだち}の仲で水臭^{くさ}からう。わしは疾^とうから感^{かん}づいていたが、黙^{もく}って、おぬしの挙動^{きやうどう}を眺^{なが}めていたのだ。おぬしは、信長公の忍び役と見たがどうだ」

「藤吉、……お前の目に会^あっちゃあ敵^{かた}わない。知^しっていたのか」
「一つ釜^{かま}の飯^いを食^くっているおぬしのすることを、知らないでどうするものか。——信長公はわしにとっても大事な御主人^{ごしゅじん}だ。蔭^{かげ}ながらわしらでも、案^{あん}じられることもある」

「訊^きねたいとはそのことか」

「神^{かみ}かけて、他言^{たご}はせぬ。がんまく、わしを信じてくれ」

がんまくは、そういう藤吉郎の顔をじっと見ていたが、

「よし打ち明けてやろう。だが昼^{ひる}は人目^{ひとめ}につく、折^せを待^{まち}て」

その後、がんまくの口^{くち}から、彼は、織田家の内情^{うちじやう}について種々^{しんしん}な知識^{ちしき}を得^えた。そして主人^{しゅじん}信長^{のぶちやう}の境遇^{きやうぐい}に、理解^{りかい}と同情^{どうじやう}をもつて、よい奉公^{ほうこう}の真^{まこと}を尽^{つく}した。

けれど藤吉郎は、そうした陰謀^{いんぼう}家の家臣^{かしん}の中にある若い孤君^{こきみ}の将来^{しやうらい}を、少しも危^{あや}ぶみはしなかった。先代^{せんだい}以来^{いらい}の老臣^{らうしん}も重臣^{じゆうしん}も、信長^{のぶちやう}を見捨^{みすて}てかけていたが、まだ召^{めい}し抱^{だく}えられて年月^{としげふ}も浅^あい藤吉郎^{のぶきちやう}のみは、深く信長^{のぶちやう}に信^{しん}じているものがあつた。

（ここを、わが殿^{との}は、どう切り拓^{ひら}いて行^いかれるだろうか）

と、身分^{みぶん}の低い彼は、ただ遠くから祈^{いの}る気持^{きじ}で眺^{なが}めていた。
その月の末頃^{すえき}だった。

いつものことで、多くの家来も従いていなかった。

信長は、突然、駒を曳き出させて、城外へ遠乗りに出た。

清洲きよすの城下から、守山もりやままで、その間、約三里程である。彼はいつも、朝飯前に、飛ばして帰って来る。

が——その日は、先頭の信長の馬首は、守山へは向わないで、城下の十字街道から東へ向って駈け出した。

「やッ。殿には？」

「どこへ行かれる気——」

続く家臣の五、六騎は、また、出しぬけを喰って、あわを喰いながら、後を追いかけていた。

徒士かちの者や、草履取は、当然途中でこぼれてしまう。

だが、がんまくと藤吉郎の二人だけは、遅れながらも、必死に飛んで、信長の駒から捨てられまいとした。

「すわ！ 事だぞ」

と、二人は互に、眼顔を見合つて、ぬかるなど励まし合つた。

なぜならば信長の馬首は、那古屋なごやへ向つてゐるからである。藤吉郎はがんまくから、深い内情を聞いている。そこは信長を亡き者にして、弟の信行を擁立しようとしてゐる陰謀の府ではないか。

何をしてくるか知れない信長が——何が起るか測りはか難い危地へ、——向う見ずな駒を飛ばして行くのである。

これほど危険なことはない。

「一大事」

と、がんまくや藤吉郎が、心のうちで、大変を予期したのも無理ではなかった。

だが、より以上、驚いたのは、彼の唐突な来訪をうけた、那古屋城代の林佐渡守と、弟の美作みまさかだつた。

あわただしく、本丸の一室へ駈けこんで来た家臣が、

「殿、殿——はやく、お出迎えにお立ちなされませ。信長公のお越しにござりますぞ」

と、告げても、

「何、何じゃと？」

耳を疑つて、起とうとはしなかった。——

まさか！ という気持が邪魔していた。

「騎馬で、ただ、四、五騎のお供衆をつれたのみで、大玄関まで、いきなりお乗り着けなされました。——何か、高声で、お供衆と笑つておいでなされました。ともあれ、お早くお出迎えを」

「これこれ。真まじか」

「はッ、はッ」

「信長公が、お越しあそばしたというのか」

「御意にござります」

「すりや大変じゃ」

佐渡守は、なぜということもなく狼狽ろうばいした。顔いろまで、さつと変つた。

「弟、……何事じやろう」

「ともあれ、お迎えした上で」

「そうだ。早く来い」

大廊下を、急いで行くと、もう玄関の方から、活潑な足踏みを踏み鳴らして、信長は通つて来るのだつた。

「……はッ。これは」

林兄弟は、彼の前を避けて、ひたと廊下に平伏した。

「やあ、佐渡。美作みまさかも達者か。守山までと思つたが、どうせのことなら、先に茶のある那古屋にせいと、遠乗りの目当てに駈け参つ

た。——辞儀など、重々しゅう、飾らずともよい。早く、茶を出せ、茶を出せ」

云いすてると、勝手を知った本丸の第一の間の上段に坐り、後から息を喘^せいて追いついて来た家臣たちを顧み、

「暑いう。暑い暑い」

と、駄々っ子のような扇使いして、襟^{えり}に風を入れていた。

茶を。菓子を。

お褥^{しとね}を——

と、出す物も、後^{あと}や前^{さき}に、城内の者は、慌^{あわ}て合う。

何しろ不意過ぎる。

林佐渡と美作の兄弟は、倉皇^{そうこう}として、信長の前へ、挨拶に出た

が、侍女や家来たちの慌てぶりを、見ていられない顔して、一度、

中坐して退つて来た。

「午刻^{ひるどき}でもあるし、遠乗りの御空腹もあろうで、すぐまた、お中食^{ちゆうじき}

——と仰せ出されるかも知れぬ。早く厨^{くりや}の膳部の者へ、料理の手

廻しを、申しつけておけい」

佐渡が、そう吩咐^{いっぷ}していると、弟の美作守が袖を引いて、

「兄上、——あちらで柴田殿が、ちょっとお顔を拝借したいと申さ

れています」

と、囁^{ささや}いた。

頷^{うなず}いて、佐渡も小声に、

「うむ。今参る。……そちも先へ行っておれ」

と、いった。

その日も、柴田権六勝家は、那古屋城へ来ていたのである。何か

密談をすました後、さて、帰ろうかと立ちかけたところへ、突然、

主君信長の来臨という玄関の騒ぎに、出てはまずいし、帰ることも

できず、度を失つて、小書院の隠れ座敷へあわててはいり込んでいたものだった。

そこへ美作が来、林佐渡も後から来て、三名、ほっと吐息^{といき}をつきながら、額を寄せ合つた。

「だしぬけだ！……いや驚いたな」

「何かにつけて、この調子だから、定石^{じようせき}で行くと手が狂う。およ

そ、何が測^{はか}り難いというて、うつけ者の出来心ほど怖いものはない」

「それじゃて」

と、権六勝家は、眼で奥を指しながら、

「あの喰えぬ舅^{しゅうし}御、山城守道三ともある老獪^{ろうかい}なお人まで、嘴^{くちばし}

の青い殿に、煙に巻かれたといういわれは——」

「そうかも知れぬ」

「兄上……」

と、美作は先刻から、眉に険^{けわ}しい色を湛^{たた}えて、辺りへ気を配つ

ていたが、さらに、声をひそめて、

「今も咄^{とつ}嗟^さに、権六どのと、申し合わせたことでござるが、いっ

そのこと！……」

「何。いっそのこと」

「お供も、僅か五、六名で、突然お越しあられたのは、いわば天の

与えた絶好な機会ではござるまいか」

「殿をか？」

「そうです。——お中食を差し上げている間に、武者隠しへ、腕き

きの者を忍ばせ、てまえ御給仕に出ますれば、合図と同時に、信長

公を」

「もし、仕損じては」

「何の、庭面^{にわも}、廊下、到る所を、人数をもつて取り囲ませ、多少

の傷負を出しましょうとも、眼をつぶって刺し奉る臍を決めてかかれは……」

権六も云い足した。

「どうじゃ、佐渡殿」

さすがに林佐渡は——じつと俯向きこんでいたが、権六と美作のつよい眸に圧されて、

「ウム。……寔、今が、つかめと与えられた機会かもしれぬ。では」

「御決心か」

眼と眼を見合わせて、三名が、膝を立てかけた時だった。

ずしずしと、力のある足音が、廊下を踏んで来たかと思うと、塗ぼねの大障子をさつと開けて、

「やあ、ここにおったか。佐渡、美作。茶ものんだ、菓子も喰うた。はや立ち帰るぞ」

——あつと、立てかけた膝を縮めて、三名は、居竝んでしまった。

信長は、その中にいる権六勝家の姿へ、じつと目をつけた。

「ほ。……権六じゃの」

信長は歩み寄って、平蜘蛛のように手をつかえた権六勝家の、頭の上から微笑んでいった。

「儂が参る時に、そちの乗馬によう似た栗毛が、駒繫ぎにつないであつたが——やはりそちのものであつたか」

「はッ……。来合せてはおりましたなれど、御覧のごとく、平常の汚い身装をいたしおりましたゆえ、君前に罷り出るも、不作法と存じ、わざとこれに差し控えて」

「はははは。存外、洒落男よのう。信長を見よ。かような粗末じ

や」

「恐れ入ります」

「これ——」

冷たい扇子の塗骨が、権六の首すじを櫛するように、軽くたたいた。

「君臣の仲じゃに、身なりがどうのと、儀式に囚われた遠慮、水くさいぞよ。——にも儀式、二にも儀式。あれは都の公方殿のすることよ。織田は田舎侍でいい」

「以後。以後は……」

「どういたした、権六。顫いているではないか」

「かえって、御意に逆らいましたかと、恐縮の余りに」

「はははは。許す、許す。もう顔を上げい。——いや待て待て、儂の革足袋の紐が解けておる。権六、ついでに結んでくりやれ」

「……はッ」

「佐渡」

「は」

「邪魔をいたしたのう」

「滅相もないおことは」

「したが、信長のみならず、四隣の敵国の客は、いつでも不意に来るものぞ。心して、留守をせよ」

「朝暮、心いたして、弓矢を磨いておりまする」

「そうか。頼もしい家来どもを持って、信長は安心。——いや信長のためばかりではない、まちがえばその方どもの首もないのじゃ。権六、よいか」

「お結びいたしました」

「大儀」

信長は、まだひれ伏している、三名の後ろを開けて、中廊下から玄関の方へ、大廻りして出て行つた。

「……………」

柴田権六と、林佐渡、美作の三人は、真つ蒼な顔を見合つて、一瞬、茫然としていたが、われに回ると、あわただしく、信長の後を追いかけて、再び、玄関の式台に平伏した。

——が、信長の姿はもうそこには見えない。

大手門の方へ降つてゆく幅の広い坂道の辺りに、ただ夏々と、蹄の音だけが聞えていた。

いつも置き捨てをくう近侍たちは、また不覚を重ねぬように、帰りは信長に続いてしたが、小者の中の、がんまくと藤吉郎のふたりだけが、かなり遅れて、後から駈けて行つた。

「がんまく」

「おう」

「よかったな」

「よかった」

遅れはしたが——しかし二人は不覚とはしなかった。嬉々として、主君の姿を、先に見ながら急いでいた。

もし何らかの、兇事でも起つた場合は、すぐ清洲城へ変を知らせて——と、二人は密かに謀し合はせ、二の丸の狼煙山へ上つて、いざとあれば、狼煙番を斬り殺した上、そこから煙を上げる考へだつたのである。

名塚の砦は、信長の手足の一部である。一族の佐久間大学に守らせてある。

その年の八月だった。

まだ夜も明けぬ頃。——初秋の眠りごこちを、砦の者は、不意の軍馬に驚かされて匆ね起きた。

敵は？——意外にも日頃の味方だった。

「那古屋衆の、謀叛と見ゆるぞ。柴田権六の兵千人。林美作の人数七百ばかり。——不意を襲せて来おつた！」

物見やぐらで、誰かどなった。それすら、深い霧の中である。

ここは手薄。

一騎、二騎、霧を衝いて、すぐ清洲の本城へ、知らせに飛ぶ。

信長は、まだ眠っていた。

が——寢所へその注進が伝わると、彼はすぐ、具足を纏い、槍を把つて、城門まで駈け出して来た。

彼の後には、誰もまだ続いて来なかった。

すると、ただ一人。

信長より先に、大手の唐橋門のそばに、駒を曳いて、待ち構えていた雑兵があつた。

「——お馬を」

と、その雑兵は、信長の前へ、駒を寄せて云つた。

信長は、意外な顔した。

自分より早い奴がいたことに驚いたらしいのである。

「誰だ？ そちは」

と、訊いた。

雑兵は、陣笠を脱つて、ひざまずきかけた。信長は、もう鞍の上に在つて、

「それには及ばん。そちは、誰の手の者であるか」といった。

「お草履取の、藤吉郎にござりまする」

「猿か」

信長は、また呆れた。

庭使いの草履取など、出陣の場合に、先駆けして来る筋のものではない。見れば、粗末な物であるが、胴や脛^{すね}などにつけ、雑兵笠をかぶっている。——その氣負った姿が、信長には愉快に見えた。

「合戦に参る氣か」

「お供、仰せつけ下さいまし」

「よし、ついて来い」

信長と彼の姿が、朝霧の中へ、二、三町も遠く淡^{うす}れて行つた頃、大手の橋を鳴り轟^{とどろ}かせて、二十騎、三十騎、五十騎——そして四、五百名の兵がどつと、霧を黒くして追いかけて行つた。

名塚^{なつか}の砦^{とりで}の者は、必死に防戦していた。信長は、単騎、寄手の陣の中へ駆け入って、

「儂^みに弓を引く者の面見^{つら}せい。信長はこれにあるぞッ。——佐渡、美作^{みまさか}、権六^{ともがら}の輩。何ほどの力やある。何ほどの思慮やあつて儂^みに叛^{そむ}くッ。わが前へ来つてその太刀振りを見せいッ」

彼の声は、怒っていた。その大きな声は、寄手の関^{とぎ}の声を消した。

「不忠の臣ども、信長が成敗してくる。逃ぐるも不忠ぞー」

林美作は、その声に恐れをなして逃げ出した。どう考えても、信長の声と思えなかった。雷鳴^{かみなり}に追われているような心地だった。彼の恃^{たの}みとする将兵たちにも、主君というものに対しては、先天的な觀念がある。

——直接、信長の姿、信長の声、しかもその峻^{しゅん}烈^{れつ}な威風に駆けちらされると、手も槍も出なかった。

「待てッ。逆賊」

信長は、逃げる美作^{みまさか}を見つけ、馬上から槍で突き刺した。

そして、血ぶるいしながら、美作の兵へ向つて、宣言した。

「主を討つても、そちらは主とはなれぬ身ぞ。叛逆^{あやつ}の徒に操^{あやつ}られて、百世の汚名を残さんよりは、謝して、信長の馬蹄の前に悔いよ。悔ゆる者は、助けおく」

左翼の陣が崩れ、美作が討たれたと聞くと、柴田権六^{しばたけんろく}は陣を消して、末盛城^{すえもりじょう}へ逃げこんでしまった。

末盛城には、信長の母公がいる。また、信長の弟、信行がいる。

「どうしようぞ」

敗軍を知つて、母公は泣きおのきの、信行は戦慄した。

逃げ帰つた叛軍^{はんぐん}の将、柴田権六は、

「この上は、身に代えて」

と、頭を剃^そり、鎧^{よろい}をすてて、法衣^{ころも}になった。

そして、林佐渡と同道して——母公と信行をも連れて——翌日、清洲の城へ、謝罪に出た。

唯一の力は、母公の詫言^{わびごと}であつた。母公は、佐渡と権六から云いふくめられている通りに、信長へ三人の助命をすぎた。

信長は、案外、怒っていなかった。

「免^{ゆる}します」

母公へ、あっさり云つて、それから、背に汗をして平伏している柴田権六へ、

「坊主」

と、呼んだ。

「……は」

「権六勝家ともある者が、なぜ頭など剃^そりこぼちたか。慌^{あわ}てた奴」
苦笑して——また、佐渡へ、

「そちもだ」

と、やや屹きつという。

「年がいもない奴のう。平手ひらてなかつかさ中務の亡き後は、そちをこそ、片腕とも頼んでいたに。——今となれば、中務を死なせて口惜くしやくしゅう思うう」

信長は、落涙して、しばらく黙っていたが、

「いやいや、中務を自害させ、そちをも、謀叛人むほんにんにいたしたは、皆、信長が不徳というものじゃ。——信長も以後はふかく反省しよう。そちたちも、儂みに仕えるものなれば、ふた心など持つな。武門に生きる効かいもあるまい。——武士は一道か、牢人ろうにんかじゃ」

佐渡は、眼が醒さめた。

信長の真のすがたを、今初めて仰いで、その天質をやっと知ったのだった。

ただ、恐ろしい心地に打たれた。身の程も恐ろしかった。かたく、忠勤を誓って、顔も上げ得ずに退さがった。

——が、骨肉には、かえって、分らなかつたとみえる。弟の勘十郎のぶひさ信行は、信長の寛大を、むしろ見縊みくびって、

「母がいるので、乱暴な兄も、わしをどうすることもできぬのだ」
と思った。

母公の愛と、盲目にかくれて、信行はその後も、陰謀をやめなかつた。

信長は、嘆じた。

「信行の悪戯わるさは、悪戯として、放はなっておいてもよいが、そのため、幾多の家士が、逆徒となって、武門の身を過あやまる。骨肉なれど、家のため、家臣のため、眼をつぶらねばなるまい」

機を見て、信長は遂に、信行を捕えてこれを刺してしまった。

もう信長を、暗愚と見る家臣はなかつた。

いや、むしろ近頃では、彼の明敏と鋭利なひとみに慍しやういく伏しすぎ
て、信長自身、

「ちと、くすりきが利きすぎた」

と、時には、苦笑を覚えるくらいなものだった。

しかし、信長の準備は、できていた。彼は毛頭、家臣や骨肉を偽るために、暗愚を装っていたわけではなかつた。

父信秀の死後、自分が一国を負って、四隣の敵国へ。

——よし。いつでも。

という構えができるまでの安全弁べんに、自己の偽装を用いていたのである。敵国を謀はかるために、自領の中に無数に入り込んでいる密偵を計るために——周囲の肉親をも家臣をも、思い込ませて来たのだつた。

が、この間に、信長は人間の表裏と、社会の機微とを、より多く学んだ。彼が年少から名君らしい名君であつたら、それは誰も用心して、露骨に示さなかつたに違いない。

「猿、すぐ来い」

御小人頭おびとがしらの藤井又右衛門ふじいまたえもんは、あたふた駈けて来て、小屋の内に休息している藤吉郎を呼びたてた。

何事かと、

「は、御用で？」

藤吉郎は、すぐ出て来た。

「お召しじゃ」

「え」

「殿様が、ふいに、其方そなたのことをお訊ねなされて、呼んで来いという仰せ。——何か貴様、お叱りでも受けるような覚えはないのか」

「べつにございせんが」

「ま、早く来い」

又右衛門は、彼を促うながすと、思いがけない方へ、先に立つて行った。

信長はその日、何思ったか、城内の兵糧倉ひょうりょうぐらから台所を一巡して、なお、薪倉炭倉まきぐらすすみぐらなどまで、検分して歩いてた。

「召し連れて参りました」

又右衛門が、信長の歩行の横へ額ぬかずいて、こう告げると、信長は足を止めて、

「あ、連れて来たか」

と、彼のうしろに控えている藤吉郎の姿に眼を止め、

「猿、前へ出い」

と、いった。

「は……」

「今日からそちを、台所役人に取り立てて得させる。よいか、台所で働けよ」

「ありがとう存じます」

「台所方は、雄々しゅう、槍先の功名もならぬところじゃが、戦場の華々はなばなしい場所よりは、わけて大事な陰かげの守りぞ。いうまでもないが、精出して勤めい」

即座に、彼の地位と扶持ふちは、今までより一段、昇格した。台所役人といえ、もう御小人組ではなかった。

けれど、台所方へまわされることは、その頃、侍の恥か、落ち目のように思われていた。

——あいつも遂々とうとう、お台所へ落ちて行った。

という風に見られて、そこは戦場や表方では、使い途にならない人間の捨場すてばのように、蔑視べつしされていた。

御小人、中間ちゅうげんの端でも、

——台所の者。

といえ、軽く見られるし、若い者にとっては、出世の機会も、将来性もない所だけに——組頭の又右衛門は、退さがって来ると、藤吉郎へ同情して、慰め顔にいった。

「猿、つまらないお役目にまわされて、不足だろうが、その代りに、お扶持ふちが増されたから、まあまあ出世としなければなるまい。お草履取なら、身分は軽くても、御馬前で働く時もあるので、末は楽しみだが、その代り生命いのちがけの御奉公も、覚悟せねばならぬ。お台所にいれば、生命の心配はまずないからのう。二ついいことはな

いものじやて」

慰めれば、慰められて、はいはいと頷うなずいていたが——しかし藤吉郎自身には、少しもそんな不服は見えなかった。

むしろ、彼は信長から、望外な見出しに預かったことを心から感激しているふうだった。

さて、彼が台所方の職に就いて見ると、第一に、その薄暗いことと、陰湿いんじつなことから、不潔なことが、目についた。

昼間でも、太陽を忘れているような、生気せいきのない膳部番や、料理人や、老いたるお賄まかない頭がしらが、十年一日の如く、昆布こぶの煮出し汁じゅうのにおいの中に住んでいる。

「これはいかん」

藤吉郎には、耐えられないものがあつた。彼は、陰気が嫌いである。薄暗い——生気がない——そういう空気はすべて嫌いだつた。

「そこらの壁へ、大きな窓を切つて、風と太陽を、いっぱいに入りたいものだ」

そう考えたが、台所方には台所方の組織もあり、古顔の上役もいて、その仕事一つも、実行はむずかしく見えた。——藤吉郎は、毎日、商人あきんどが納品する鰹かつお節ぶしの蝕むくいを調べたり、椎茸しいたけや干瓢かんぴょうの記入などを、黙々とやっていた。

お城の台所方へ出入りする御用商人達あきんどは、藤吉郎の係になつてから、すっかり調子がぐだけて来た。

「どうも、旦那のように仰おほつしやられると、良い品を、お安く持つて来ずにはいられなくなりますよ」

「まったく、木下様にかかつては商人も跣足はだしですよ。乾物でも、干魚でも、穀類でも、時の相場はよくご存じだし、品物にお眼まなこは鑑きくし、手前どもを、欣よろこばせて、安くお仕入れになることはお上手じょうず

だし……」

と、皆いった。

「ばかを申せ」

藤吉郎も、笑つていう。

「何も、わしは商人じやなし、上手も下手へたもあるものか。わしの利得になることではあるまいが。——ただ、そちたちのお納めする品はみな御家中方の口に入るものだ。命は食よりと申す。このお城の命は、つまるところ、お台所から上げる食物の如何にある。——少しでも良い物を上げることが、われわれの御奉公というものじゃ」また。

折には、そうした商人たちに、茶など飲ませて、打ち寛くつろぎながら、雑談の中で説いた。

「お前らは、商人だから、御納品を運ぶたびに、すぐにこの一車で、幾らの利得と——利得を離れたことはあるまいが、もし敵国のために、お城が亡びたら何とする。長年の懸代金かけだいぎんは、元も子も失うばかりか、他国の大将が、城主となれば、他国から従したがつて来た商人が、取つて代つて、お前らの商売まで奪つてしまふ。——こう考えたら、何よりも、御当家の礎いしずえを根として、われわれもお前方も、枝や花と茂つて、子孫までも共に栄え、利得することを考えずばなるまい。——だからお城へ納める品で、不当に儲けもうけようなどという考えは、慾が小さいぞ」

それからまた、彼は、お賄まかない頭がしらの老人にも、誠意をもって仕えた。分りきつたことでも、老人の意見を問ひ、気にそまぬことでも、一応は服従して、老人の顔を立てた。

が、当然、仲間の一部には、

「目まぐるしい奴だ」

「何にでも口を出しおる」

「働きぶる猿」

などと陰口もあり、彼を、退者^{のけもの}にしようとする気配もあった。自分が、一つの波として起る場合、どこにでも、波にぶつけて来る波はある。藤吉郎は、ほとんど、そういうものには、無関心な顔つきだった。

賄^{まかないがし}頭と相談して、信長にまで申し出た台所方の改築は、許可された。

彼は、大工をさしずして、天井には風入れを明け、壁には大きな窓を切らせた。下水、その他、彼の理想どおりに改築した。

守護職^{しゅごしやく}の斯波家^{しばけ}が住んでいた時以来——何十年という間、昼間も燈明で煮物するほど暗かった清洲城^{きよす}の大台所に、朝も夕方も、かんかん太陽が映しこんだ。爽やかな風がふき通した。

「物が早く腐える」

とか、

「塵が目立つ」

とかいう苦情にも、彼は、耳をかさなかった。

清潔になった。

無駄が目に見えて来て、無駄がなくなつて来た。

総じて、一年も経つと、ここも、彼の性格そのまま、明るく風通しよく、活動的な機能を持つ所と變つて来たのである。

すると、その年の冬。

今までの炭薪奉行^{すすまき}、村井長門守^{むらいながとのかみ}は免役^{めんえき}になって、その跡役へ、

藤吉郎が奉行に任じられた。

なぜ、長門守が、役目を罷めさせられたのか。

そしてなぜ、自分が、炭薪奉行に登用されたのか。

藤吉郎は、信長から任命されると、同時に、それを考えてみた。

「ははあ、炭薪の費え^{ついで}を、もっと節約せよとお旨^{むね}だな。いや、そのお旨は、一昨年から出ているが、村井長門の節約ぶりでは、お気に召さぬのだな」

で——彼は、広い城内の炭火のある所、薪^{まき}を使用している所を、新奉行として、隈なく見て歩いた。

御用部屋、控部屋^{ひかえ}、書院、詰の間^{つめ}、奥、お表、どんな所にも、冬は火の気があつたし、大きな炉^ろも切つてあつた。

わけて、小者部屋^{せうしやへ}だの、若侍たちの屯^{たむろ}には、山のように木炭を炉^ろにあけて、冗費^{じようひ}していた。

「木下殿だ。木下殿が見えた」

「なんだ、木下殿とは」

「新たに、炭薪奉行になった木下藤吉郎殿。むずかしい顔して、見廻りに来たぞ」

「あ、あの猿か」

「灰をかけておけ。灰を」

若侍たちは、あわてて灰をかぶせたり、黒いのを、火消し壺へ入れたりして、仕すました顔していた。

「やあ、お揃いだな」

藤吉郎は、そこへ来ると、連中のあいだに割りこんで、自分も炉^ろへ手をかざした。

「こんど、不肖^{ふしょう}藤吉郎が、炭薪奉行を仰せつかりました。どうかよろしく」

「や、それはどうも」

若侍たちは、むず痒い顔をし合つた。藤吉郎は、炉^ろに挿^さしてある大きな金火箸^{かひし}を持って、

「ことしの冬は、ひどく寒いではないか。このように火を埋いけこんでおいては、手先ばかりで、体が温ぬくもらぬ」

と、自分で赤い火を掘り出して、

「そちらの炭籠すすかごの炭を、もっと存分に、つごうではないか。それから、今までは、一部屋について、一昼夜炭何貫と、お定めがあったそうだが、火の気の儉約は、寒々しい。十分にお使い下さい。そしていちいち部屋頭がしゅのお手判だの、何だのと、面倒な手数も御無用、お要用いりようだけ炭倉へ取りにお越しください」

足軽や中間の小屋へ行つても、藤吉郎はその調子で、節約節約と、従来、やかましくのみいわれて、萎縮いしゆくしていた人々へ、大いに炭薪を使うことを、奨励してまわった。

「こんどの奉行は、いやに大まかじゃないか」

「察するところ、猿殿、一躍炭薪奉行に引き上げられたので、すっかり気を好くしてしまい、気前を見せているつもりだろうが、猿の上調子に乗ったりしていると、今にこつちまで、飛んでもない御叱責おしげをくうかもしれぬぞ」

いくら寛大に放任しても、炭薪の使用などには、おのずから限度がある。家中の心理は、むしろ自誠じかいして、その限度は出なかった。

清洲城の一年間の薪炭の使用料は、約千石の余を超えていた。領内の伐木ばつぱくの面積だけでも、年々多大の量を灰にするので、その支出の金額ばかりでなく、藩政上からも、信長は、その節約を心がけていたものだった。で、二年間ほど、村井長門守に奉行を命じて、やらせてみたが、少しも実績が上がらなかった。反対に、年費が殖ふえたりした。その上、節約という声の感じが、家中の心理を、萎微いびさせたり、歪ゆがめさせたりしたのみだった。

藤吉郎はまず、その窮屈と萎縮から、家中の気もちを解放した。

それから彼は、信長の前へ出て、こう建言した。

「とかく冬中は、御家中の若殿輩わかつのばらも、足軽などお下しもの者も、総じて、屋内に引き籠りがちで、菜漬なづけを喰うて、湯茶をのんで、埒うちもないむだ話に、徒然つれづれの日を送りがちに見うけられます。――炭薪の節約などより先に、御賢慮をもって、この悪習をひとつお矯め直し願わしゅう存じまするが」

「むむ。そうか」

信長は、彼のことを容れて、すぐ老臣に命じた。

彼の老臣は、番頭ばんがしらや足軽頭を集めて、家中一般に、平時の日課を励行させることについて、熟議をかさねた。

武具の手入れ、講習、禅の実修、領土内の交代巡視。――それから射撃槍術の奨励はもとより、城内の土木もやらせ、小者たちには、暇があると、馬の沓くつまで作らせた。

要は。

閑ひまを与えないことだった。

一体、武將の気もちからすると、家中の侍たちは、わが子の如く可愛かった。かたく契ちぎられた君臣のあいだは、骨肉にひとしい愛情で結ばれていた。

いざ、戦いくさとなる日には、その者どもは、自分の馬前で――眼の前で、生命いのちをすてて戦い死ぬのだった。可愛くなくては――また、その愛情や君恩を感じないでは、馬前に死ぬ勇士はない。従つて。

平時の日には、どうしても、つい寛大に流れやすかった。

また、何日戦いくさへ。

と、思いやるからであった。

しかし、信長は、それがかえって家臣らのためにも良くないこと

を考えていた折からなので、断じて、平時といえども、寸閑の暇もないように、修養や生活を正して、嚴重に日課を励行させた。

同時に。

奥向おくむきの女性たちにも、稽古事や、掃除や、また、籠城攻戦の場合の習練などもさせて、起きるから寝るまで、暇のない生活規律を立てさせた。

もちろん自分自身も。

そして或る時、藤吉郎が見えた折、やや得意そうな顔して云った。

「猿、どうじゃ近頃は」

「はッ。御威令の効き目は見えて参りましたが、まだまだ」

「まだ足らんか」

「もう一層」

「どこがまだ不足か」

「御城内の風が、御城下一般の民家へも、浸しみわたって行きますまでは」

「む。なるほど」

信長は近頃、かなり藤吉郎のことばに、信を抱いて、聴くようになっていた。

侍側じそくの人々は、それをいつも、苦々しい顔して、白眼視していた。

なぜならば、彼のように、短い年月の間に、小者小屋から畳の上へ昇った例すら少ないのに、君前へ出て、献策けんさくめいたことを、直接にいうなど、もつての外な——と等しく眉をひそめるのだった。

しかし、年額千石以上の炭薪の消費高は、その冬の半ばかりもう目立って節約されて来た。いや、藤吉郎自身は、各部屋をまわる度に、

「冬は寒いもの、炭薪など、吝けちけちせず、十分にお費つかいなさい。いちいち部屋頭がしらの御判なども要らぬ。自由に、炭倉へ参って、要るだけお持ちなされ」

と、大まかなことをいつてはいたが、一面、家中一般に、暇がなくなつたので、むだな炭火を費やして、炉を囲んでいる時間などなくなつてしまつたのである。

また、多少暇があつても、体を動かして、絶えず筋肉に緊張を持つと、自然、炭火などは不用品になり、炊事その他の燃料もすべて簡略になつて来て、一カ月の燃料が三カ月もある程、變つて来た。が——藤吉郎は、それでもまだ、自分の職分を達したものと、満足はしなかつた。

来年の冬の炭薪は、夏山のうちに、山で買入れの契約をする。彼は、お城御用の商人あきんどを案内に立て、山支度して検地に出かけた。

薪山の検地などは、従来から形式だけのものに過ぎない。

あの山の檜ひの何百本。

この山のくぬぎ何本。

と、山商人に引つ張りまわされて克明に視て歩いたところで、一山から炭薪が何石とれるか、素人目では見当もつかなかった。

百姓仕事や、町のことなら、何でも心得ているつもりだが、藤吉郎にも炭薪のことなどは、仔細に分つていなかった。

「む。む。左様か。——なるほど、なるほど」

彼も、従来の慣例どおり、ざっと歩いて、形式だけで降りて来た。商人あきんどたちは、その晩、奉行の一行を、土地の豪家に招待して、盛宴を張る——。これも前からのいきなりであった。

「今日は、お奉行様始め、御大儀さまにござりました」

「さだめし、お疲れのことで」

「何の設けもございませぬが、こよいは悠々と、おくつろぎの程を」

「そして、この後とも宜しくひとつ」

こもこもに挨拶やら追従やら、下へも措かない歓待である。

勿論、酌人も揃っている。どこの唄い女か娘か、とにかく身ぎれいに化粧もこらしたのが、奉行の側につききりで、杯を洗う、肴をすすめる。湊といえはすぐ湊紙。

「よい酒じゃ」

藤吉郎は、悦に入っている。悪い気もちであろう筈はない。

脂粉のにおいを見廻して、

「美人だな。どれもこれも」

と、いった。

商人のひとり、

「お奉行様にもやはり、女子はおすきでござりまするか」

畏る畏る戯れると、当り前なことを訊く——といわないばかりに、

藤吉郎は真面目くさって、

「女子もすき、酒もすきじゃ。世の中にある物はみなよいな。ただ

心せぬと、よいものも仇になる」

「仇にならぬ程に、どうぞお氣に召しましたら、酒など、花など」

「よしよし。氣随気ままにさせて貰おう。——ところで、その方ども、商売のはなしは一向にせんが、察するところ、遠慮しておるとみえる。では、この方から切り出すが、きょう歩いた山の雑木台帳、これへ見せてくれい」

「どうぞ御覧遊ばして」

「ふム、明細じゃの。木の数はこれで相違ないのか」

「相違ございませぬ」

「これで炭薪八百石御上納とあるが、これだけの山で、この石量になるのか」

「昨年よりは、お納めの額が減りましたので、今日、御検地の山の分で、左様になりますわけで」

翌朝、商人たちが、お奉行の御機嫌伺いというので来てみると、

藤吉郎は、朝まだ暗いうちに起きて、山へ行ったというので、驚いて彼らは山へ追って行った。

見ると。

藤吉郎は、足軽や附近の木樵百姓などを督励して、各々に三尺ほどに断らせた縄束を持たせ、買入れの契約をした山一帯の樹木の根に一筋ずつその縄を結び付けさせていた。

縄数は最初に何千本と分っていた。それが終って、残部の計算をしてみると、立木の数がすぐに知れる。台帳に記載してある立木の数と、実際の数とを照し合わせてみると、ほとんど、三分の一以上も、数量には懸値があった。

「商人どもを皆ここへ呼び集めろ」

藤吉郎は、木の切株に腰をすえて、下役の者に吩咐けた。

商人たちは、平伏した。

何を云い出されるかと、内心惧れおののいていた。

いくら山を検分しても、立木の数など、素人に分るものでないし、実際にまた、これまでの炭薪奉行は、台帳に書いてある数量をそのまま、鵜のみにしていたものだが、こんどの新奉行は、その手に乗らなかった。

「商人ども」

「へい……」

「この台帳の数と、実際の木の数とは、だいぶ違うではないか」

「……はあ」

「はあではない。これは如何なるわけだ。その方どもは、多年の御恩顧を、ありがたいとは思わず、かえって利に狎^なれて、御領主を欺^{あざむ}き奉り、かような嘘を書き上げて、暴利をむさぼりおったな」

「……め。滅相もない」

「然らば、何でこのように数が違うのか。このままの数で炭薪をお納めするからには、御納庫になる品も、百石の炭は六、七十石、千石の炭薪は、実際には六、七百石しかお納めいたさぬのであろうが」

「いえ、なかなか、そのような理^{わけ}では」

「だまれ。多年山より炭薪を伐^きり出して職とするその方どもが、かような大きな眼違いをする筈はない。心得て致したとあれば、奉行を欺^{あざむ}き、御領主の国費を騙^{たばか}り取った大罪と申さねばならぬ」

「恐れ入りました」

「一同の家財を没収し、断罪にしてもよいところだが、今までの役人方の手落ちもある。この度だけは、見のがして遣わすが、石数^{こくすう}のところは、有態^{ありてい}の通り書き直して差し出せ」

「畏りましてござります」

「——が、それだけでは、免^{ゆる}すわけには参らぬぞ」

「へい」

「古語にもある。一本の木を伐らば、十本の木を植えよと。——昨日よりこの地方の山を見るところ、年ごとに伐^きる木は多いが、ほとんど、植えた跡は見ぬ。かようなことで年経る時は、いつか麓^{ふもと}の田野は洪水に見舞われ、ひいては国の衰えとなろう。国衰える時は、その方どもも当然、負担や不幸はかかって来るものぞ。真^{まこと}の利を積み、真の家富を願ひ、子孫の幸^{しあわせ}を願うなれば、まず国を強うせねばなるまい」

「はい……」

「その税として、また、今日まで暴利をむさぼった罰として、今後、千本の木を伐り出す時は、五千本の苗を必ず差し出すこと。固く申しつけるが、どうじゃ、不服か」

「ありがとう存じます。それでお免^{ゆる}し下さるものなら、苗木は必ず差し出します」

「うム。然らば、人足料として、台帳に書き出しの数量に、五分の割増しは認めて遣わすであらう」

それからまた、その日、手伝わせた百姓たちには、伐木の跡の植林をいつけて、苗百本について幾^{いく}値と手間賃をきめ、それは城内から支払うであらうと云い渡した。

「さ、帰ろう」

と、藤吉郎に促^{うなが}されて、商人たちは、ほっと生きた心地を取りもどした。そして口々に、

「驚いたなあ。こんどのお奉行には、うっかりできぬぞ」

「だが、分ったお方だ」

「今までのように、ぼろいわけにはゆかないが、といって、損はない。まあ地道にやろう」

山を降りながら、囁^{ささや}き合っていた。

麓^{ふもと}へ来ると、商人たちは、もう倉皇^{そうそう}と帰りかけたが、藤吉郎は引きとめて、

「お役が終った。今夜はわしに従^{したが}って来い。わしも今夜は寛^{くつろ}ぐであらう」

と町の旅舎へ、一同を引っ張って来て、ゆうべの返礼に、馳走を振舞い、お奉行の彼もいい機嫌に酔って、すっかり砕^{くだ}けたところを見せた。

米饅頭よねまんじゅう

彼は、愉快だった。

ひどく独りで悦に入っていた。

——というわけはその日、

「猿」

と、例によって信長に呼ばれ、信長からこういう言葉をうけたからだだった。

「台所方は、そもそも、経済を旨とする所なのに、その台所に、そのような奴を置くのは、大の不経済と申すものだ。以後厩方を申し付ける」

そして、知行三十貫、城下の侍小路に、宅地をもつかわす——という君恩を受けたのだった。

欣しかった。

彼は、欣しいことに会おうと、正直に欣しがる男だけに、独りニヤニヤと顔へ出て来るものをつつまれなかった。

早速、以前の同役、がんまぐの小屋をたずねた。
がんまぐはまだ、草履取をしていた。

「どうだ、暇はないか」

「なんで？」

「城下へ参って、一献奢りたいが」

「ま。遠慮しましょう」

「どうして」

「木下殿には、今では、台所奉行というお役。このがんまぐは、以前に変らぬ草履取。あなたの沽券にかかりましょう」

「ひがむな。——そんな気持なら、真っ先に訪ねては来ない。実は、身に過ぎたお取り立ての上にもまた、今度は、お厩方三十貫と仰せつかった」

「ほ……」

「小者小屋にはいても、おぬしの忠義な心底を、おれは頼もしく思っている。——で、歓びを分かちたいのだ。どうだ、来ないか」

「それはめでたい。——だが藤吉郎殿、おぬしは俺より正直者だな」
「む。なぜ」

「おぬしは何事も、おれに打ち明けて包むことがないが、わしは実は、多分におぬしへ隠していた。本当のところをいうと、わしはお草履取はしていても、例の……時折特別な御用を勤めるので、殿のお手許からじかに、莫大なお手当を戴いていて、それは皆、密かに国元の屋敷の方へ送っておるのだ」

「ふム……故郷に屋敷など持っておるのか」
「江州の柘植村へ行けば、一族もいるし召使も二十人くらいはいる」

「ははあ、甲賀だな」

「柘植村は伊賀だ」

「ああ、そうか」

「だから、貴公に奢られては、こちらが面目ない。いずれお互いに、もっと立身したら、奢りましょう。奢られましょう」

「そうか。知らなかった」

「まだ、風雲はこれからだ」

「そうとも、これからだ」

「預けておこう。将来へ」

「いや、よかろう」

藤吉郎は、そこでまた、よけいに愉快になって来た。

実に、社会は明るい。

彼の見る眸ひとみのまえには、陰やみだの暗やみだのというものがない。

怖ろしい秘密性を持つ乱波者らんぱもののがんまぐすら、彼には遂に、何も隠さなかった。織田一藩で知る者のない、身の上までを、簡単ではあるが、とうとう打ち明けてしまった。

きよう沙汰された禄くは僅かに三十貫ではあるが、この三十貫のうちには、主君の信長が、ここ二年ばかりの台所奉行としての、自分の働きを認めてくれた知己の意味がこもっている。

彼は、それが欣うれしいのだ。炭薪の消費も、一年間の額たか、半分以上に減つて来たが——そんな数字よりは欣うれしいのである。

(経済を旨とする台所方に、そちのような奴を置くのは、そもそも大の不経済——)

こう信長からいわれたのは、何にしても、忘れられない歎なげびだった。——信長公もまた、うまいことを仰うやっしゃる大将ではある

——と感心しながらも、欣うれしくて堪たまらなかった。

いわゆる、おめでたい男に、傍眼はためからは、見えもしよう。

独りで、にやにやと、時々、笑くぼを泛うかべながら、彼は午ひるからお城を出て、清洲きよすの町をぶらついていた。

町を歩くにも、得意であった。

ここ五日は、転役を機会に、彼の体には、休日を与えられていた。

——その間に、拝領した屋敷に——どうせ侍小路のうちでも最も小さい、門と垣と五間ぐらいな小屋敷だろうが——それにしても家財を備えつけ、婆やと中間ちゅうげんの一人ぐらひは、召し使わなければな

らない。

「生れて初めて、一戸の主人となるのだ。その家を見ておこうか」
こう考えて、道を変えた。

附近は、お厩うまや者ばかり住んでいる。組頭の家をのぞいて、ちょっと、挨拶をしておく。組頭はいなかったが、妻女が出て来て、
「まだ、お独りでいらっしゃいますか」

と、訊くので、

「独り者でござる」

ありのままに答えると、

「では、何かと、御不便でございましょう。宅には、召使もおり、家具の余分なものもありますから、何なと、お入り用なものはお持ち下さいませ」

親切な奥方であった。藤吉郎は、いずれ充分、わがままなお願いに出るでしょう、とあらかじめ頼んで、門を出た。

すると、奥方は、自身わざわざ門の外まで出て来て、二人の間を呼び、

「新規に、お厩うまや方へ変つて来られた、木下藤吉郎様じゃ。あの、桐畑きりばたけの空屋敷へ、近いうちお移りになるそうな。——ちよつと、御案内して、お前方の手空てすきの時、お掃除などしておいてお上げなさい」と、いいつけてくれた。

で——藤吉郎は、中間に案内されて、これからのわが家になる官舎へ行つてみた。

想像以上、大きい家なので、

「ほう……これは立派な家だ」

と、門へ向つて呟つぶやいた。

聞けば、前には、小森式部こもりしきぶという者が住んでいたとか。それも

大分前のことらしく、屋敷は荒れているが、しかし、彼の眼には大きく立派に見えてならなかった。

「裏は、桐畑でござるな。これも何やら吉兆でござる。てまえ木下家の紋が、先祖以来、桐を用いておりますからな」

確とした記憶はないが——彼は何かそんな気がしたのである。

父弥右衛門の持っていた古い鎧櫃か、短刀の鞘だかに、そんな紋を見た気がするので、案内してくれた中間に向って、ともかくそういつてしまった。

彼自身も、気がついていいることであるが——とかく機嫌がよい時は調子づいて、そう必要もないことをも、また、確と肚にもないことでも、得意にまかせて、喋舌ったりする傾向がある。

口から出てしまった後で、

(こいつ、いい程なことをいう)

と、自分で誡めたりすることもあるが、決して、悪い肚があったり、軽薄でいうのではないから、自分では、さしたることとも思っていない。

しかし、専ら、

(猿めは、法螺をふく)

という一部の評も、その辺に原因していた。

そして、彼自身でもまた、

(そうだ。おれは、法螺ふきでないこともないな)

と、認めていた。

だが、そのために、彼の全部を誤認してしまったり、また、毛嫌いしたりした小さな潔癖家は、遂に、彼の大きな生涯の同伴者にはなれない人々だった。

——それからしばらくすると、彼の姿は、清洲の町の、繁華な中

心地に見出された。

家具なども買ったらしい。

また古着店の前で、ふと立ち止まったら、偶然、桐の紋のついた陣羽織があったので、値を訊いてみた。

「安い」

彼はすぐ買って、すぐそこで着てみた。——すこし長いがみツともない程ではあるまいと、着て歩いた。

陣羽織といっても、青木綿のひらひらしたやつで、ただ、襟だけに金襴に似た布が膝りつけてある。誰が着たのか、桐の紋は、背中に白く染め抜いてある。

「見せたいなあ、母上に」

自分の姿を——そう思う。

ここの繁華な町を歩けば、また感慨にたえないものがあつた。新川の茶わん屋に奉公していた頃のことだ。陶器を積んだ手押し車を押して、素跣足で、町の者や、きれいな女の見の中を——その頃のみじめな自分の姿も思い出されるのだった。呉服屋へはいった。

そこには、京織の上等な呉服ものが、棚に並んでいた。

何を買ったか、彼は、

「では、相違なく、届けてくれよ」

と、代金をおいて、外へ出て来た。彼の懐中は、常にかくの如くにして、半日の休日には、空になるのが常だった。

——米饅頭。

と、青貝で文字を埋めた立派な看板が、町角の屋根にかかっていた。それは、清洲の名物で、いつも旅人が大勢腰かけ、一方では土地の客が混み合っていた。

「饅頭をくれい」

藤吉郎は、今そこから着て来たばかりの、大きな桐の紋を背負つて、混み合っている客の中へはいった。

あかまえたれ
赤前垂の少女が、

「いらつしやいますし。ここでおあがりなさいですか、お土産でございますか」

藤吉郎は、一つの床几しよづきに腰かけて、

「両方だよ。先にここで喰べる分を一盆。それからべつに、使いの駄賃は出ずから、中村へ行くついで馬子にでも頼んで、中村のわしの家へ、饅頭一折——大きな折に入れてな、届けておいてもらいたいのだ」

後ろ向きに働いていた店の亭主らしい男が、

「おう、旦那様で。まいどありがとうございます」

「よう。相変らず繁昌はんしょうだな。今も例のところへ、届ける折を、頼んだところだが」

「はいはい。中村へは、よくこの辺からついでの衆もございますし、中村の衆も、お寄り下さいますから」

「いつでもいい、頼んでおくれ。——それから、この手紙を、饅頭の折の中へ、入れてやってくれ」

藤吉郎は、懷中ふとこに用意して来た手紙を、店の者に頼んだ。

母上へ

とうきちろう

と、封の上に書いてあった。店の者は、手にとつて、

「何か、お急ぎの御用でも」

「なに、早いに越したことはないが、いつでもよい。何しろ、わしの母ときては、以前からこの米饅頭よねまんじゅうという、眼のない好物なのでな……」

云いながら、彼も、一つ頬張った。

だが、彼にとると、その饅頭の味には、すぐ涙を催して来るような思い出があった。

母の好きな饅頭——

買つてやりたいが。自分も喰べたいが。と喉のどから手が出るほど欲しく思いながらも、買えずに、手押し車を押して、さもない我慢をしながらこの前を通つた少年の日が——いつもここへ来れば思い出されるのだった。

「やあ。木下殿ではないか」

若い娘づれの武士。さつきからこちらを見ていたが、彼が、盆の饅頭を空からにした頃、こう声をかけながら立つて来た。

「おお。これは」

藤吉郎は、頭かしらを下げた。

ゆみのしゆう弓之衆の浅野又右衛門長勝あさのまたえもんながかつなのである。小者小屋に勤めていた頃から、世話になった人なので、格別、礼を篤あつうして、いんぎんに辞儀をした。

が——場所は、城内とちがい、町の米饅頭屋の土間なので、又右衛門も、きょうは気軽だった。

「おひとりかな」

「はい。一人で」

「こちらの床几しよづきへ参らぬか——あれへ寧子ねねも連れて来ておるで」

「ほ。お嬢様も」

藤吉郎は、横を見た。

すぐ床几一つ隔へだてて、うしろ向きに、十七、八の小がらな麗人が、白い襟足を見せて、騒々しい辺りの客の中に、独り端然として、腰かけていた。

麗人——といったが、藤吉郎も女にかけては、かなり鋭い審美眼を備えている。あながち、彼の眼だけにそう見える女性ではなく、誰が見ても、

(美人！)

と、迷わずに云い切れる程な——それは十人並み以上の娘だった。寧子と書いて、ねねと訓む。その可憐な名も、この娘の人がらにふさわしかった。小さく整った容貌に、ぱちりと、聡明らしい眸を静かに持っている。

又右衛門は、藤吉郎を誘って、その明眸の持主の前へ連れて来た。

「寧子」

「はい」

「こちらは、木下藤吉郎どのというて、この度、御台所御用人から、お厩衆へご登庸になったお方だ。お見知りおきを願っておくがよい」

「……はい。あの」

寧子は、顔を染めて、

「木下様には、初めてではございませんぬ」

「何。知っておる……？」

「ええ」

「いつ、どこで」

「お手紙をいただきましたり、また、お贈物をいただいたりして」

又右衛門は、仰山に驚いた顔をして、

「これは怪しからぬ。手紙などを遣り取りいたしておったのか」

「わたくしからは、差し上げたことはございませんが」

「それにせよ、父のわしへ、黙っておるなど、不埒な沙汰じゃ」

「いいえ、お母様には、いちいち申し上げてございます。お母様は、

度々のお贈物などは、かたくお断りいたしていらつしやいますが、お節句の、正月のという度に、木下様からは、よく頂戴物をいたします。……お父様からも、お礼を申しあげて下さいませ」

「ふーむ」

と、又右衛門は、娘の顔と、藤吉郎の顔を見くらべて、

「いや、男親という者は、恐そうな眼ばかりしていて、存外、迂闊なものよ。……知らなかったわい。……よく、猿殿は抜け目がないぞ、という噂は聞いていたが、まさか、わが娘にお目が止まっているとは思わなかった。——あはははは」

「いや、どうも」

藤吉郎は、大きく後ろへ手をまわして、頭を掻いた。

非常なでれ方だった。

しかし、苦労人の浅野又右衛門が、笑ってくれたので、いささか救われた顔だったが、それにしても、真つ赤になった顔はなかなかさめなかった。

事実。

寧子の方では、どう思っているか知らないが、先の意志にかかわらず、藤吉郎は、寧子が好きだった。

——で、中村の母と共にいる姉の所へ、時折、帯や反物など求めて届けてやるついでに、寧子の許へも、身に過ぎた京染だの、堺織の錦などを奮発して、届けておくことも忘れなかった。